【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4111

業務実績書

研No.1

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究（(1)-①-ア）

【事業概要】
他機関との連携をはかり、文化財の研究情報について、効果的に発信してゆくための手法を研究・開発し、文化財に関する研究情報の蓄積を行うとともに、公開・活用のための手法等について総合的に研究する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財ｱｰｶｲﾌﾞｽﾞ研究室長　津田徹英

【スタッフ】
田中　淳、山梨絵美子、二神葉子、塩谷　純、綿田　稔、小林達朗、江村知子、皿井　舞、中村節子、橘川英規、井上さやか、中村明子、城野誠治、鳥光美佳子（以上、企画情報部）丸川雄三、中村佳史（以上、国立情報学研究所）

【主な成果】
語彙・固有名詞からの記事検索、ならびに、筆名から実名を検索できる明治期美術雑誌『みづゑ』創刊号から 10 号までの Web 上での試行版公開を目指した。

【年度実績概要】
国立情報学研究所と研究連携をはかり、研究協議会を重ねながら、東京文化財研究所の文化財情報のアーカイブの一環として、美術雑誌『みづゑ』の明治期刊行分をデジタル画像化するとともに、全文テキスト化をはかり、検索手法を駆使しながら、筆名情報の検討を行い、実名を特定化するとともに、同一外来語の片仮名表記の違いなどを検討し、語彙や固有名詞からの記事検索ができる Web 上での試行版『みづゑ』（創刊号－10 号）を目指し、部内で 3/27 に公開を行った。

【実績値】
国立情報学研究所との研究協議会の開催 11 回（6/11,7/28,8/30,9/13,10/21,11/25,12/22,1/31,2/9,2/29,3/26）
Web 上での試行版『みづゑ』（創刊号～10 号）の部内での公開（3/27）。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4111

自己点検評価調書

研 No.1

1．定性的評価

観点	適時性	独自性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	研究協議会の開催件数	デジタル画像を活用した文化財情報の公開				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	他機関との連携をはかりながら、文化財情報を効果的に公開・活用していくために、研究協議会を開催しつつ、公開・活用のための手法について研究・開発を行い、Web 上での試行版・『みづゑ』明治期刊行分（創刊号～10 号）の公開を目指し、「文化財の研究情報の活用・公開のための総合的研究」に対して成果をあげたので A と判断した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	23 年度の実施計画に沿い、研究協議会を開催して、文化財の研究情報について効果的に発信していくための手法の研究開発を行い、文化財情報のデジタルアーカイブの一環として、Web 上での試行版『みづゑ』の公開のイメージを明確に示すに至ったので順調と判断した。これを踏まえ、次年度は、Web 上での美術雑誌『みづゑ』明治期刊行分の順次更新を行い、更なる文化財情報のアーカイブを進めたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4112

（様式１）

業務実績書

研 No. 2

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の資料学的研究（(1)-①-イ）

【事業概要】

日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性を解明するために、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら調査研究を行い、文化財を対象とする資料学的基盤を整備、確立する。あわせてその基盤を礎としながら国内外の研究交流を推進する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長　塩谷　純

【スタッフ】

田中　淳、山梨絵美子、津田徹英、二神葉子、綿田　稔、小林達朗、江村知子、皿井　舞（以上、企画情報部）、相澤正彦、中野照男、中村佳史、丸川雄三、三上　豊、森下正昭、吉田千鶴子（以上、客員研究員）

【主な成果】

① 調査：横山大観《山路》、京都国立近代美術館本の調査、永青文庫本の調査撮影。菱田春草《菊慈童》（飯田市美術博物館蔵）の調査。
② 美術史研究のためのコンテンツ形成：古記録･文献史料記載絵巻関係資料のデータ化。今泉雄作『記事珠』の翻刻・訳注。古美術文献目録の作成。
③ 研究交流促進のための研究会の開催：メラニー・トレーデ氏講演会の開催。
④ 研究成果報告書の作成：『美術研究作品資料』の編集。

【年度実績概要】

(1) 調査

横山大観《山路》、京都国立近代美術館本の調査、および修理中である永青文庫本の本紙裏面の調査撮影を行った（塩谷）。菱田春草《菊慈童》（飯田市美術博物館蔵）の調査を行った（塩谷）。

(2) 美術史研究のためのコンテンツの形成

既に当研究所ＯＢによってカード化されている古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化を行った。作業にあたっては目録（出典等）のみならず当該記事本文も入力し、公開時の利便性を図った（綿田）。東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作『記事珠』の翻刻・訳注を進めた（塩谷・綿田・江村・皿井）。古美術文献目録作成の一環として、付録月報に掲載された文献のデータ化を行った（津田・綿田・小林・江村・皿井）。

(3) 研究交流促進のための研究会の開催

３月５日に日本美術史研究者のメラニー・トレーデ氏（ハイデルベルク大学教授、ミシガン大学トヨタ客員教授）による講演会「「文化的記憶」としての八幡縁起の絵画化―その古為今用」を開催、土屋貴裕氏（東京国立博物館）・塩谷のコメンテーター、津田の司会でディスカッションを行った。

(4) 研究成果報告書の作成

『美術研究作品資料』の第６冊として『横山大観《山路》』の編集を進めた（塩谷）。

【実績値】

学会誌等への掲載論文数２件（①～②）
学会等での発表件数３件（③～⑤）

【備考】

① 塩谷　純「秋元洒汀と明治の日本画（1）」　『美術研究』404　2011.8
② 江村知子「江戸時代初期風俗画の表現世界」　『美術研究』405　2012.1
③ 相澤正彦「浄瑠璃本「かるかや」の画風」　企画情報部研究会　2011.7.27
④ 皿井　舞「平安時代前期から後期へ―六波羅密寺十一面観音像の造像」　企画情報部オープンレクチャー　2011.11.11
⑤ 森下正昭「東日本大震災被災地における文化財救援活動調査―オーストラリア学界における発表報告とインタープリテーションの重要性」　企画情報部研究会　2012.1.24

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4112

自己点検評価調書

研 No. 2

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2．定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度の講演会講師として招聘した日本美術史研究者のメラニー・トレーデ氏は、美術史のみならず欧米の人文科学の研究動向にも精通し、同氏との交流は日本の研究状況をあらためて見直す好機となった。そうしたマクロな視点と併せ、横山大観《山路》の調査研究という一点の作品をめぐるミクロな視点での研究も、修復中の本紙裏面の調査撮影を行うなど、実りの多いものとなった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今泉雄作『記事珠』の翻刻・訳注は近代における古美術研究の実態をうかがう資料として、古美術文献目録の作成は付録月報掲載のデータ化という、既存のデータベースの欠を補うものとして、いずれも公開へ向けた作業が進められている。また上記の横山大観《山路》調査についても、これまでの調査成果をふまえた基礎資料集の刊行を目指して編集作業を続行したい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4113

（様式１）

業務実績書

研 No. 3

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	近現代美術に関する交流史的研究（(1)-①-ウ）

【事業概要】

日本を含む東アジア諸地域における近現代美術の研究資料の収集、整理、調査研究を行うとともに、その交流を明らかにする有効な視点と調査研究方法の開発を目指す。また、多様化する我が国の現代美術の動向に関する調査研究を行い、基礎資料を作成する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長　山梨絵美子

【スタッフ】

田中　淳、塩谷　純、城野誠治、鳥光美佳子、中村明子（以上、企画情報部）、三上　豊、丸川雄三（以上、客員研究員）

【主な成果】

東アジア諸地域の近現代美術の研究資料収集、整理として、未公刊資料である黒田清輝宛書簡のデジタル画像作成、矢代幸雄筆ベレンソン宛書簡の翻刻を進めた。また、黒田清輝関連資料のウェブ上での公開促進のため、当所所蔵の白馬会展目録等のデジタル画像作成を行った。東アジア美術交流の調査研究では、日本で学び台湾で活躍した陳澄波の作品調査を行った。我が国の現代美術の動向に関する基礎資料として笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進めた。

【年度実績概要】

1　東アジア諸地域の近現代美術の研究資料収集、整理として以下の５件を行うことができた。

（１）　黒田清輝宛書簡のデジタル画像作成を進めた

（２）　矢代幸雄筆ベレンソン宛書簡の翻刻を進めた。

（３）　当所所蔵の貴重資料『黒田清輝遺作展目録』、白馬会展目録等のデジタル画像作成を行った。

（４）　白馬会の画家で中国大陸に渡った時期のある森岡龍造の画業について調査を行った。

（５）　台湾の洋画家陳澄波の作品調査を行った。

2　我が国の現代美術の動向に関する調査研究としては、以下を行った。

（１）　笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進めた。

（２）　当所所蔵の画廊資料の画廊別による整理とカード化を行った。

【実績値】

研究会等発表　３件（①～③）

論文掲載数　　３件（④～⑥）

【備考】

①　田中　淳　発表　「日本におけるゴッホ受容―1912 年を中心に」、第 13 回国際日本学シンポジウム「感覚・文学・美術の国際日本学　ファン・ゴッホと日本―ガシェ芳名録紹介本をめぐって―」、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター、7 月 8 日

②　田中　淳　「『画を仕上げる力』とは―青木繁の芸術」、「没後 100 年　青木繁」展（7 月 17 日～9 月 4 日）、ブリヂストン美術館、8 月 6 日

③　田中　淳　「中川一政とゴッホについて」、「没後 20 年記念展　中川一政が愛した芸術」展（2011 年 9 月 23 日～11 月 20 日）、真鶴町立中川一政美術館（神奈川県）、10 月 22 日

④　田中　淳　「中川一政の芸術の糧となった愛蔵品―近代日本のゴッホ受容と関連して」、「没後 20 年記念展　中川一政が愛した芸術」展（2011 年 9 月 23 日～11 月 20 日）、真鶴町立中川一政美術館（神奈川県）、pp. 6-11

⑤　田中　淳　「創作と評価―萬鉄五郎《風船を持つ女》を中心に―」、『美術研究』405 号、2012 年 1 月、pp. 15 -24

⑥　山梨絵美子「美術教育者としての黒田清輝の一面－内弟子・森岡柳造という受容者を通して」『森岡柳造展』図録（鳥取県立博物館、2011. 4）、pp8－11

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4113

自己点検評価調書

研 No. 3

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2．定量的評価

観点	研究会発表数	論文掲載数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的、定量的な評価観点の上で一定の成果をあげることができた。次年度は東アジアの研究者との人的交流も含め、さらに充実させていきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度は東アジアの研究者との人的交流も含め、さらに充実させていきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4114

（様式１）

業務実績書

研 No. 4

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	美術の表現・技法・材料に関する多角的研究（(1)-①-エ）

【事業概要】

彫刻や絵画を中心とする美術作品を構成する材料やそこに用いられた技法、ひいては表現、その制作過程、作品の成り立ち、生成されてから今日にどう至ったか、それがどのように受容されてきたか等を、関連書分野と連携しながら多角的に分析し、現在目の前にある「作品」ないし文化財に対するより深い理解を形成することを目指す。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長　綿田　稔

【スタッフ】

田中　淳、山梨絵美子、津田徹英、二神葉子、塩谷　純・綿田　稔・小林達朗・江村知子・皿井　舞（以上、企画情報部）・中野照男（客員研究員）

【主な成果】

本研究は美術作品が基盤としている表現・材料・技法等を文献史料あるいは作品に対しての科学的手法による分析を援用しながら解明することを目的とする。本年度は絵画・彫刻を中心に作品調査を進めるとともに、作画技法を記載した江戸時代の未紹介板本を調査した。また、ホームページ上で公開している奈良時代史料にあらわれた彩色語彙についてのデータベースを増補した。

【年度実績概要】

作品調査：宝福寺蔵木造性信上人坐像（於群馬県立歴史博物館）・松岡美術館蔵伝周文筆竹林山水図等・石見美術館蔵狩野松栄筆益田元祥像等ほかを調査した。

雪舟についての多角的な検討を進め、一定の成果を得た。またギメ美術館蔵大政威徳天縁起絵巻 6 巻の詞書の翻刻作業を進めた。

資料調査：江戸時代の作画技法書である板本「御絵鑑」（零本。元禄 13 年刊、萩博物館蔵）を調査し、同内容の国立国会図書館本および静嘉堂文庫本を調査した。

研究会 2 件（2011 年 10 月 12 日、綿田稔「室町漢画の基盤―周文と雪舟の場合―」／2012 年 2 月 28 日、綿田稔「『御絵鑑』について」）および研究協議会 1 件（2012 年 2 月 24 日「ギメ本大政威徳天縁起絵巻詞書検討会」）を開催した。

前中期計画で作成した奈良時代史料にあらわれた彩色語彙についてのデータベースを完成させるべく、『大日本古文書』20～25 巻から情報を採録してデータベースを増補するとともに、既存データの内容を再整理した。

前年度までに寄贈を受けた資料のうち、技法材料研究ととくに関わりの深い久野健旧蔵資料および秋山光和旧蔵資料の整理を進めた。

【実績値】

論文掲載数　　2 件（①～②）
発表件数　　2 件（③～④）

【備考】

①綿田　稔「山水長巻考―雪舟の再評価にむけて―」　『美術研究』405 号　pp. 25-46　2012.1
②津田徹英「中世真宗の祖師先徳彫像の制作をめぐって」　『美術研究』406 号　pp. 27-47　2012.3
③綿田　稔「室町漢画の基盤―周文と雪舟の場合―」　第 45 回企画情報部オープンレクチャー　東京文化財研究所セミナー室　2011.11.12
④綿田　稔「『御絵鑑』について」　企画情報部研究会　東京文化財研究所企画情報部研究会室　2012.2.28

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4114

自己点検評価調書

研 No. 4

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2．定量的評価

観点	論文掲載数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	前中期計画の「美術の技法・材料に関する広領域的研究」を継承しながら、「表現」へと視野をひろげて、実作例と史料の双方から多角的なアプローチを行っている。計画初年度としては十分な成果を得られたため、Ａと判断した

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全般的に計画通りに進捗したと考える。次年度以降も一層の深化が期待できるため、計画的に調査研究・史料収集・データ整理を継続していきたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4121

業務実績書

研 No. 5

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究（(1) －②）

【事業概要】
近畿地方を中心として、重要な古寺社や関連する旧家等が所蔵する歴史資料や書跡資料等について、継続的・悉皆的に整理・調書作成・写真撮影等の調査をおこない、現存資料の把握に努め、成果を目録・データベース等により、また重要資料は翻刻して公開する。このような調査によって文化財研究の基礎を固めた上で、文化財の歴史的性格・特徴等を研究し、日本の歴史・文化の研究に資する。撮影した写真は焼き付けを作成し、研究者等の研究に供する。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	歴史研究室長　吉川　聡

【スタッフ】
渡辺晃宏(都城発掘調査部史料研究室長)、馬場 基、山本 崇(以上、同部主任研究員)、桑田訓也、山本祥隆(以上、同部研究員)、児島大輔(埋蔵文化財センター特別研究員)、加藤 優(客員研究員)

【主な成果】
明日香村大字八釣が所蔵する明神講関係資料に関する調査成果を公表した。これは藤原鎌足像を礼拝する儀礼の関係資料であり、多武峯の膝下の地である明日香に、鎌足信仰が古くから現在にまで存続していることを明確にできた。また、春日座大工の家である木奥家の歴史資料を調査・公表した。この調査によって春日社造替が、その仕様を記した帳面に基づいて、旧例にのっとりながら、またその時々の判断も加えつつ、社殿を造営していることなどが明瞭となった。

【年度実績概要】
本年度は、興福寺・仁和寺・三仏寺・氷室神社大宮家・薬師寺・木奥家(旧春日座大工)などが所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

興福寺調査は、第 92 函紙背文書・第 112 函～第 115 函の調書を作成した。写真は第 92 函～第 98 函を撮影した。仁和寺調査は、御経蔵聖教第 41～第 43 函の調書原本校正、第 38 函～第 41 函の写真撮影を実施した。また第 150 函所収の古文書については、写真に基づいて釈文を作成し、その原本校正をおこなった。薬師寺調査は、第 51～第 57 函の調書作成と、第 24 函・第 25 函の写真撮影を実施した。

三徳山三仏寺は、第 3 函・第 4 函の調書を作成し、第 2 函～第 4 函の写真撮影を実施した。また、木製品・仏像や、三仏寺所蔵の大日寺出土瓦経の調査・写真撮影を実施した。さらには、大日寺出土瓦経の理解を深めるために、鳥取県立博物館・倉吉博物館・山陰歴史館等、諸所に分蔵されている大日寺出土瓦経の調査をおこなった。

木奥家所蔵の春日座大工関係資料

氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で連携研究をおこない、未成巻文書について、昨年度までに作成した調書の校正作業をおこなった。

また、江戸時代に春日座大工を世襲していた木奥家の古文書調査を実施し、目録・論稿を奈良文化財研究所編『木奥家所蔵大工道具調査報告書』に掲載した。その他、明日香村大字八釣の妙法寺が所蔵する資料や、明治時代に平城宮跡保存運動に活躍した、石崎勝蔵に関係する資料の調査をおこなっている。また昨年度の調査成果に基づき、明日香村大字八釣が所蔵する明神講関係資料の調査成果を公表した。

その他調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査・文化庁依頼の醍醐寺聖教調査などに協力した。

【実績値】
論文等数：報告書等 1 件、論文 1 件
調査資料点数
興福寺：調書作成資料点数 271 点、写真撮影資料点数 124 点
薬師寺：調書作成資料点数 62 点、写真撮影資料点数 85 点
三仏寺：調書作成資料点数 206 点、写真撮影資料点数 755 点
仁和寺：調書等原本校正資料点数 224 点、写真撮影資料点数 633 点
木奥家：調書作成資料点数 120 点、写真撮影資料点数 116 点

【備考】
報告書等：『木奥家所蔵大工道具調査報告書』奈良文化財研究所、2012.3「第 5 章木奥家所蔵春日座大工関連史料」・「付章木奥家所蔵春日座大工関連史料目録」
論文：吉川聡・谷本啓・児島大輔「明日香村八釣の明神講関係資料調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6.15

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4121

自己点検評価調書

研 No. 5

1．定性的評価

観点	正確性	適時性	継続性	発展性		
判定	A	A	A	A		

備考
近畿を中心とする、世界遺産にも登録されるような古寺社等には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、極めて適時性が高い調査である。そのため、着実に中断なく全容を把握する調査を実行しており、正確性・継続性に優れている。このような調査が所蔵者の管理の基礎となり、また研究の基礎となるものであり、発展性がある。今年度は特に、明日香村大字八釣で今も続いている明神講について、その関連資料の調査成果を報告することができた。藤原鎌足像を礼拝する儀礼とその本尊・関係資料の報告であり、多武峯膝下の明日香の地に、藤原鎌足を神としてまつる儀礼が古くから存在していることを明確にできた。また、春日大社の春日座大工だった木奥家の古文書を調査して性格を考察し、春日社造替が、その仕様を記した帳面にもとづきながら、しかし多少の改変を伴いながらおこなわれている様相を明確にできた。以上よりＡと判定した。

2．定量的評価

観点	調査対象箇所数	調査点数	論文等数			
判定	A	A	A			

備考
調査対象箇所数は、年度計画に掲げた寺社をすべて調査した。調査点数・論文等数は、それぞれ目標値 500 点・2 点であり、実績値はそれと同等または上回っているので、Ａと判定した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺、仁和寺、三仏寺の調査は計画通り実施した。大宮家は、奈良市教育委員会と連携研究を実施した。また薬師寺、旧春日座大工の木奥家の調査もおこなった。明日香村大字八釣・木奥家の資料については公表してその価値を明らかにした。明日香村大字八釣・木奥家は、それぞれ地区・個人が所有しており、注目されにくい資料であるので、そのような資料を世に知らしめ価値をみいだすことには意義があるだろう。以上の成果を総合的に判断してＡとした。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、年度計画通り堅調に実現できたと考える。また、明日香村大字八釣・木奥家の資料を調査し、成果を公表することができた。今後もこのペースで調査研究を進める必要がある。 今年度は、公表に至った成果が明日香村大字八釣・木奥家と、いずれも地区・個人所蔵の資料となったので、今後は、大量の資料を所蔵している寺社の調査を進め、積極的に公表に取り組んでいく必要があるだろう。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4131

業務実績書

研 No. 6

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究（(1)－③）

【事業概要】
我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の技法についての再検証（調査研究）を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	建造物研究室長　林良彦

【スタッフ】
箱崎和久［都城発掘調査部遺構研究室長］、黒坂貴裕［都城発掘調査部主任研究員］、大林潤、番　光、鈴木智大、海野聡、高橋智奈津［以上、同部研究員］、井上麻香、北山夏希［同部特別研究員］清水重敦［文化遺産部景観研究室長］恵谷浩子［以上、同部研究員］、松本将一郎［同部特別研究員］、成田聖［企画調整部任期付研究員］

【主な成果】
文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料の整理等の作業を行い、「建造物現状変更説明」については出版物として刊行・配布し、「ガラス乾板」については画像のデジタルデータ化と目録の出版により、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する再検証作業を継続的に実施した。このほか、受託事業により、各種歴史的建造物の調査をおこなった。

【年度実績概要】

カイベイ町並み調査

1. 所内で保管している文化財建造物保存修理時の「建造物現状変更説明」資料のうち、1953 年度から 1955 年度分のワード文書化、図版調整を行い、その成果を本文編と図版編に分けて刊行・配布した。また、同じく所内保管の文化財建造物等の撮影ガラス乾板（滋賀県分）を整理して、画像をデジタル化し、目録を出版した（デジタル化は外注）。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。
2. 古代建築の技法に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を 2009 年、10 年度に引き続き実施した。本年度は、引き続きかつて法隆寺西院金堂に使用されていた部材について調査をおこなった。なお、調査にあたっては、竹中大工道具館の協力を得た。
3. 建造物の基礎データ収集等を目的とした奈良町の木奥家大工道具及び家屋調査を行い、報告書を刊行した。
4. 海外関連事業として、日中韓の 3 国の文化財研究所における共同研究の一環として、2011 年 10 月に中国北京市で、国際学術会議に参加した。『仏塔建築保存』のテーマで研究発表をおこなうとともに、総合討議をおこなった。
5. 海外協力として、文化庁がおこなう協力事業の一環として、ベトナム・ドンナイ省フーホイ、ティエンザン省カイベイの伝統的建造物群保存対策調査をおこなった。
6. 2011 年 6 月 20 日～24 日に「建造物保存活用基礎課程」の研修を行った。全国から 20 名の参加があった。
7. 兵庫県近代和風建築総合調査、延暦寺建造物調査および高梁市旧高梁尋常高等小学校建築調査を受託し、調査・図面作成・報告書原稿作成をおこなった。

【実績値】
論文等数 12 件（公刊図書 4 件①～④、論文等 8 件⑤～⑥）　　学会等発表件数 3 件⑦
保管建造物関係資料整理：写真乾板デジタル化 1200 枚、現状変更資料入力等 1953～1955 年分
古代建築研究現地資料収集：法隆寺古材調査 55 回
保管建造物資料の外部者利用数：乾板写真 3 件 116 枚、建造物保存図 2 件 46 枚、摺拓本 3 件 10 冊

【備考】
①奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1953～1955（本文編）』2012. 3
②奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1953～1955（図版編）』2012. 3
③奈良文化財研究所『木奥家所蔵大工道具調査報告書』2012. 3
④奈良文化財研究所『国宝・重要文化財写真乾板目録Ｖ』2012. 3
⑤林良彦「本門寺五重塔の解体修理にともなう構造上の諸問題」『第 3 次中日韓建築遺産保存国際学術会議論文集』中国文化遺産研究院 2011. 10. 12
⑥箱崎和久「古代東アジアの発覚木塔とその構造推定」『第 3 次中日韓建築遺産保存国際学術会議論文集』中国文化遺産研究院 2011. 10. 12　　ほか 6 件
⑦林良彦「本門寺五重塔の解体修理にともなう構造上の諸問題」『第 3 次中日韓建築遺産保存国際学術会議』2011. 10. 13　　ほか 2 件

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4131

自己点検評価調書

研 No.6

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「建造物現状変更説明」「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は近年継続的に実施しており、地味な作業ではあるが高く評価できる。古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づき、これを発展させるため、新たに「技術・技法」等の視点を加え研究するもので、独創性のある研究内容といえる。特に、法隆寺古材調査は、古代建築の技法を知る上でまたとない資料であり、新たな視点での調査をおこない、成果を資料化することは、古代建築研究の展開におおきく貢献するものである。また、木奥家大工道具調査は稀少な大工道具一式の調査で、近世の建築生産の諸相を作り手側に焦点を当てて明らかにしようとするもので今後の研究の発展が期待できる。受託業務として行った兵庫県近代和風建築総合調査では、わが国の近代和風建築の研究と保存に対して貢献をなす成果をあげた点で、高く評価できる。また、受託業務として行った延暦寺建造物調査、高梁市旧高梁尋常高等小学校建築調査においては、詳細かつ正確な調査にもとづいて、その価値を明確にすることで、近年文化庁で推進されている文化財の保存・活用によるまちづくり施策に、おおきく貢献している。

2．定量的評価

観点	論文等数	資料整理数				
判定	A	A				

備考
　論文等数、資料整理数ともに十分な成果が認められるので、A と判定した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施でき、この継続的な実施によって、本事業の重要性が認知されるようになっている。古代建築の研究に関しては、法隆寺古材調査は基礎的な作業であり、今後高く評価されるものと考える。木奥家の大工道具調査や受託各事業で、諸建築の具体相を究明できたことは、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できるとともに、将来実施する建築調査に反映できる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は地味な作業であるが、これを継続させることの重要性をさらにアピールさせたい。後者の研究は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究所ならではの研究として、今中期計画に掲げたものであり、研究成果をより高める必要がある。今年度の成果を元に、次年度においては本研究の実施にさらに力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4141
（様式１）

業務実績書

研 No.7

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究（(1)-④-1）

【事業概要】
わが国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成をおこなう。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	部長　宮田繁幸

【スタッフ】
高桑いづみ、飯島　満、菊池理予（以上、無形文化遺産部）

【主な成果】
現在伝承されている狂言歌謡や謡本、美保神社所蔵楽器、最初期の SP である出張録音盤の中でもほとんど調査がなされていないフランス・パテー盤、文化財保護委員会及び文化庁が行った工芸技術記録について調査研究をおこない、無形文化遺産部所蔵音声資料の整理をしつつ伝承の危ぶまれる伝統芸能について実演記録を作成した。

【年度実績概要】
現在伝承されている狂言小歌のうち、初期歌舞伎と交流のあった歌謡について、狂言各流の異同を調査し、流儀差のみならず家単位で異なる場合があることなどを指摘した。成果は能楽学会で口頭発表し、金沢大学発行の報告書に掲載した。
室町後期から江戸初期にかけての謡本を調査し、ゴマの向きと旋律の動きについてかなりの程度で対応関係がみられることを立証した。成果は能楽学会大会で口頭発表し、能楽学会の機関誌に掲載の予定である。また、能「梅枝」の桃山時代の旋律を復元し、銕仙会で上演した。
美保神社所蔵の楽器調査をおこない、その成果を島根県立古代出雲歴史博物館で講演した。
無形文化遺産部所蔵の東大寺二月堂修二会の記録に基づいて第 6 回公開学術講座を開催した。
最初期の SP レコードである出張録音盤の中で、特殊な再生装置（縦振動録音方式）を必要とするため、これまで十分な試聴すらなされてこなかったフランス・パテー盤（明治 44 年吹込み）について、再生とメディア転換を試み、その収録内容の調査確認をおこなった
工芸技術に関しては、実地調査を行いつつ文化財保護委員会及び文化庁が行った工芸技術記録、及び近世における染織技法書について調査・検討を行い、その成果を第 35 回文化財の保存と修復に関する国際研究集会「染織技術の伝統と継承 - 研究と保存修復の現状 - 」で発表した。
連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録を作成した。また、伝承が変化しつつある宝生流謡曲について、近藤乾之助師ほかによる実演記録を作成した。

【実績値】
学会等発表件数　　5 件（①～⑤）
論文等発表件数　　3 件（⑥～⑧）

【備考】
① 高桑いづみ「ゴマがあらわす謡のフシ―世阿弥自筆本から文秋譜まで―」能楽学会第 10 回大会　2011.5.7
② 高桑いづみ「狂言小舞謡の伝承を考える」能楽学会例会　2011.6.13
③ 高桑いづみ「日本の伝統楽器―種類と歴史―」島根県立古代出雲歴史博物館特別講座　2011.6.4
④ 高桑いづみ「能『梅枝』と小書『越天楽』」銕仙会特別講座　2011.11.18
⑤ 菊池理予「日本における染織技術保護の現状と課題　－わざを守り伝えるために－」第 35 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会　2011.9.4
⑥ 高桑いづみ「『梅枝』と越天楽今様」　『銕仙』608号　2011.12
⑦ 高桑いづみ「狂言小舞謡の伝承を考える一野村万蔵家と狂言共同社のフシの比較を中心に一」『金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書』第17集　2012.1
⑧ 飯島満「フランス・パテー盤に関する調査報告」『無形文化遺産研究報告』6　2012.3

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4141

自己点検評価調書

研 No. 7

1．定性的評価

観点	適時性	独自性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　無形文化遺産部が作成した音声資料は他では作成しえない独自性の高い資料が多い。そのなかでも東大寺修二会関係の録音資料は質量ともに価値の大きなものである。公開学術講座ではそれに基づく成果を公開したが、今後も作成資料の意義を講座等で広く公開していく予定である。狂言歌謡、謡本の音楽面についても独自な視点から調査を行っており、その成果を公表した意義も大きい。伝承が危ぶまれる芸能の実演記録も他では行っていない事業であり、現在をのがしては記録が残らない危険性をはらんでいる点で適時性にかなうものである。美保神社の楽器調査は島根県立古代出雲歴史博物館、フランス・パテー盤については早稲田大学演劇博物館の事業との協力であり、工芸技術記録資料の調査は東京国立博物館の協力を得ている。他所との研究協力を行いつつ調査や発表を行うことができた。以上、さまざまな視点から無形文化財の伝承について多角的に調査を行った。

2．定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				

備考
1 年間の成果として、研究発表数、論文数ともに十分であると判断した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	さまざまな視点から無形文化財の伝承について、総合的な調査、および記録作成を行うことができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	総合的評価で記した通り、多角的に無形文化財の伝承について成果をあげることができた。次年度計画ではこの方向性を保ちながら、さらに深く調査研究を行いたいと考えている。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4142

（様式１）

業務実績書

研 No. 8

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（(1)-④-2）

【事業概要】

我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで東京文化財研究所で収集し、保管している無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行い、媒体転換等の必要な措置を講じるための準備を進める。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部　宮田繁幸

【スタッフ】

今石　みぎわ（無形文化遺産部）

【主な成果】

民俗技術の伝承実態、民俗芸能の伝承組織について現地調査と資料収集を行い、その成果を『無形文化遺産研究報告』などに報告した。また無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議し、その成果を報告書にまとめ、関係者、関係機関等に配布した。さらに地方自治体で作成された無形文化遺産に関する記録の所在情報について、確認作業を行い、データ化を完了した。

【年度実績概要】

1. 無形民俗文化財に関する調査・資料収集

民俗技術に関する調査・資料収集として、鵜飼および鵜捕りの技術調査、北関東を中心とする茅葺き屋根の維持技術についての調査を行なった。その成果の一部は「鵜と鵜飼の民俗」で報告した。また、山口県下松市において莚織り技術を中心とする民俗調査を行なった。その成果は『無形文化遺産研究報告』で報告した。さらに、削りかけ状祭具に関わる技術と風俗・慣習の調査を北海道と福岡県太宰府にて行なった。

2. 無形民俗文化財の公開状況に関する調査研究

地域伝統芸能フェスティバルあおもり（青森県）、国民文化祭京都 2011（京都府）における民俗芸能等の公開状況調査を実施した。

3. 研究集会の開催

2011 年 12 月 16 日（金）、第 6 回無形民俗文化財研究協議会を「震災復興と無形文化――被災地からの報告と提言」をテーマに、東京国立博物館平成館において開催し、170 名の参加を得た。5 件の事例報告（「東日本大震災を乗り越えて―沿岸部の民俗芸能　復興の現状」阿部 武司／「津波と無形文化」川島 秀一　／「被災集落と神社祭礼について」森 幸彦／「後方支援と三陸文化復興プロジェクト」小笠原 晋／「震災と文化復興」赤坂 憲雄）をもとにコメンテーター2 名（小川直之、石垣悟）を含めた総合討議を行なった。成果は『第 6 回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめ、参加者および関係者に配布した。本テーマは 2012 年度も継続テーマとして取り上げる予定である。

。

【実績値】

発表等件数：　3 件　（①～③）

論文等件数：　2 件　（④～⑤）

【備考】

① 今石みぎわ「青潮文化とタブノキ」東北芸術工科大学　2011 年 6 月 18 日

② 宮田繁幸「民俗芸能のネットワークについて」　フォーラム「民俗芸能ネットワークと地域活性化」　寒河江市立図書館　2011 年 10 月 23 日

③ 今石みぎわ「民俗技術と自然環境―削りかけ状祭具と樹木との関わりを中心に」東京文化財研究所 第 3 回総合研究会 2012 年 1 月 10 日

④ 今石みぎわ「鵜と鵜飼の民俗」　『人と動物の近代―絵はがきのなかの動物たち』　東北芸術工科大学東北文化研究センター　2011 年 9 月

⑤ 今石みぎわ「莚と莚織の技術」『無形文化遺産研究報告』6　東京文化財研究所　2012 年 3 月

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4142

自己点検評価調書

研 No. 8

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2．定量的評価

観点	論文掲載数	研究会発表件数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	民俗技術を中心とする無形民俗文化財に関する調査・資料収集、無形民俗文化財の公開状況に関する調査研究、及び研究集会の実施は、いずれも十分実施できた。とりわけ東日本大震災を受けて実施した無形民俗文化財研究協議会は、従来以上に反響を呼び、内容・参加者ともに充実した形で行えた。今年度の成果を踏まえ、次年度以降無形民俗の分野でどのようなことが可能なのかを引き続きテーマとして検討していきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年度当初の計画に沿って実施されており、目的を順調に達成できた。 なお、現中期計画は東日本大震災直後に決定されたものであり、その文言にその後の状況が十分反映されてはいないが、各年度計画において、その後の状況への対応を図っていくこととしたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4143
（様式１）

業務実績書

研 No.9

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	無形文化遺産分野の国際研究交流事業（(1)-④-3）

【事業概要】
無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】
高桑いづみ、飯島　満、菊池理予、今石みぎわ（以上、無形文化遺産部）、俵木悟（客員研究員）

【主な成果】
韓国国立文化財研究所無形文化遺産研究室との交流事業において、平成 22 年度までの交流成果に関する合同発表会を実施した。東南アジア諸国を中心として、無形文化遺産保護に関する情報収集を実施した。その他、関係する国際会議・シンポジウム等へ参加し無形文化遺産分野における国際的情報収集を行った。

【年度実績概要】
韓国との交流事業では、平成 23 年 8 月 9 日に東京文化財研究所において、以下の合同研究発表会を実施した。
研究発表内容： 飯島満「日韓におけるアナログ音声資料の保存と活用」、 林瑩鎭「韓国無形文化財保護制度の「種目」と「原型」」、 高桑いづみ「日韓における楽器製作者の現状」、「韓国と日本の重要無形文化財制度の性格と方向―工芸分野を中心に―」、 俵木悟 「韓国における無形文化財の映像記録のアーカイブ化の現状」、 林承範「韓・日無形文化財映像記録の意味―日本千葉県「洲崎踊り」の映像記録を中心に―」
さらに、翌 10 日今後の研究交流のあり方についての協議を行った。それに基づいて、あらたな合意書を平成 23 年 11 月に締結した。
東南アジア諸国を中心とする無形文化遺産の情報収集では、11 月に洪水直後のバンコクを訪問し、無形文化遺産関連施設・機関等の被害状況の確認を行った。
無形文化遺産分野の国際的情報収集では、以下の国際会議等に出席し、情報収集及び研究発表等を実施した。
参加会議：5 月“The Value and Competitive Power of Naganeupseong Folk Village as World Heritage”韓国順天市、6 月「2011 年アジア太平洋無形文化遺産フェスティバル国際学術会議」韓国全州市、8 月「中日韓非物質文化遺産保護比較研究国際シンポジュウム」中国広州市、11 月「無形文化遺産保護条約第 7 回政府間委員会」インドネシア　バリ、2012 年 2 月「国際人類学民族学連合　無形文化遺産委員会」

【実績値】
研究会開催　1 回
研究発表　　6 回　（①～⑥）
論文等　　3 件　（⑦～⑨）

【備考】
① 宮田繁幸「日本の世界遺産（無形文化遺産分野）登載現況と見通し」“The Value and Competitive Power of Naganeupseong Folk Village as World Heritage”韓国順天市、2011.5.12
② 宮田繁幸“The Safeguarding of Intangible Cultural Heritage in Japan”「 2011 年アジア太平洋無形文化遺産フェスティバル国際学術会議」韓国全州市、2011.6.10
③ 宮田繁幸「日本における無形文化遺産の保護」中日韓非物質文化遺産保護比較研究国際シンポジュウム、中国広州市中山大学、2011.8.2
④ 飯島満「日韓におけるアナログ音声資料の保存と活用」　日韓無形文化遺産学術発表会　東京文化財研究所 2011.8.9
⑤ 高桑いづみ「日韓における楽器製作者の現状」　日韓無形文化遺産学術発表会　東京文化財研究所　2011.8.9
⑥ 宮田繁幸“Documentation of Japanese Intangible Cultural Heritage” 国際人類学民族学連合　無形文化遺産委員会 Centro Regional de Investigaciones Multidisciplinarias　2012.2.25
⑦ 飯島満「日韓におけるアナログ音声資料の保存と活用　－SP レコードを中心に」　『日韓無形文化遺産研究』　韓国国立文化財研究所・東京文化財研究所 2011.11
⑧ 高桑いづみ「日韓における楽器製作者の現状　－重要無形文化財と選定保存技術のはざまで－」　『日韓無形文化遺産研究』　韓国国立文化財研究所・東京文化財研究所　2011.11
⑨ 宮田繁幸「岐路に立つ無形文化遺産保護条約」　『無形文化遺産研究報告』6　東京文化財研究所　2012.3

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4143

自己点検評価調書

研 No. 9

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	効率性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2．定量的評価

観点	発表数	論文等				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	韓国との交流に関しては、研究発表会と報告書の刊行により、前中期計画の交流のとりまとめができ、今中期計画における新たな交流枠組みも構築できた。国際会議等での情報収集、情報発信においても、効率的な実施ができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	韓国国立文化財研究所との無形文化遺産分野に関する交流は、新たな合意書の締結が実現し、本中期計画中の交流の基礎を構築できた。国際会議等における情報収集、情報発信の面でも、当初の計画を順調に実施している。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4151

業務実績書

研 No. 10

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究（(1) －⑤－ア、イ、ウ）

【事業概要】
遺跡を含む記念物に関して、国内外の動向も踏まえ、調査・保存・整備計画段階から整備後における管理・運営と公開・活用に至るまでの調査研究を行うとともに、遺跡等マネジメント研究集会（第１回）『自然的文化財のマネジメント』を開催する。また、遺構の露出展示を伴う整備事例の資料収集・現地調査により遺構露出展示に関する調査研究を進める。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長　　平澤　毅

【スタッフ】
小野健吉（文化遺産部長）、青木達司（文化遺産部主任研究員）、黒崎直（客員研究員）

【主な成果】
遺跡等における遺構露出展示について、個別事例の情報収集をおこない、データベース構築の作業を進めるとともに、露出展示遺構の保存管理に関するマニュアルの検討をおこなった。また、過年度の成果について、『地域における遺跡の総合的マネジメント』［平成 22 年度遺跡整備・活用研究集会（第 5 回）報告書］を刊行・配布するなど、その普及等をおこなった。

【年度実績概要】

1. 国内外における遺跡の整備に関する調査研究活動の一環として、遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を実施した。また、地域における遺跡の総合的マネジメントや自然的文化財のマネジメントについて検討した。

2. 2012年2月16・17日に、「自然的文化財のマネジメント」をテーマとして、平成23年度遺跡等マネジメント研究集会（第1回）を、平城宮跡資料館講堂で開催した。韓国から2名の研究者を招聘し、日韓国際研究集会とした。研究集会の開催趣旨等のほか、講演3件、事例報告3件が発表され、これらを踏まえ総合討議をおこなった。なお、研究集会参加者からアンケートの回収率は出席者の85%で、うち96%から有意義であったとの回答を得た。

3. 研究集会開催後、次年度にこの研究集会の報告書を編集・刊行する準備として、総合討議の内容の整理等を進めた。

4. 昨年度の研究集会「地域における遺跡の総合的マネジメント」の成果について検討を加え、「奈良文化財研究所紀要 2011」に報告するとともに、報告書を執筆・編集・刊行した。

5. 全国における遺構露出展示に関する現状と課題を詳細に把握するため、個別事例の整情報収集に基づきデータベース構築を進め、管理マニュアルの作成など、露出展示における問題点の分析と今後のあり方について具体的な検討を進めた。

6. 全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主幹課等に対して平成22年度に刊行した報告書を配布するなど、過年度の成果の公表に努めた。

遺跡等マネジメント研究集会（第１回）　［2012. 2. 16-17］

【実績値】
1. 研究集会開催数：1 回（①：参加者数：地方公共団体職員・民間事業者等約 60 名）
2. 刊行図書数：1 件（②）
3. 論文等数：15 件（論文 7 件③、講演・発表等 8 件④～⑤）。

【備考】
①『遺跡等マネジメント研究集会（第 1 回）自然的文化財のマネジメント　講演・報告資料集』　2012. 2
②『地域における遺跡の総合的マネジメント』平成 22 年度遺跡整備・活用研究集会（第 5 回）報告書　2011. 12
③小野健吉「文化財庭園（庭園遺構）の発掘と整備における留意事項」『日本庭園学会誌第 25 号』日本庭園学会 2011. 10　　ほか 6 件
④小野健吉「遺跡の整備と活用」文化庁拠点交流事業事業人材育成事業研修（ビシュケク／キルギス）2011. 10. 16
⑤平澤毅「歴史的庭園の現状と保存 ～特に発掘庭園の整備について～」文化比較：イタリアと日本における文化遺産の保護（主催：法政大学陣内研究室、於：イタリア文化会館）2011. 5. 25　　ほか 6 件

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4151

自己点検評価調書

研 No. 10

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A

備考
昨年度開催した研究集会のテーマである「地域における遺跡の総合的マネジメント」は、文化庁が推進している「歴史文化基本構想」、文部科学省・農林水産省・国土交通省の三省共管による「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」の動向とも関連して、近年極めて注目されている研究課題であり、その報告書を取りまとめ、公表したことは極めて高く評価できる。また、前・中期計画における『遺跡整備・活用研究集会』（2006 年度から計 5 回開催）の成果を踏まえて、新たに企画・開催した『遺跡等マネジメント研究集会』（第 1 回）「自然的文化財のマネジメント」をはじめ、時宜に適った調査研究の取組の成果は極めて良好であると評価できる。遺構露出展示に関する調査研究については、遺跡整備分野における前・中期計画の柱のひとつであり、特に平成 19 年度以降、全国的な現状把握を進め、平成 20 年度に開催した研究集会『埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題』における検討を踏まえて、平成 21 年度以降、さらに個別具体的な事例における詳細な状況把握を進める中で、管理マニュアルを含む重要事項の検討に予想以上に時間を要しており、他の業務遂行との調整から、十分な内容・構成とするため、成果の最終取り纏めを次年度に送ったのは、正確性の観点から適切と判断される。

2．定量的評価

観点	研究会等の開催回数	報告書等刊行件数	論文等件数			
判定	A	B	S			

備考
前・中期計画において開催してきた『遺跡整備・活用研究集会』の検討成果を踏まえ、遺跡等のマネジメントの在り方を検討するために今年度から開催することとした『遺跡等マネジメント研究集会』は、近年、この分野で様々な検討が重ねられてきた韓国の研究者 2 名を招聘して、これまで十分に検討されてこなかった「自然的文化財のマネジメント」を第 1 回の主題としたもので、日本と韓国の自然的文化財の保護施策を共有し、意見を交換したこの国際研究集会は、全国各地及び様々な分野から約 60 名の参加が得られ、その情報や課題の共有等において高く評価できる。一方、年度当初において、取り纏めを計画していた遺構露出展示に関する調査研究においては、全国各地の個別事例の照会に係る詳細な情報項目の検討について検討を進めてきたが、東日本大震災の影響などから、事例に関する情報収集やデータベース構築に係る詳細事項の確認などにおいて、十分な取組を進めることができずに、遺構露出展示の管理マニュアルなどを含む最終成果の取り纏めに至らず、作業完了の見通しの点から、結果的に見送ることとなったことは課題である。また、国内外の動向を踏まえつつ、論文・講演等を通じ、遺跡を含む記念物保護に関して、保存管理対象の理解、保存管理手法及び技術的事項を含む遺跡等の整備に関わる調査研究成果等の公表・普及を行った件数は十二分であり、中でも「名勝の保存管理策定に関する考察」の学会発表（2011 年 11 月 13 日）が、平成 23 年度日本造園学会全国大会ベストペーパー賞（造園学原論・歴史分野）を受賞したことは極めて高く評価できる。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	内容としては概ね当初の計画通り事業を実施でき、また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、今年度から新たに立ち上げた遺跡等マネジメント研究集会については、急速に変化していく社会構造・国民生活等と遺跡を含む記念物保護との関係について、将来を見通した取組として極めて重要であり、さらに充実を図っていくべき事業のひとつである。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	遺跡整備に関する情報の収集・整理・公開に関する検討を様々な観点から進めることができた。特に、研究集会においては、多角的な観点から自然的文化財のマネジメントについて検討したことは、時宜に適った成果として評価できる。一方、第 2 期中期計画から持ち越しとなっている遺構露出展示に関する調査研究については、現時点での検討を踏まえて、次年度に最終的な成果の公表を行う必要がある。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4152

業務実績書

研 No. 11

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究（(1) －⑤－エ、オ）

【事業概要】
庭園史に関する文献調査及び国内外での現地調査のほか、「庭園の歴史に関する研究会」の開催など、日本庭園に関する基礎的資料の検討をおこない、森・村岡・牛川資料の整理を進める。また、不動産文化財に関連した研究成果について、米国・コロンビア大学との研究交流の下に、コロンビア大学で講演を行う。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長　　平澤　毅

【スタッフ】
小野健吉（文化遺産部長）、青木達司（文化遺産部主任研究員）、高橋知奈津（都城発掘調査部研究員）、
惠谷浩子（景観研究室研究員）、エドワーズ・W（客員研究員）、マレス・E・ベルナール（客員研究員）

【主な成果】
鎌倉時代の庭園・建築・文献等の研究に取り組んでいる研究者とともに「庭園の歴史に関する研究会」を開催し、その成果を報告書として取りまとめた。日本庭園に関する国際的な情報発信検討については、その一環として『Japanese Garden Dictionary』の校訂を進めた。また、米国・コロンビア大学において、日本の不動産文化財に関わる講演２件をおこなった。

【年度実績概要】

1. 2011年10月29日に、大学等の外部研究者（庭園史学、考古学、建築史学、文献史学、美術史学、文学等）とともに「庭園の歴史に関する研究会」（テーマ：鎌倉時代の庭園　－京と東国－）を開催した。

2. 上記、研究会の報告書『平成23年度庭園の歴史に関する研究会報告書　鎌倉時代の庭園　－京と東国－』を執筆・編集・刊行した。

3. 森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、整理を進めた。

4. 日本庭園研究に関する国際的な情報発信検討の一環として、『Japanese Garden Dictionary』の校訂を進めた。

5. 発掘庭園データベースについては、新たな事例情報の収集を進めるとともに、情報項目充実の方向性について検討を進めた。

6. 過年度に刊行した古代庭園研究会に係る各報告書の配布をおこない、成果の公表に努めた。

7. その他、国内外における庭園史及び歴史的庭園　の保護等に関する調査研究に係る情報の収集・整理・検討を進め、現地調査・研究協議等をおこなった。

8. 2011 年 9 月 27 日に、米国・コロンビア大学において、講演会（JAPAN Architecture + Preservation）をコロンビア大学建築・計画・保存大学院及びコロンビア大学中世日本研究所と共催し、“Authenticity and Dismantling Repair System in Architectural Restoration in Japan” 及び “Memories of Sacred Landscape: Lost Female Rituals and Remaining Cultural Landscape in the Amami Islands, Southern Japan” の２つの講演をおこなった。

庭園の歴史に関する研究会　［2011.10.29.］

【実績値】
1. 研究会等開催数：2 回（①奈良文化財研究所；大学等研究者 24 名参加，②米国・コロンビア大学；約 40 名参加）
2. 刊行図書数：1 件（③）
3. 論文等数：16 件（論文 8 件④、講演・発表等 8 件⑤）。

【備考】
①『平成 23 年度庭園の歴史に関する研究会　鎌倉時代の庭園 －京と東国－　資料集』　2011.10
②発表者：清水重敦（文化遺産部景観研究室長），石村智（企画調整部国際遺跡研究室研究員）
③『鎌倉時代の庭園 －京と東国－』平成 23 年度庭園の歴史に関する研究会報告書　2012.3
④小野健吉「日本庭園の歴史をたどる」『一個人』2011 年 8 月号 KK ベストセラーズ 2011.6　　ほか 7 件
⑤小野健吉「平泉の庭園に見る中国庭園の影響」『平泉文化の国際性と地域性』に関するワークショップ 2011.11.12
　ほか 7 件

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4152

自己点検評価調書

研 No. 11

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
第１期及び第２期中期計画において開催してきた『古代庭園研究会』の調査研究成果を踏まえつつ、第３期中期計画において開催することとした『庭園の歴史に関する研究会』においては、中世を主なテーマとし、これまで包括的な検討がされてこなかった鎌倉時代庭園に関する検討をおこなったことは極めて意義が高い。さらに、日本庭園研究の基盤的資料として極めて重要な森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園史等関係研究資料の整理などを含め、調査研究の取組の成果は良好であると評価できる。また、米国・コロンビア大学との研究交流事業においては、当研究所から２名の研究員を派遣し、講演を行うことによって、継続的な研究交流の基礎を築くことができた点で重要といえる。

2．定量的評価

観点	研究会等の開催回数	報告書等刊行件数	論文等件数			
判定	A	A	S			

備考
『庭園の歴史に関する研究会』においては、これまで包括的な検討がされてこなかった鎌倉時代庭園に関する検討を進めたことは極めて意義が高く、その成果を報告書として取りまとめたことは高く評価できる。一方、米国・コロンビア大学において、日本の不動産文化財に関する講演２件を英語により実施したことは、欧米と日本の不動産文化財に関する研究交流を進める上で重要な成果であったといえる。また、論文・講演等を通じ、庭園の歴史及び保存修理等に関して、基礎的調査研究及び技術的事項を含む調査研究成果等の公表・普及を行った件数は十二分であり、中でも「「桂垣」と「桂垣」裏ハチク林に関する研究」の学会発表（2011 年 11 月 13 日）が、平成 23 年度日本造園学会全国大会ベストペーパー賞（造園材料・施工・管理分野）を受賞したことは極めて高く評価できる。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施でき、また、今後の調査研究に関して取り組むべき国際的な調査研究の方向性について検討を進めることができた。特に、「庭園の歴史に関する研究」においては、庭園史学のほか、考古学、建築史学、文献史学、美術史学、文学等の学際的な検討の重要性を示すことができた。このような庭園研究の取組は、日本の中世を中心に検討を進めるものであるが、さらに国際的観点からも推進していくべきである。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	庭園に関する調査研究を様々な観点から進めることができた。これらの成果を踏まえつつ、国内外の庭園史に関する調査研究及び歴史的庭園の保護をめぐる諸々の現状を踏まえると、今後、学際的・国際的な観点から、外部の研究者等と調査研究協議を重ねていくことが極めて重要である。森蘊・村岡正・牛川喜幸等の庭園史等関係資料については、さらに整理を進め、庭園史及び歴史的庭園保護の基盤的な資料の研究をさらに推進していく必要がある。また、米国・コロンビア大学との研究交流については、当面、当研究所から不動産文化財の調査研究・保存管理等に関わる研究員を派遣し、我が国固有の不動産文化財の特質や現状につき、欧米の関連研究者等に普及していくことが重要である。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-1

業務実績書

研 No. 12

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城宮跡東院地区（第 481 次）の発掘調査（(1) －⑥－ ア）

【事業概要】
平成 18 年度から計画的におこなっている平城宮跡東院地区の実態解明を目的とした学術発掘調査。調査区は東院地区の西北部に位置し、調査面積は 816 ㎡。調査期間は、平成 23 年 4 月 4 日～6 月 24 日である。6 月 16 日に調査成果を報道発表し、6 月 19 日には現地説明会をおこない、約 650 名の参加があった。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】渡邉晃宏、青木 敬、鈴木智大、芝 康次郎（以上、都城発掘調査部）、中村一郎、井上直夫、岡田 愛（以上、企画調整部）

【主な成果】
平城宮跡東院地区の西北部にあたる調査区で、掘立柱建物跡、掘立柱塀、溝等の遺構を多数検出した。おもな遺構としては、調査区西部を東西に流れる石組溝、調査区全体を整然と区画する掘立柱塀がある。これらは周辺の調査成果も勘案すれば 6 期以上に区分でき、区画の大規模な改変があること、奈良時代末期には調査区の北半と南半で建物群の性格が異なること、出土遺物から見て重要な建物群が存在すると想定されること、などが明らかとなった。

【年度実績概要】
検出遺構は、掘立柱建物 13 棟、掘立柱塀 7 条、掘立柱列 1 条、溝 3 条で、これらは少なくとも 6 期の変遷がある。
遺構の様相から、区画施設を含む大きな改変をともない、奈良時代末期にあたる 6 期には整然とした区画が存在することを確認した。遺構の変遷からは以下のような点が指摘できる。また出土例の少ない貴重な遺物も発見した。
〔区画の大規模な改変と排水計画〕1 期から 2 期には東西溝、東西塀により、南北を区画していたのが、3 期には一転して、南北塀により東西が区画される。4 期にはこの塀も廃され、前後の時期と異なる計画となったが、5 期には再び 3 期に似た建物配置がなされる。そして 6 期になって、南北 80 尺に区画される空間が南北に 2 つ並ぶようになった。区画施設を含む配置計画の変更を繰り返しながら、奈良時代末期には、きわめて整然とした区画が設けられたことが明らかになった。
〔建物の規模〕東院の西辺部で検出していた大型の総柱建物群が並ぶ範囲は、今回の調査区南辺部に留まる。これより北は身舎・廂建物で、規模も小さくなり、奈良時代を通して、建物群のもつ性格が異なることが明確になった。調査区一帯は、東院中枢部を支えるバックヤード的な施設があったと推定される。
〔出土遺物〕調査区からは瓦、土器が多数出土した。特記すべきものとして、奈良時代の火舎の獣脚が計 3 点出土しており、しかも須恵器製 1 点と銅製 2 点で素材が異なる。建物の規模からは当該地域はバックヤード的な施設と推定されたが、このような貴重品の出土は、隣接する地域に重要な施設が存在することを推測させる。

調査区全景（南西から）

【実績値】
論文等数：2 件①～②
発表件数：1 件（報道発表：平成 23 年 6 月 16 日、現地説明会：平成 23 年 6 月 19 日）
出土品：土器コンテナ 26 箱（土師器・須恵器。須恵器製獣脚 1 点）、軒丸瓦 11 点、軒平瓦 19 点、丸・平瓦コンテナ 99 箱、柱根 1 点、銅製獣脚 2 点
記録作成数：実測図（A2 判）36 枚、遺構写真（4×5）125 枚

【備考】
①鈴木智大「平城宮東院地区の調査－第 481 次－」『奈良文化財研究所紀要 2012』2012.6（予定）
②鈴木智大「平城宮東院地区の調査－第 481 次－」『奈文研ニュース No.42』2011.9

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4161-1

自己点検評価調書

研 No. 12

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考

816 ㎡という限られた調査面積であったが、東院地区の構造を知る上で、重要な成果を得ることができた。

適時性：平城京遷都 1300 年祭がおわり、その後の活用が問われるなか、昨年度に引き続き重要な地区の発掘調査を遂行することができた。調査に当たっては、発掘作業の概要を示す案内板を掲示し、宮跡来訪者に調査と遺跡保護の重要性を伝えることができた。
また 6 月 19 日におこなった現地説明会には悪天候にもかかわらず約 650 名もの聴衆をあつめた。説明会に際しては、カラーリーフレットを作成・配布し、よりわかりやすい説明ができた。

発展性：調査成果は、平城宮をはじめとする都城研究、古代建築研究に大きく貢献すると考えられる。

継続性：周辺既調査地域との遺構の連続性を確認できた。また次期調査への足がかり的な成果を得ることができた。

正確性：谷部に立地する当該地域は、きわめて複雑な土層の堆積のため、遺構の把握が困難な地域だが、遺構を的確に把握し、正確な調査をおこなうことができた。また都城発掘調査部員による現場検討会をおこない、さらなる正確性の向上をはかった。

2．定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				

備考

本調査区では、多数の土器、瓦が出土し、周辺地域の出土状況との検討をおこなう資料を得ることができた。また須恵器製の獣脚が 1 点、銅製の獣脚が 2 点、出土した。とくに銅製の獣脚は、平城宮跡での出土は 2・3 例目であり、その保存および残存の状況は 1 例目をしのぐ良品で、奈良時代の火舎を明らかにできる好例である。

6 月 19 日の現地説明会に先立ち、16 日に報道発表をおこない、同日以後、各報道機関から発信された。また現地説明会ではカラーリーフレットを作成・配布するとともに、アンケートを実施し 98 件の回答を得ることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	遺構の検出が非常に難しい東院地区の調査であったが、的確な土層や遺構の把握により、正確かつ迅速に調査をおこなうことができた。また現地説明会に際してはカラーリーフレットを作成し、聴衆からの好評を得ることができた。今回の調査成果をうけて、東院地区中枢部の解明への足がかりを得ることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	継続的な調査の実施により、非常にむずかしい土層の堆積がある平城宮跡東院地区にありながら、正確かつ迅速な調査を遂行できた。今後、周辺地区の継続的な発掘調査の実施により、東院地区の全貌を明らかにすることが期待される。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-2

業務実績書

研 No. 13

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	古代官衙、集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行（(1) － ⑥－ア）

【事業概要】
飛鳥・藤原京、平城京などの古代都城は、多くの古代官衙・集落遺跡との関連性の中にその歴史的特性を位置づけることが重要である。また、こうした古代官衙・集落遺跡の調査・研究は、各地で分散的に行われる傾向が強く、都城研究を背景としての総合的検討が地方自治体からも渇望されている。そこで、各地の古代官衙・集落遺跡の調査・研究集会を検討する研究集会を開催し、報告書を刊行することで、こうした研究課題や地方自治体の要望に答える。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】
馬場 基、青木 敬、小田裕樹、海野 聡（以上、都城発掘調査部）、小澤 毅（埋蔵文化財センター）

【主な成果】
第 15 回古代官衙・研究集落研究集会を開催（12/9･10）した。テーマは「四面廂建物を考える」である。事例紹介のほか、建築学的視点からの検討、文献資料からの分析、事例を総合しての問題提起などが報告され、これらを踏まえての活発な討論がおこなわれた。
昨年度実施した研究集会の報告書を『奈良文化財研究所研究報告第６冊　官衙・集落と鉄』として刊行した。

【年度実績概要】
Ⅰ．古代官衙・集落研究集会の開催（12/9･10）
テーマを「四面廂建物を考える」とした。
「身舎外周柱列の解釈と上部構造」と題して建築学的視点からみた四面廂建物の構造と遺構の特徴について箱崎和久氏からの報告を得た。次に各地の事例の紹介やその特徴・傾向の分析などの報告を「都城と周辺地域の四面廂建物」として家原圭太氏から、「西日本における四面廂建物の様相」として小澤太郎氏から、「東日本における古代四面廂建物の構造と特質」として江口桂氏から、それぞれ得た。「平安時代の儀式・建築からみた母屋と廂」として文献資料からみた廂空間の特質の分析について有富純也氏から報告を得、「多面廂建物跡・雑考―古代仏教系遺物共時傾向の検討を中心に―」として池田敏宏氏より四面廂建物の意義についての意見提示がなされた。また、「検出遺構における四面廂建物」として遺構の分析事例と手法について青木敬氏から報告があった。これらの報告を踏まえ、石橋茂登氏の司会により、活発な討論が行われた。
Ⅱ．『奈良文化財研究所研究報告第６冊　官衙・集落と鉄』（論考編・資料編）の刊行
昨年の研究集会の報告集を『奈良文化財研究所研究報告第６冊　官衙・集落と鉄』として刊行した。論考６編と討論記録を収録し、頁数は 204 である。

【実績値】
古代官衙・集落研究集会　参加者総数 131 名
アンケート回答 107（回収率約 81％）
大変有意義であった：68、有意義であった：36、普通：3、あまり有意義でなかった：0、有意義でなかった：0

【備考】
『四面廂建物を考える』第 15 回　古代官衙・集落研究会研究報告資料、奈良文化財研究所、2011.12
『奈良文化財研究所研究報告第６冊　官衙・集落と鉄』奈良文化財研究所、2011.12

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4161-2

自己点検評価調書

研 No. 13

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
今年度の実績については、以下のような評価を与えることができると考えている。
適時性：古代官衙や集落の研究を進めるうえで、適切な議題設定をおこなうことができた。
独創性：当研究所にとって、もっとも関心の深い分野の一つである古代の官衙・集落について、全国的視野からの研究発表と討論をおこなうことができた。
発展性：発表と議論の内容は、今後の研究に対して大いに発展性が見込むことができる。
効率性：研究会の準備や資料集の作成には、各方面の助力を得て効率的に進めることができた。
継続性：当研究所の事業として研究会を継続させることとなり、当研究所内外の研究者の協力を得て、充実した内容の研究会を開催することができた。参加者からは次回以降の研究集会への期待も多く寄せられており、今後の開催に励みとなっている。
正確性：発表者による研究の成果を討論することによって、内容をさらに充実させることができたと同時に、正確性についてもさらに向上させることができた。

2．定量的評価

観点	成果報告	収集資料数				
判定	A	A				

備考
成果報告：昨年度の研究集会の記録を『奈良文化財研究所研究報告６　官衙・集落と鉄』として刊行することができた。論考編には６編の論文と研究集会における討論記録を収録した。非常に幅広く、意欲的で独創的な内容が盛り込まれており、今後の活用が大いに期待される。
収集資料数：今年度の研究集会『四面廂建物を考える』の予稿集と資料集を簡易製本にて作成した。ここには、当研究所内外６名の研究者による発表資料を収めており、発表で引用された遺跡数や文献数は膨大な数にのぼる。さらに、全国の事例を資料集として整理した分量も膨大である。これらをもとに活発な討論をおこなうことができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究集会には多くの参加者を得、アンケートの結果も報告書も好評である。また、各地方自治体からの参加者の評価も高く、継続的に研究集会を開催し、成果を公表することが望まれる。次年度以降も、研究集会の開催と報告書の発行の継続を目指す。なお、編集作業等の効率化は大いに進捗しつつあるが、高い質の維持と強い継続力確保のため、さらなる効率化を目指していく。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究集会での報告や討論を通じて、古代都城の分析に資する成果を得たのみならず、全国地方自治体職員等の相互の調査・研究情報共有や質の向上にも寄与することができた。また、研究報告の刊行によって、これらの成果をしっかりと公表し、国民共有の財産とすることもできた。ただ、報告書刊行は、大部のものであったこともあり、予定よりも多くの業務量が発生することになってしまった。 本研究集会・報告書については、全国の地方自治体職員からもその継続を望む声も大きい。古代都城の分析にも非常に役立つものであり、今後もしっかりと継続する必要があると考える。そこで、継続性を担保するためにも、編集作業等のより一層の効率化を推し進めていく。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-3

業務実績書

研 No. 14

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	藤原宮跡朝堂院地区（第 169 次）の発掘調査（(1) －⑥－ア）

【事業概要】
「飛鳥・藤原」地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6 世紀末から 8 世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究をおこなうものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は、わが国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、平成 11 年度から中枢部の実態解明のための計画調査を実施している。

【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】
高橋知奈津、廣瀬　覚、若杉智宏、石橋茂登、桑田訓也、橋本美佳、玉田芳英、番光、森先一貴［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］

【主な成果】
朝堂院朝庭の発掘調査を実施し、朝庭の礫敷や排水のための暗渠や溝を検出し、朝庭における整備状況を確認した。また、下層調査では、藤原宮造営期の遺構として運河、藤原宮造営に先行して設置された朱雀大路とそれにそって並ぶ柱穴列、および掘立柱建物 6 棟を検出した。これにより、藤原宮の造営過程をこれまで以上に詳細に復元する手がかりが得られた。

【年度実績概要】
本研究は、朝堂院朝庭の整備・利用状況を明らかにするとともに、下層に存在する藤原宮造営期の遺構を具体的に把握することを目的として実施した。調査期間は 2011 年 4 月 4 日～2011 年 12 月 15 日、調査面積は 1350 ㎡である。
調査の結果、調査区全面で径 5～10 ㎝ほどの礫を検出し、朝庭が礫敷によって整備されていたことを再確認した。藤原宮期の遺構としては、南北方向の礫詰暗渠 1 条、南北方向の素掘溝 3 条を検出したのみで、今回の調査範囲がまさに広場として機能していた様子が明らかとなった。
下層遺構の調査では、調査区西側で藤原宮の造営に先行して設置された朱雀大路東側溝と、その東側で南北方向に並ぶ柱穴列を検出した。柱穴列は朱雀大路沿いに設けられた区画施設の痕跡と考えられる。また、調査区中央では、藤原宮造営時に資材運搬に使用されたと考えられる運河（幅約 6 m、深さ約 2m）を検出し、運河底付近から、土器・木材（木簡数 3 点を含む）・獣骨が出土した。さらに、調査区東側では、掘立柱建物 6 棟を発見した。いずれも方位にそって建てられていることから藤原宮造営期の建物と考えられるが、検出層位や柱穴間の切り合いから少なくとも 3 時期にわたる建て替えが認められた。朝堂院朝庭の礫敷下でこうした建物跡が密集して検出されたのは、本調査が初めてであり、藤原宮の造営過程を考える上で貴重な成果となった。ただし、現段階ではこれらの建物群の性格は不明であり、今後、周辺部の調査を進める中で検討を深めていく必要がある。
なお、2011 年 11 月 2 日に記者発表、11 月 5 日に現地説明会をおこなった。

調査区全景（南から）

【実績値】
論文等数：2 件（調査報告 1 件①、その他 1 件②）
発表件数　2 件（現地説明会 1 件③、報道発表 1 件④）
出土遺物　軒瓦 22 点、丸平瓦コンテナ 11 箱、土器コンテナ 75 箱、木材コンテナ 9 箱（製品 3 点、木簡 3 点、ほか加工木など）、石器・石製品 44 点、獣骨 63 点、そのほか炭・焼土・種実など
記録作成数　遺構実測図 93 枚、写真（4×5）372 枚
現地説明会来場者数　620 人

【備考】
①高橋知奈津・廣瀬覚「朝堂院の調査－第 169 次」『奈良文化財研究所紀要 2012』2012. 6（予定）
②廣瀬覚「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原 169 次）」『奈文研ニュース No. 44』2012. 3
③奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査－飛鳥藤原第 169 次調査現地説明会資料」2011. 11. 5
④奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査－飛鳥藤原第 169 次調査記者発表資料」2011. 11. 2

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4161-3

自己点検評価調書

研 No. 14

1．定性的評価

観点	適時性	継続性	独創性	発展性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
適時性・継続性：特別史跡藤原宮跡の全体解明のための継続的な計画調査である。
独創性:わが国最初の本格的都城の造営から解体までの一連の過程解明に寄与する。
発展性：藤原宮中枢部の造営過程を詳細に復元するための手がかりを得ることができ、さらなる研究課題への展望が生まれた。
正確性：慎重かつ冷静に調査を遂行し、その成果を外部に発表することができた。

2．定量的評価

観点	論文数等	現地説明会来場者数				
判定	A	A				

備考
本調査研究の成果は、研究所紀要をはじめとする紙面において、順次公開することができた。また、現地説明会では、雨天にもかかわらず多くの参加者があり、盛況を博した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査研究は、調査・記録・公開・発表等、適切におこない、定性的・定量的評価においてほぼすべてがＡと判定されるため、総合的評価もＡと判定した。 計画調査として、次年度以降も継続的に調査をおこなう予定である

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、かつ目的を順調に達成した。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-4

業務実績書

研 No. 15

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	甘樫丘東麓遺跡(第 171 次)の発掘調査（(1) －⑥－ア）

【事業概要】
日本における古代国家成立期の舞台である飛鳥地域は、6 世紀末から 8 世紀初めの間、国家における政治・経済・文化の中心地としての役割を担っていた。本研究は、このような重要性をもつ同地域の具体像を復元するために考古学・文献史学・建築史学・保存科学などの分野からなる学際的な研究を行うものである。今年度は甘樫丘東麓遺跡の実態の把握にむけた調査を進めている。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】
清野孝之・山本崇・渡辺丈彦・黒坂貴裕・庄田慎矢・小田裕樹・木村理恵・高橋透・降幡順子［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］井上直夫、栗山雅夫、岡田愛［以上、企画調整部］

【主な成果】
丘陵裾部において柱穴列を検出した。谷部では斜面を切り土・盛土により平坦面を造成しており、平担面上にて石敷・柱穴・溝および被熱により赤色硬化した部分を検出した。7 世紀前半段階における、谷部の土地利用形態を明らかにした。

【年度実績概要】
今年度の調査は甘樫丘東麓遺跡の丘陵裾部における遺構の遺存状況の確認、第 161 次調査で検出した谷部における遺構の全容を明らかにすることを目的として実施した。調査期間は 2011 年 9 月 22 日～2012 年 4 月下旬（予定)、調査面積は 879.5 ㎡である。

丘陵裾部の調査では、第 161 次調査で検出した SA225 に直交する柱穴列 1 条を検出したが、近世以降の段畑の造成により、古代の遺構面は大きく削平を受けていることが明らかになった。

谷部の調査では、第 161 次調査で一部検出していた谷 SX200，炭混層 SX201、硬化面 SX202、石敷 SX203 の解明に努めた。その結果、これらの遺構の広がりや内容を確認したほか、掘立柱建物 1 棟、溝 3 条以上等を新たに確認した。また、谷 SX200 は出土土器より飛鳥Ⅰの新しい段階（7 世紀中葉）に埋め立てられたことが明らかになった。

以上の成果より、この谷において 7 世紀前半に、何からの生産活動が行われた可能性が高いことが判明した。

なお、2012 年 3 月 2 日に記者発表、3 月 4 日午前 11 時から午後 3 時にかけて現地見学会をおこない、1,005 名が参加した。

調査区近景（南から）

【実績値】
論文等数：2 件（調査報告 1 件①、その他 1 件②）
発表件数：2 件（現地見学会 1 件③、報道発表 1 件④）
出土遺物　軒瓦 2 点、丸平瓦コンテナ 3 箱、土器コンテナ 13 箱、金属製品 7 点、石製品 1 点、そのほか羽口・炭・焼土・穀物・種実など
記録作成数　遺構実測図 65 枚、写真（4×5）151 枚
現地見学会来場者数　1,005 人

【備考】
①清野孝之・小田裕樹「甘樫丘東麓遺跡の調査－第１７１次調査」『奈良文化財研究所紀要 2012』2012.6（予定）
②小田裕樹「甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原 171 次）」『奈文研ニュース No.44』2012.3
③奈良文化財研究所都城発掘調査部「甘樫丘東麓遺跡の調査－飛鳥藤原第 171 次調査現地見学会資料」2012.3.4
④奈良文化財研究所都城発掘調査部「甘樫丘東麓遺跡の調査－飛鳥藤原第 171 次調査記者発表資料」2012.3.2

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4161-4

自己点検評価調書

研 No. 15

1．定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：甘樫丘東麓遺跡の実態の解明に向けた計画的な調査である。
継続性：計画調査の継続による遺跡全体の構造の解明を実施している。
発展性：遺跡の全容を復元するための手がかりを得、さらなる研究課題への展望が生まれた。

2．定量的評価

観点	論文数等	発表件数	現地説明会 来場者数			
判定	A	A	A			

備考

調査成果は、研究所紀要をはじめとする紙面において、順調に公開することができた。また、現地説明会では、多くの参加者を得、盛況となった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査研究は、調査・記録・公開・発表等を適切におこない、定性的・定量的評価において全てがＡと判定されたため、総合的評価もＡと判定した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに進行しており、課題であった甘樫丘東麓遺跡の実態の把握についても順調に進んでいる。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4162-1

業務実績書

研 No. 16

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等（(1) －⑥－イ）

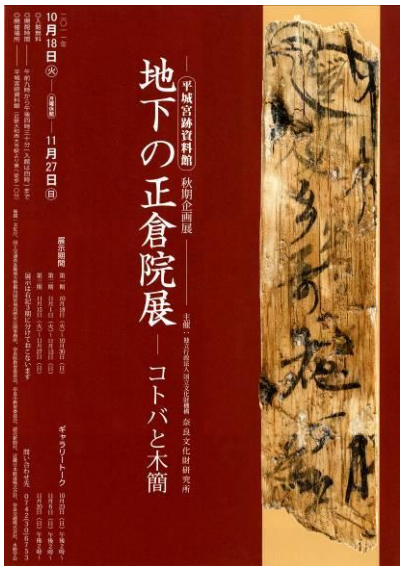
【事業概要】
平成 23 年度の発掘調査によって平城宮・京跡から出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、検出遺構の整理・分析研究を、年間を通じて実施した。また、昨年度以前の調査で出土した遺物について、報告書刊行またはその準備作業としての再調査をおこなった。さらに、出土遺物の科学的保存処理を継続して実施した。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】
小池伸彦、芝 康次郎、諫早直人、神野 恵、森川 実、青木 敬、今井晃樹、石田由紀子、川畑 純、渡辺晃宏、馬場 基、山本祥隆、箱崎和久、大林 潤、鈴木智大、海野 聡（以上、都城発掘調査部）、
中村一郎、栗山雅夫、鎌倉　綾（以上、企画調整部）

【主な成果】
本年度の発掘調査で出土・検出した遺物・遺構の整理・分析研究、図面作成・写真撮影などの基礎作業をおこない、平成 24 年刊行予定の『奈良文化財研究所紀要 2012』の報告を準備した。併せて、昨年度以前の発掘調査で出土した遺物についての調査を継続して実施した。また、『地下の正倉院展―コトバと木簡』を開催した。

【年度実績概要】
・平成 23 年度の発掘調査による出土遺物の整理
平城宮・京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、検出遺構の図面作成・写真撮影・分析研究、および出土遺物の科学的分析・保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じて発掘調査と併行して、これを遅滞なく実施した。
本年度は平城宮東院地区において、掘立柱建物群を多数検出し、所期の成果を得た。この発掘調査では、複雑な遺構の整理と出土遺物の調査研究とを実施した。このほか、朱雀大路緑地（第 478 次・486 次）、興福寺北円堂（第 483 次）、薬師寺旧境内（第 489 次）の発掘調査についても、検出遺構と出土遺物の整理を平行して実施した。
・平成 22 年度以前の出土遺物の整理
『名勝大乗院庭園発掘調査報告』刊行に向けての再整理・分析を重点的に実施した。これは検出遺構の検討と、出土遺物の調査からなる。また、平城宮東区朝堂院地区の出土遺物・検出遺構について、報告書刊行に向けての再整理・分析を開始した。
・これまでに平城宮内から出土した木簡の中から優品を選び、平城宮跡資料館にて秋季企画展『地下の正倉院展―コトバと木簡』（10 月 18 日～11 月 27 日）を開催し、広く公開した（写真）。
・特別企画展『地下の正倉院展―コトバと木簡』にともない、展示解説図録『地下の正倉院展―コトバと木簡』を作成した。
・『平城宮発掘調査出土木簡概報（四十一）』を刊行した。



「地下の正倉院展」案内

【実績値】
報告書等 1 件、展示図録 1 件

【備考】
展示解説図録『地下の正倉院展―コトバと木簡』2011.10
『平城宮発掘調査出土木簡概報（四十一）』2011.12

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4162-1

自己点検評価調書

研 No. 16

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：新たに出土・検出した遺物・遺構の資料的価値を明確にし、重要なものについては迅速に情報公開し、国民の文化財としての活用を図った。
発展性：新たに出土した資料や検出した遺構の検討を通じ、より高度な古代史研究を推進するとともに、資料の分析にあたって新たな方法を追求した。
継続性：平城宮・京および寺院の発掘調査を通じて得た膨大な歴史資料についての基礎的な分析と研究を継続した。
正確性：蓄積されている資料を正確に資料化し公表した。

2．定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					

備考
論文等数：当初予定の刊行物を順調に刊行できたことに加え、新しい成果を適時公表することができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮・京跡および寺院で出土した膨大な考古資料・文字資料を継続的に整理・分析し、古代史研究上のさまざまな重要課題について、汎東アジア的な視点で検討を加えたことから、総合的にみてＡと判定した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの研究を基礎として、さらに新しい資料・方法を加味・活用して、研究を深化させた。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4162-2

（様式 1）

業務実績書

研 No. 17

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等（(1) －⑥－イ）

【事業概要】

本年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】

玉田芳英、清野孝之、降幡順子、石橋茂登、山本 崇、黒坂貴裕、渡辺丈彦、廣瀬 覚、庄田慎矢、木村理恵、小田裕樹、若杉智宏、高橋 透、森先一貴、橋本美佳、番 光、高橋知奈津［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、石田由紀子［都城発掘調査部（平城地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛［以上、企画調整部］、藤井裕之(埋蔵文化財センター)、金原正明(奈良教育大学)、杉山真二(（株）古環境研究所)

【主な成果】

本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、成果の一部を公表した。

【年度実績概要】

①　本年度の発掘調査による出土遺物について

本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木簡・木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類などの整理、分析研究、発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業及び、出土遺物の保存と保存処理は発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じての野外での発掘調査と並行して各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2012』等で公表する。

②　前年度までの出土遺物について

発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書として公刊するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。また藤原宮東面北門周辺から出土した木簡 611 点の整理・分析・研究が終了し、その成果を『奈良文化財研究所史料 88 冊　藤原宮木簡　三』として刊行した。それ以外には、藤原宮 SD1901A(運河)出土瓦(第 20 次)、SD2300 出土土器(第 23 次)の整理・分析、朝堂院朝庭(第 163 次)・藤原京右京六条二・三坊(第 167 次)の自然科学分析、水落遺跡(第 165 次)の珪藻分析などがおこなわれ、その成果を論文として公表した。

【実績値】

公刊図書等数：2 冊①～②　　論文等数：6 件③～⑧　　記録作成数：写真（4×5）338 枚

【備考】

①奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要 2011』2012.6（予定）
②奈良文化財研究所『奈良文化財研究所史料 88 冊　藤原宮木簡　三』2012. 1.30
③石田由紀子「第 20 次調査 SD1901A(運河)出土瓦報告」『奈良文化財研究所紀要 2011』2012.6（予定）
④高橋透「第 23 次調査 SD2300 出土土器報告(1)」『奈良文化財研究所紀要 2011』2012.6（予定）
⑤山本崇・藤井裕之「藤原宮木簡の樹種」『奈良文化財研究所紀要 2011』2012.6（予定）
⑥若杉智宏・番光・山崎健・金原正明・杉山真二「藤原宮朝堂院朝庭(第 163 次)、藤原京右京六条二・三坊(第 167 次)の自然科学分析」『奈良文化財研究所紀要 2011』2012.6（予定）
⑦庄田慎矢「水落遺跡の珪藻分析報告－第 165 次(東区)」『奈良文化財研究所紀要 2011』2012.6（予定）
⑧木村理恵「飛鳥藤原地域出土の木製食器」『奈良文化財研究所紀要 2011』2012.6（予定）

【書式Ｂ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 4162-2

（様式 2）

自己点検評価調書

研 No. 17

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

適時性：新出土資料の迅速に公開し活用に供した。
独創性：新たな資料分析方法を追究した。
発展性：蓄積された歴史資料を正確に資料化した。
継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究と保存処理を実施した。
正確性：新出資料の正確な資料的性格と価値について公表した。

2．定量的評価

観点	公刊図書数					
判定	A					

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行い得たので、総合的にＡと判断した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	報告書作成のための遺物・遺構整理作業を、ほぼ予定通り進めることができた。また、成果物の刊行も計画通りに行い得た。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4163

業務実績書

研 No. 18

中期計画の項目	４文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究（(1)-⑥-ウ）

【事業概要】
飛鳥地域の壁画古墳についての調査研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、鋳造関連遺物を中心とした資料の調査を行う。また、飛鳥時代木造建築遺物の研究として、山田寺出土部材の研究を行う。

【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長　　加藤真二

【スタッフ】
成田聖、丹羽崇史　［以上、飛鳥資料館］

【主な成果】
飛鳥地域の壁画古墳の研究としては、昨年度の天文図の調査に基づき、春期特別展を開催した。また、新たに、キトラ、高松塚古墳出土大刀の類例および同時代資料の集成を行った。同時に、武人像を中心とした壁画資料の収集をおこない、7～8 世紀における武器の着装について研究を進めた。
東アジアにおける工芸美術史・考古学研究のうち、鋳造関連遺物の調査は、橿原市出土品の調査と、宮内庁および奈文研埋文センターと共同して、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の明日香村古宮遺跡出土の金銅製四鐶壺の調査を実施した。また、これまでの鋳造関係遺物の調査成果をもとに夏期企画展を実施した。
山田寺出土部材については、経年的に計測調査をおこなっており、本年もこれを継続した。その結果、大きな変化がないことを確認した。

【年度実績概要】
飛鳥地域の壁画古墳の研究：キトラ、高松塚古墳出土大刀の類例および同時代の考古資料を集成するとともに、内外の壁画にみられる武人像に関する資料を集積し、7～8 世紀にかけての武器、武具の種類やその着装状態を探求した。この研究成果は平成 24 年度春期特別展、およびその展示図録の基礎となる。なお、昨年度の研究成果を飛鳥資料館図録第 54 冊として刊行した。
鋳造関連遺物の調査研究：橿原市内膳北八木遺跡、堺市大井遺跡出土品を中心に蛍光 X 線分析などを実施し、その成果を研究図録第 14 冊として刊行した。また、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の明日香村古宮遺跡出土の金銅製四鐶壺を対象に、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター、宮内庁と共同調査を実施した。この結果、素材や製作に関する詳しい情報がえられるとともに、詳細な実測図を作成することができた。また、唐の墓誌蓋の図像との比較から、四鐶壺の鳳凰図の年代的な位置づけを初歩的に把握した。そして、これらの成果を研究図録第 15 冊として刊行した。さらに、これまでの調査研究の成果をもとに夏期企画展「鋳造技術の考古学―東アジアにひろがる鋳物師のわざ―」を開催し、飛鳥資料館カタログ第 25 冊を刊行した。
山田寺出土部材の研究:第２展示室で常設展示中の重要文化財山田寺出土部材について、ひずみ計を設置して、その経年変化を計測している。計測によれば、大きな変化は生じておらず、展示を継続している。

調査中の金銅製四鐶壺

【実績値】
飛鳥地域の壁画古墳の研究　図録１冊（①）
鋳造等関連遺物の調査研究　カタログ１冊（②）、研究図録２冊（③・④）
山田寺出土回廊部材　経年変化計測値

【備考】
① 『星々と日月の考古学』飛鳥資料館図録第 54 冊　2011 年４月
② 『鋳造技術の考古学―東アジアにひろがる鋳物師のわざ―』飛鳥資料館カタログ第 25 冊　2011 年８月
③ 『奈良県橿原市内膳北八木遺跡・大阪府堺市大井遺跡出土冶金関連遺物の調査』
飛鳥資料館研究図録第 14 冊　2012 年３月
④ 『奈良県明日香村古宮遺跡出土金銅製四鐶壺の調査』飛鳥資料館研究図録第 15 冊　2012 年３月

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4163

自己点検評価調書

研 No. 18

1．定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性	発展性		
判定	A	A	A	A		

備考
　飛鳥地域の壁画古墳についての調査研究では、キトラ、高松塚古墳出土大刀の東アジア史的な位置付けをおこない、両者の差異や日本における唐様大刀の出現に関して考察をおこなった。この議論は、両古墳の造営年代の議論にも関連する。
　鋳造関連遺物の調査研究では、都城域と周辺地区の冶金技術の差異を探ったほか、謎の多い古宮遺跡出土四鐶壺についての詳細な分析をおこなった。いずれも東アジアの冶金技術を解明するうえで、重要な所見を得られた。また、これまでの研究成果を企画展という形で広く一般に公開し、専門家はもとより、一般の方々から好評を得た。
　飛鳥時代木造建築遺物の研究として、山田寺出土部材の研究をおこなった。山田寺の出土部材を対象とする、保存処理済み大型部材に関する継続的なデータの収集により、従来我が国になかった保存処理部材の経年変化についての長期的なデータが蓄積されつつあり、保存科学および大型木製品の展示保管に大いに資している。

2．定量的評価

観点	刊行物数					
判定	A					

備考
　予定よりも多く刊行できた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	いずれも計画どおり、一部のものに関しては、計画以上のデータ、資料の蓄積とそれをもとにした研究成果をあげることができた。また、研究図録、展覧会およびその図録、カタログという形で社会に研究成果を公開、還元できた。さらに、宮内庁、奈文研埋蔵文化財センターと共同研究を進めることができ、文化財保存の面に関しても貢献ができたと考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	いずれも滞りなく、計画通り研究は進んでいることから、順調と判断した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4164

（様式１）

業務実績書

研 No. 19

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力（(1) －⑥－エ）

【事業概要】

Ａ：漢魏洛陽城跡の発掘調査を中国社会科学院考古研究所と共同して実施し、日本の都城との比較研究をおこなう。また、調査成果の概要を公表する。

Ｂ：朝陽地区隋唐墓出土副葬遺物ならびに遼西地域東晋十六国期の都城について、中国遼寧省文物考古研究所と共同で調査・比較研究し、日本都城成立期の交流を考察してその成果を公表する。

Ｃ：鞏義市黄冶唐三彩窯跡および当地出土をはじめとした製品について、中国河南省文物考古研究所との共同研究を実施し、日本の奈良三彩との関連を総合的に考察し、成果を公刊する。

Ｄ：日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究および研究員を相互に長期派遣する発掘調査交流を、韓国国立文化財研究所とおこなう。

Ｅ：中央アジアの旧石器時代資料に関する共同研究を、カザフ国立大学とおこなう。

Ｆ：河南省文物考古研究所が行う河南省許昌市霊井遺跡出土の細石刃石器群の整理・研究に参与、協力をおこなう。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　井上和人

【スタッフ】

Ａ：井上和人、今井晃樹［以上、都城発掘調査部］、栗山雅夫［企画調整部］他９名（王巍、銭国祥、朱岩石他）

Ｂ：井上和人、小池伸彦、清野孝之、諫早直人［以上、都城発掘調査部］他６名（李向東、李新全他）

Ｃ：深澤芳樹、玉田芳英、森川 実［以上、都城発掘調査部］他８名（孫新民、趙志文他）

Ｄ：深澤芳樹、石橋茂登、青木 敬、庄田慎矢、諫早直人［以上、都城発掘調査部］他 25 名（権宅章 他）

Ｅ：森本 晋、加藤真二［以上、企画調整部］、森川 実、芝 康次郎、森先一貴［以上、都城発掘調査部］

Ｆ：加藤真二、丹羽崇史、成田聖［以上、企画調整部］

【主な成果】

Ａ：漢魏洛陽城は宮城壁およびその周辺を対象として共同調査を実施。

Ｂ：共同研究の成果として『遼寧省朝陽地区隋唐墓の整理と研究』の執筆と編集。金嶺寺遺跡出土遺物調査の実施。

Ｃ：河南省および河北省で生産した唐三彩の調査研究を実施。唐三彩に関する学会で発表。

Ｄ：日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を実施。

Ｅ：カザフ国立大学所蔵資料の調査および大学研究者との研究交流を実施。

Ｆ：霊井遺跡出土品の調査研究を実施。中国・韓国より研究者４名を招聘。講演１回、研究報告を２回実施。

【年度実績概要】

Ａ：2011 年５月に２名の研究員を派遣した。宮城壁の断割調査から宮城の変遷を明らかにし、宮城内外の遺構を検出した。漢魏洛陽城の調査成果は 2011 年５月 28 日に日本考古学協会大会、および奈良文化財研究所所内講演会にて発表をおこなった。

Ｂ：2011 年９月に３名の研究員を派遣し、共同研究成果の取りまとめと次年度以降の事業計画について協議した。また、2011 年 11 月に４名の研究員を派遣し、朝陽地区の金嶺寺遺跡出土瓦等を調査した。

Ｃ：2011 年６月に北京で開かれた鞏義窯に関する学会に参加するとともに、２件の発表をおこなった。2011 年 11 月には研究員を中国に派遣し、鞏義市水地河・白河地区、東魏鄴城、河北省邢州窯などより出土した唐三彩、北朝白瓷・青瓷などを調査した。同年 11 月には中国側から５名を招聘して、学術講演会を開催した。2012 年３月には、図録『白河唐三彩窯の考古新発見』を刊行した。

Ｄ：2011 年 11 月・12 月および 2012 年３月に研究員を派遣して調査研究を実施した。発掘交流では８～10 月に１名派遣、10～12 月に１名の招聘を実施した。また、共同研究に関連して研究報告会を開催し、調査研究に対する協力や理解を深めている。

Ｅ：2012 年２月に研究員を派遣して、大学所蔵のシュルビンカ遺跡出土資料の実測や写真撮影など調査を実施した。

Ｆ：2011 年４月、12 月、2012 年２～３月に中国へ研究員等を派遣し、中韓の研究者を４名招聘し、国際学会で報告した。

【実績値】

学会、研究会等発表実績５件①、論文発表実績５件②～③、報告書刊行物実績１件④

記録作成数：Ａ 遺構平面図 12 枚、フィルム（4×5）84 カット、デジタルカメラ 333 カット、Ｂ 写真・3D デジタイザ・調書・実測図等の記録多数、フィルム（4×5）48 カット、 写真・調書等の記録多数、Ｄ 論文等２件、Ｅ　論文集計１部、写真・調書等の記録多数、Ｆ　遺物実測図・写真・調書等の記録多数。

【備考】

①井上和人・今井晃樹ほか「中国漢魏洛陽城－北魏宮城中枢部の発掘調査－」日本考古学協会第 77 回総会 2011.5.29　ほか４件

②森本晋・加藤真二ほか「カザフスタン南部の多層遺跡」『旧石器研究第７号』日本旧石器学会 2011.5

③玉田芳英「河北省邢州窯出土唐三彩の調査」『奈良文化財研究所紀要 2012』2012.6（予定）　ほか３件

④『鞏義白河窯の考古新発見』（日本語版）奈良文化財研究所 2012．3

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4164

自己点検評価調書

研 No. 19

1．定性的評価

観点	独創性	発展性	適時性			
判定	A	A	A			

備考
独創性：東アジアの考古学に関する最新情報を入手・公開し、日本古代史の再検討に貢献した。
発展性：海外の研究機関と連携し、日本文化の源流を探るための基礎的研究の蓄積を継続している。
適時性：成果報告を迅速に作成し、公表した。

2．定量的評価

観点	成果報告	記録件数				
判定	A	A				

備考

成果報告：速報性を重視した報告をおこなった。
記録件数：未公開の貴重な学術資料について多くの記録調書を作成し、写真などのデータを収集できた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国、韓国、カザフスタンで、関係研究機関との連携のもとに遺跡・遺物を調査し、相互の研究を向上させたほか、計画どおりに事業を実施できたので、総合的にＡと判断した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	いずれの研究も計画通りに実施し、成果をあげることができた。これらの国際共同研究は都城発掘調査部を中心として担当しており、6本の研究を総合的に組み立てることにより、古代史の解明に資する成果を達成することを目指している。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4171

（様式１）

業務実績書

研 No. 20

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究（(1) －⑦）

【事業概要】

文化的景観及びその保存・活用に関する調査・研究の一環として、諸外国との比較を行いつつ、我が国の文化的景観保護行政に関する基礎的な情報を収集し、整理が終了したものより順次公表を行う。また、文化的景観の学術及び保護に資する研究会を定期開催し、その成果を踏まえて文化的景観の保護に関する研究集会を開催する。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	文化遺産部長　小野健吉

【スタッフ】　清水重敦［文化遺産部景観研究室長］、惠谷浩子［同部研究員］、松本将一郎［同部特別研究員（アソシエイトフェロー)］、宮城俊作［客員研究員］、小浦久子［客員研究員］

【主な成果】　文化的景観に関する調査研究の一環として、アメリカ合衆国における文化的景観保護の状況を視察し、研究交流の道筋を立てた。国内に関しては、現地調査や視察、協議を通じて、文化的景観の保存計画、整備・活用事業の基本的な考え方を整理し、論文等を通じて成果を報告した。また、文化的景観学研究会を、準備会を含めて 3 回開催し、その成果を踏まえつつ、文化的景観の制度発足以来の保護と学術の動向の中間総括を目的として、文化的景観研究集会（第４回）を開催した。

【年度実績概要】

1.　基礎的・体系的研究

文化的景観の基礎的・体系的な調査研究の一環として、今中期計画より諸外国との比較研究を開始した。今年度はアメリカ合衆国国立公園局による文化的景観保護につき、現地研究者と情報交換をするとともに、バーモント州のマーシュ・ビリングス・ロックフェラー国立歴史公園を視察し、保護の現状と問題につき担当者と協議をおこなった。

少人数で横断的議論をおこなう場として設定した「文化的景観学研究会」については、準備会を含めて３回開催した。１回目は「都市・集落の文化的景観をめぐる動向」を、２回目は「町並み保存と文化的景観」をテーマに、準備会と合わせて開催した。

シンポジウム形式で実施する「文化的景観研究集会」については、過去３度に渡り開催してきた同集会での課題を洗い出し、制度発足後６年を経過した文化的景観保護行政と学術研究の動向の中間総括を目指し、2011 年 12 月 16・17 日に「文化的景観の現在－保護行政・学術研究の中間総括－」をテーマとして開催した。初日は「奥飛鳥の文化的景観」の現地視察と基調講演・鼎談をおこない、2 日目は 10 件の報告の後、総合討議をおこなった。これに合わせ、『文化的景観研究集会（第４回）講演・報告資料集』（報告書等②）を作成した他、昨年度開催した研究集会（第３回）の成果報告書（報告書等①）を刊行した。

研究集会における見学会の様子

2.　文化的景観保護に関する現地調査・研究

宇治市、四万十市、亀岡市をフィールドに、文化的景観の整備手法につき、各自治体と協力して文化的景観の価値評価及び整備計画立案調査を進めた。

この他、京都岡崎、佐渡相川、長良川流域の文化的景観に関する受託調査研究や、全国の文化的景観の視察と担当者との協議を通して、特に都市に関わる文化的景観の価値評価と保存計画立案、文化的景観の整備・活用事業のあり方について基本的な考え方を整理し、調査報告会等において提言をおこなった。

【実績値】

研究集会開催数：１回、参加者数：地方自治体職員（文化財、都市計画、企画ほか）等、164 名。
研究会開催数：３回。
報告書刊行：１冊①～②、論文：８件③～⑤、研究発表：６件⑥～⑦。

【備考】

報告書等：①『文化的景観研究集会（第３回）報告書　文化的景観の持続可能性-生きた関係を継承するための整備と活用-』奈良文化財研究所、2011.12、
②『文化的景観研究集会（第４回）講演・報告資料集』奈良文化財研究所、2011.12
③清水重敦「都市を文化的景観として見ること-佐渡相川、京都岡崎の調査から-」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6.15
④惠谷浩子「米国合衆国における保全史の聖地」『遺跡学研究』第８号日本遺跡学会 2011.11.20
⑤松本将一郎「1960 年代の景観論　再考」『遺跡学研究』第８号日本遺跡学会 2011.11.20　　ほか５件
⑥清水重敦「文化的景観をわかりやすく-複合性、重層性、変化と価値評価-」文化庁平成 23 年度文化的景観保護実務研修会 2011.6.9
⑦清水重敦「文化的景観とは何か」京都市みやこ文化財愛護委員育成事業事前講座 2012.2.14　　ほか４件

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4171

自己点検評価調書

研 No. 20

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　文化的景観の保護制度が発足して６年が経過し、価値評価、保護手法等に関する課題が年々蓄積していく中、基礎的情報と総括的整理がなされていない現状に対し、①文化的景観学研究会及び文化的景観研究集会の開催による情報の集約と整理、②その成果報告書の刊行による情報発信、③現地調査を通じた保護手法についての独創性ある提案、をおこない、文化的景観保護行政あるいはその学術研究に当研究所ならではの役割を果たし、その水準を高めることに貢献した。また、国際比較研究への着手により、文化的景観に関する視野を広げ、国際連携をおこなっていく素地を形成しつつある。

2．定量的評価

観点	論文数等	研究会回数	研究集会回数			
判定	A	A	A			

備考
　研究成果を１冊の報告書として出版刊行したほか、学術雑誌等における論文や研究発表による公表をおこなった。本年度開催した研究集会には164名の参加を得､文化的景観の保護行政をめぐる諸課題に関する活発な議論ができた。文化的景観学研究会では、都市の文化的景観に関わる行政担当者が一同に会する場を設定することができ、課題の多い都市の文化的景観の現状を俯瞰する初めての機会を設定することできた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化的景観に関する国際比較への取り組みを開始したこと、研究会及び研究集会等の実施による保護行政、学術研究への貢献、宇治や四万十川流域等を対象とした現地調査・研究、学会や学術雑誌等での研究成果発表と、年度当初の計画を十全に実施し、的確な成果を公表し得た。これらの成果を踏まえつつ、今後も文化的景観に関する保護行政及び学術に資する成果の的確な公表を目指し、基礎的調査研究と現地調査研究を進めていく。なかでも、国際比較については、次年度以降も積極的に実施し、国際連携への道筋を立てていく予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化的景観に関する基礎的研究、現地調査、研究集会の開催等を通じて、計画通り研究が進捗し、多くの成果を公表し得た。次年度以降は、国際比較研究をいっそう推進するとともに、文化的景観研究集会を奈良以外の場所において開催し、フィールドとの繋がりを強めていく。また、研究所独自の国内の調査フィールドを設定し、専門領域を越えた文化財保護のあり方について調査研究を深めていく。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4181

（様式１）

業務実績書

研 No. 21

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開（(1) －⑧－ア）

【事業概要】

官衙関係遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、寺院遺跡の発掘調査において抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析をおこない、一般公開する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅

【スタッフ】

山中敏史（客員研究員）、森本晋（企画調整部企画調整室長）、馬場基（都城発掘調査部主任研究員）、青木敬、海野聡、小田裕樹（以上、都城発掘調査部研究員）、清野陽一（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

【主な成果】

官衙関係遺跡の建物データについては、特に古代における四面廂建物の遺構を重点的に収集し、居宅や集落まで範囲を広げて全国的に網羅した『四面廂建物資料集成』を作成した。また、寺院遺跡の属性分析をふまえたデータベースを、九州から近畿地方まで公開した。さらに、井戸のデータベースの対象を古代の遺跡全般に拡充して、資料収集をおこなった。

【年度実績概要】

1. 平成22年度以前に刊行された古代の遺跡全般に関する報告書のめくり作業をおこない、四面廂建物の遺構の資料を全国的に収集・整理した。
2. 今年度に開催した第15回古代官衙・集落研究集会「四面廂建物を考える」の資料集成（①）を作成した。
3. 報告書のめくり作業をおこない、国府・郡衙・城柵やその他の官衙関係遺跡等の資料を追加収集・整理した。また、平成20年度までに刊行された古代寺院に関する報告書のめくり作業をおこなった。
4. 新たに収集した官衙関係遺跡と古代寺院遺跡の資料をデータベース化し、新出資料を追加して一般公開をおこなった。
5. 古代寺院遺跡の建物遺構を中心とした属性分析を進め、それにもとづく寺院遺跡データベース構造を作成して資料収集と整理をおこない、近畿地方以西のデータについて、奈良文化財研究所のホームページで一般公開をおこなった。
6. 平成 21 年度以前に刊行された古代の遺跡全般に関する報告書のめくり作業をおこない、井戸のデータベースの作成・公開に向けた資料収集をおこなった。

古代寺院建物データ入力画面（部分）

【実績値】

官衙関係遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡数約150件、文献データ約750件、
建物データ約550件、画像データ約600件、
井戸データ約250件

古代寺院遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡数約110件、文献データ約2,300件、
建物データ約400件、画像データ約900件

公開データ数：官衙関係遺跡：遺跡数約1,630件、文献データ約14,800件、建物データ約16,900件など
古代寺院遺跡：遺跡数約1,010件、文献データ約10,900件、建物データ約2,100件など

研究集会当日資料集：1 件（①）

【備考】

① 馬場基ほか編『四面廂建物遺構資料集成』第 15 回古代官衙・集落研究集会当日資料集、2011.12

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4181

自己点検評価調書

研 No. 21

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
情報の共有化が要望されてきた古代寺院遺跡について、データ数の拡大をともなうデータベースを充実させている点で、適時性と発展性が認められる。また、毎年増加する官衙関連遺跡に関するデータを逐次補充することにより、正確性と継続性、効率性を確保している。

2．定量的評価

観点	データベース入力件数	データベース公開件数				
判定	A	A				

備考
毎年増加する官衙関係遺跡のデータの追加入力に加えて、居宅・集落など古代遺跡全般における四面廂建物の遺構を全国的に集成し、データベースの充実化を図るとともに、四面廂建物遺構の資料集成を作成した。また、寺院遺跡データの収集・入力作業を進め、データの公開も着実に達成した。さらに、井戸のデータベースの対象を拡充し、資料収集をおこなった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データベース入力件数の目標値を大幅に上回ったほか、古代の遺跡全般における四面廂建物遺構の資料収集とデータベース化をおこない、資料集成を作成した。古代寺院遺跡のデータベースでは、近畿地方以西、とりわけ古代の中心地でもある奈良県内についてのデータを一般公開できた。各地で寺院遺跡の調査研究にあたっている者にとって、情報の共有化につながると同時に、遺跡から抽出すべき遺構の属性についての指標を提示するものであり、寄与するところが大きい。今後も、新発見の官衙関係遺跡データを継続的に収集・整理するとともに、全国に及ぶ古代寺院のデータベースを作成し、逐次公開していくことにしたい。また、これにくわえて、発掘調査で検出例の多い井戸遺構についても属性分析をおこない、整理・収集とデータベース化をおこなうことにより、官衙関連遺跡の調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	官衙関連遺跡について、新出資料の補充を含めたデータベースの作成を着実に進め、一般公開するとともに、官衙以外の居宅や集落における四面廂建物についてもデータ収集をおこない、データベースのいっそうの充実化を図っている。一方、平成21年度に構築した寺院遺跡のデータベースでは、近畿地方以西のデータを網羅的に収集・整理してデータベース化し、一般公開することができた。今後は、官衙関連遺跡および寺院データの収集とデータベース化を継続し、利用しやすいかたちでの一般公開をさらに推進していくことが必要である。また、古代の井戸についても、居宅や集落遺跡などまで範囲を拡大してデータ収集をおこない、発掘調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4182

業務実績書

研 No. 22

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査（(1) －⑧－イ）

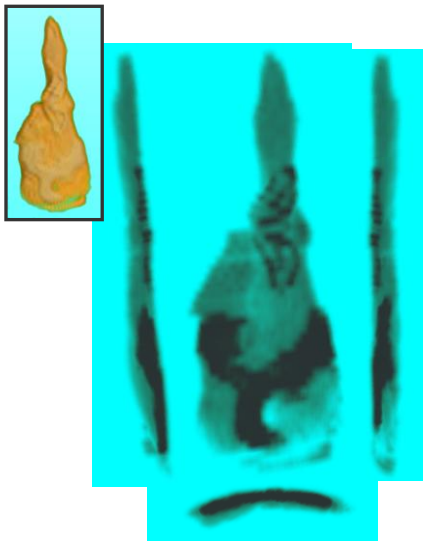
【事業概要】
標記プロジェクトに関して、1）考古遺物の非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用研究、2）高エネルギーＸ線ＣＴ法およびＸ線ＣＲ法の応用研究、3）漆製遺物や塗装材料などの分析法の実用化とデータベース作成、4）鉄製遺物の埋蔵環境調査、5）被災文化財の救済における保存科学の果たすべき役割についての研究集会の開催、に取り組む。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】
脇谷草一郎、田村朋美（以上、研究員）、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、赤田昌倫（アソシエイトフェロー）、佐藤昌憲、肥塚隆保（以上、客員研究員）

【主な成果】
1）ガラス製品の標準試料のスペクトルを集積するとともに、ガラス製遺物のスペクトルを取得した。
2）金属製品の構造調査としてＸ線ＣＴ撮影することにより、象嵌構造を明らかにした。
3）木造建造物の塗装の材質分析をおこない、漆塗装、油系塗装および膠彩色を明らかにした。
4）鉄製遺物の埋蔵環境の室内再現実験を実施し、腐食のメカニズムを解明する取り組みを始めた。
5）「被災文化財のレスキュー―保存科学の果たすべき役割と課題―」をテーマとした研究集会を開催した。

【年度実績概要】
1）飛鳥寺から出土した黄色不透明ガラス小玉について、レーザーラマン分光分析および蛍光Ｘ線分析を実施し、人工黄色顔料 $PbSnO_3$ が着色に用いられていることを明らかにした。
2）（株）日立製作所との共同研究の一環として、愛知県立美術館所蔵の高麗鉄地金銀象嵌鏡架のＸ線ＣＴ法を用いた内部構造調査を実施し、板象嵌が施されていることを明らかにした。
3）談山神社の本殿並びに十三重塔の塗装調査を実施し、十三重塔からは漆塗装と油系塗装を、本殿からは漆と膠を検出した。また、油系塗装の塗装部の変色について分析を行い、鉛丹が炭酸化して塗装表面に析出していることを明らかにした。
4）鷹島海底遺跡を対象として、海洋鉄製遺物の埋蔵環境の室内再現実験を行い、鉄製品の腐食と埋蔵環境の関係についての基礎データを収集した。
5）「被災文化財のレスキュー―保存科学の果たすべき役割と課題―」と題した研究集会を開催し、文化財を災害から守るための日常の備えや、被災した文化財を救出する体制、危機管理のありかたと保存科学の果たすべき役割について、情報交換と総合討議などを行った。



高麗鉄地金銀象嵌鏡架の XCT 画像

【実績値】
発表件数：10 件①～④
論文等数：5 件⑤～⑧
研究集会参加者数：103 名

【備考】
①高妻洋成「文化財建造物塗装材料の分析（1）～談山神社塗装の FT-IR 分析～」文化財修復学会第 33 回大会 2011. 6. 4
②高妻洋成「テラヘルツ分光イメージングによる高松塚古墳壁画の漆喰の状態調査」文化財修復学会第 34 回大会 2011. 6. 4
③降幡順子「高松塚古墳壁画の材料調査－蛍光Ｘ線分析法による下地漆喰に関する調査（3）－」日本文化財科学会第 28 回大会 2011. 6. 11
④田村朋美「ガラスから見た武寧王時代の国際関係」武寧王陵発掘 40 周年国際学術会議 2011. 10. 28　　ほか 6 件
⑤高妻洋成「平城宮跡の木簡出土深度の土壌調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011. 6. 15
⑥高妻洋成「法隆寺所蔵古材調査２－金堂支輪板の顔料分析調査－」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011. 6. 15
⑦降幡順子「特別史跡キトラ古墳出土遺物の保存処理と調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011. 6. 15
⑧田村朋美「ガラスから見た古代の交易ルート－武寧王陵出土品と日本出土品の比較を中心に－」『百済文化 第 46 輯』公州大学校附設百済文化研究所 2012. 2. 29　　ほか 1 件

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4182

自己点検評価調書

研 No. 22

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
出土遺物の非破壊材質調査としてレーザーラマン分光分析および蛍光Ｘ線分析を実施し、古代ガラスの着色剤について明らかにした。出土遺物の構造調査としては、金属製品のＸ線ＣＴ撮影を実施することにより、象嵌構造を明らかにした。その他にも多くの出土遺物の材質構造調査を実施することによって、古代の材料や技術に関する重要な知見を得ることができた。埋蔵環境調査に関しては、鉄製遺物の埋蔵環境の室内再現実験を実施し、鉄製品の腐食と埋蔵環境の関係についての基礎データを収集した。

2．定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会参加者数			
判定	A	A	A			

備考
文化財保存修復学会で２件、日本文化財科学会で７件、国際シンポジウムで１件の、合計 10 件の学会発表をおこなった。また、『奈良文化財研究所紀要』に４件、『百済文化』に１件の合計５件の論文を発表した。さらに、研究集会では 103 名の参加者を得て、事例報告に加え、総合討議でも活発な議論を行うことができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価をＡと判定した。次年度は、ガラス製遺物以外の出土遺物にもラマン分光分析の応用範囲を広げていきたい。埋蔵環境調査に関しては、平城宮跡内での埋蔵環境調査の実施にあたって井戸の選定や効率的な調査方法の確立を実現し、木製遺物の保存と埋蔵環境の関係についてのデータ収集に重点をおいた取り組みを進めていきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。次年度は、ラマン分光分析の応用範囲の拡大や、木製遺物の埋蔵環境調査の一環として、平城宮跡内での埋蔵環境調査の実施に向けて取り組んでいきたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4183

業務実績書

研 No. 23

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集（(1) －⑧－ウ）

【事業概要】
土質遺構や装飾古墳の安定した公開・展示を行うことを目的とした環境調査、ならびに維持管理技術の開発的研究の一環として、遺跡を構成する土、石材および大気における熱・水分移動を推定する解析技術に関する研究、および土質遺構露出展示、装飾古墳の公開・展示に関する実地試験に取り組む。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】
降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、脇谷草一郎、田村朋美（以上、研究員）

【主な成果】土質遺構の露出展示を実施予定の福島市宮畑遺跡を調査フィールドとして、遺構の保護施設（覆屋）内の室空気および遺構土壌における熱水分同時移動解析を行い、換気や空調を利用した遺構の安定化法について検討した。岡山市千足古墳では墳丘における熱水分同時移動解析を行い、石室湛水のメカニズムについて考察すると同時に、盗掘以前の墳丘における熱水分同時移動解析を実施して、盗掘以前の石室における湛水発生の有無や、湛水によって生じた石障の劣化速度について検討を行った。

【年度実績概要】
1）福島市宮畑遺跡では土質遺構露出展示のための保護施設（以下覆屋）が竣工している。そこで、覆屋の仕様、すなわち屋根や壁の断熱性、窓の日射取得率や換気回数などを考慮して、遺構土壌の含水率変化および覆屋内室空気の変化について解析を行った。その結果、遺構土壌表面の含水率は周期的変動を示すものの、その値は遺構土壌の塑性限界を下回るものであり、乾燥による劣化の発生が予測された。そこで、遺構土壌の含水率が減少する時期に、覆屋内室空気の換気回数を減少させ、空調による室空気の加熱を行った場合、室空気中の湿気が遺構土壌へと供給されることで、遺構土壌の過度な乾燥が抑制され、遺構の安定化を達成しうる見通しが得られた。

竣工した覆屋（宮畑遺跡）

2）岡山市の千足古墳では、石障の表層剥離が著しく進行しているため、表面に施された線刻が失われる危険性があり、その対策が急がれている。石障の劣化要因について検討した結果、石障の劣化は、石室内が湛水状態に陥るために生じることが明らかとなった。そこで、石障の現地保存の可否を明らかにすることを目的として、墳丘における熱水分同時移動解析を行い、石室の開口部を閉塞した場合でも石室内の湛水状態が生じるか否かを検討した。その結果、石室直上の盗掘孔埋土は透水性を有するので、開口部を閉塞したとしても、埋土に浸透した雨水が石室内へと浸出することが予測された。また、石室床面土壌の地山はきわめて透水性が低いために排水が非常に緩慢であり、天井部において浸出水が発生すると同時に、湛水状態へと移行することが予想された。さらに、開口部を閉塞した場合、外気との換気が抑制されることにより、湛水状態にある水の排水が一層緩慢になる怖れも危惧される。

3）日田市に位置するガランドヤ古墳では、復元する墳丘によって石室石材表面における結露の発生を抑制し、装飾の保存を図る手法について、現在検討を進めている。そこで、遮水性の墳丘復元を想定した覆屋を設置し、周辺土壌への雨水の浸透を抑制して石室周辺土壌の含水率の低下を促進させ、石室内の結露を抑制しうるのかを検討した。調査の結果、夏期以外の時期では、石室内室空気の相対湿度が 80％前後で推移する環境を作り出すことが可能であることが判明した。一方で、夏期には外気に含まれる大量の水分が換気によって石室内へ流入し、この期間は石材の表面に依然として結露が発生することが明らかとなった。今後は数値解析をもちいて結露の発生時期と発生場所を推定するとともに、結露を予防する手段について検討を行う予定である。

【実績値】
発表件数：2 件①～②
論文等数：2 件③～④

【備考】
①脇谷草一郎「千足古墳における水分移動解析」日本文化財科学会 2011.6.11
②脇谷草一郎「宮畑遺跡における土質遺構露出展示保存の取組み」地盤工学会 ATC19　2011.9.28
③脇谷草一郎「史跡ガランドヤ古墳における水の挙動に関する調査研究２」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6.15
④脇谷草一郎「千足古墳における水分移動解析」『日本文化財科学会第 28 回大会発表予稿集』日本文化財科学会 2011.6.11

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4183

自己点検評価調書

研 No. 23

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
福島市宮畑遺跡では覆屋内の土質遺構における熱水分同時移動解析を行い、露出展示後の長期間にわたる遺構土壌の含水率変化、覆屋内室空気の変化などについて予測した。可逆性に乏しい遺構保存において、遺構に生じる劣化を事前に予測する解析技術は非常に重要な知見を与えるものと考えられる。また、岡山市の千足古墳では、墳丘における熱水分同時移動解析を行い、現在の開口部を閉塞した場合でも水が石室内へ浸出すること、石室床面土壌はきわめて透水性が低いため、浸出水の発生と同時に石室内は湛水状態へと変化することが予測された。一方、盗掘以前の墳丘では、石室内への浸出水は発生していなかったと考えられる。したがって、現在の開口部を閉塞しても石室は湛水状態に陥る怖れがあり、また湛水状態にあることで進行する石障の劣化は、盗掘後のこの約 100 年間で急激に進行した可能性が高いと判断された。以上の結果は、石障の保存対策上、重要な知見を与えるものと考えられる。

2．定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
判定	A	A				

備考
日本文化財科学会第 28 回大会で 1 件、地盤工学会ＡＴＣ19 国内委員会で 1 件の発表を行った。また、『日本文化財科学会第 28 回大会発表要旨集』および『奈良文化財研究所研究紀要 2011』に各 1 件、計 2 件の論文を発表した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初の計画通り順調に達成することができたことから、総合的評価をＡと判定した。次年度は二次元の熱水分同時移動解析を行い、装飾古墳石室内で結露が発生する場所を推定するとともに、換気あるいは除湿により結露を防止する手法について検討する予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業を当初の計画通り順調に達成することができたことから、順調と判定した。次年度の土質遺構の保存に関する研究では、遺構面に集積する塩類のリーチング法について検討を続ける予定である。また、二次元の熱水分同時移動解析を実施し、引き続き覆屋内室空気の換気回数あるいは空調などによって遺構土壌の安定状態を維持する方法についても検討を進めたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4211

（様式１）

業務実績書

研 No. 24

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財デジタル画像形成に関する調査研究（(2)-①）

【事業概要】

本研究では、着色仏画、彩色壁画・油彩画・日本画などを対象とし、文化財研究に資するデジタル画像の形成方法、および、その応用のための手法（表示・出力）を開発し、広範な活用の方向性を研究する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 津田徹英

【スタッフ】

田中　淳、山梨絵美子、二神葉子、塩谷　純、綿田　稔、小林達朗、江村知子、皿井　舞、城野誠治、鳥光美佳子(以上、企画情報部)、早川泰弘（保存修復科学センター）

【主な成果】

脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財の高精細な画像や特殊撮影画像の公開と多目的な利用に供すべく、サントリー美術館所蔵の「泰西王候騎馬図屏風」、東京国立博物館所蔵の「虚空蔵菩薩像」、京都・佛光寺蔵「善信聖人親鸞伝絵」の調査・撮影を行うとともに、他機関との共同調査研究として宮内庁三の丸尚蔵館と「春日権現験記絵巻」の調査、奈良国立博物館との共同調査研究として「信貴山縁起絵巻」の調査を行い、台湾・故宮博物院との共同研究の成果として『李唐萬壑松風図光学検測報告』を刊行した。

【年度実績概要】

1. 他機関との共同研究成果の刊行

文化財の高精細画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。他機関との共同研究成果として台湾故宮博物院と『李唐萬壑松風図光学検測報告』を刊行した。

2. 今年度の他機関との共同調査研究

1)宮内庁三の丸尚蔵館（「春日権現験記絵巻」の調査）(2011.12.13)

2)奈良国立博物館（「信貴山縁起絵巻」の調査）(2011.11.8-11)

3. 古代から近代までの絵画の調査・撮影

1) サントリー美術館所蔵の「泰西王候騎馬図屏風」（2011.9.14,28,10.20,21,25）

2) 東京国立博物館所蔵の「虚空蔵菩薩像」(2011.10.5)

3) 京都・佛光寺蔵「善信聖人親鸞伝絵」（2012.2.22-24）

4. デジタルコンテンツの多目的利用の一環として、サントリー美術館で「泰西王候騎馬図屏風」の調査成果の公表をその展覧会（会期 2011.10.26～12.4）に合わせて行うとともに、講演（城野誠治「西秦王候騎馬図屏風との新しい出会い」2011.11.5）を行った。

【実績値】

調査箇所数	5 件
報告書の刊行	1 件（①）
学会研究会等での発表（論文を含む）件数	3 件（②）
画像展示の件数	1 件（③）

【備考】

①『李唐萬壑松風図光学検測報告』（11.12 刊）

② 城野誠治「西秦王候騎馬図屏風との新しい出会い」（11.11.5 サントリー美術館）

城野誠治「有関〈萬壑松風図〉光学探測方法的画像資訊化」『李唐萬壑松風図光学検測報告』pp.103-109（11.12）

城野誠治「科学写真撮影法の概要と結果」『平等院鳳凰堂 仏後壁 光学調査報告書』pp.98-99（12.3）

③「西秦王候騎馬図屏風」の高精細デジタル撮影による画像の公開展示（11.10.26～12.4 サントリー美術館）

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4211

自己点検評価調書

研 No. 24

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	調査箇所数	画像展示件数	発表数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	他館との共同研究により、各時代の日本美術を代表する作品（「春日権現験記絵巻」、「信貴山縁起絵巻」）の調査・撮影を行い、「泰西王候騎馬図屏風」の調査成果の報告会を開催し、併せて、高精細デジタル撮影による画像展示を行うとともに、これまでの成果を『李唐萬壑松風図光学検測報告』として刊行するなど、デジタルコンテンツの多目的利用の成果を上げたのでＡと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿って調査・研究を実施し、成果の報告についても順調に行うことができた。また、成果公表の一環として、所蔵館における展覧会に際してパネル展示等を行い、高精細デジタル画像の文化財への応用研究についての周知と関心を喚起することができた。次年度においても文化財への高精細デジタル画像の応用と研究をすすめ、積極的に成果公開に努めることにしたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4221

業務実績書

研 No. 25

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の測量・探査等に関する研究（(2) －②）

【事業概要】
埋蔵文化財の調査における新たな手法の開発・導入と応用のため、文化財の計測・測量および探査等に関する研究を行い、調査の質的向上と効率化に資するべく、方法的検討と実地データの収集・分析を進める。本事業は、現在の文化財調査の実態に鑑み、従前の方法との乖離を埋めつつ、新たな技術の有効利用法を研究・提示することで、当該分野における指針としての役割を果たすことを目的としている。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅

【スタッフ】
金田明大（主任研究員）、西村康、西口和彦（以上、客員研究員）

【主な成果】
文化財の計測・測量および探査技術の向上と有効利用法の研究を推進し、大学や地方公共団体と連携して実践を行った。計測・測量分野では、三次元レーザー測量と写真測量の技術的検討を進め、遺跡・遺物の図化法や、比較的安価な機器の導入と普及に関する研究を実施した。探査分野では、ＧＰＲおよびＥＭ探査、磁気探査、電気探査の走査方法改善と新たな機器の試作、ＧＰＳによる位置精度向上実験を行い、多様な条件下での遺構の確認に成功した。

【年度実績概要】
計測・測量分野では、東大寺法華堂・軒廊、平城宮朱雀大路緑地、岩屋山古墳（以上、奈良県）の遺構や、平城京出土の遺物などに対して、三次元計測を行った。岩屋山古墳の計測は大学・自治体と共同で実施し、その成果を大阪で開催されたナレッジキャピタルトライアル 2011 で公開した。また、複数の遺跡において新たな機器のテストを行い、費用対効果の高い機器による計測の有効性を確認した。また、ＵＡＶ（無人飛行艇）などの遺跡での試験を実施し、カンボジアにおいて遺跡の空中写真計測を行った。

探査分野では、平城宮大極殿院、東大寺東塔院・大仏殿・法華堂、飛鳥寺西方遺跡（以上、奈良県）、成合遺跡（大阪府）、砂原陣屋（北海道）、高田 2 号墳（千葉県）、天良七堂遺跡、三軒屋遺跡（以上、群馬県）、神野向遺跡（茨城県）、真福寺貝塚（埼玉県）、周防国庁（山口県）、大宰府蔵司地区（福岡県）、西都原古墳群（宮崎県）、普天間キャンプ内遺跡（沖縄）、クラン・コー遺跡（カンボジア）、ボラルダイ古墓群、サウラン都市遺跡（以上、カザフスタン）の探査を実施した。あわせて機器の開発と探査手法の改良を行い、官衙や寺院など広域の遺跡では、そりによる安定したアンテナの走査と迅速な探査が可能となった。また、精度向上と位置決定の迅速化についても、関連機関・企業と連携しつつ、実地での検討を進めた。

このほか、探査の普及を目的として、地下電磁計測ワークショップを平城宮で開催し、46 名の参加を得た。また、国外でも中央アジアの研究者に対する UNESCO 地中探査ワークショップを開催し、当該地域での有効性の検証のため、現地研究者との連携による探査を実施して、良好な成果を得ることができた。

ボラルダイ古墓群における探査ワークショップ風景

【実績値】
講演件数：1 件①　　発表件数：8 件②～④　　論文等数：5 件⑤～⑥
遺跡探査実施件数：19 件　　三次元計測件数：46 点
研修実施件数：3 件
大学講義件数：1 件

【備考】
①金田明大「救援体験から考える文化遺産の防災・復興の課題」奈良歴史研究会公開シンポジウム 2011.7.9
②金田明大「The CEDACH DMT: a volunteer-based data management team for the documentation of the earthquake-damaged cultural heritage in Japan」ほか Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology 2011 Beijing 2011.4.12-16
③金田明大「『被災文化遺産救援コンソーシアム』について」考古学研究会緊急集会 2011.4.23
④金田明大「何を測るのか？残すのか？－文化財保護と三次元計測－」三次元計測フォーラム 2011　2011.5.18
ほか 1 件
⑤金田明大「胡桃館遺跡の遺跡探査」『胡桃館遺跡詳細分布調査報告書』北秋田市教育委員会 2011
⑥金田明大「古代日本の官衙・寺院遺跡探査の実践-奈良文化財研究所による近年の GPR 探査-」『信学技報』Vol.111 電気情報通信学会 2011.11.24　　ほか 3 件

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4221

自己点検評価調書

研 No. 25

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：技術革新が進行するなかで的確な指針を欠く現況の改善。
発展性：全国の遺跡調査への応用性と影響力。
効率性：時間的投資・人的投資の効率化。
継続性：事業中断以前を含めた、黎明期以来の技術・データの継続的検討、収集と蓄積。

2．定量的評価

観点	探査実施件数	計測実施件数	発表件数	研修件数		
判定	A	A	A	A		

備考

いずれの項目も当初の目標値を上回っている。とくに探査実施件数はそれが著しい。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	作業の迅速化や質的向上、地方公共団体などへの協力と成果の還元が達成できたため、Ａと判定する。反面、国内外の外部機関からの依頼が年々急増しており、緊急性や重要性を考慮してそれらへの対応を進めた結果、新規技術の開発や検討に充てる時間がきわめて不足している。研究補助者の確保が必要だが、現状では充分に対処できていないこと、補助者の交代による技術的蓄積の継承に時間がかかることから、これ以上の研究の拡大は事実上困難である。また、順次更新を進めてはいるが、漏水事故や機器の老朽化のため、相当数の機器がいまだ使用できない状況にあり、これらを必要とする作業には対応できない点も大きな問題である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	成果とその蓄積という点では、当初の予想を超える進展をみせている部分もあり、順調と判定する。国内外各地からの依頼や問い合わせも急増しており、とくに探査分野は、多チャンネル計測の検討など、今後いっそうの進展が期待できる。反面、三次元計測や探査成果のデータ処理には時間を要するため、研究補助者の入れ替わりもあって、研究員の負担が増大している。また、依頼の急増や機器の老朽化と故障により、新たな方法の試験・改良に取り組む時間がないことも問題である。したがって、すみやかな対応を図るとともに、次年度の研究計画や依頼の受諾についても一部見直す必要がある。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4231

業務実績書

研 No. 26

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	年輪年代学研究（(2) －③）

【事業概要】
遺跡出土木材、木造建築物、木造美術工芸品などの年輪年代測定を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。とりわけ、当研究所で開発したマイクロフォーカスＸ線ＣＴやデジタル画像による非破壊年輪年代測定法は、非破壊を原則とする文化財調査に有効であるため、調査対象の拡充と活用を図り、これらの研究成果を公表する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	年代学研究室長　大河内隆之

【スタッフ】
芝康次郎（都城発掘調査部研究員、年代学研究室兼務）、児島大輔（特別研究員〈アソシエイトフェロー〉）、光谷拓実、伊東隆夫、藤井裕之（以上、客員研究員）

【主な成果】
2 県下 2 遺跡の出土木製遺物、3 県下 3 棟の木造建造物、7 府県下 25 件の木造美術工芸品ついて年輪年代測定調査を実施した。このうち、神像彫刻を中心とした 16 件の美術工芸品に対して、プロジェクト研究者らが開発したマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置による年輪年代測定調査を実施している。これらの調査・研究成果の一部を論文等 9 件、学会発表等 11 件として公表した。

【年度実績概要】
1. 木造文化財の年輪年代調査：年輪年代調査は上記のように美術工芸品に対する調査研究件数を飛躍的に伸ばすことができた。
2. 木造文化財の樹種同定調査：2 県下 2 件の美術工芸品、2 県下 3 棟の建造物、2 県下 5 遺跡の出土木製品の樹種同定調査を行ったほか、木簡の樹種同定調査を引き続いて実施し、報告書を公表している。
3. マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の活用：上記の年輪年代調査実績のうち、奈良・興喜天満神社神像 5 躯の調査は、奈良国立博物館における特集陳列「初瀬にますは与喜の神垣」展の開催に伴う同博物館との共同調査であり、様式による制作年代把握が困難な神像群に数値年代を与えることができた。すなわち、5 躯とも 12 世紀前半以降に用材調達がなされたと考えられ、このうち 4 躯は同じ原木に由来することを明らかにした。本調査事例は、様式把握の困難な像に対する年輪年代調査の有効性と、外部から目視での年輪計測ができない対象に対するマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の有効性を示す好例となった。また、京都・久多地区所蔵の木製五輪塔は、墨書銘によれば、紀年を持つ五輪塔としては現存最古のものである可能性が高く、数値年代を得るために本装置を用いて年輪年代計測を試みたが、年代は不詳であった。しかしながら、本装置によって三次元撮影を行ったところ、内部に奉籠された舎利や、経巻ないし結縁交名と思われる巻紙状のものを観察することができた。
4. マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置のデバイス更新：現有の装置は乾燥状態にある木造文化財の非破壊年輪年代測定を目的として、平成 16 年に本研究所に設置されたが、撮像系を構成するデバイスのマイクロフォーカスＸ線源とＸ線受像部に、経年変化による劣化が認められていた。本年度は、これらを最新のものに換装することで、より高出力化・高解像度化を図り、大型の木製品や湿潤状態にある出土木製品、あるいはＸ線吸収の多い無機質材料製の資料など、従来では対応が困難だった文化財の調査研究をも可能とした。更新された装置の活用が今後期待される。

デバイス更新されたＸ線ＣＴ装置による調査風景

【実績値】
学会、研究会等発表：11 件①～③
論文等発表：9 件④～⑤

【備考】
①大河内隆之・光谷拓実「国宝永保寺開山堂の年輪年代調査」日本文化財科学会第 28 回大会 2011. 6. 11
②伊東隆夫「木を識る・組織でわかる木の特性と樹種」兵庫県立考古博物館「木のうつわ　６０００年の技」展 特別講演 2011. 4. 23
③児島大輔「描かれた大乗院庭園」名勝大乗院庭園文化館主催文化講演会 2012. 3. 3　　ほか 8 件
④吉川聡・谷本啓・児島大輔「明日香村八釣の明神講関係資料調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011. 6. 15
⑤大河内隆之「年輪年代学的視点からみた興喜天満神社の神像群」『特集陳列「初瀬にますは与喜の神垣」展図録』奈良国立博物館 2011. 7. 16　　ほか 7 件

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4231

自己点検評価調書

研 No. 26

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
適時性：建造物や木彫像の解体修理あるいは木製遺物の出土に際しては、迅速に対応して調査研究に及び、建築史・美術史・考古学等の歴史学・文化財科学関連諸分野に年輪年代情報を提供することができた。
独創性：日本古代を代表する建造物である東大寺法華堂の建立年代に迫る成果を得られたのは、他の方法ではなしえなかったことであり、独創性のきわめて高い研究成果として認めることができる。
発展性：マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の利用価値を多角的に認め、その能力を高めるため既存の装置のデバイスを更新して、さらに高解像度の画像を取得することが可能となった。今後は、これまで計測できなかった大型の資料や湿潤状態にある資料も調査対象として、画像を取得することが可能となる。
効率性：十分に効率的な調査・研究を行っているが、今後さらなる効率化を図る必要がある。
継続性：年輪データを継続的に収集しているほか、永保寺（岐阜県）の年輪年代調査も継続的に行っており、いずれも顕著な成果として認めることができる。
正確性：多くの自然科学的年代測定法の中で、年輪年代法は１年単位の年代を測定できる点できわだった存在である。公表する年代は統計学的にきわめて正確な数値であり、高い評価に値する。

2．定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考
調査件数および公表した研究成果は、論文等数・発表件数とともに前年度を上回っている。なお、発掘調査報告書や修理報告書など発行主体が他機関にある調査物件については、当研究室における担当分の研究成果報告が済んでいても、報告書自体がいまだ刊行されていないため、上記件数に数え上げることのできない調査研究成果が存在することを付言しておく。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的、定量的に優れた業績を残すことができたため、Ａと判定する。今後は、調査・研究のいっそうの効率化を図るとともに、デバイスの更新がなされたマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置のさらなる活用を図ることで、より充実した調査・研究成果を上げられるよう努力したい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	新規中期計画の初年度として、調査・研究事業を順調に遂行できた。次年度は、年輪データの蓄積、適応樹種の拡大、さらにはデバイスの更新がなされたマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の活用といった継続的かつ発展性のある調査・研究事業を推進するとともに、発掘調査や建造物、美術工芸品の修理事業等にも即応できる体制を整えて研究に適時性をもたせ、従前の正確性をさらに高めることで、質的にも量的にも豊かな成果を上げられるよう努めたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4241

業務実績書

研 No. 27

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	動植物遺存体による環境考古学的研究（(2) －④）

【事業概要】
動植物遺存体による環境考古学的研究を継続して行う。また、出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行い、東アジアや環太平洋地域の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	環境考古学研究室長　松井章

【スタッフ】
山崎健（研究員）、丸山真史、菊地大樹（以上、客員研究員）

【主な成果】
幅広い時代の動植物遺存体の分析を進めて、その研究成果を国内外の学会や研究会において発表した。また、学会、大学、博物館等で発表・講演を行い、環境考古学に関わる展示にも協力するなどの社会貢献を行った。研究の基礎となる標本を継続的に収集・作製・管理するとともに、広く活用されるように魚類の骨格標本目録を刊行した。

【年度実績概要】
池島・福万寺遺跡（大阪府）、京都大学所蔵資料（京都府）、朝日遺跡（愛知県）、藤原宮朝堂院、甘樫丘東麓遺跡（以上、奈良県）などから出土した動物遺存体の分析を実施した。藤原宮朝堂院では、造営時に機能した運河跡から出土した資料の中に、関節炎（飛節内腫）の症状が見られるウマの骨が存在することを明らかにした。藤原宮の造営に、資材運搬などを担う駄馬が多く利用されていた実態を示す貴重な資料である。また、京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室に動物標本として所蔵されていた標本の中に、犢橋貝塚、園生貝塚、吉胡貝塚、上黒岩岩陰遺跡、帝釈峡遺跡群などの未報告資料が含まれていたために、所蔵標本の現状の記録と資料の基礎的なデータを報告した。

骨病変のあるウマの骨（藤原宮朝堂院）

研究成果の発信としては、2011 年 11 月 26・27 日に「第 15 回動物考古学研究集会」を開催した。研究集会では、特別講演 1 件、口頭発表 15 件、ポスター発表 11 件の計 27 件の発表があった。その他、日本文化財科学会、日本人類学会、近江貝塚研究会などで発表を行った。社会貢献としては、同志社大学公開講座、大阪歴史講座、大阪府立弥生文化博物館開館 20 周年記念シンポジウム、富山県埋蔵文化財センター特別展記念シンポジウム、立命館大学の国際シンポジウムなどで講演を行った。平城宮跡資料館や藤原宮跡資料館の展示にも協力して、研究成果をわかりやすく伝えた。

継続的に実施している現生動物骨格標本の収集と公開では、キョン、トド、ウシ、ウマ、エゾライチョウなどの動物骨格標本を収集した。また、奈良文化財研究所に所蔵されている魚類の骨格標本 1,146 点の標本目録を『埋文ニュース』146 号として刊行し、他の組織、研究者への公開を行った。連携研究として、藤原宮から出土した動物遺存体の同位体分析を実施した。来年度に、文献史料や他遺物の様相と比較検討しながら、その成果をまとめる予定である。

このほか、東日本大震災で被災した陸前高田市立博物館所蔵の骨角器 1,000 点余りを仮保管し、破損状況の観察・記録と脱塩処理などを実施中である。

【実績値】
公開した標本数：1,146 点
論文等数：17 件①～③
発表件数：19 件④～⑦

【備考】
①松井章「The Use of Livestock Carcasses in Japanese History: An Archaeological」『Coexistence and Cultural Transmission in East Asia』LEFT2 COAST PRESS, INC.California　2011.4
②山崎健・橋本裕子・茂原信生「都大学大学院理学研究科自然人類学研究室所蔵の動物標本―とくに動物遺存体と動物化石について―」『動物考古学 28 号』動物考古学研究会 2011.5.1
③山崎健「弥生時代の狩猟活動」『考古学ジャーナル 625』ニューサイエンス社 2012.2.29　　ほか 14 件
④松井章・大江文雄・田嶋正憲「縄文貝塚出土のトウカイハマギギ Plicofollis nella (Valenciennes)とその意義」日本文化財科学会第 28 回つくば大会 2011.6.12
⑤山崎健「遺跡出土の骨からみた動物利用の歴史」同志社大学公開講座　『自然科学からみた歴史』2011.5.13
⑥松井章「ペットと家畜と人間と―動物・環境考古学の世界」第 24 回濱田青陵賞授賞記念講演シンポジウム 2011.9.25
⑦松井章「韓国・金海会峴里貝塚の発掘と弥生文化への影響―骨角器と金属器を中心に―」大阪府立弥生文化博物館開館 20 周年記念シンポジウム　弥生文化のはじまり 2011.11.23　　ほか 15 件

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4241

自己点検評価調書

研 No. 27

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：国や地方公共団体からの要請を受けて、発掘調査や整理作業、報告書作成において環境考古学に関する協力や助言を行い、動物遺存体の分析も数多く担当した。
独創性：幅広い時代の動植物遺存体の研究を進めて、動物や植物の利用史を考古学から明らかにした。
発展性：東京大学との連携研究として、藤原宮における動物遺存体の同位体科学分析を実施した。
継続性：研究の基礎となる動物骨格標本を、継続的に収集・作製・管理している。また、哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類に続いて、魚類の標本目録を刊行した。

2．定量的評価

観点	論文数	発表件数	公開標本数			
判定	A	A	A			

備考
査読誌 3 本を含む 17 本の論文等の刊行し、学会や研究会で 19 本の発表を行った。また、1,146 点の魚類の骨格標本目録を刊行したことから、評価をＡとする。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価に関しては、幅広い時代の動物遺存体の分析を進めるとともに、研究の基礎となる標本の公開を積極的に進めている。定量的評価に関しては、動物考古学や環境考古学について、国内外で数多く論文等や学会発表を行った。以上の点から、総合的にＡと評価するのが妥当と考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も多くの学会や研究会などで研究発表を行い、これまでに上げた成果を紹介してきた。また、連携研究を実施して良好な結果を得ることができ、次年度も継続的に分析を進める予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4311

（様式１）

業務実績書

研 No. 28

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究（(3)-①）

【事業概要】

高温多湿なわが国において文化財のカビの問題は深刻である。カビの原因は、主に水分、栄養分であり、文化財の材質や環境によって被害状況やカビの種類は異なる。東北の大震災によって津波などで被災した文化財をはじめ、大規模燻蒸が難しくなってきている博物館等の施設、歴史的建造物など、環境制御が難しい場所において、大規模被害を起こさないような予防の徹底と系統的な対応について具体的な流れを示し、普及をめざす。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】

木川りか、佐藤嘉則、佐野千絵、犬塚将英、吉田直人、森井順之、早川典子、小野寺裕子、岡田　健（以上、保存修復科学センター）、藤井義久、小峰幸夫、間渕　創（以上、客員研究員）、トム・ストラング（カナダ保存研究所）

【主な成果】

被災文化財の対応については、2011 年 5 月 10 日に東京文化財研究所において研究会を開催し、紙資料をはじめとするさまざまな材質の被災文化財の初期対応について専門家からの発表を行うとともに、配布メモにまとめ、その内容を速やかにインターネットにて公開した。また、カビなど微生物による被害の調査や対策、燻蒸処置上の注意について調査研究を行い、研究発表や論文にまとめた。

【年度実績概要】

（１）　被災文化財の初期対応法についての研究会・情報共有会の開催

2011 年 5 月 10 日に研究会を開催し、被災文化財等救援委員会の構成団体などをはじめとする多くの参加者を得て、情報交換と真剣な議論が行われた。また、その内容は研究所ＨＰにて速やかに公開し、情報を多くの方に使っていただけるようにした。（参加者　161 名）

＜プログラム＞インドネシア・アチェおよび東北の大津波で被災した文化遺産の救出活動について（坂本勇）/紙文書類のカビ抑制に与える塩水の効果について（江前敏晴・東嶋健太）/プラハ洪水の際、被災文化財レスキューに使われたスクウェルチ・パッキング法（谷村博美）/　座布団圧縮袋を用いたスクウェルチ・パッキング法の検討、真水、塩水に浸した紙資料、日本画、油絵の状況について（デモンストレーション）（木川りか、ほか）/　情報交換・意見交換　コメンテーター（順不同）：　高妻洋成、青木睦、日高真吾、岡泰央、木島隆康、今津節生、山下好彦、山口孝子ほか

（２）　被災文化財に発生した微生物被害の調査および対処法の検討

津波で被災した紙資料に多くみられ、目立った赤色の斑点を形成する微生物について、調査を進め原因菌の特定、および性質の調査を実施した。また、すぐに真空凍結乾燥ができない環境での文書資料などの救済法としてのスクウェルチ・ドライイング法について、海水に浸水した場合を想定して処理工程の試験を実施した。さらに、津波で被災した資料の殺菌燻蒸によって生成する残留物質の調査を進め、実際の処理の妥当性を検討した。

（３）　歴史的建造物や古墳などの微生物の調査

霧島神宮の建造物の塗膜のカビの調査と対策について検討した。また、古墳やそのほかの文化財保存環境において浮遊菌、付着菌調査の適正化をめざした定量試験を実施した。

【実績値】

論文数　2 件　（①、②）

学会研究会等での発表件数　1 件　（③）

研究会　1 回

【備考】

① 霧島神宮の塗装部位から分離された糸状菌の諸性質（佐藤嘉則、森井順之、木川りか、太田英一、中別府良啓、中山俊介、川野邊　渉）「保存科学」51　12.03.

② 津波等で被災した文書等の救済法としてのスクウェルチ・ドライイング法の検討（小野寺裕子、佐藤嘉則、谷村博美、佐野千絵、古田嶋智子、林　美木子、木川りか）「保存科学」51　12.03

③ 水、塩水で被災した文化財の殺菌燻蒸計画時の注意点について（木川りか、佐野千絵、佐藤嘉則、犬塚将英、早川典子、山梨絵美子、田中　淳、森井順之、岡田　健、石崎武志）奈良文化財研究所　保存科学研究集会　11.12.21-22.

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4311

自己点検評価調書

研 No. 28

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　文化財のカビなどによる微生物被害の適切な予防と対策は急務であり、とくに津波などによって被災した文化財の対応については、早急に検討し、情報を関係者で共有する必要があった。本研究は、時宜を得たテーマであり、具体的な方法、知見とともに今後の方向性をさぐることができた。

2．定量的評価

観点	論文数	研究発表件数	研究会開催数			
判定	A	A	A			

備考

　研究成果については、論文や研究発表の機会を通じてすみやかに公表することができた。
　また、研究会では被災文化財のレスキューにおける初期対応について問題点や方法を関係者と共有し、議論することができたとともに、情報についてもすみやかにホームページで公開して普及することができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現場調査、基礎研究の実施、専門家間の情報交換・交流、すみやかな研究成果公開を果たし、本課題について必要不可欠な調査研究を実施することができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財の微生物被害の予防と対策をテーマとしている中で、被災文化財における生物被害の対応について取組み、得られた知見を公開することができた。次年度は、レスキューされた被災文化財については必ずしも十分な手当てや保存環境の整備ができないなかで、カビなどの被害をできるだけ防ぐにはどうするべきかについて検討し、早期に知見を普及していく必要があると考える。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4321

（様式１）

業務実績書

研 No. 29

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究（(3)-②）

【事業概要】

最近の異常気象は、文化財を展示・収蔵する施設内の環境にも影響を与え、カビの発生など様々な問題を生じている。これらの環境変化に対する対策を立案するため、環境データ解析および建築部材の水分特性などの基本データを組み込んだ環境シミュレーションを行い、保存環境の改善と省エネ化の両立を目指す。また、文化財展示・収蔵施設や保存箱などの汚染ガス対策の研究を行い、文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し改善することに資する。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】

佐野千絵、犬塚将秀、早川泰弘、木川りか　吉田直人　佐藤嘉則（以上、保存修復科学センター）、呂　俊民、小椋大輔、三村　衛、白石靖幸、北原博幸、高見雅三（以上、客員研究員）

【主な成果】

美術館、博物館、蔵、歴史的建造物等の文化財展示収蔵施設の環境データを実測解析し、絶対温度から空間内の水分分布や隣接空間同士の水分移動を評価する解析手法を確立した。また、展示ケース内装材料（木材、クロス、コーキングなど）の材料を収集し、内装材料からの放散ガス量を比較検討するための試験法試案を作成した。これら計測技術を生かし、国指定文化財の公開のための館内環境調査（温湿度・照明・空気清浄）に協力した。

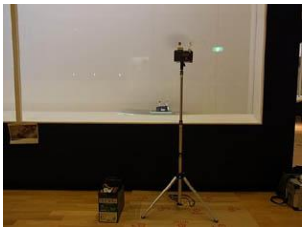
【年度実績概要】

改修工事を行った博物館の収蔵庫、空調設備が備わっていないが収蔵庫として活用されている土蔵、文化財保存の観点から温湿度環境に問題があり空調の導入を検討している寺などの文化財施設における温湿度環境を実測した。データ解析では、絶対湿度から空間内の水分分布や結露の危険性を評価し、温湿度変動を抑制する対策について検討した。

展示ケース内装材料（木材、クロス、コーキングなど）の材料を収集し、内装材料からの放散ガス量を比較検討するための試験法試案を作成した。この手法を用いて、長期にわたり改善の芳しくない展示ケースについて、展示台や展示具に対して詳細な調査を実施し、発生源を特定するとともに、改善方法として、展示ケースに対しては換気と置き型吸着剤の併用を提案し、展示具に対しては積極的なガス遮蔽と徹底的な枯らしの２種類の方法を試み、状況を改善できた。ガス濃度が高い理由としては、建物の断熱不足による冬季の結露が夏季の汚染ガス濃度に影響すると明確になった。

文化財収納箱や紙製の文化財用資材について、吸着したガスの再脱着の可能性について検討を進め、製造方法や出荷までの収納について改善策を立案した。また、マイクロフィルムのように文化財そのものが多量にガス放散する場合について、そのガス除去に適した置き型の吸着剤を利用してガス濃度の低減を試み、改善のための対策を提案した。

平成 23 年度夏の節電義務（東京電力および東北電力管内）に伴い、省エネ化の努力についてどのような手法を採用したかアンケート調査し、これからの研究進捗のための基礎資料とした。またこれに関して、「文化財の保存環境を考慮した博物館の省エネ化」に関する研究会―博物館・美術館におけるエネルギー削減―」を開催した（平成 24 年 2 月 17 日、参加者 66 名）。この研究会を通して、省エネの一手法として有効な変温恒湿方式での空調管理について文化財への影響を不安に思い、導入が遅れていることが明確になったので、温度湿度の基準の根拠となる研究を進める必要があることがわかった。



これら計測技術を生かし、国指定文化財の公開のための館内環境調査（温湿度・照明・空気清浄）に協力した。

【実績値】

研究会　1 回（参加者 66 名　アンケート回収率 77.3%（うち、有意義だった 96%、どちらでもない 2%、無回答 2%））

論文数　2 件

研究発表件数　3 件

【備考】

論文：

古田嶋智子・呂俊民・佐野千絵：展示収蔵環境で用いられる内装材料の放散ガス試験法、保存科学、51　pp. 271-280（2012）

佐野千絵・古田嶋智子・井上さやか・津田徹英・呂俊民：フィルム保管庫における酢酸雰囲気の改善の試み、保存科学 51　pp. 281-292（2012）

研究発表：

呂俊民・古田嶋智子・佐野千絵：展示収蔵環境に用いられる内装材料に関する研究その２　放散ガスのデータベース構築、第 33 回文化財保存修復学会大会、（奈良、2011. 6. 4-5）

佐野千絵・古田嶋智子・呂俊民：フィルム保管庫における酢酸雰囲気の改善、平成 23 年度室内環境学会学術大会、（静岡、2011. 12. 8-9）

犬塚将英・龍泉寺由佳・石崎武志：温湿度解析による耐震工事の影響評価、第 33 回文化財保存修復学会大会、（奈良、2011. 6. 4-5）

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4321

自己点検評価調書

研 No. 29

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	研究会の開催	論文発表数	研究発表件数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東日本大震災の影響を受け、夏季の節電など研究計画の実施時期にはいくばくかの変更もあった。研究会のテーマは、当初は博物館内の空気清浄化を取り上げる予定であったが、時宜にあわせて文化財の保存環境を守りながらいかに節電し省エネするかというテーマを取り上げ、その成果の社会への波及は大きい。基準作りを目指した基礎研究も継続しており、総合的にＡと判定した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館美術館の文化財を守りながら省エネ化も視野に入れた研究の初年度として、アンケートを通して、各博物館における節電対応の実際について情報を得たことで、次年度以降の計画がスムーズに進捗することが期待できる。独立行政法人国立美術館との統合も見据えて、温度湿度の基準作りや保存環境を考慮しながらの省エネ化の研究は非情に有用であり、計画を順調に実施することが必要である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4331
（様式１）

業務実績書

研 No. 30

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の材質及び劣化調査法に関する研究（(3)-③－ア）

【事業概要】
小型可搬型機器によるその場分析、および非破壊非接触技術による診断・解析手法の確立と実資料への応用を行う。絵画や彩色文化財に使われている顔料・染料の同定や褪色の評価、あるいは金属製文化財の材質調査や腐食生成物の分析などに関する調査手法の確立を行い、調査結果の蓄積と成果公開を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】
早川泰弘、岡田　健、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英、佐藤嘉則（以上、保存修復科学センター）、三浦定俊（客員研究員）、城野誠治、鳥光美佳子（以上、企画情報部）

【主な成果】
小型可搬型機器の開発・改良に関する基礎的検討として、ハンディ蛍光Ｘ線分析法による無機化合物の分析感度向上、および微小領域の可視反射分光分析法の導入・分析条件検討を行った。また、実資料への応用研究として、博物館・美術館内での日本絵画や木彫像の彩色材料調査を実施し、その調査結果の公表を行った。

【年度実績概要】
５年計画の初年度として、以下に示す成果を得た。また、これまでの調査研究成果に関する報告書を刊行した。
(1) 小型可搬型機器に関する基礎的検討
①ハンディ蛍光Ｘ線分析装置による無機化合物の分析感度向上を目的に、高感度検出器搭載機器の導入を図り、様々な文化財資料を対象とした分析条件の確立と信頼性の確保を検討した。
②微小領域の可視反射分光分析法の導入を図り、感度・精度等の機器特性に関する基礎的検討を行うとともに、これまで分光分析の課題であった外乱要因をできる限り排除できる分析条件の検討を進めた。

(2) 実資料への適用
複数の可搬型機器（蛍光Ｘ線分析装置、反射分光分析装置、デジタル顕微鏡など）を作品所蔵館に持ち込み、日本絵画・木彫像・染織品等の文化財の材質調査を非破壊で安全に実施した。複数の機器を駆使することで、単一機器だけでは特定できない材料の評価を行うことが可能となる。今年度は、国宝信貴山縁起絵巻（奈良国立博物館にて調査実施）、重要文化財泰西王侯騎馬図屏風（サントリー美術館・神戸市立博物館にて調査実施）、重要文化財洋人奏楽図屏風（京都国立博物館修理所にて調査実施）、春日権現験記絵巻（宮内庁三の丸尚蔵館にて調査実施）などの日本絵画を中心に、萬福寺蔵韋駄天立像（京都国立博物館修理所にて調査実施）などの木彫像、さらには能装束や小袖など染織品の材質調査も積極的に実施し、文化財材質に関する新たな調査データを多数蓄積することができた。

(3) 調査研究成果に関する報告書
これまでに非破壊での調査を実施してきた国宝平等院鳳凰堂仏後壁の光学調査に関する報告書を刊行した。

【実績値】
論文等数　２件（①、②）
発表件数　２件（③、④）
報告書　　１件（⑤）

【備考】
① 早川泰弘：「泰西王侯騎馬図屏風の彩色材料調査」　『保存科学』51、pp.19-29、 12.03
② 吉田直人、早川泰弘、村岡ゆかり、杉本史子：「重要文化財元禄および天保国絵図に使われた彩色材料と色彩表現に関する考察」　『保存科学』51、pp.31-45、 12.03
③ 早川泰弘、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊：「琉球絵画の彩色材料調査」　日本文化財科学会第 28 回大会、筑波大学 11.6.11-12
④ 吉田直人、早川泰弘、村岡ゆかり、杉本史子：「近世絵図資料に使われた彩色材料の科学的調査」日本文化財科学会第 28 回大会、筑波大学 11.6.11-12
⑤「平等院鳳凰堂仏後壁光学調査報告書」12.03

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4331

自己点検評価調書

研 No. 30

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	学術雑誌等への掲載論文数	学会研究会等での発表件数	報告書の刊行			
判定	A	A	A			
備考 研究成果を速やかに論文・学会発表の形で公表することができた。 また、調査報告書を刊行し、データ公開にも努めた。						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎研究の確実な遂行のための情報収集と実験的検討の実施、ならびに博物館・美術館などと共同した作品調査のための準備・実施および速やかな研究成果の公開を果たし、高い研究水準を達成した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の初年度として、基礎的検討の進展を果たすとともに、多くの実資料の調査を実現し、調査データの蓄積を図ることもできた。次年度では、基礎的検討課題として取り組んでいる内容を重点的に進め、実資料に適用可能な新たな調査手法の確立を目指す。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4332

業務実績書

研 No. 31

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等（(3) －③－イ）

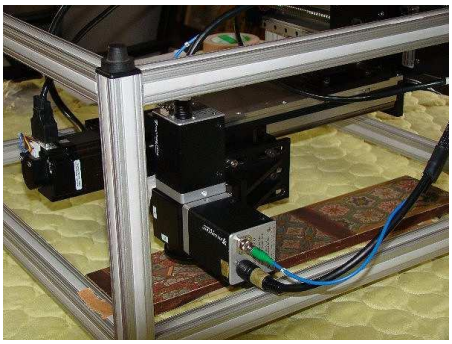
【事業概要】
ミリ波イメージング装置の改良を行う。また、ミリ波イメージング及びテラヘルツ分光イメージングにより文化財を対象とした測定に必要となるデータを収集するための基礎実験を行う。さらに、文化財に用いられている材料のテラヘルツ分光スペクトルの収集を行う。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】
脇谷草一郎、田村朋美（以上、研究員）、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）

【主な成果
1）ミリ波イメージング装置の出力レベルの改良を行った。2）人工的に多孔質とした漆喰試料のテラヘルツ分光イメージングの基礎データを収集した。3）談山神社所蔵の塗装手板のテラヘルツ分光イメージング測定を行った。

【年度実績概要】
1）現有のミリ波イメージング装置は、反射率の高い試料を測定した場合、信号量が飽和してしまい、イメージングにおいて画像化ができないという欠点があった。ミリ波の出力レベルを調整することにより、この点の改良を行った。
2）高松塚古墳やキトラ古墳の壁画が描かれている漆喰は、苆の分解消失や主成分である炭酸カルシウムの溶脱により多孔質化しており、漆喰層の崩落などが懸念される。漆喰層内部の状態はＸ線、赤外線あるいは紫外線を用いた従来の観察手法では非破壊的に知ることができないのに対し、電波のようにある程度物体内部に侵入できるテラヘルツ波は、漆喰層の状態を断層画像として得ることが期待できる。そこで、テラヘルツ分光イメージングで画像化しうる孔隙サイズなどの基礎データを得るため、人工的に多孔質化させた漆喰試料を調製し、テラヘルツ分光イメージング測定を行った。孔隙サイズの違いによって得られる画像が異なり、孔隙サイズが 300 μm 以上では、多孔性の画像化が困難となることが明らかとなった。
3）談山神社には、嘉永の大修理の際に作られたとされる彩色塗装の手板が保存されている。この塗装手板は、本殿を彩色する際に作製されたと考えられており、現在の本殿彩色の劣化を検討するうえで重要なものである。本年度は、蛍光Ｘ線元素分析とあわせて、テラヘルツ分光イメージングによる調査を実施した。その結果、金による線描では、ある程度の広さの金箔を貼りこんだ上に彩色を施し、金を線状に残す技法がとられていることが明らかとなった。


談山神社塗装手板のテラヘルツ分光イメージング

【実績値】
発表件数：2 件①～②

【備考】
①高妻洋成「木造文化財における彩色の劣化機構に対する電磁波の応用(2)」日本文化財科学会第 28 回大会 2011. 6. 11
②高妻洋成「テラヘルツ分光イメージングによる高松塚古墳壁画の漆喰の状態調査」文化財修復学会第 33 回大会 2011. 6. 4

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4332

自己点検評価調書

研 No. 31

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　現有のミリ波装置の出力レベルの改良を行い、良好な画像を得ることができるようにしたことは、ミリ波イメージングを文化財に応用するうえで意義深いものと言える。また、漆喰層の内部状態をテラヘルツ分光イメージングで把握するための基礎実験として行った、人工的に多孔質化させた漆喰試料のテラヘルツ分光イメージング実験により、画像化できる孔隙サイズの目安が得られたことは、画像の解釈においてきわめて有効である。このほか、談山神社に所蔵される嘉永の大修理で作製されたとされる塗装手板資料のテラヘルツ分光イメージングでは、現在、本殿に残る彩色の材質的な情報ならびに塗装工程などの構造上の特徴など、その劣化状態などを検討するうえで重要な知見を得ることができた。

2．定量的評価

観点	発表件数					
判定	A					

備考
　日本文化財科学会で１件、文化財保存修復学会で１件の計２件の学会発表を行った。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画通り順調に達成することができたことから、総合的評価をＡと判定した。次年度以降も、ミリ波イメージングならびにテラヘルツ分光イメージングの文化財への応用研究を、国立文化財機構の諸施設、独立行政法人情報通信研究機構ならびに京都大学大学院農学研究科と共同して推進していきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画の初年度として、ミリ波イメージングの改良とテラヘルツ分光イメージングの文化財への応用研究に取り組み、本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。次年度以降は、漆喰壁画の漆喰層の状態を知るための基礎研究、泥で被覆されて肉眼では観察できなくなっている絵画の可視化のための基礎データの収集などに重点をおくとともに、彩色材料のテラヘルツスペクトルの収集蓄積を進めていきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4341

（様式１）

業務実績書

研 No. 32

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究　（(3)-④）

【事業概要】

屋外に位置する木造建造物および石造文化財を対象に、文化財劣化要因となる周辺環境の影響評価手法や劣化診断手法を確立する。また、木造建造物の修復材料について実験室及び現地曝露試験による評価を行う。さらに、韓国・国立文化財研究所と共同研究を行い、保存修復技術に関する情報共有を進める。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長　朽津信明

【スタッフ】

朽津信明、中山俊介、早川典子、森井順之（以上、保存修復科学センター）、川野邊　渉（文化遺産国際協力センター）

【主な成果】

石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について周辺環境計測を行った。また、その結果に基づく劣化要因の解明、周辺環境影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を行った。詳細には、(1) 臼杵磨崖仏保存管理計画の策定および石造文化財の劣化と周辺環境影響に関する調査、(2) 木材充填材料や木造建造物塗装に添加する防カビ剤の現地曝露試験、(3) 大韓民国・国立文化財研究所との共同調査、ワークショップ等を実施した。

【年度実績概要】

石造文化財では、臼杵磨崖仏の保存管理計画の策定や石造文化財の保存状態調査を行った。木造建造物では、木材充填材料の劣化促進試験を実験室および厳島神社で実施した。日韓共同研究は第 4 期を迎えるにあたり、研究項目の整理及び目標設定を行った。

今年度の成果は次の通りである。

(1) 石造文化財：臼杵磨崖仏における凍結防止のための覆屋封鎖に関して、より閉鎖性を高めるためにホキ石仏第二群覆屋の崖面との接触部分に仮設壁を設けたうえで、気流変化に関する現地観測を実施し効果を確かめた。また、磨崖和霊石地蔵（広島県三原市）における劣化と周辺環境に関する調査を実施し、その成果より潮汐で濡れる磨崖仏表面に対し適切な修復方法の提案が行えた。

(2) 木造建造物：厳島神社など海浜環境で使用可能な木材充填材料について評価するため、修復材料として使われる樹脂の発熱量と比重測定、圧縮強度測定、紫外線照射試験及び冷熱サイクル試験、現地曝露試験を行い、その結果を報告した。また、霧島神宮本殿等の塗装修理工事において発生したカビに対処するため現地曝露試験を行い、適切な防カビ剤および処置方法に関する成果を得た。

(3) 今年度の大韓民国・国立文化財研究所との共同研究：2011（平成 23）年 11 月 7 日、東京文化財研究所にてワークショップを開催した。また、島根県において花崗岩の利用に関する調査を共同で行った。

【実績値】

報告書：1 件（①）
論文等：5 件（②～⑥）
発表等：5 件（⑦～⑪）

【備考】

① 日韓共同研究報告書 2011　東京文化財研究所／国立文化財研究所（大韓民国）　48p　12.3
② 森井順之　屋外石造文化財の環境計測および環境制御　マテリアルライフ学会誌　23-2　pp.67-71　11.5
③ 森井順之、佐藤嘉則、間渕創、木川りか、太田英一、中別府良啓、中山俊介、川野邊渉　霧島神宮における塗装劣化要因の解明とその対策の検討　保存科学 51　pp.249-260　12.3
④ 早川典子、舘川修、渡辺慶乃、森井順之、岡田光治、原島誠　厳島神社大鳥居修理のための充填材料評価試験　保存科学 51　pp.1-18　12.3
⑤ 朽津信明　近世の島根県における石材の利用　日韓共同研究報告書 2011　東京文化財研究所／国立文化財研究所（大韓民国）　pp.4-11　12.3
⑥ 森井順之　日韓共同研究～この五カ年の方向性　日韓共同研究報告書 2011　東京文化財研究所／国立文化財研究所（大韓民国）　pp.34-40　12.3
⑦ Masayuki MORII　Environmental Control in Conservation of the Buddhist Image Carved on Natural Cliff　Conference internationale - Jardins de Pierres - Conservation de la pierre dans les parcs, jardins et cimetieres　I'Institut national du patrimoine　11.6.22-24
⑧ 森井順之、早川典子、朽津信明、川野邊渉、三嶋有子　国宝・臼杵磨崖仏保存のための管理計画について　東アジア文化遺産保存学会第二回学術研究会　内蒙古博物院（中華人民共和国）　11.8.16-18
⑨ 森井順之　国宝・臼杵磨崖仏における劣化とその対策　地盤工学会 ACT19 平成 23 年度第一回国内委員会　地盤工学会　11.9.28
⑩ 朽津信明　石塔保存のための覆屋効果に関する研究　文化財保存修復学会第 33 回大会　奈良県新公会堂　11.6.4.
⑪ 朽津信明　風化環境の違いによる石造文化財の風化速度の違い　日本応用地質学会平成 23 年研究発表会　札幌市教育文化会館　11.10.27-28

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4341

自己点検評価調書

研 No. 32

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	石造文化財の保存状態とその周辺環境の相関について様々な事例を確認でき、劣化防止策としての環境制御の可能性について有益な情報を得た。また、木材充填材料に関して透水性を高める混合物を見つけた。日韓共同研究は合意書を更新し、研究項目の整理・目標設定を行うことができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り順調に進めることができた。特に木材充填材料に関しては、高い透水性を持つ材料を開発することができ、今後厳島神社など常に海水影響を受ける木造建造物に応用可能なことが分かった。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4342

（様式１）

業務実績書

研 No. 33

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の災害対策及び被災文化財の救援と保存修復手法に関する研究　（(3)-④）

【事業概要】

阪神淡路大震災以降文化財防災の必要性が高くなっている中、本研究では地震災害に着目し、仏像など彫刻の地震時転倒評価およびその対策に関する研究を実施する。また、東日本大震災で被災した有形動産文化財の救援活動において、津波被災した文化財の救援・一時保管に関する指導・助言等を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長　朽津信明

【スタッフ】

石崎武志、岡田　健、中山俊介、北野信彦、森井順之、早川泰弘、佐藤嘉則、犬塚将英、吉田直人、木川りか、佐野千絵、山下好彦（以上、保存修復科学センター）、川野邊　渉、山内和也、友田正彦、加藤雅人、邊牟木尚美、島津美子（以上、文化遺産国際協力センター）、田中　淳、山梨絵美子、二神葉子、津田徹英、綿田　稔、塩谷　純、小林達朗、江村知子、皿井　舞、（以上、企画情報部）、宮田繁幸、飯島　満、今石みぎわ、菊池理予（以上、無形文化遺産部）

【主な成果】

平成 23 年度は、(1) 東大寺法華堂安置仏像群および塑造四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を講ずるため、塑造執金剛神立像の三次元計測と地震時転倒予測を継続した。また、仏像と同じ大きさの模型を使った振動台実験を三重大学・防災科学技研究所の協力のもと行った。(2) 東日本大震災で被災した有形動産文化財の救援活動において、事務局を担い被災地における活動支援を行った。

【年度実績概要】

平成 23 年度の成果は次の通りである。

(1) 東大寺法華堂安置仏像群および塑造四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を講ずるため、重量や重心などを推定するために三次元形状計測を行った。計測には、凸版印刷株式会社にて開発中の「ステレオカメラの移動撮影に基づいた簡易形状計測システム」を使用した。今年度は、塑造執金剛神立像を対象に撮影・解析を行い、その結果をもとに地震時転倒予測を行った。

　また、地震時転倒予測手法の妥当性について確認するため、乾漆造四天王立像と同じ像高・重心にした模型を製作し、防災科学技術研究所にある振動台にて実験を行った。その結果、阪神淡路大震災の波形で強度を 1.1 倍にした揺らし方でも転倒しないことを把握した。

(2) 平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で被災した有形動産文化財の救援を目的として文化庁により設置された「文化財レスキュー事業」において、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会の事務局を担った。

　事務局内に、事務室、会計経理班、活動支援班（物資調達）、情報分析班、記録班、広報班を配置し、国立文化財機構各施設との連携を取りつつ、委員会構成団体からの人員派遣、物資の調達を行った。救援対象は、宮城県、岩手県、茨城県、福島県の 4 県に及び、各県教育委員会、文化庁と共同でレスキュー活動を運営した。とくに宮城県では 4 月から 7 月までの期間、仙台市博物館に現地本部を設置し、東京文化財研究所研究職員の常駐態勢と、機構各施設の人的な応援態勢によって活動を運営した。

　文化庁への支援要請が出ていない地域の被災文化財についても、東京文化財研究所独自の活動として状態調査及び応急処置、保存環境等への助言を行った。

　宮城県気仙沼市個人所蔵の具足一領（胴は江戸、冑は室町時代）が被災し、各種材料を用いた総合工芸品の処置技術について、所蔵者の同意を得て試験的な処理作業を実施し、被災文化財に対する修復材料及び技法に関して多くの情報を得ることができた。

　被災して電気が停止した石巻文化センター2 階の展示スペースや、廃校となった学校の校舎などを救援文化財の保管場所として利用するにあたり、空調設備のない環境でのモニタリングについて、現地教育委員会、県立博物館の保存担当学芸員等と連絡を取りつつ、観察をおこなった。

【実績値】

論文等：1 件（①）

発表等：1 件（②）

【備考】

① Masayuki MORII　"3.3 Salvage Project of Cultural Properti es Damaged by the Earthquake and Tsunami"　The Great East Japan Earthquake -Report on the Damage to the Cultural Heritage-　pp.29-30　Japan ICOMOS National Committee　11.11

② 藤田悠貴、森井順之、大村真理子、花里利一　仏像の耐震対策に関する研究―縮小模型を用いた振動台実験―　日本建築学会 2011 年度大会（関東）　早稲田大学　11.8.23-25

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4342

自己点検評価調書

研 No. 33

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏像群の地震対策に関する研究では、仏像群の三次元計測結果に基づく地震時転倒予測手法の妥当性を振動台による実験により確認した。また、東日本大震災で被災した文化財の救援活動（文化財レスキュー事業）において主要な部分を担当した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究では、東日本大震災にすぐに対応し、当初目標としていた仏像群の地震対策に加えて、文化財レスキュー事業への対応を行った。今後は救援された被災文化財の安定収蔵にむけて、保存環境や修復技術に関する様々な研究成果が求められる。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4351

（様式１）

業務実績書

研 No. 34

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究（(3)-⑤）

【事業概要】

日本ではこれまで和紙、糊、膠、漆などのなどの伝統的な文化財修復材料が劣化の程度や修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。このような伝統的修復技術・材料及び合成樹脂の物性、製作技法、利用法に関する調査・分析・評価及び開発を行い、修理現場での応用を図る。以上の内容に即した研究会を開催する。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	伝統技術研究室長　北野信彦

【スタッフ】

朽津信明、早川典子（以上、保存修復科学センター）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター）

【主な成果】

本年度は今期中期計画の初年度であるため、伝統的な建築文化財の塗装材料である漆塗装や乾性油系塗料などの過去の塗装修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の施工指導に役立てた。伝統的修復材料であるフノリの基礎調査を開始した。合成樹脂の関する調査では、過去使用した樹脂の劣化などの問題点解決に向けた基礎実験を行った。また、研究所が所蔵する過去の合成樹脂などを用いた修復事業の資料を分類整理し、ネガフィルムのデジタルデータ化は継続してこれを進めた。また、第 5 回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会を開催し、計 86 名の参加を得た。

【年度実績概要】

1) 建築文化財に使用する塗装材料の耐候性向上に向けた基礎実験を進めるとともに、PY-GC/MS 分析装置を用いた各種修復材料の基礎分析を進めた。さらにこのような調査実績を施工中の塗装修理の施工計画に役立てた。また、建築文化財における塗装材料の調査と修理に関する研究成果を報告書に纏めた。

2) 劣化し、除去が不可能になったポリビニルアルコールを、酵素を利用することで除去する可能性を見いだし、酵素による PVA の分解性を確認した。また、修復現場での施工と少量の除去を試みた。

3) 伝統的修復材料であるフノリの基礎調査を開始した。

4) 研究所が所蔵する表具裂見本の絹布関係資料について、個々の絹の折状態や繊維の拡大顕微鏡画像の取り込みを行い、基礎データを集積した。これら目録を作成しデータベース化に向けた整理を行った。

5) 研究所が所蔵する過去の合成樹脂を用いた修復事業の資料を分類整理、目録作成、ネガフィルムのデジタルデータ化は継続してこれを進めた。

6)「建築文化財における伝統的な塗料の調査と修理」をテーマに、2011 年 9 月 29 日（木）に東京文化財研究所のセミナー室において、第 5 回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会を開催し、計 86 名の参加を得た。

1. 北野信彦（東京文化財研究所）:「建築文化財における塗料の使用に関する問題提起」
2. 窪寺茂（建築装飾技術史研究所）:「伝統的な塗料の再認識-17、18 世紀台頭のチャン塗技法研究-」
3. 佐藤則武（日光社寺文化財保存会）:「日光社寺建造物群における各種塗料の使用の歴史」
4. 本多貴之（明治大学理工学部）:「建築文化財における塗料の分析」
5. 参加者全員「総合討論」

【実績値】

研究会開催数：1 回 参加者数：86 名
報告書：2 冊（①～②）
論文数：1 件（③）
研究発表件数：2 件（④～⑤）

【備考】

① 『伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書 2011 年度』東京文化財研究所、2012,3
② 『建築文化財における塗装材料の調査と修理』東京文化財研究所、2012,3
③ 文化財修復に用いられたポリビニルアルコール除去における酵素利用の検討、（早川典子、酒井清文、貴田啓子、坪倉早智子、大河原典子、岡田祐輔、藤松仁、川野辺渉）文化財保存修復学会誌 56、(2012) 印刷中
④ 絵画修復に用いられたポリビニルアルコールの除去における酵素の利用可能性について（早川典子、酒井清文、岡田祐輔、藤松仁、坪倉早智子、貴田啓子、川野辺渉）文化財保存修復学会第 33 回大会、2011.6.4、奈良
⑤ 古糊と古糊様多糖の接着力について（早川典子、岡泰央、君嶋隆幸、澤田篤志、近藤修二、坂本くらら、西本友之、大倉隆則、川野辺渉）文化財保存修復学会第 33 回大会、2011.6.5、奈良

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4351

自己点検評価調書

研 No. 34

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2．定量的評価

観点	発表件数	刊行書発行数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	建築文化財に使用する屋外塗装や彩色材料の歴史資料に関する調査研究や物性・耐候性試験を行い、実際の塗装修理の現場の施工に役立てた。絹などの表具裂見本や伝統的な修復材料であるフノリのデータベース化、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。本研究所が携わった修復事業のうち、研究所が所蔵する資料を分類整理し、目録作成を進めた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本プロジェクトで実行している手法の有効性が修理現場に応用されるなど、有効性が明らかになってきている。それに伴い重要な知見の蓄積と、これらの一部を報告書の形で纏めることができたため、計画の実施状況は順調である。次年度以降も引き続き、基礎的知見の収集と試料目録化を推進する予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4352

（様式１）

業務実績書

研 No. 35

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	国際研修「紙の保存と修復」（(3)-⑤）

【事業概要】

日本の紙本文化財を所蔵する海外の美術館・博物館に、そのような文化財の保存修復専門家が所属していることは稀であり、海外の保存担当者からの保存修復についての問い合わせが多い。また近年では、和紙を使った修復技術が、欧米の文化財修復に応用されるようになってきた。そこで文化財研究所は、ICCROM と共同で 10 カ国 10 人の参加者を募り国際研修会を開催し、日本紙本文化財の保存と修復についての研修を行う。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	文化遺産国際協力センター長　川野邊　渉

【スタッフ】

加藤雅人、楠　京子、山田祐子（以上、文化遺産国司協力センター）、早川典子（以上、保存修復科学センター）

【主な成果】

2011 年 8 月 29 日～9 月 16 日の期間で 10 カ国から 10 名を迎え入れて研修を行った。紙本文化財の修復理念、材料学の講義を行った。実習では、掛軸修復、和綴じ冊子製作、屏風・掛け軸の取扱などを行った。またスタディーツアーでは美濃を訪れ、和紙の原料・製造から流通までを和紙産地の歴史とともに学習し、和紙の抄造を体験学習した。修復工房および伝統的材料の製作工房、店舗を訪れ現状を視察した。

【年度実績概要】

[場所]九州国立博物館

[参加者]アブドゥライ・パリサ イラン テヘラン　アザッド大学、ブーダリス・ゲオルギオス ギリシャ ビザンチン文化博物館、クレスポ・ルイス スペイン スペイン国立図書館、ジャンドロ・フロラヌ スイス ジュネーブ図書館、ケンパイアー・プッタース ワーミー・マドゥ・ラニ インド インド芸術・文化遺産ナショナルトラ、オドール・チャベス・アレ ハンドラ メキシコ メキシコ国立公文書館、スニトクテ・ダイヴァ リトアニア ミカロユス・コンスタンティナス・チニス国立美術館、スティグリッツ・マリニタ イギリス オックスフォード大学ボードリアン図書、ヴィトコヴスカ・モニカ フランス パリ第一大学、マウ・アン・フランセス カナダ カナダ国立図書館公文書館

[研修内容]

講義：岡　泰央「装潢の概念」、早川典子「日本画修復に使われる接着剤について」、加藤雅人「紙の基礎」、藤田励夫「古文書の紙について」

実習：巻子修復、冊子綴じ、掛軸・屏風取扱い

見学：九州国立博物館、長谷川和紙工房、美濃和紙の里会館、美濃史料館、美濃市美濃町（伝統的建造物群保存地区）、溝川商店、放光堂、西村彌兵衛商店、金高刃物老舗、岡墨光堂

巻子修復実習の風景

【実績値】

研修会開催数　１回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4352

自己点検評価調書

研 No. 35

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	開催数					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、研修生の募集時期が震災と重複しており、募集の減少が懸念されていたが、実際には 50 名以上の応募があった。このことからも本研修の需要が高いことが分かる。また当プロジェクトのような研修は国際的にも珍しく、研修生からも「同僚にすすめる」「継続して欲しい」などの高評価をいただいた。以上のことから、Ａと判断した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度は、研修の準備を進めるなかで、開催時期に震災の影響による計画停電が懸念されていた。そのため、九州国立博物館で開催したが、九州国立博物館の協力もあって、ほぼ例年通りの研修を行うことができた。変更点に関しては、九州国立博物館での視察などがあり、これもまた研修生から高評価を得られた。以上のことから順調と判断した。次年度は当研究所で開催する予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4353
（様式１）

業務実績書

研 No. 36

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	在外日本古美術品保存修復協力事業（(3)-⑤）

【事業概要】
日本の文化財は欧米を中心に海外でも多く所蔵されている。しかし、これらの保存修復の専門家は海外にほとんどおらず、多くの博物館などで適切な処置に窮している。そこで、海外で所蔵されている掛軸などの紙本絹本文化財および漆工芸品のうち、本格的な修復が必要な作品を一旦日本に運び修復して返還することを目的とする。また、ワークショップを開催し、保存修復に必要な日本の文化財に対する理解の深化、修復技術の移転を行う。

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	文化遺産国際協力センター長　川野邊　渉

【スタッフ】
加藤雅人、楠　京子、山田祐子（以上、文化遺産国利協力センター）、早川典子、山下好彦（以上、保存修復科学センター）、田中　淳、綿田　稔、塩谷　純、江村知子（以上、企画情報部）、深井　啓、安孫子卓史（以上、研究支援推進部）

【主な成果】
掛軸５作品、屏風１作品を預かり修復を行った。内、掛軸３作品の修復を完了して所蔵館に返還した。他作品に関しては修復作業中である。また、次年度以降の修復候補作品選定のため、漆工芸品の調査をヨーロッパにおいて行った。
ベルリンにおいて紙本絹本文化財の保存修復に関するワークショップを、ケルンにおいては漆工芸品の保存修復に関するワークショップを開催した。

【年度実績概要】
[作品修復]
・ケルン東洋美術館（ドイツ）所蔵　出山釈迦図　仲安真康筆　紙本墨画　掛軸装１幅　修復完了・返還済み。
・ケルン東洋美術館（ドイツ）所蔵　山水図　祥啓筆　紙本墨画淡彩　掛軸装１幅　修復完了・返還済み。
・ケルン東洋美術館（ドイツ）所蔵　寒山拾得図　伊藤若冲筆　紙本墨画　掛軸装１幅　修復完了・返還済み。
・ケルン東洋美術館（ドイツ）所蔵　霊照女図　絹本著色　掛軸装１幅　修復中。
・キンベル美術館（USA）所蔵　二十五菩薩来迎図　絹本著色　掛軸装　２幅　修復中。
[ワークショップ]
Workshops on the Conservation and Restoration of Urushi (Lacquer ware)”、場所　ケルン市博物館連合・ケルン東洋美術館（ケルン・ドイツ）

ワークショップ風景（ケルン）

・(Worhshop 1) 2011 年 11 月 14 日、参加者　4 名、講義 “Introduction to Urushi” “Restoration of Urushi Object”、実習 “Material and techniques -Japanese lacquer”
・(Worhshop 2) 2011 年 11 月 15～18 日、参加者 6 名、講義 “Damage of Urushi objects”, “History and damage of Export Lacquer”, “Concept and process to Uurshi conservation”, “Cleaning”, “Case study on the “International Training program”, “The Cooperative Program for the Conservation of Japanese Art Object Overseas” and The Mazarin Chest Project”、実習 “Investigation into Urushi object”, “Facing”,” Material and techniques”,” Making sample board-grand and caoting”, “Cleaning”

Workshops on Conservation of Japanese Art Objects on Paper and Silk、場所 ベルリン国立博物館連合・アジア美術館（ベルリン・ドイツ）
・(Worhshop 1) “Basics for Japanese paper and silk cultural properties”、2011 年 11 月 15～16 日、 参加者 16 名、講義 “Paper”, “Adhesives”, “Introduction to soko (Japanese Traditional Mounting)”, and “The Making of *washi*”、実習 “Preparation of Paper for Drawing and Writing with Chinese Ink”, and “Art with Chinese Ink”
・(Worhshop 2) “First step for Japanese folding-screen restoration”、2011 年 11 月 17～18 日、参加者 11 名、講義 “The Structure of Folding-Screens” and “An Example of Folding Screen Restoration”、実習“Creation of Panels for Screens”
・(Worhshop 3) “Second step for Japanese folding-screen restoration”、 2011 年 11 月 21～23 日、10 名、実習 “Creation of Folding-Screens” and “Restoration of Folding-Screens”

【実績値】
ワークショップ開催数　５回
修復完了作品数　３件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4353

自己点検評価調書

研 No. 36

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	ワークショップ開催数	修復作品数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	修復の完了したケルン東洋美術館所蔵作品に関しては、所蔵館でも満足していただき、返還後に特別展で展示されている。ワークショップに関しても、継続を望む声、あるいは開催回数、開催地の増加を望む声が高く、満足度も高い。現実的には予算、人員の点から、開催数の増加などは不可能であるが、来年度も引き続き、内容のさらなる充実化を図る。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	絵画作品６作品のうち、３作品は修復が終了し返還した。残りのうち、１作品は次年度第１四半期中に返還予定であり、１月に新たに預かった作品に関しては、２年間の修復予定である。 ワークショップについても、当初予定の紙本絹本文化財および漆工芸品に関してそれぞれワークショップを滞りなく開催した。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4361
（様式１）

業務実績書

研 No.37

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究（(3)-⑥）

【事業概要】
近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物など従来の文化財とは、規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両などの保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長　中山俊介

【スタッフ】
朽津信明、早川典子、森井順之、池田芳妃（以上、保存修復科学センター）、小堀信幸、横山晋太郎、長島宏行（以上、客員研究員）

【主な成果】
今年度は近代化遺産の中でも、建造物に使われている塗料（油性塗料）に関して、関係者を招き、研究会を開催し、それぞれの立場から油性塗料についての発表、討論を行い、それを通じて、現在国内のほとんどの塗料メーカーが生産を中止した油性塗料をどのように確保し、文化財の修復に使用していけるか等、検討を加えた。さらに屋外展示されている大型構造物、鉄道車両や航空機などの文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外暴露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査している。山口県萩市や静岡県伊豆の国市にある反射炉など、史跡指定された土地に建つ建造物の保存に関して研究を行った。
昨年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。

【年度実績概要】
今年度は近代化遺産の中でも、建造物に使われている塗料（油性塗料）に関して、現在国内でほとんどの塗料メーカーが生産を中止している状況の中、文化財にどのように使われて来たのか、修復の際、油性塗料が使われているのか否かどのように判定するのか、油性塗料が使われている事が確認されても、新たな油性塗料が入手出来ない場合はどうしたら良いのか、など、修復の理念を含めた研究会を行った。保存修復に実際に携わっている担当者４人と国外の専門家１人を招き、平成24年２月10日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。
台湾において、日本統治下に建設され、今も現役で活躍している建造物や鉱山、鉄道及び鉄道施設の保存状況について現地にて情報交換を実施した。
国内においては、新潟県佐渡市の佐渡金銀山遺跡、静岡県伊豆の国市の韮山反射炉、山口県萩市の反射炉などの現地調査を実施した。
屋外展示されている鉄道車両や航空機等の金属を主体とした文化財に関しても同様に現地調査を実施した。加えてそのような屋外展示されている鉄道車両や航空機などの金属を主体とする文化財の防錆対策のために各種サンプルを作成し小樽市総合博物館、船の科学館、かかみがはら航空宇宙科学博物館、大樹町多目的航空公園、海上自衛隊鹿屋航空基地での曝露実験も継続して実施している。
これらの地点では、試料の受けた紫外線量をはじめ、温度、湿度などの測定も行い、これらの塗装仕様と劣化速度の相関についても調査している。屋外展示航空機の環境測定も継続している。
設計図面あるいは明治後期から大正期、昭和初期にかけて記録された航空史関連資料などの保存の一環としてデジタル化を行うなど貴重な資料を後世に遺すべく現地で状態を調査し保存手法を研究している。

【実績値】
報告数　　４件（①～④）
発表件数　　２件（⑤～⑥）
報告書刊行数　２件（⑦～⑧）

【備考】
①中山俊介　「Conservation and Restoration of Concrete Structures」『Conservation and Restoration of Concrete Structures』, pp.5-19、2012.3
②中山俊介　「音声・映像記録メディアの保存と修復」　『音声・映像記録メディアの保存と修復』、 pp.5-13、2012.3
③中山俊介、森井順之　「Conservation, Restoration and Utilization of Modern Cultural Heritage in Japan」『COLLECTION OF EXTENT ABSTRACTS The Second Symposium of the Society for Conservation of Cultural Heritage in East Asia』 p.p.111-112 12.3
④中山俊介、大河原典子、池田芳妃、安部倫子　「フィルモン音帯の修復手法の開発」　『保存科学』51, pp.243-248、2012.3
⑤中山俊介　「近代文化遺産の修復に使われる油性塗料について」　近代建築に使用されている油性塗料に関しての研究会、東京文化財研究所、　2012.2.10
⑥中山俊介、森井順之　「日本に於ける近代化遺産の保存・修復及び活用」　東アジア文化遺産保存学会第２回学術研究会内蒙古博物院、フフホト・中華人民共和国、11.8.16-18
⑦『Conservation and Restoration of Concrete Structures』　東京文化財研究所　111p、2012.3
⑧『音声・映像記録メディアの保存と修復』　東京文化財研究所　88p、2012.3

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4361

自己点検評価調書

研 No. 37

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近代文化遺産の保存・修復と活用について、各種の現地調査を実施することが出来た。その現地調査を通じて、現状の把握、解決すべき問題点なども新たに掴むことが出来た。特に、建造物関連で、明治期から大正期、昭和初期に使用されていた油性塗料に関して、専門家を招いた研究会を開催し多くの知見、新たなる研究者との連携の可能性も得ることが出来た。さらに今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得る事が出来た。現地調査や研究会を通じて近代文化遺産の重要性を多くの方々に認識していただいた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	前中期計画で得た成果を元にさらに調査研究を発展させる事を目的として、現地調査を今後も続けて行くことでさらに重要な成果が期待できると考えている。また、研究会を通じて新たな知見を得ると共に、多くの研究者との連携も可能となり、今後の研究を進める上で、重要な成果を得た。次年度も今年度の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となった。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4411
（様式１）

業務実績書

研№38

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力（(4)-①）		

【事業概要】
高松塚古墳：壁画の修理及び修理環境の保全並びに壁画の劣化原因及び劣化防止対策措置などの調査・研究を実施
キトラ古墳：取り外した漆喰片についての経過観察、及び保存のための強化処置を実施

【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【担当部課】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】
岡田　健、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英、佐藤嘉則、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之（以上、保存修復科学センター）、川野邊　渉、加藤雅人（以上、文化遺産国際協力センター）、山田祐子、楠　京子（以上、特別研究員）、大河原典子（客員研究員）

【主な成果】
高松塚古墳では、昨年度、脆弱化した漆喰層の常温抽出布海苔による１度目の強化は全石終了した、そのうち天井１・２・3、青龍・西男子・白虎・玄武の計 7 石においては無地場に長波の紫外線照射を行い、バイオフィルムのクリーニングを行っている。
キトラ古墳では平成 22 年度までに石室内の漆喰すべての取り外しが完了し、取り外した漆喰片についての経過観察、及び保存のための強化処置を行っている。更に、これから漆喰片を壁単位で組み立てていくにあたり、補填等に適切な材料の検討や実験を行っている。

【年度実績概要】
高松塚古墳
昨年度、脆弱化した漆喰層の常温抽出布海苔による１度目の強化は全石終了した、そのうち天井１・２・3、青龍・西男子・白虎・玄武の計 7 石においては無地場に長波の紫外線照射を行い、バイオフィルムのクリーニングを行っている。また西女子、西男子、天 1 においては黒カビによる汚れが顕著なため、顕微鏡下でのクリーニングを行った。西男子は継続中である。概ね無地場のバイオフィルムのクリーニングが完了した天井１・２・3、東男子、東女子、西男子、西女子、玄武は精製布海苔による 2 度目の漆喰層の強化を行った。また、絵画面のクリーニング及び漆喰の強化に関してはより適切な処置方法を検討するために模擬漆喰を用いた実験を行っている。これらの作業についての記録写真整理も随時行っている。
高松塚古墳壁画修復施設において継続的に微生物環境調査を実施しているが、本年度も 2011 年 9 月と 12 月の 2 回にわたり空中浮遊菌の調査・施設のふきとり調査を実施したところ、いずれの調査結果からも施設内が非常に清浄に保たれていることがわかった。この結果は、今年度同時期に実施したキトラ古墳施設の調査結果と対照的であった。
そのほかの装飾古墳における微生物調査として、土壌を採取して光学顕微鏡で観察することとあわせ、微生物群集構造解析を予備的な調査として実施している。
高松塚古墳関係の保存菌株のうち、今年度に 350 株について、メンテナンスを実施している。
キトラ古墳
平成 22 年度までに石室内の漆喰すべての取り外しが完了し、取り外した漆喰片についての経過観察、及び保存のための強化処置を行っている。更に、これから漆喰片を壁単位で組み立てていくにあたり、補填等に適切な材料の検討や実験を行っている。
また、これまで額装を行った「白虎・青龍・玄武・朱雀」の四神と、十二支のうちの「子・丑・寅」の計 7 点の壁画についても、随時経過観察を行っている。これらの作業についての記録、資料整理も行っている。
紫外線間欠照射により微生物制御を行っているキトラ古墳石室の微生物相の調査を 2011 年 10 月に微量のサンプリングを行い実施した。高松塚古墳壁画修復施設で実施されている方法と同様の方法で、キトラ古墳施設の微生物環境（汚染度）調査を実施したところ、空中浮遊菌の調査でも、壁面などのふきとり調査においても、キトラ古墳の前室、小前室などでは、現在清浄に保たれている高松塚古墳壁画修理施設の場合よりも 100 倍ないしはそれ以上の密度でカビが検出された。
高湿度環境で土があるため、そのような傾向になることは当然ではあるが、微生物汚染が進まないような管理が今後も必要である。今年度は 2012 年 1 月にキトラ古墳施設の前室、通路などの除菌清掃を実施し、3 月には小前室のカビ対策として露出度表面のポリシロキサン樹脂のメンテナンスを実施する予定である。
キトラ古墳関係の保存菌株のうち、今年度は 116 株について、メンテナンスを実施している。

【実績値】

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4411

自己点検評価調書

研 No. 38

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性			
判定	A	A	A			
備考						

2．定量的評価

観点	援助・助言 実施件数					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	キトラ古墳、高松塚古墳ともに、本年度の計画を予定通り遂行し、良好な成果を上げることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い調査研究の水準で事業を進めることができた。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4412

業務実績書

研 No. 39

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力（(4) -①）

【事業概要】
本事業は、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施するもので、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査および保存・活用に関して技術的な協力を行った。

【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長　深澤芳樹

【スタッフ】
深澤芳樹、玉田芳英、降幡順子、廣瀬 覚、若杉智宏、木村理恵、高橋透［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、青木 敬［都城発掘調査部（平城地区)］、辻本与志一、脇谷草一郎、高妻洋成、田村朋美［以上、埋蔵文化財センター］、井上直夫、栗山雅夫、岡田愛[以上、企画調整部]、石崎武志、早川泰典、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊（以上、東京文化財研究所)、水野敏典（奈良県立橿原考古学研究所)、長谷川透（明日香村教育委員会）

【主な成果】
文化庁が進める高松塚古墳仮整備事業や保存・活用に関する事業が円滑かつ適切に施工されるよう協力した。
平成 22 度のキトラ古墳壁画の取り外し作業終了を受け、キトラ古墳石室内の考古学的調査を行った。また、壁画、および古墳の保存、活用、整備の方向性を議論・検討するための技術的な支援・協力を行った。

【年度実績概要】
高松塚古墳については、平成 22 年度に引き続き、平成 18 年・19 年度に実施した石室解体事業に係る発掘調査の成果、出土資料・記録類の整理作業として、石室石材の三次元計測による高精細データの取得、および発掘調査・解体作業中に撮影した記録映像の編集作業を実施した。
また、壁画の保存修復（劣化原因）に関して、蛍光Ｘ線分析を用いた壁画の材料調査、デジタルアーカイブスキャンニングによる画像記録、漆喰のテラヘルツ分光イメージングについての基礎実験等を実施した。
春・秋の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際しては、解説員として研究員（のべ 15 名）を派遣した。

平成 22 年度に壁画の取り外しが終了したキトラ古墳では、石室内の調査を実施し、床面に残存する漆喰上の精査、石室石材表面および石室構造に関して考古学的調査・検討を行った。
壁画の保存修復に関しては、蛍光Ｘ線分析を用いた壁画の材料調査、デジタルアーカイブスキャンニングによる画像記録等をおこなった。
さらに 2 週間に 1 回、研究員により古墳石室内等のカビ点検作業を実施した。緊急時には現地において応急的な処置にあたり、文化庁に状況を報告した。
キトラ古墳壁画の保管・活用については、今後予定されているキトラ古墳墳丘の整備について、考古学的観点から支援・協力を行った。

【実績値】
論文等数：4 件(論文：2 件、その他：2 件)①～④
学会・研究発表等：2 件⑤～⑥
記録作成数　遺構実測図 100 枚、写真（デジタル）356 枚

【備考】
①降幡順子・辻本与志一・脇谷草一郎・高妻洋成ほか「高松塚古墳壁画の材料調査－蛍光Ｘ線分析法による下地漆喰に関する調査（3）－」『日本文化財化学会第 28 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 2011. 6. 11
②高妻洋成・降幡順子・脇谷草一郎ほか「テラヘルツ分光イメージングによる高松塚古墳壁画の漆喰の状態調査」『文化財保存修復学会第 33 回大会研究発表要旨集』一般社団法人文化財保存修復学会 2011. 6. 4
③若杉智宏「キトラ古墳石室内の調査（飛鳥藤原 170 次）」『奈文研ニュース No. 42』2011. 9
④若杉智宏「キトラ古墳の調査－飛鳥藤原第 170 次」『奈良文化財研究所紀要 2012』2012. 6（予定）
⑤降幡順子・辻本与志一・脇谷草一郎・高妻洋成ほか「高松塚古墳壁画の材料調査－蛍光Ｘ線分析法による下地漆喰に関する調査（3）－」日本文化財化学会第 28 回大会 2011. 6. 11
⑥高妻洋成・降幡順子・脇谷草一郎ほか「テラヘルツ分光イメージングによる高松塚古墳壁画の漆喰の状態調査」文化財保存修復学会第 33 回大会　一般社団法人文化財保存修復学会 2011. 6. 4

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4412

自己点検評価調書

研 No. 39

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
適時性：キトラ古墳壁画取り外し完了を受け、石室内の考古学的調査を適切に行うことができた。
独創性：保存科学、考古学の双方の立場から、壁画古墳の保存・活用に助言を行うことができた。
発展性：緊急性を有する文化財の保存・活用に対する今後の方向性を示すことができた。
効率性：高松塚古墳の発掘調査の成果を、整備、公開に直結させることができた。
継続性：高松塚古墳の実績を基に、今後、キトラ古墳の整備・活用を進めていく見通しが得られた。
正確性：古墳や壁画に関する学術的成果を高い精度で得ることができた。

2．定量的評価

観点	論文数	研究発表数				
判定	A	A				

備考
調査成果等を
当研究所発行の定期刊行物等に報告するとともに学会等で発表し、調査成果等を迅速に公表することができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高松塚古墳の発掘調査成果の整理ならびに壁画の分析調査が進み、また、キトラ古墳の石室内調査により、保存・活用に資する新たな学術的成果が得られた。これらの実績を基に、今後のキトラ古墳の保存・活用・整備等の事業が円滑に進められることが期待できる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	壁画古墳という重要かつ緊急性の高い文化財に対して、保存・活用に関するモデルケースを構築することができ、今後の方向性を示すことができた。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4421

業務実績書

研 No. 40

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関する技術的協力（(4) －②）

【事業概要】
飛鳥・藤原地域は、我が国国家成立期の舞台であり、6 世紀末から 8 世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心地であった。本事業は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内に所在する檜隈寺の全体像を復元すべく、遺跡周辺の調査をおこなうものである。檜隈寺は、飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、この遺跡の実体解明および保存活動に資するため、2008 年度より発掘調査を実施している。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】
黒坂貴裕、渡辺丈彦、小田裕樹、木村理恵［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、井上直夫、栗山雅夫、岡田愛［以上、企画調整部］児島大輔［埋蔵文化財センター］

【主な成果】
今年度は、檜隈寺中心伽藍跡の南東方向に所在する土壇状の高まり部分と、檜隈寺が所在する丘陵の南東裾部の 2 カ所について発掘調査をおこなった。調査区の面積は合計 402 ㎡である。土壇状の高まり部分では、大型柱穴 2 基を確認し、丘陵裾部では、石敷と素掘溝を確認した。いずれも古代の遺構であると考えられる。大型柱穴は重要文化財於美阿志神社石塔婆に関わり、素掘溝は檜隈寺寺域に関わるとみられ、檜隈寺の実体解明に繋がる重要な成果が得られた。

【年度実績概要】
本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、建物建設計画に先立ち、檜隈寺中心伽藍跡の南東方向に所在し、以前から寺域に関わる建物跡が推測されていた土壇状の高まり部分と、2010 年度の調査で部分的に石敷を確認していた丘陵の南東裾部分の 2 カ所について調査を実施した。調査期間は 2011 年 10 月 20 日～12 月 2 日。調査面積は合計 402 ㎡である。

土壇状の高まり部分では、1 辺 1.5m～1.8m、残存深さ約 1.2m の柱穴 2 基を確認するとともに、それぞれに柱根が残存していることも確認した。これらの柱穴を結ぶと、その方位は檜隈寺中心伽藍の方位の振れと一致する。また、方位の振れに順うと、柱穴 2 基の中間は檜隈寺塔跡の中軸線上に位置する。しかし、柱穴埋土からは平安時代の土器が出土したため、7 世紀頃の檜隈寺に伴うものではなく、檜隈寺塔跡に所在し平安時代後期の作とされている、於美阿志神社石塔婆（国指定重要文化財）に伴うと考えられる。

丘陵南東裾部分では、昨年度に検出していた石敷について、全体像の確認調査をおこなった。石敷は人頭大の石を用いていたが、その丘陵側で一回り大きな石を立てている状況を確認した。しかし、その他の部分では遺構が削平されており、本来は東側水田方向に広がっていたものと考えられる。また、この石敷の西側丘陵上で素掘溝を確認した。素掘溝は幅 1.6m、深さ約 50 ㎝で、その方位の振れは檜隈寺中心伽藍の振れに一致しないが、丘陵の地形に沿っており、延長は檜隈寺中心伽藍の東側に延びると見られる。いずれも遺物から 7 世紀以前の遺構と考えられる。

本調査では、檜隈寺の古代における幅広い年代の遺構を確認し、特に大型柱穴 2 基は、中心伽藍に伴う重要な遺構と考えられ、檜隈寺の実体解明に繋がる重要な成果が得られた。

大型柱穴と柱根

【実績値】
論文等数：2 件（論文 1 件①、その他 1 件②）
出土遺物　　軒丸瓦 1 点、軒平瓦 3 点、丸瓦 57 点、平瓦 90 点、その他瓦類 5 点、
土器 2 箱、銅製品 1 点、木屑 1 点、壁土 1 点、
建築部材 1 点
記録作成数　遺構実測図 20 枚、写真（4×5）49 枚

【備考】
①黒坂貴裕・小田裕樹・渡辺丈彦「檜隈寺周辺の調査－第 172 次」『奈良文化財研究所紀要 2012』2012.6（予定）
②黒坂貴裕「檜隈寺の調査（飛鳥藤原 172 次）」『奈文研ニュース No.44』2012.3

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4421

自己点検評価調書

研 No. 40

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			

備考

適時性：国営公園整備事業の事前調査と、檜隈寺周辺の遺構状況解明について、双方に寄与した。
発展性：これまで不明な点の多かった７世紀前半および奈良時代以降の檜隈寺の動向が確認できる重要な資料を得た。特に、国指定重要文化財於美阿志神社石塔婆に関わる遺構を確認できた。
継続性：2008 年度から実施している発掘調査の成果を受け、檜隈寺周辺の全体像復元にかかわる継続的な調査をおこなった。

2．定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、檜隈寺の伽藍が完成した７世紀後半の資料のみならず、これまで不明な点の多かった７世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺の動向が確認できる資料、および土地利用状況に関わる重要なデータを得ることができたため、総合的にＡと判断した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査は、年度当初の計画通りに実施されており、国営公園整備事業に関わる範囲について、および課題であった檜隈寺の全体像復元の解明に向けて、それぞれに有益なデータを得ることができた。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4431

（様式 1）

業務実績書

研 No. 41

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	農林水産省が行う大和紀伊平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区 2 号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力（(4) －③）

【事業概要】

飛鳥・藤原地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6 世紀末から 8 世紀初めにいたる間、政治・文化の中心地であった。本研究は、農林水産省が行う大和紀伊平野土地改良事業にともなう本地域の埋蔵文化財の調査・研究に対して協力・支援を行うものである。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹

【スタッフ】

山本崇、清野孝之、高橋 透、庄田慎矢［以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区)］、川畑純、山本祥隆［以上、都城発掘調査部（平城地区)］、井上直夫、栗山雅夫［以上、企画調整部］

【主な成果】

大和平野支線水路等その 3（県営飛鳥 2 号幹線（右岸）その 5）改修工事に伴う発掘調査で、対象地は藤原右京七条西一坊（橿原市上飛騨町）にあたる。総長 100m の工事区域のうち、中央約 80m分は立会で対応し、残りの西区（約 10m×1m)、東区（約 10m×1m）を発掘調査した。その結果、古墳時代と古代の遺構（溝等、一部中世を含む）を検出、記録した。

【年度実績概要】

西区では溝 1 条と炭溜りを検出した。溝の遺構検出面は北西に隣接する飛鳥藤原第 62 次調査の遺構検出面の標高がほぼ一致している。この溝に関して、ここには藤原京右京西一坊坊間路東側溝が想定されており、検出した溝の位置とほぼ重なることから、西一坊坊間路東側溝の可能性がある。ただし古代の遺物は出土していない。炭溜りは溝の検出面から約 10 ㎝下層で検出した。ここからは古墳時代前期の高坏や甕がまとまって出土している。

東区では溝 1 条を検出した。溝の遺構検出面は東に隣接する飛鳥藤原第 17 次調査の遺構検出面と標高がほぼ一致している。溝は出土遺物から古墳時代中期以降につくられ、7 世紀後半には完全に埋没していたと考えられる。

以上のように、本事業では水路付け替え工事に伴う限られた調査範囲の中ではあったが、埋蔵文化財に関する情報を最大限に引き出し、必要となる記録類の作成を迅速に進めることができた。

なお調査期間は平成 24 年 2 月 15 日～平成 24 年 2 月 24 日であったが、調査終了後も調査地外の既設管撤去工事の立会を実施し、工事が埋蔵文化財に影響を与えることがないことを確認した。

西区溝検出状況（東から）

東区全景（東から）

【実績値】

論文等数　1 件①

出土遺物　土器 1 箱、木製品（火鑽臼）1 点ほか

記録作成数　遺構実測図 5 枚、写真（4×5）16 枚

【備考】

①黒坂貴裕「2010 年度 都城発掘調査部（飛鳥藤原地区）発掘調査・立会調査一覧」『奈良文化財研究所紀要 2012』2012.6（予定）

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4431

自己点検評価調書

研 No. 41

1．定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				

備考
適時性：工事の状況に応じて迅速に対応して文化財を保護・記録することができた。
継続性：飛鳥・藤原地域の遺跡情報を継続的に収集することができた。

2．定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	農林水産省が行う大和紀伊平野土地改良事業にともなう埋蔵文化財への影響について、迅速かつ適切に対応・処理することができ、遺構の保護・記録を行うことができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性を要する事前調査について効率良く対応し、藤原地域の基礎資料を蓄積することができた。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究（(5)－①）

【事業概要】
館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　田良島哲

【スタッフ】
荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員），安藤香織（列品管理課登録室アソシエイトフェロー），井上洋一（企画課長），池田宏（上席研究員），伊藤嘉章（学芸研究部長），伊藤信二（教育普及室長），井上洋一（企画課長），猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員），今井敦（博物館教育課長），恵美千鶴子（調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー），沖本明子（保存修復課保存修復室アソシエイト・フェロー），小山弓弦葉（工芸室主任研究員），及川穣（列品管理課登録室アソシエイトフェロー），河内晋平（東京藝術大学助手），川村佳男（保存修復課保存修復室研究員），神庭信幸（保存修復課長），木島隆康（東京藝術大学教授），鬼頭智美（企画課国際交流室），木下史青（デザイン室長），金鐘旭（東京藝術大学），小菅将夫（岩宿博物館館長），後藤健（東京国立博物館上席研究員），小林牧（広報室長），佐々木佳美（列品管理課登録室アソシエイトフェロー），佐藤祐介（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー），佐藤香子（環境保存室研究支援者），佐藤祐介（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー），澤田むつ代（特任研究員），品川欣也（調査研究課考古室研究員），島谷弘幸（副館長），白井克也（列品管理課平常展調整室長），鈴鴨富士子（東京藝術大学非常勤講師），鈴木みどり（博物館教育課ボランティア室長），鈴木晴彦（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー），関紀子（調査研究課絵画・彫刻室アソシエイトフェロー），瀬谷愛（列品管理課平常展調整室員），高木雅広（エクサーチ LLC 合同会社），高橋裕次（博物館情報課長），竹内奈美子（調査研究課工芸室長），竹浪遠（黒川古文化研究所），田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長），田良島哲（調査研究課長），千葉史（株式会社ラング），塚本麿充（調査研究課東洋室研究員），土屋貴裕（調査研究課絵画・彫刻室研究員），土屋裕子（保存修復課環境保存室主任研究員），富田淳（列品管理課長），富山恵介（東京藝術大学大学院），中村春佳（修理技術者），中安知佳，西尾歩（立命館大学），平野はな子（修理技術者），藤田千織（博物館教育課教育普及室主任研究員），古谷毅（列品管理課主任研究員），星野裕昭（アルテアエンジニアリング㈱），松嶋雅人（企画課特別展室長），松田麻美（国立歴史民俗博物館），松本伸之（学芸企画部長），村田良二（博物館情報課情報管理室長），森田正彦（慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科），山田俊輔（調査研究課考古室研究員），横山真（株式会社ラング），横山梓（企画課特別展室研究員），米倉乙世（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー），和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）

【主な成果】
館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財と、その周辺領域に関して、美術史・歴史学・考古学・博物館学等の各見地から学会・研究会・学術雑誌上で各種発表を行った。

【年度実績概要】
・内外の学会・研究会で、各種発表を行った。
・学術雑誌に各種の論考を発表し、著書を刊行した。

【実績値】
・学会・研究会等発表件数：48 名 64 件。
池田宏（上席研究員）「赤糸威大鎧の魅力とその修復」，春日大社：国宝 赤糸威鎧修復記念シンポジウム（平成 23 年 4 月 16 日）ほか。
・論文等掲載数： 47 名 90 編。
塚本麿充（調査研究課東洋室研究員）「皇帝の文物と北宋初期の開封−啓聖禅院、大相国寺、宮廷をめぐる文物とその意味について−（上）（下）」　『美術研究』404, 406 号 ほか。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適宜性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
各種学会誌・紀要等の学術誌や学会・研究会において、平素の調査研究や、平常陳列・特別展に係る業務・他館への協力の中で得た最新の学術情報を、多岐の分野にわたって発表するとともに、広く社会的な発信を行った。

2．定量的評価

観点	学会・研究会等発表件数	論文等掲載数				
判定	A	A				

備考
学会・研究会等発表件数：48 名 64 件。論文等掲載数： 47 名 90 編。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	前年度に比して遜色のない調査研究成果の公開を行い、絵画・書跡・工芸・考古・歴史資料などの各ジャンルにわたり、最新の学術情報を盛り込んだ情報を発信しえた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画に基づき、順調に進捗している。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）特別調査法隆寺献納宝物（第 33 次）「聖徳太子絵伝」第 7 回（(5)－①）

【事業概要】
東京国立博物館では、法隆寺献納宝物について、昭和 54 年より、33 次にわたって献納宝物の調査を館内および館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。献納宝物は、経年によって脆弱化しており、各分野の研究者が直接的な調査をすることは難しい。本事業はすべての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。毎次の調査研究については「法隆寺献納宝物特別調査概報」を発刊している。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課　田沢裕賀

【スタッフ】
田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、土屋貴裕（調査研究課絵画・彫刻室研究員)、瀬谷愛（列品管理課研究員)、小山弓弦葉(調査研究課工芸室主任研究員)、伊藤信二（博物館教育課教育普及室長)、沖松健次郎(企画課特別展室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、澤田むつ代(学芸研究部特任研究員)、小林達朗(東京文化財研究所企画情報部主任研究員)、谷口耕生（奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長)、朝賀浩（文化庁美術学芸課主任文化財調査官)、村重寧（早稲田大学名誉教授)、松原茂（根津美術館学芸部長〈当館客員研究員〉)、東野治之（奈良大学教授〈当館客員研究員〉)、若杉準治（京都国立博物館名誉館員)、岡本明子（山野美容芸術短期大学講師)、谷川ゆき（国文学研究資料館プロジェクト研究院)

【主な成果】
本年度は、国宝聖徳太子絵伝 10 面のうち第 9 面と第 10 面を調査対象とした。経年の劣化、補修によって判別の困難な図様の細部について明らかにできた。また、剥落や劣化などにより画の見えないところについて、現法隆寺絵殿に嵌められた吉村法眼周圭充貞の模写(天明 7 年＝1787)を比較検討することによって、その内容を新たに確認した。

【年度実績概要】
高精細デジタルカメラによって 1 面 132 カット(2 面合わせて 264 カット)撮影し、それを合成することによって原寸大以上に引き伸ばすことが可能となったことから、実作品に基づいて細部を照合しつつ、各事跡場面の特定と、描かれたモチーフの形状、描写について詳細な客観的記述を重ね、各研究者共同で、確認、確定を行った。高精細画像の各場面の拡大図とともにこれを公表することにより、事業概要で述べたとおり、すべての研究者に対して通常の状態では観察の困難な詳細な本図の詳細な客観的情報を提供する下地ができたものと考える。
また、国宝聖徳太子絵伝 10 面の調査は、今年度をもってひとまず完了することになる。そのため、各面に付された色紙形の法量、現状を詳細に記述し、あわせて、画面に用いられた料絹を全面にわたって調査した。
平成 23 年度に実施した第 33 次特別調査の内容は、『法隆寺献納宝物特別調査概報 32』「聖徳太子絵伝 5」として刊行した。

【実績値】
調査回数　　2 回
調査概報発行　1 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数	調査概報発行				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当該調査は、絵画史、工芸史だけでなく、歴史の専門家を含めた調査で、各場面の検証、用絹、絵具など総合的な作品評価を行ってきた。これまでの成果を踏まえ、第 10 面までの検討をまとめた概報の刊行を行って、国宝聖徳太子絵伝 10 面の調査完了とした。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第 9、10 面の調査を行って概報を刊行し、これまでの第 1 面から 10 面までの当該調査研究の成果をその中に集約した。その成果を踏まえ他の聖徳太子絵伝に関する調査法を確立した。今後、当館所蔵の他の聖徳太子絵伝に調査範囲を広げてゆく計画である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-3
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）特別調査「書跡」第９回（(5)-①）

【事業概要】
館書跡収蔵品の中で、平安時代から江戸時代にわたる歌書、物語、願文など和様の書跡類を調査する。この分野ではすでに平安時代の作品を中心とした図版目録「和様１」を刊行しているが、その後の新規収集品及び鎌倉時代以降の作品を対象とする。特に古筆切となっている断簡類の原典特定作業、使用された料紙の種類、書写年代の比定を行うとともに、法量計測、高精細画像撮影など基礎データを収集し今後の研究に便宜を図る。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　田良島哲

【スタッフ】
田良島哲（東京国立博物館学芸研究部調査研究課長）、高橋裕次（東京国立博物館学芸企画部博物館情報課長）、髙梨真行（同ボランティア室主任研究員）、羽田聡（京都国立博物館学芸部研究員）、酒井芳司（九州国立博物館企画課展示室研究員）、吉川聡（奈良文化財研究所文化遺産部歴史研究室長）、池田寿（文化庁美術学芸課主任文化財調査官）

【主な成果】
平成元年以降当館で収集した書跡分野に属する古筆切48件について、作品の名称、古筆切としての通称、制作年代、形状、界線について確認した。断簡は原典推定をし、可能な限り『国歌大観』の収載番号との照合を行った。合わせて原装丁の推測、使用された料紙の紙質分析の検討も合わせて行った。今回の調査対象について記載文字を可能な限り解読し書誌情報を収集した。また対象全件について法量を計測し本紙部分の撮影を行った。

【年度実績概要】
平成元年以降当館の収蔵にかかる書跡分野に属する列品の内、主として掛軸装の古筆切、巻子装・帖装の作品、について次の項目について調査を実施した。
1,名称・通称の検討、2,筆者の真贋・伝称筆者などの検討、3,制作年代、4,元装丁の推測、5,形状性質の確認、6,本紙の法量計測、7,出典の推定、8,使用料紙の分析、9,界線の分析、10,記載文字の判読、11,書誌情報の確認、12,写真撮影

調査対象：B-3171 山城切(秋興)　伝藤原定頼筆　１幅、B-3352 林葉和歌集切　伝西行筆　１幅　など48件
調査日　：平成24年２月７日(火)～9日(木)

調査風景

写真撮影

【実績値】
調査件数:48件　調査人数:参加者10人　24人日(のべ)
調査日数:3日間
調書作成:48枚
撮影画像数:65カット

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	調査件数	調査日数	調書作成	写真撮影		
判定	A	B	A	A		
備考 年度前半に計画していた予備的な調査を実施することができなかったが、今回実施した調査において、予定していた以上の作品の調書作成を行い、また特に多くの写真撮影を行って、長期的に利用できる基礎データを得ることができた。						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	一定数の作品の調書作成及び写真撮影を行い、調査の手順と調査担当者の作品に対する認識の深化を図ることができた。次年度以降、順調に調査が推移することが期待される。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	調査内容については十分な成果を得ることができたが、参加者の日程調整等を適切に行うことにより、より多くの参加者を得ることで、調査の推進を図りたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)　特別調査「工芸」第３回（(5)-①）

【事業概要】
東京国立博物館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人国立文化財機構の国立博物館 4 館および文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家が同時に同じ作品を調査することで、精度の高い成果が得られる。また、各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示公開の向上に結びつけることを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長　竹内奈美子

【スタッフ】
伊藤嘉章（東京国立博物館学芸研究部長）、今井敦（博物館教育課長）、伊藤信二（博物館教育課教育普及室長）、猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、酒井元樹（調査研究課工芸・考古室研究員）、横山梓（企画課特別展室研究員）、久保智康（京都国立博物館学芸部企画室長）、尾野善裕（京都国立博物館学芸部工芸室長）、永島明子（京都国立博物館学芸部企画室主任研究員）、内藤榮（奈良国立博物館学芸部長補佐）、清水健（奈良国立博物館学芸部教育室研究員）、鳥越俊行（九州国立博物館学芸部博物館科学課環境保全室主任研究員）、末兼俊彦（九州国立博物館学芸部文化財課研究員）、川畑憲子（九州国立博物館学芸部企画課文化交流展室研究員）、遠藤啓介（九州国立博物館学芸部展示課研究員）、齋藤孝正（文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官）

【主な成果】
東京国立博物館の金工・陶磁・漆工の列品について、最新の研究結果を反映させた知見を共有することができた。金工調査では、室町時代の金工品について、表現上の理解が進み、今後研究を行う必要性や将来性を確認した。また、陶磁調査では、昭和初期に評価されたいわゆる鑑賞陶器の傾向について認識を深めることができた。漆工調査では、館蔵の十種香箱の調査を終え、それぞれの特色と制作年代に関して検討を加え、十種香箱の多様性とその変遷について議論を深めた。

【年度実績概要】
◆金工調査
実施期間　平成 24 年 3 月 5 日（月）
金工列品のうち、玉幡・華鬘・鏡像などの荘厳具を中心に室町時代の作品 7 件について調査を実施し、制作技術や図像的な特徴、美術史的な価値などについて検討を加えた。室町時代の金工品について、表現上の理解が進み、今後研究を行う必要性や将来性を確認できた。

◆陶磁調査
実施期間　平成 23 年 12 月 7 日（水）・8 日（木）
東洋陶磁列品のうち、横河民輔コレクションの宋・元時代の陶磁器の調査を行ない、製作地や製作時期、製作技法などについて意見交換を行なった。昭和初期を中心とした時代に収集された陶磁器 31 点を集中的に調査することにより、当該時期に評価されたいわゆる鑑賞陶器の傾向について認識を深めることができた。

◆漆工調査
実施期間　平成 24 年 3 月 1 日（木）・2 日（金）
漆工列品のうち香道具をテーマとし、昨年度に引き続き、香を聞き当てる遊び、組香に用いる道具類をとりあげて調査を実施した。特に今年度は組香に用いる諸道具を一括して一つの箱に収める「十種香箱」2 件（42 点）について詳細な調書をとり、館蔵の十種香箱の調査が終了した。それぞれの特色と制作年代に関して検討を加え、十種香箱の多様性とその変遷について議論を深めた。

【実績値】
調査回数　3 回
調査日数　5 日
調査員　16 名
調査対象作品　40 件

（写真左）金工調査風景
（写真右）漆工調査作品

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　工芸分野では美術や考古、歴史などの分野より研究者が不足しており、研究推進の緊急性が高く、本事業は時宜に適している。
　また、工芸各分野の研究者がそれぞれ複数揃う国立文化財機構ならではの事業であり、独創性や正確性・効率性が高い。本年度も各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。
　さらにこの調査事業を継続的に行うことにより、研究推進や展示公開に寄与するところは多く、発展性も大きい。

2．定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査員人数	調査作品数		
判定	A	A	A	A		

備考
　計画通り、それぞれ1～2日にわたる金工・陶磁・漆工の調査会を実施した。早期に日程調整を行い、各分野の各機関専門家がそれぞれほぼ全員揃って調査を行った。漆工調査の対象作品は1件に多数の内容品を含むため、作品件数の数値は少なく見えるが、実際には多岐にわたる多数の作品の調査を行っている。各分野の調査においてきわめて効率良く、相当数の作品を調査できた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進および展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査している。今後は刀剣・染織分野についても調査を行っていくことが望ましく、24年度以降も継続する必要がある。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り作品調査を実施することにより、研究を推進し、その成果が展示公開の向上に寄与している。本事業のような調査会を次年度以降も継続的に行っていくことによって、工芸分野の文化財に関する研究の推進を図る。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-5
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5）特別調査「彫刻」第１回（(5) -①）

【事業概要】
社寺所蔵の仏像、神像、肖像彫刻を調査し、調査研究報告、論文等の研究活動に結び付け、あるいは寄託の増加、特別展等の企画につなげて展示の向上を図る。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室長　浅見龍介

【スタッフ】
丸山士郎（博物館教育課教育講座室長）

【主な成果】
鎌倉市東慶寺の仏像調査。7 躯を調査し、そのうち 3 躯について従来推測されていた制作年代を訂正すべきという結果に至った。
鎌倉市建長寺開山蘭渓道隆墓塔の調査。制作年代については従来とおり南北朝時代とみられた。なお、この墓塔の内部、下層には埋納物のないことが確認できた。
同寺開山堂床下石室の調査　石室蓋石は鎌倉石（砂岩）製で、開山堂創建期に遡る可能性が考えられる。非常にもろい状態なので、樹脂などで強化しさらに研究を進めることとする。

【年度実績概要】
東慶寺
① 地蔵菩薩坐像はこれまで、頭部は室町時代、体部は江戸時代の作と考えられてきた。像内に応永の銘のある摺仏と、享保の年紀のある文書が納められていたためである。しかし、像の作風は鎌倉時代の特色を示し、補修部分があるものの、写実表現に精彩があり、時代の下るものではないと判断できる。頭部と体部で時代が異なるとも考えられず、ともに鎌倉時代後期の作と推定した。
② 観音菩薩坐像はこれまで、南北朝時代の作と考えられてきた。近年、鎌倉時代後期から南北朝時代の作例が多数見出され、この時期の作風の変遷が明らかになり、年代推定の精度が増している。その観点からこの像は鎌倉時代後期に置くべきものと考えられる。従来指摘されていなかった当初部分と後補部分の区別も明らかにした。
③ 聖徳太子立像（南無仏太子）はこれまで、南北朝時代の作と考えられてきた。これも前述の像と同じ理由から、鎌倉時代後期の作と推定した。
④ 水月観音坐像は、かつては室町時代、南北朝時代の作と考えられてきたが、10 年前の当館特別展「鎌倉―禅の源流」において浅見は鎌倉時代・14 世紀の作と推定し、現在それが認められている。しかし今回の調査で、13 世紀に遡る可能性が高いと考えた。
建長寺
① 開山堂安置の蘭渓道隆坐像の研究にかかわる遺骨の納置方法の研究の一環として墓塔の調査、開山堂床下の石室の調査を実施し、彫像との関係を考察する。今年度は墓塔の解体調査、開山堂床下石室の蓋石の調査と体制作り、実施計画を策定した。

【実績値】
調査日数　5 日　（東慶寺　1 月 18 日、22 日、27 日、建長寺 8 月 19 日、3 月 15 日）
調査件数　9 件　（東慶寺　仏像 7 件、建長寺墓塔 1 件、開山堂床下蓋石 1 件）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-5

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	A	A	A	A

備考
　当館のフィールドとして東国の社寺を対象とした調査を継続したいと考えている。特別展や新規寄託につながる事業であり、発展性、継続性などの視点から今年度は十分な成果が得られた。

2．定量的評価

観点	調査日数	調査件数				
判定	A	A				

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	従来の時代判定を改める成果が得られたこと、建長寺開山塔床下石室の調査の体制と準備の進展が判定の理由である。来年度は建長寺の調査を継続する一方、別の寺院の調査も計画し、館員の参画を呼び掛ける。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り作品調査を実施することにより、研究を推進し、今後の事業継続の展望を開くことができた。本事業のような調査を次年度以降も継続することにより、彫刻の展示を充実させ、さらに研究の推進を図る。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-6

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6）特別調査「金地屏風の金箔地についての調査研究」―尾形光琳風神雷神屏風を中心に（(5)－①)

【事業概要】
近年絵画作品の金・銀の使用が注目されている。当館が収蔵する尾形光琳筆「風神雷神図屏風」をはじめとした、各派各時代の金地屏風を同条件の下で調査し、金地についての客観性のあるデータを蓄積する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長　田沢裕賀

【スタッフ】
神庭信幸（保存修復課長）、松嶋雅人（企画課特別展室長）、荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、金井裕子（調査研究課絵画彫刻室員）

【主な成果】
当館収蔵の尾形光琳筆「竹梅図屏風」と「風神雷神図屏風」に加え、同時代の土佐光祐筆「栄華物語図屏風」、狩野永敬筆「十二ヶ月花鳥図屏風」を対象として、エックス線、蛍光エックス線と実体顕微鏡による分析調査やそのデータの集約を行ない、検討会を開催した。

【年度実績概要】
当館収蔵の絵画作品の中から、尾形光琳筆「竹梅図屏風」・「風神雷神図屏風」他の作品を選び、金色部分の化学分析を行なった。
本年度は、これまで調査したデータをもとに検討会を 2 回行ない、データ検討後に実際の作品を見ながら、参加者による意見交換を行った。調査箇所により金の存在を示す蛍光エックス線の強度に違いのあることが確認できたが、そのデータの客観性と有意性を確認するために、厚さの異なる金箔の調査を実施する必要が確認された。また、金箔以外の絵の具や、銀に関する調査が重要であることが確認された。

金箔データ検討会

データと実作品の比較調査

【実績値】
・分析結果検討会　2 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-6

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	B	B	

備考
本調査は、金地作品の箔使用に関する調査で、多くのサンプルからデータを集めることで、各時代のさまざまな流派の絵画制作上の特徴をより客観的に研究する基礎調査としてきわめて重要なものである。昨年度までに行った尾形光琳と同時代に活躍した絵師の作品の調査結果をもとに、今年度は、館内の多くの研究者によるデータの検証と作品の実見調査を行った。

2．定量的評価

観点	検討回数					
判定	A					

備考
館内の多くの研究者の参加による検討会を２回行ない、データと実作品の観察を合わせた意見交換の機会を設けた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は、地震後のレスキュー活動等により、資料のデータ収集が進まなかったが、検討会を開催し、館内でのデータの検討と共有化を行った。来年度は、収集サンプル数を増やしデータの客観性を高めるための確認調査を行なっていきたい。また、金箔以外の絵の具や銀に関する調査が作品理解のうえで重要であることが確認された。来年度は、調査対象を広げる予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	データの集積を増やすことは出来なかったが、これまでのデータをまとめて、2 回の検討会を開催することが出来た。検討会での分析により、今後は、さらにサンプル数を増やすことで、調査データの客観性を高める必要性があらためて確認された。そのためには綿密な調査計画を立て、さらに調査回数を増やすことで、データ集積をさらに進め、結果の外部公開を目指したい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-7

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7）板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究（科学研究費補助金） （(5)－①）

【事業概要】
平成21年度東京国立博物館に一括寄贈された約1万件におよぶ板谷家伝来資料について、デジタル撮影、データ整理を行ない、データベース作成・公開への準備を進める。また各古文書・絵画資料の画題や原本、伝来等について調査するとともに、板谷家作品を所蔵する機関にて現存作品調査を実施。これにより伝来資料について、資料そのものと現存作品との比較という両面から理解を深め、その成果を公開する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画･彫刻室長 田沢裕賀

【スタッフ】
池田宏（上席研究員）、冨坂賢（保存修復課保存修復室長）、小野真由美（企画課出版企画室主任研究員）、瀬谷愛（列品管理課平常展調整室研究員）、塚本麿充（調査研究課東洋室研究員）、金井裕子（調査研究課絵画･彫刻室研究員）、山下善也（京都国立博物館連携協力室長）

【主な成果】
伝来資料について、約1,500点（約3,800カット）の撮影を終了するとともに、並行して新たな知見の整理、絵画資料の調査、古文書の翻刻を行った。また、スタッフによる研究会を開き、今年度はとくに板谷家が手がけた「東照宮縁起絵巻」に関する資料を調査し、名古屋東照宮等にて作品の調査撮影を行なった（24年2月21日～23日）。また23年度までの成果を東京国立博物館所蔵の住吉家、板谷家の本画とともに展示した。

【年度実績概要】
1.　特集陳列「板谷家の絵画とその下絵」開催
会場：特別2室　会期：平成23年10月25日～12月4日
23年度までの成果を活かした特集陳列を開催した。会場にてリーフレット（オールカラー8ページ、無料）を配布した。
2.　伝来資料のデジタル撮影、データ整理
作品保存とデータベース公開のため、伝来資料のデジタル撮影、データ整理を、週4日行なった。
3.　調査の実施
東京国立博物館所蔵の住吉家、板谷家作品の調査を行なった。また23年度は名古屋を中心に、尾張徳川家墓所建中寺、名古屋東照宮、徳川美術館での調査を実施した。（平成24年2月21日～23日）。
4.　研究会の実施
10月東京国立博物館内で、東照宮縁起絵巻や賢聖障子絵等関係資料を中心に調査・研究会を行なった。平成24年3月6日～7日に、名古屋調査と23年度調査研究成果の報告検討を行った。

デジタル撮影

【実績値】
1.　画像データ作成点数　約1,500点、約3,800カット
2.　展覧会回数　1回　・特集陳列「板谷家の絵画とその下絵」（於特別2室、平成23年10月25日～12月4日）
3.　研究会回数　2回
第1回　日程 平成23年10月25日（火）～26日（水）
第2回　日程 平成24年3月6日（火）～7日（水）
4.　外部調査回数　1回
平成24年2月21日（火）～23日（木）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-7

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
板谷家伝来資料は総数１万点を超え、御用絵師の活動実態を研究するうえでの貴重な資料群である。23 年度より科学研究費を受け、国内外に所蔵される板谷家の絵画について所在確認と調査を実施し、同時に伝来資料の解読、翻刻、粉本、下絵の画題特定と本画との比較を行なっている。膨大な資料の撮影、データ整理に、平成 23 年度は 2 人の整理作業補助員、1 人のカメラマンで当館研究員とともに作業にあたってきた。次年度以降はこれらのデータをもとに再度各資料に関する情報を精査し、5 年後の公開に向けて利便性の高いデータベースの作成を追及していきたい。

2．定量的評価

観点	画像データ作成点数	展覧会回数	研究会回数	外部調査回数		
判定	A	A	A	B		

備考
当初目標であった当館所蔵作品と伝来資料についての研究成果展示を行ない、またデジタル撮影、データ整理作業、古文書解読などの調査を定期的に行なうことができた。現状では１月あたり約 250 点の撮影をおこなっているが、本年度は、撮影開始時期がやや遅れたものの、目標値に近いカット数の撮影を行うことが出来た。平成 27 年度のデータベース公開と研究総括を目標とするため、撮影作業については今後スピードを上げていく必要がある。当機構研究員と科研研究分担者・協力者との合同調査を 4 日行った。また、2 月に外部調査として名古屋で関連作品の調査を行った。24 年度は本事業の成果発表について力を入れていきたい。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度の当初目標をほぼ達成し、次年度以降の明確な調査・作業予定の見通しがたっている。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	計画通り実施されており、当該年度計画を 100％達成した。 次年度以降につづく調査研究の基盤ができた。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-8

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8）油彩画の材料・技法に関する共同調査（(5)－①）		

【事業概要】
東京国立博物館所蔵の油彩画約 150 件の中から、明治期を中心とした約 70 件を調査対象とする。東京藝術大学大学院油画保存修復研究室はこれまで大学所蔵の明治期油彩画について調査研究を続け、多数の成果を公表している。この度の共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルＸ線写真、蛍光Ｘ線分析等の科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行ない、これまで東京藝術大学が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考える。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

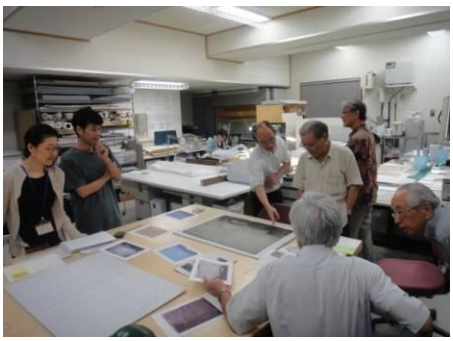
【スタッフ】
木島隆康（東京藝術大学大学院教授）、西川竜二（東京藝術大学大学院助教）、田沢裕賀（調査研究課絵画彫刻室長）、土屋裕子（保存修復室主任研究員）、荒木臣紀（環境保存室主任研究員）

【主な成果】
平成 20 年 11 月から開始し、可能な限り月 1 回のペースで調査を進めてきた。調査は朝 10 時から午後 5 時までであり、1 回の調査では終了しない調査もあるが、これまでのところ調査が終了した作品は、22 点である。次第にデータが蓄積されているが、その中から、平成 21 年度は 3 点についての調査内容を『東京国立博物館紀要』（第 45 号、2010 年）にて、平成 23 年度には、『MUSEUM』631 号および 635 号にて、2 点ずつ計 4 点についての調査内容を発表している。

【年度実績概要】
平成 23 年度に調査が終了した作品（これまでに調査した作品の追加調査も含む）は、①個人蔵　国沢新九郎筆《ランプと洋書》、②個人蔵　伝高橋由一筆《大工の作業場》、③A-712　筆者不詳《ふたりの女性》、④A-11251 原田直次郎筆《ランプと洋書》、⑤A-11261 アントニオ・フォンタネージ筆《風景》、⑥A-714 マック・シャン筆《チャールズ王子》、⑦A-732 筆者不詳《遠望富岳図》

【実績値】

研究発表件数　1 件
論文掲載件数　2 件
調査回数　：7 回（Ｘ線撮影 1 回を含む）
調査作品数：7 点
論文：平成 23 年『MUSEUM』4 月号（631 号）および
12 月号（635 号）にて、成果の一部を発表


油彩画の状態について検討

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-8

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
今年度は、東京藝術大学が集積しているデータベースに追加情報をもたらす作家の作品についての詳細な調査記録およびＸ線透過撮影の一部を行なった。『MUSEUM』などでの発表を着実に行なっている。

2．定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数	調査作品件数		
判定	A	A	A	A		

備考
本調査の結果として得たデータの一部は、平成 23 年 4 月および 12 月出版の『MUSEUM』第 631 号および 635 号に掲載した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館が所蔵する油彩画コレクションは、東京藝術大学の同時期の作品群を補完する意味でその存在は大きい。これまで光学的調査が不十分であったため、東京藝術大学の作品と材料や技術に関する科学的な比較が困難であったが、一連の調査によって徐々に可能になってきている。今後の調査の進捗が更なる可能性を開いていくものと考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査作品、調査回数、研究発表、論文発表など計画通り実施できた。次年度も引き続き今年度同様に臨む計画である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-9

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9）目録学の構築と古典学の再生に関する調査研究（科学研究費補助金）（(5)－①）		
【事業概要】 日本独自の目録学を構築し、「知のネットワーク」で結ばれた公家社会の文庫群（＝データベース）の復原や伝統的知識体系を解明することにより日本古典学の研究基盤を再生する（研究代表者　東京大学史料編纂所教授　田島公）			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　田良島哲
【スタッフ】 島谷弘幸（副館長）、猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、恵美千鶴子（調査研究課アソシエイト・フェロー）			
【主な成果】 ＊館蔵の古典籍、特に国宝「九条家本延喜式」の本文及び紙背文書に関する調査研究を行った。 ＊上記研究の成果として影印本『国宝九条家本延喜式』の刊行を開始、継続した（第 1 巻刊行）			
【年度実績概要】 ＊「九条家本延喜式」紙背文書の釈文作成のための研究会を 13 回行い、釈文の確定を図った。 ＊「九条家本延喜式」に関わる諸問題を研究するため、プロジェクト全体に関わる研究者が参加する検討会を 4 回行った。 ＊「九条家本延喜式」の影印本刊行のための準備を進め、第 1 巻を刊行した。 ＊「延喜式」の研究成果の公開として「九条家本延喜式」の一部を本館第 3 室において、展示した（平成 23 年 9 月 21 日～10 月 30 日及び平成 24 年 2 月 14 日～3 月 25 日）。 ＊平成 22 年度に行った古筆切の調査成果として、古今和歌集に関する展示を本館第 3 室において行った（平成 23 年 11 月 1 日～12 月 11 日）。			
【実績値】 ※紙背文書研究会の開催：13 回 ※延喜式検討会の開催：　4 回 ※古典籍類の展示公開：　3 回			
【備考】			

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-9

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	研究会開催回数	検討会開催回数	展示回数			
判定	A	B	A			
備考 紙背文書の研究会は、館内において可能な限り定期的に実施することができたが、館外の研究者を交えた史料の検討会は、震災の影響もあり多少回数が少なかった。						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究において、当館に求められた課題である、国宝「九条家本延喜式」の基礎的情報の構築と公開について、特に紙背文書に関する高精細画像の取得と釈文テキストの作成を完了する目途がたち、目的を達することができた。また、館蔵の公家関係の資料についても基礎的なデータの収集を行うことができた。今後より積極的な情報の公開に取り組む方向である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は23年度で終了となり上記総合的評価のとおり、一応の目的を達した。今後は本研究の後継研究プロジェクトなどとも協力し、この研究分野が一層発展するように、館蔵品の情報公開等に取り組みたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-10
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	10)文化財保護の歴史に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)－①)

【事業概要】
東京国立博物館は、明治 4 年(1871)の「古器旧物保存」や、同 5 年に博覧会の出品物考証に備えるために行った文化財調査「壬申検査」をはじめ、「臨時全国宝物取調」など文化財保護に関する多くの資料を所蔵している。こうした文化財保護の歴史に関わる情報、資料などを広く収集、整理し、そのデータを公開することを目標とする。

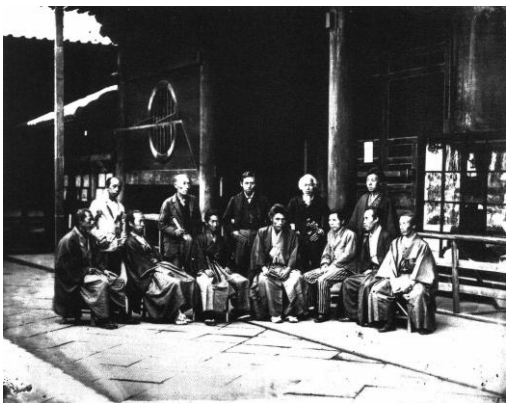
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長　高橋裕次

【スタッフ】
浅見龍介(調査研究課東洋室長)、丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、白井克也(列品管理課平常展調整室長)、島谷弘幸(副館長)、恵美千鶴子(学芸研究部調査研究課アソシエイトフェロー)

【主な成果】
東京国立博物館が収蔵する文化財保護に関連する作品や資料について、展示履歴などの情報を参考にして作成した調査対象リストをもとに、デジタルカメラによる記録撮影やスキャニングによるデータ収集を行った。また、特集陳列の開催による研究成果の公開や、国内在の文化財保護の歴史に関わる事例の検討を実施した。

【年度実績概要】
1. 東京国立博物館所蔵の関係資料の調査
博物館の草創期より現在にいたる、文化財保護に関連する資料について、その収集と整理を継続して行った。本年度は、館史資料のほか、戦後まもなく始まった博物館ニュースなどの出版物などをスキャニングし、記事を検索することにより、これまで知られていなかった文化財保護のあり方を明らかにするなど、研究の進展をはかった。また、当館が、明治 5 年（1872）の創立・開館以来、制作あるいは購入した模写・模造のうち、平家納経の模写・模造および関係資料の撮影を行った。

2. 特集陳列の開催による資料の公開
本年度、特集陳列「博物館の創始者・蜷川式胤の文化財保護」2012 年 3 月 27 日 ～ 5 月 20 日 展示室 本館 16 室において、当館の創立時から 文化財保護活動に深く関わってきた蜷川式胤をとりあげた。蜷川式胤は、東寺の公人の家に生まれ、幕末に文化財の調査活動を行い、明治政府の制度局につとめた後、博物館の創立に関わった。蜷川が制作・寄贈した作品の中には、重文「壬申検査社寺宝物図集」や重文「旧江戸城写真帖」など、蜷川および博物館の文化財保護活動を示す資料が多く含まれている。


湯島聖堂博覧会関係者写真

3. これまでに調査研究などの交流を行っている韓国国立中央博物館より送付をうけた館史編纂や修復などの文献資料をもとに、韓国の文化財保護の現状やその歴史に関わる研究を行った。

【実績値】
特集陳列
「博物館の創始者・蜷川式胤の文化財保護」作品数 40 点 2012 年 3 月 27 日 ～ 5 月 20 日
調査件数　80 件、写真撮影点数　1,000 点、データ入力点数　400 点

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-10

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A

備考
　文化財に関連する資料について、従来の分類・整理法にもとづく調査項目などの再検討を行い、これからの時代に適合した情報の収集方針を明確にし、資料の分類項目を追加した。より発展性のある調査・研究としての成果が期待できるようになった。

2．定量的評価

観点	論文数等	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数		
判定	A	A	A	A		

備考
　博物館ニュースをはじめとする出版物などのデータ化を推進した。特集陳列「博物館の創始者・蜷川式胤の文化財保護」では40点の資料を公開し、解説入りのパンフレットを配布した。また韓国国立中央博物館における文化財保護関連資料など、多くの情報を収集できた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	昨年度に行った英国の博物館などの調査によって、国際的な視野に立って、日本の文化財保護の歴史をとらえ直すことの重要性を認識した。その結果、東京国立博物館の所蔵する文化財保護の歴史に関する情報の収集・整理のあり方を検討したことで、より継続性のある計画的な資料の収集・保存・研究を可能とする見通しにいたった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの博物館の国際交流の実績を反映して、韓国の文化財保護の歴史に関わる資料について検討を行った。来年度は、これらの研究成果をもとに意見交換などを実施し、国内外の博物館における文化財保護のあり方を総合的に把握できるように努めたいと考えている。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-11

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	11）占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究（科学研究費補助金）（(5)－①）

【事業概要】
本研究は、占領期（1945 年から 1952 年）の連合国軍最高指令官最高司令部（GHQ/SCAP）による歴史教育政策を調査し、国立博物館を中心に据えた歴史教育事業の成果とその意義について考察することを目的とする。占領期の教育研究の基盤となる CIE 文書を和訳しデータベースを構築し広く公開するとともに、文書の内容について調査研究を行う。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育講座室主任研究員　神辺知加

【スタッフ】
神辺知加（博物館教育課教育講座室主任研究員）

【主な成果】
本研究は、博物館関係文書データベース構築のための CIE 文書の調査を行った。文書検索は国立国会図書館が資料選別のため付けた分類記号（十進分類）及び分類記号ごとの文書目録（荒敬、内海愛子、林博史『国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書目録』全 11 巻）を手がかりに、本研究に該当する文書を探し出し、和訳を行い、データを蓄積した。

【年度実績概要】
１．昨年度和訳、データ化した国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書について、公開に向けて内容の正確さを高めるためリライトを重ねた。
２．新たな GHQ/SCAP 文書について、和訳とデータ化を行った。

【実績値】
国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書の和訳　リライト　200 件
国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書の和訳　データ化　30 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-11

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	B	A	

備考
本研究の基本資料となる国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書のデータベース公開に向けて、和訳の正確の向上を目指し、達成できた。

2．定量的評価

観点	リライト件数	データ化件数				
判定	A	A				

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、和訳の正確さを高めるのに時間を費やしたことで大変読みやすくなった。そのため次年度は、今年度蓄積したデータを分析し調査研究を進めることがスムーズにできる。また蓄積したデータはデータベースの公開を行う予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	今年度は、和訳のリライトをする必要があり、データベースの公開に至らなかった。来年度は速やかにデータベースを公開する予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-12
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12）宮廷工芸に関する物質文化的研究（科学研究費補助金）（(5) -①）		

【事業概要】
本研究は、日本の宮廷で用いられた建築・服飾・調度品などの工芸資料について、生活様式を反映する物質文化の見地から研究し、公家階層の生活様式に基づいた宮廷工芸の分類体系を構築するものである。本研究は、日本の公家階層が用いた宮廷工芸という特定事例を対象とするが、その成果は、歴史研究の物質文化的側面を深化させて、人間の生活感を反映する歴史の構築に資する工芸史研究の試論とすることを念頭におく。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課貸与特別観覧室主任研究員　猪熊兼樹

【スタッフ】
猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）

【主な成果】
本年度は、東京国立博物館、宮内庁書陵部、国立公文書館、葵祭行列保存会、北京故宮博物院を中心に調査し、その調査内容に分析と考察を加えたものを発表した。発表内容は次の通り。「日本宮廷生活文化的伝承　―以賀茂祭為中心―」（非物質文化遺産保護「東亜経験」国際学術研討会（平成 23 年 7 月 16 日　中国四川省 四川音楽学院綿陽芸術学院）、「清朝の礼制文化」（東京国立博物館特別展『北京故宮博物院 200 選』図録　平成 24 年 1 月 2 日）。

【年度実績概要】
１、東京国立博物館所蔵資料の調査
東京国立博物館が所蔵する大嘗祭を中心とする宮廷関係資料のデジタル撮影を行なった。
２、宮内庁書陵部所蔵資料の調査
宮内庁書陵部が所蔵する大嘗祭・賀茂祭・春日祭・石清水臨時祭・京都御所調度類を中心とする宮廷関係資料の複写を行なった。
３、国立公文書館所蔵史料の調査
国立公文書館が所蔵する大嘗祭・京都御所調度類・宮廷年中行事を中心とする宮廷関係資料の文献複写を行なった。
4、葵祭行列関係資料の調査
葵祭行列保存会に赴き、葵祭（賀茂祭）の儀礼作法および服飾調度類に関する画像および動画の記録を行なった。
以上 1～4 の成果は、「日本宮廷生活文化的伝承　―以賀茂祭為中心―」（非物質文化遺産保護「東亜経験」国際学術研討会（平成 23 年 7 月 16 日　中国四川省 四川音楽学院綿陽芸術学院）において発表した。
5、北京故宮博物院の調査
東京国立博物館特別展『北京故宮博物院 200 選』にかかる調査の知見を本プロジェクトに援用することで、研究内容に幅と深みを出した。その成果は、「清朝の礼制文化」（東京国立博物館特別展『北京故宮博物院 200 選』図録　平成 24 年 1 月 2 日）に執筆し、また平成 24 年 1 月 8 日に講演会を行なった。

【実績値】
調査回数　10 回
データ収集件数　画像 2,134 カット、動画 12GB 分
研究発表件数 2 件
論文掲載件数 1 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-12

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数	データ収集件数	研究発表件数	論文掲載件数		
判定	S	S	S	A		
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査回数を重ねながら収集したデータに基づき、研究発表を行なっているため。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	計画通りの調査を進行させるとともに、当初は計画外であった中国の宮廷文化についても視野におさめた研究が深まったため。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-13
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	13）日本近世実景図研究（(5) -①）

【事業概要】
東京国立博物館が所蔵する実景図を中心に、館外の実景図も視野に入れ、作品調査・実地調査・文献資料に基づき研究することにより、近世における実景表現の制作態度を明らかにする。日本絵画の実景表現を広く東アジアの中で捉えるため、中国絵画・朝鮮絵画も研究の対象とし、その影響関係を探る。特集陳列（平成 25 年度開催予定）としての公開として寄与できる研究を目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長　田沢裕賀

【スタッフ】
大橋美織（調査研究課絵画彫刻室任期付研究員）平成 23 年 9 月 30 日迄

【主な成果】
本年度は、東京国立博物館所蔵実景図作品を中心に検討・調査を行うとともに、館外の作品に関しても調査を依頼した。特に長崎・大分での調査に同行できたことは、本研究にとって大きな進歩となった。
本プロジェクト責任者であった大橋美織が 9 月末をもって静嘉堂文庫美術館へ異動したため、田沢裕賀がプロジェクトを引き継ぎ、スタッフである大橋とともに研究を継続させることとなった。

【年度実績概要】
◎　作品検討及び調査
東京国立博物館所蔵品のうち、特集陳列での公開意図に合った作品の選定及び調査を行った。
また、関連する作品について、館外作品の調査を行った。
特集陳列出品予定の画家・木下逸雲に関する研究プロジェクト（姫野順一氏・若木太一氏〈長崎大学〉、植松有希氏〈長崎歴史文化博物館〉）に参加し、本研究に有意義な指摘を受けた。
〔長崎・大分調査〕
・長崎歴史文化博物館
・大山寺、岳林寺、大超寺、広瀬資料館、咸宜園教育研究センター、個人宅
〔関西〕
・個人宅（兵庫）

谷文晁「公余探勝図巻」上巻のうち
（東京国立博物館蔵）

「真景図帖」のうち
（兵庫・個人蔵）

【実績値】
1．作品調査（館外）：2 回（兵庫、長崎・大分）
（館内の作品調査は、業務の合間に幾度にも渡って行ったため、正確な回数を出すことは難しい。）
2．実地調査、関連展覧会視察・情報収集：6 回（うち田原・台湾 各 2 回、長崎・大分 1 回、韓国 1 回）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-13

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
「東アジアの中での日本」という視点は、美術史研究の上でも近年特に活発化している。その視点を取り入れ、かつ実際の風景を描いた作品という一般の人にも馴染みやすいテーマで特集陳列を組むことが、本研究の特徴といえる。東京国立博物館所蔵品の中でも、今まで陳列されることのなかった実景図作品を公開し、その位置付けを『MUSEUM』等で報告することにより、近世絵画史研究へ寄与することができる事業となると考えている。

2．定量的評価

観点	作品調査	実地調査				
判定	A	B				

備考
今年度予定していた耶馬渓への調査を行うことができなかったため、実地調査はＢとした。
しかし、昨年度からの課題であった九州・関西での作品調査を行えたことは、本研究を大きく進捗させた。東京国立博物館所蔵品の作品調査と合わせ、今年度の主な予定であった基礎的な作品調査は、概ね実行することができたと考える。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業は、平成25年度特集陳列に向けての継続的な研究であり、今年度は主に前年度から引き続き基礎調査に比重を置くことを予定していた。そのため、館内の実景図作品の調査が順調に進んだことは望ましいことと考える。また、館外の作品調査に関しても、諸氏御協力のもと、多くの作品を拝見できたことは大きな収穫であった。 プロジェクト責任者であった大橋の異動に伴い、年度の後半に関して進捗がまま遅れたことは否めないが、異動先の作品を含め、今後より広範囲の作品を視野に入れた研究が期待できる。来年度はより計画性を持って調査研究にあたることが必要といえる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	途中、プロジェクト責任者の異動はあったものの、引き継ぎを行うことにより、今年度の予定はある程度順調に消化された。来年度は、今年度以上に計画的に予定を立て、平成25年度に成果の報告としての展覧会が開催できるよう準備を進める。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-14
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	14）古筆切紙背の史料学的研究（科学研究費助成金）（(5)－①）

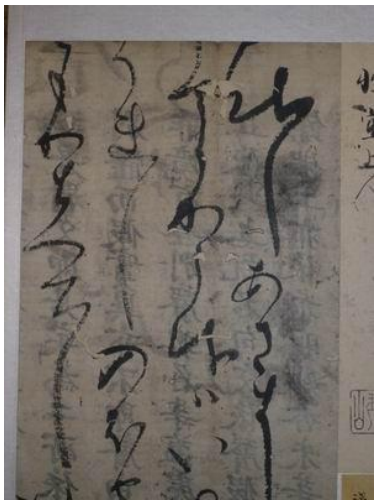
【事業概要】
筆切の紙背（裏面）には、典籍や記録の断簡が見られることがある。判読の困難という要因もあり、これまで学術的に注目されることがほとんどなかったが、デジタル画像処理技術の普及によって、紙背の内容を把握することが可能となってきた。この研究は、既知の手鑑等に収載されて伝わった希少な古筆切の中から紙背を持つものを集成し、その史料学的な評価と研究の方法を確立することを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　田良島　哲

【スタッフ】
田良島　哲（調査研究課長）、島谷弘幸（副館長）

【主な成果】
古筆切の紙背に文字等が記述されている事例を抽出し、形態及び判読によって内容を推測して、どのような典籍や文書が古筆切の紙背に出現するかを考察した。特に同一手鑑に貼り込まれた複数の消息切（書状）が、実は紙背に同じ典籍が書写されていることが判明し、特定の典籍を解体して、裏面に書かれた書状類を「古筆」として手鑑の各所に貼り込む場合があることを確認できた。

【年度実績概要】
＊九州国立博物館所蔵の古筆手鑑１件及び当館所蔵の古筆手鑑２件について、全丁の高精細画像撮影を行い、基礎的なデータを取得した。その中から紙背に記述のある資料を抽出した。
＊すでに刊行されている影印本等に掲載された古筆切資料の中から、紙背に記述のあるものを確認し、その内容について検討した。


本研究で確認した紙背のある消息切（書状の断簡）

【実績値】
画像作成：274 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-14

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
備考						

2．定量的評価

観点	画像作成件数					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	古筆切紙背に関する既存の情報の集約をおおむね行うことができた。また、館蔵品及び国立文化財機構内の施設が所蔵する手鑑の原品についても一部を調査することができ、成果を得た。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査の順序は前後するが、所期の情報収集は順調に進んでいる。次年度は外部の機関が所蔵する手鑑等の原品について、可能な限り実見の機会を得るように努めたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-15
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	15)近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究（科学研究費補助金）（(5)－①）

【事業概要】
本研究は、近現代に形成された古日本染織コレクションがいつ、どのような形態のものが、どのような経路で、どのような形状の変化を伴いながら移動し、コレクションとして集積されたのかを調査することによって、染織史研究の基盤となる古日本染織コレクションの形成過程を明らかにし、古日本染織が近現代に形成された美術史の中でどのように価値付けられたのかを明らかにする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室主任研究員　小山弓弦葉

【スタッフ】
小山弓弦葉(学芸研究部調査研究課工芸室主任研究員)

【主な成果】
本年度は、昨年度調査に引き続き、洋画家・岡田三郎助が蒐集した古染織（時代裂）コレクションの内、現在埼玉・遠山記念館に所蔵されている資料、および、ボストン美術館に所蔵されるビゲローの古日本染織コレクション、ロサンジェルス・カウンティ美術館に所蔵される在米個人コレクターが蒐集した江戸時代の日本の袈裟コレクション、建築家フランク・ロイド・ライトが蒐集した古日本染織裂コレクションを調査し、明治後期から大正初期にかけて国内外で蒐集された古日本染織コレクションのデータを集積し、その傾向等の分析を行った。

【年度実績概要】
本年度は、昨年度に引き続き、洋画家・岡田三郎助が蒐集した古染織（時代裂）コレクションの内、現在、埼玉・遠山記念館に所蔵される古染織コレクションを調査し、その画像付きデータベースをファイルメーカーで作成した。調査内容は、小裂のほとんどは画像がないため、新規撮影を行って画像で閲覧可能なデータの集積を目指した。また、データの集積の能率化をはかるため、遠山記念館より同コレクションの所蔵リストや目録を提供いただき、それらの基礎資料を元にリストをデータ化するとともに、コレクションの全容を調査しその形態や形態の変化、墨書やラベルといった記録を中心に調査を行った。

また、日本国内における古染織コレクションの主要を占める、岡田三郎助コレクション（遠山記念館・松坂屋所蔵）、野村正治郎コレクション（国立歴史民俗博物館所蔵）、吉川観方コレクション（奈良県立美術館・京都府京都文化博物館・福岡市博物館所蔵）とほぼ同時期に蒐集された海外のコレクターによる古日本染織コレクションの調査も、本年度から開始した。6 月にはボストン美術館に所蔵されるビゲローコレクションの内、能装束コレクションに関する情報収集を行った。また、平成 24 年 1 月には、ロサンジェルス・カウンティ美術館にある、個人染織コレクターが明治～大正期に蒐集した古日本染織コレクションの内、特にこれまでに公開されてこなかった江戸時代の袈裟のコレクション約 110 件の内 70 件あまりを調査し、写真を撮影して記録した。また、アリゾナ州スコッツデールにあるフランク・ロイド・ライト・アーカイブスにおいて、フランク・ロイド・ライトが蒐集した古日本染織コレクション 87 件を調査・写真撮影し、蒐集に関する資料を調査した。以上により、在米のコレクターが山中商会や古美術商・野村正治郎を通じて作品を購入したことが判明し、その時期や経緯についても明らかになりつつある。また、日本にある古日本染織コレクションとの関連性についても調査が可能となった。

以上の調査で得た写真および調査内容はファイルメーカーに画像と連動させて入力し、今後の研究の基盤となるデータとした。また、来年度以降調査を行う予定の旧吉川観方コレクション、旧長尾欣弥コレクション（旧鐘紡コレクション・文化庁および女子美術大学付属美術館所蔵）についても、関連図書に記載されるデータを元にファイルメーカーにデータを入力し、次年度以降の調査に備えた。

これらの調査結果から得られた研究成果の一部は、『「辻が花の誕生」―〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』（東京大学出版会）より本年度 3 月末に刊行した。

【実績値】
データ集積件数　1,810 件
内訳
ロサンジェルス・カウンティ美術館所蔵古日本染織コレクションデータ（調査データ入）　71 件
フランク・ロイド・ライト旧蔵古日本染織コレクションデータ（調査データ入）　87 件
岡田三郎助旧蔵古日本染織コレクションデータ（調査データ入）　216 件
吉川観方旧蔵古日本染織コレクションデータ（未調査分）　302 件
長尾欣弥旧蔵古染織コレクションデータ（未調査分）　1,134 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-15

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	データ集積件数					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、昨年に引き続き、近代に形成された古日本染織コレクションの主要な一つである岡田三郎助のコレクションと、在米の海外コレクターによって蒐集されたコレクションとを調査し、コレクションのデータを集積することによって、ほぼ同時期に形成された国内外における古日本染織コレクションの比較研究が可能となった。次年度以降も同様の手法によって、順次、近代コレクターの古日本染織コレクションのデータを集積し比較検討資料をさらに充実させたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	近代の日本人コレクターによって蒐集された主要なコレクションは、今回データを集積した岡田三郎助の他に、古美術商である野村正治郎、実業家・長尾欣弥、実業家・根津嘉一郎、日本画家・吉川観方などがあげられるが、次年度以降は、同様の手法によって、日本のコレクターによるコレクションの調査を進めたい。さらに、海外に流出し、蒐集されることになったコレクションの内、在米のコレクションの一部を調査したが、アメリカ国内にはまだ、これまで調査されていない古日本染織コレクションがある。それらの多くは山中商会や古美術商・野村正治郎によって売買されたと考えられるが、来年度は、アメリカだけではなくヨーロッパ方面についても調査を進め、より幅広い視野で古日本染織コレクションの形成過程を概観できるよう、情報の集積を図りたい。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-16

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	16）絵巻の＜伝来＞をめぐる総合的研究（科学研究費補助金）　（(5)－①）

【事業概要】
本研究は、絵巻の研究を従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉え直し、推進する。研究にあたっては、絵巻の伝来、鑑賞歴に関わる情報を収集・蓄積した上で、絵巻が今日に至るまでにどのような軌跡を経て伝世したのかという、各作品の通時的な歴史性に配慮し、絵巻という媒体全体を視野に入れた総合的な分析を行うことを最終的な目標として設定する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室研究員　土屋貴裕

【スタッフ】
土屋貴裕（調査研究課絵画・彫刻室研究員）

【主な成果】
本年度は、絵巻の伝来、鑑賞歴といった情報を収集するため、まず、古代中世の文献資料に記載された絵巻関係資料の抜き出しとデータ化を進めた。また、東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査に着手し、主に近世に制作された模本から作品所蔵情報を得る基盤を整えた。同時に、近代における作品の移動等に関する情報を収集するため、東京文化財研究所所蔵の売立目録の調査を開始し、そこに記載された情報のデータ化を進めた。

【年度実績概要】
①文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化
本研究が主な対象とする古代中世絵巻の伝来、鑑賞情報を得るためには、日記、古記録等の文献資料を博捜し、そこに記載された本文を整理する必要がある。抜き出しにあたっては、絵巻のみならず仏画、肖像画、屏風等、絵画関係の記事をピックアップし、本年度はおよそ 40 タイトルの文献資料から約 400 件の記事を抜き出し、データ化した。

②東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査準備
絵巻模本の多くは近世に作られたが、その制作に際して、所蔵者や伝来等の情報が記されている場合がままある。本研究では、東京国立博物館所蔵絵巻模本の悉皆調査を目指し、目録の整理、撮影、所蔵者や伝来、模写者等の情報を収集すべく、模本リストの整理に着手した。

③売立目録の調査
①と②が前近代における絵巻情報の収集と整理であるのに対し、近代における作品の移動等を追うため、売立目録に記載された絵巻の調査を進めた。とりわけ、東京文化財研究所には国内有数の売立目録が所蔵されており、その全てから、絵巻を中心とするやまと絵の情報を抜き出し、ＰＤＦ化を進める準備を整えた。本年度は 150 件ほどの目録から 110 点の情報を抜き出した。

【実績値】
絵巻伝来関係資料の抜き出し（未データ化含む）　約 500 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-16

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	関係資料の抜き出し					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化、売立目録の調査という、本研究推進にあたっての基礎作業を着実に進めることが出来た。また、絵巻模本の悉皆調査に先んずる事前の整理・調査も効率的に行うことができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は絵巻の研究を作品のみならず、その付帯情報から総合的にとらえるべく進めてきたが、研究開始当初の計画に沿ったデータ収集を行うことができた。また、絵巻模本の調査もリストはおおむね整理することができたため、次年度以降、リストと作品との照合、撮影に取り組む。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-17

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	17）狩野晴川院養信による寺社宝物摸本の基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-①）

【事業概要】
本研究は、東京国立博物館（以下、東博）が所蔵する木挽町（こびきちょう）狩野家伝来の模本類（下絵、地取など含む）のうち、寺社の宝物を模写した全資料の基礎的調査を実施し、江戸時代後期の木挽町狩野家当主・晴川院養信（せいせんいんおさのぶ）とその弟子達の活動を明確にすることを目的とする。さらにこれに関連して、木挽町狩野家伝来模本類を含む東博所蔵の全模本、下絵、スケッチ等資料のデータベースを制作・公開する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課アソシエイトフェロー　安藤香織

【スタッフ】
安藤香織（列品管理課アソシエイトフェロー）

【主な成果】
本年度は東博が所蔵する木挽町狩野家伝来の模本類について研究を進めるにあたり、基礎的な情報収集と整理を実施した。具体的には、資料分類Ｐ（歴史資料）と資料分類Ａ（絵画）に属する膨大な資料類から、木挽町狩野家伝来の模本類を特定する作業をし、かつ寺社宝物の模本と判明した資料について撮影を実施した。また木挽町狩野家伝来模本類を含む東博所蔵の資料類データベース公開に向け、情報処理とシステムのアレンジを進めた。

【年度実績概要】
1、養信一門による寺社宝物模本の特定、撮影
木挽町狩野家伝来の模本類は、歴史資料分野（東博資料分類Ｐ）と絵画分野（同Ａ）とに属している。このうち歴史資料分野に属するものについては、目録の情報などをもとに、木挽町狩野家伝来の寺社宝物模本を特定し、デジタル撮影を実施した。また、絵画分野に属する模本類約 7,500 件（約 11,110 点）に関しては、木挽町狩野家伝来のものと明治以降に制作された模本類とが混在しているため、調査と情報整理を進め、各模本に記された模写者名や模写年月日などの文字情報と、受入（購入）時の台帳の情報などの分析により、木挽町狩野家伝来の模本類を特定する作業を実施した。以上により寺社宝物模本と判明したものについては、必要に応じてデジタル撮影を行った。デジタル撮影は撮影協力者１名に依頼した。以上の特定作業と撮影は、半数以上を終了した。

2、データベース作成に付随する諸準備
東博所蔵の模本類（模本、下絵、地取など資料）のデータベース公開に向けては、協力者１名を頼み、データ整理を進めた。それと同時に、博物館情報課各位からのアドバイスも参考にしつつ、一般用にも研究用にも利用できるデータベースを目指して、より良いシステムを検討しつつ、既存のシステムのアレンジを進めた。また、木挽町狩野家の活動全体を明らかにしたいという本研究の目的を考えると、資料の側からだけでなく、制作者からも検索できることが望ましいため、制作者名の一覧も作成しているところである。そのためには各模本に記された模写者名を集め、同一人物を統合し整理する必要があり、数百人分のデータ整理をしなくてはならないが、現段階では約半数を終えたところである。データベースは来年度の公開であるが、本年度中に小規模なデータ量でテスト運用をし、実際の使用に向けて改善点の洗い出しをした。

撮影画像のうち、P-2213 紋錦旗模抜写

【実績値】
調査・撮影日数：５日
撮影件数：15 件
撮影カット数：122 カット

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-17

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	B	B

備考

東京国立博物館が所蔵する模本等の資料には貴重なものが多く、これらの基礎的研究と情報の公開は、江戸時代から明治時代まで、幅広い時代の絵画史研究に役立つことが見込まれるため、適時性および発展性はＡとした。また、作業協力者に撮影やデータ整理、システムのアレンジ等を依頼しており、効率よく作業を進められているため、効率性はＡとした。この他の項目については、現段階では研究途中であり評価し難いが、本年度中の作業目標は達成されているためＢとした。

2．定量的評価

観点	調査・撮影日数	撮影件数	撮影カット数			
判定	B	A	A			

備考

最低限の撮影日数は確保できたため、本年度分の撮影件数は十分達成された。撮影カット数は撮影件数に対して妥当な量である。データベース用のデータ量はかなり多いが、作業協力者によってデータ整理が行われ、本年度中の成果としては十分なものが得られた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	木挽町狩野家に伝来した寺社宝物の模本の研究に関わる資料の調査・撮影のうち、半数強を終えた。データベースについてもデータ整理やシステムのアレンジなど準備を進めることが出来た。以上の作業については、今年度分を順調に完了したと思われる。次年度は撮影やデータ整理等の作業を引き続き実施した上で、これらを調査報告としてまとめ、データベースを公開する。より一層充実した研究とすべく、効率的に実施していきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の達成までに必要な作業工程のうち、本年度分は順調に完了した。次年度は本年度の成果を基盤として研究を進め、成果を社会に還元できるよう努めたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-18

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	18)黒耀石の獲得と消費からみた完新世初期人類社会の形成過程(学術研究助成基金助成金)((5)－①)

【事業概要】
本研究では、更新世末から完新世初期における社会の複雑化の過程を考察するために、日本列島中央部地域を対象として、人類の資源開発行動に関するモデルを構築する。本研究の特色は当時の主要な資源の一つである黒耀石に着目し、原産地の開発の様相と消費地での分布状況とを総合的に理解するための枠組みを構築できる点にある。特に、東京国立博物館所蔵の長野県諏訪湖底曽根遺跡採集の資料等を対象に基礎研究を実施し、その成果を公開する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課アソシエイトフェロー　及川　穣

【スタッフ】
及川　穣（列品管理課アソシエイトフェロー）

【主な成果】
今年度は主に、東京国立博物館所蔵の長野県諏訪湖底曽根遺跡採集の資料を中心に基礎研究を実施した。分析項目は、写真撮影、石材判別、器種分類、形態分類、法量計測、黒耀石製石器の蛍光Ｘ線分析装置（EDXRF）による元素組成測定。
その他の資料調査については、東京大学大学院情報学環社会情報研究資料センター所蔵の坪井家資料、大分県九重町二日市洞穴、長野県下諏訪町和田峠原産地周辺遺跡、静岡県伊東市柏峠原産地周辺遺跡の資料調査を実施した。

【年度実績概要】
東京国立博物館所蔵の諏訪湖底曽根遺跡採集石器全点（110 点）について、写真撮影と石材判別、器種分類、形態分類、法量計測の基礎データ整理を完了した。さらに、黒耀石製石器と黒曜石原石 52 点について東京国立博物館学芸研究部保存修復課の蛍光Ｘ線分析装置（EDXRF）を稼働して元素組成を測定し、産地推定のためのバックデータを完成させた。
東京国立博物館特集陳列「石に魅せられた先史時代の人びと」（平成 23 年８月２日～10 月 31 日）において、館所蔵の長野県諏訪湖底曽根遺跡採集資料を中心にその研究成果を公開した。また、展示に利用した 3D 閲覧技術による石器製作過程の理解と可視化の方法について研究発表をおこなった。さらに黒曜石原産地開発にかかわる研究論文を執筆した。
及川　穣　平成 23 年８月１日「石器に込められた太古の想い　特集陳列「石に魅せられた先史時代の人びと」」『東京国立博物館ニュース』第 708 号　東京国立博物館　p9、井上洋一・品川欣也・及川　穣・河内晋平・森田正彦　平成 23 年８月２日『特集陳列　石に魅せられた先史時代の人びと』（展示リーフレット）　東京国立博物館　全４頁、Oyokawa Minoru, Kawachi Shinpei, Morita Masahiko, Kosuge Masao, Shinagawa Yoshiya, Inoue Yoichi, Yokoyama Shin, Chiba Fumito 2011.11.27 “Media Art and Archaeology: Special attention on how to understand the technique of lithic reduction sequences from stereoscopic 3D” The 4th Annual Meeting of the Asian Palaeolithic Association : National Museum of Nature and Science, Tokyo p117、及川　穣　平成 24 年３月 31 日「黒耀石地下採掘活動の起源と縄文文化の形成過程」『リバティアカデミーブックレット　明治大学黒曜石研究センター公開講座　黒曜石をめぐるヒトと資源利用』明治大学リバティ・アカデミー　p37-44、及川　穣　平成 24 年３月 31 日「旧石器時代後半期における黒耀石原産地開発の一様相―杉久保型ナイフ形石器の製作技術と和田群黒耀石の獲得と消費―」『資源環境と人類』第２号　明治大学黒耀石研究センター　p15-35。

【実績値】
基礎データ整理件数　110 点
蛍光Ｘ線分析件数　52 点
研究発表　１回
論文等本数　４本（論文発表１本、一般向け普及書１本、博物館ニュース（展示案内）１本、展示リーフレット１本）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-18

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

東京国立博物館所蔵の考古資料は、研究史的に重要な資料が多い。しかし、これまで先史時代の列品のうち石器資料については目録等の刊行は無く、その基礎研究と公開は十分でない。そのため本研究で基礎研究を実施し、その成果を刊行物や展示により公開していくことは重要であると考えられ、独自性はＡとした。特に今年度は、東京国立博物館特集陳列による成果公開を実施できたため、適時性と発展性はＡとした。また、作業協力者にデータ整理等を依頼しており効率良く作業を進められているため、効率性はＡとした。継続性と正確性については今年度の作業目標は達成されているため、Ａとした。

2．定量的評価

観点	基礎データ整理件数	蛍光Ｘ線分析件数	研究発表回数	論文等本数		
判定	A	A	A	A		

備考

基礎データ整理件数と、蛍光Ｘ線分析装置（EDXRF）による元素組成の測定件数について、今年度の作業目標を達成している。蛍光Ｘ線分析は、産地推定のためのバックデータを完成させた。
研究発表回数と論文等本数も十分に目標値を達成した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館所蔵の長野県諏訪湖底曽根遺跡採集資料の基礎研究と、その他の資料調査、さらに展示や研究発表、論文執筆による成果公開など、計画通り実施できている。次年度には、諏訪湖底曽根遺跡採集石器全点（110 点）の図化作業と、黒耀石製石器の残りの 48 点について蛍光Ｘ線分析装置（EDXRF）による元素組成の測定を実施し、基礎研究を完了することができる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	基礎研究と資料調査、さらに展示や研究発表、論文執筆による成果公開など、計画通り実施されており、当該年度計画を 100％達成している。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-19

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	19）東京国立博物館所蔵国際交流史料データベース（科学研究費補助金・研究成果公開促進費）（(5) －①）

【事業概要】

東京国立博物館が所蔵する日本書跡、和書、などの異なる分野に分類された明治時代までの 1,000 点余りにのぼる文献史料の書誌情報、史料解題、全撮影された史料の高精細画像データからなるデータベースを構築し、東京国立博物館 Web ページ上のリンクである「東京国立博物館情報アーカイブ」(http://webarchives.tnm.jp/archives/での公開を目的とする研究。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡･歴史室主任研究員　髙梨　真行

【スタッフ】

髙梨真行(調査研究課書跡・歴史室主任研究員)、三輪紫都香(学芸研究部列品管理課登録室アソシエイトフェロー)

【主な成果】

当館所蔵の史料の内、平安時代後期に活躍した天台僧円珍の入唐中に中国・唐の地方役所と円珍自身や大宰府などの官衙との間で取り交わした文書と、江戸時代の江戸幕府と朝鮮王朝間の外交である朝鮮通信使や琉球王府の接待に関する記録類や書契について調査・研究を実施し、研究成果を解題としてまとめ、史料の全撮影を実施して、解題・書誌データ・史料撮影画像を当館の Web ページ上の「東京国立博物館情報アーカイブ」(http://webarchives.tnm.jp/archives/で公開した。

【年度実績概要】

当館の書跡および和書に分類される列品の内、東京国立博物館が所蔵する日本書跡、和書、歴史資料などの異なる分野に分類された明治時代までの 1,000 点余りにのぼる中国・朝鮮半島と日本との関係の変遷を跡付けられる文献史料の画像を中心とするデータベースを作成した。

〈対象〉[書跡]B-2405 国宝　円珍関係文書の内から、円珍贈法印大和尚位並智証大師諡号勅書、充内供奉治部省牒、円珍戒牒、大宰府公験、福州公験、台州温州公験、大宰府公験、大友氏屈請、円珍自筆書状、B-1751～B-1753 朝鮮人来聘覚書、B-1788 朝鮮聘使来朝覚書、B-1789 琉球使参府覚書、[和書]QA-1471 朝鮮信使来聘記録、QB-1248-01 朝鮮国関係諸記録、QB-3299 朝鮮信使記録

〈対象史料の書誌・歴史的考察〉

上記史料について調査内容に基づき解題を作成した。

B-2405 台州温州公験(国宝　円珍関係文書の内)

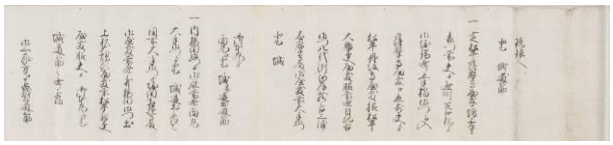
〈調査の実施〉

データベースに掲載する項目についての調査を行った。

平成 23 年 4 月 27 日(水)に史料選定調査を、6 月 1 日(水)、12 日(日)、9 月 14 日(水)にデータベース公開項目についてデータ採取調査を実施した。

〈調査項目〉

史料名称、記載内容、法量計測、料紙材質、制作年代推定、表装形態の検討、史料解題、備考



B-1789 琉球使参府覚書

〈史料撮影の実施〉

平成 23 年 5 月 1 日(日)、8 日(日)、18 日(水)、22 日(日)、25 日(水)、6 月 12 日(日)、15 日(水)、26 日(日)、8 月 17 日(水)、19 日(金)、21 日(日)、11 月 9 日(水)、20 日(日)、平成 24 年 1 月 18 日(水)に上記対象史料の全撮影を実施した。

【実績値】

調査日数:4 日間

撮影日数:14 日間

調査史料件数　7 件　　B-2405 国宝　円珍関係文書(9 巻)、B-1751～B-1753 朝鮮人来聘覚書(3 巻)、 B-1788 朝鮮聘使来朝覚書(9 通)、B-1789 琉球使参府覚書(6 通)、 QA-1471 朝鮮信使来聘記録(1 冊)、QB-1248 朝鮮国関係諸記録(3 冊)、QB-3299 朝鮮信使記録(8 冊)　計 12 巻、15 通、12 冊

撮影カット総数:674 カット、データ量総計　約 1,800MB

解題テキスト数　約 4,000 文字分

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-19

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	B	B	A	A

備考
東アジア文化圏と歴史研究の現況を考えた場合、中国、朝鮮半島、東南アジアそして日本は時代的変遷を通じて多様な交流を行ってきた歴史を持つ。その歴史を研究する上で、環太平洋または東アジアというマクロな視点による共通の文化で包括した東アジア文化圏という概念が現在研究の中核となりつつある。また最近では「朝鮮王朝儀軌」の返還を巡る日韓外交上での時事問題など国内外の耳目を集めている。いわばそうした世界的なニーズに対応した、当該研究は一定の意義と評価を得られるものと判断される。

2．定量的評価

観点	調査日数	撮影日数	調査件数	撮影数	データ量	テキスト数
判定	B	A	A	A	A	B

備考
収蔵品より、書跡、和書（江戸期の刊本・冊子装）分類されている資料を抽出し、1 件（収蔵品単位）ごとに史料の全撮影を行ったことにより、各国所有史料の総合的分析と検討が必須とされる東アジア圏における歴史研究での史料公開促進につながったと考える。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は平安時代中期に中国・唐に渡って活躍し、帰国後我が国の天台宗の発展に寄与した円珍に関する入唐中の文書と江戸時代に日本と朝鮮との間で行われた朝鮮通信使に関係する史料や同じく江戸幕府と琉球王府との交流を示す文献を中心に公開を進めてきたが、この他にも当館館蔵品でこうした東アジア間外交に関連する史料の全貌が明らかになってきた。レベルの高まりつつある当該研究のニーズに対し、現体制での研究推進ではどうしても定量的な継続に限界があるため、次年度以降は一定度の研究水準を維持しながらも、研究成果として公開されるデータベースのレコード数の実績拡大に向けて方策を検討していく必要を感じた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	特に昨今の日中・日韓外交の進展に伴い、国内に所蔵される中国・韓国関係の文献史料に対する国内外の注目の高まりに対し、本データベースの公開はその流れに対応した事業で、史料閲覧による研究機会の均等を図り、東アジア文化圏での国際交流史研究への基盤を提供し得たものと考える。特に高精細画像のデータベースをインターネットで公開することにより、史料を利用した学際的な研究発展のための基盤整備を果たしたと判断される。その結果、国立博物館として世界に収蔵品の情報を発信し続けるという使命は本研究によっては一程度果しえたと考える。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-20

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	20）諸先学の作品調書・画像資料類の保存と活用のための研究・開発（科学研究費補助金）（(5)－①）

【事業概要】
本研究では、諸先学による美術作品の調書・画像資料等の保存と活用のための研究・開発をめざす。その過程で、先行研究者が何に関心をもち、作品にどのように向かい合ったのかについての傾向について調査を行い、解明を目指す。加えて、対象となった作品そのものの情報(調書類・経年変化・修理・研究・展覧会などの情報)の蓄積・充実をはかり、公開・利用の手法開発を行う。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室研究員　土屋貴裕

【スタッフ】
土屋貴裕（調査研究課絵画・彫刻室研究員）

【主な成果】
本年度は、日本の絵巻研究の第一人者である梅津次郎氏の自筆調書類、紙焼き写真類、研究資料類等の調査・研究を行なった。東京文化財研究所は梅津次郎氏の没後、1988 年と 2008 年の 2 度にわたり、氏のご遺族より研究資料の寄贈を受けたが、そのうち、本年度は 35 ㎜フィルムを中心とした画像資料の整理を進めた。前年度までにフィルムコンタクトシートの大半のスキャニングを終えたが、本年度は全フィルムのスキャニングを終え、さらに各フィルムを 1 コマずつ分割し、作品情報を付与した。モノクロの画像ながら現在は所在不明な作品も含まれ、今後、研究資料としての活用が大いに期待される。

【年度実績概要】
①35 ㎜フィルム等のスキャニング
梅津氏が研究資料として撮影した 35 ㎜フィルム、6×6 フィルム等の焼き付けコンタクトシートのスキャニングを終えた（約 600 シート）。また、フィルムを各カットごとに分割し、今後の利活用にそなえた（約 1 万カット分）。

②撮影作品リストの作成
各カットに分割した画像に対し、フィルム包材に記された作品名、所蔵者情報などをともに作品を同定し、棒目録を作成した。その際、梅津氏の自筆調書、日記等の検討もあわせて行なった。

③資料の公開へ向けた準備
各作品には現蔵者の明らかなもの、不明なもの、あるいは梅津氏調査時とは所蔵者が異なっている場合などがある。そのため、各画像を検討し、可能な限り現所蔵者情報を盛り込むべく、関連資料から検討を進めた。

【実績値】
梅津次郎氏蒐集 35 ㎜フィルム等のスキャニング　約 1 万カット

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-20

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	フィルム等のスキャニング					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	梅津次郎氏の自筆調書類、紙焼き写真類、研究資料類等の調査・研究を進めるにあたっては、梅津氏撮影の写真資料の整理が重要な一角を占める。本年度はその整理をほぼ終えることができたことは特筆される。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の全体スケジュールのうち、梅津氏資料の整理の大半は終えることができた。次年度以降はこれらの資料を有機的に結び付け、その公開に向けた研究開発を進めていくよう努めたい。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-21

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	21）絵巻に描かれた「場」と「もの」に見る中世日本の重層的世界観に関する研究（科学研究費補助金）　((5)－①)

【事業概要】
本研究では、中世の人々の日常生活、労働、信仰、行事、儀礼、合戦の他、異国や異域、神仏化現の舞台となる「場」（型）を抽出・収集し、そこに描かれた建築や環境、多様な「もの」に、身分差や階層差がどのように描き分けられ、関連付けられているかを具体的に検証し、作品研究の深化と、物語絵画、とりわけ絵巻という媒体の歴史的特性を明らかにする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室研究員　土屋貴裕

【スタッフ】
土屋貴裕（調査研究課絵画・彫刻室研究員）

【主な成果】
本研究では中世絵巻に描かれた多様な「場」を「型」として捉え横断的に検討する。特に分担者は、異国（唐・天竺・蝦夷など）や異域（地獄・極楽・竜宮など）、そして神仏化現の舞台となる架空の「場」を構成する建築や環境、そしてそこで用いられる「もの」が、どのように「本朝」のそれと描き分けられ、関連付けられているのか、描かれた「場」の抽出・収集と分析をおこなった。今年度は特に「聖徳太子絵伝」、「清水寺縁起絵」の検討を進めた。

【年度実績概要】

①「聖徳太子絵伝」の研究
聖徳太子の伝記の中で、太子十歳条、敏達天皇十年に蝦夷鎮撫の説話が見えるが、この事跡は多くの聖徳太子絵伝でも描かれている。法隆寺献納宝物本、法隆寺献納宝物四幅本（嘉元 3 年、上野法橋・但馬房筆。いずれも当館蔵）、個人蔵本（当館寄託）、メトロポリタン美術館本などに描かれた「蝦夷」の図像の抽出と、そのイメージソースについて検討を進めた。

②「清水寺縁起絵」の研究
当館所蔵、全三巻「清水寺縁起絵」（土佐光信筆、永正 14 年。当館蔵）の調査を行ない、に描かれた「蝦夷」の姿、および表象の中の「異界」としての「蝦夷」の地について、関連作品とともに比較検討を進めた。

【実績値】
調査撮影件数　約 1,000 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-21

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	調査撮影件数					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本中世の異国や異界の表象分析を進める中で、中世を通じて描き継がれた「聖徳太子絵伝」、中世後期の絵所において描かれた「清水寺縁起絵巻」は重要な作例とみなしうる。その撮影をともなう調査をまずは終えた。これらをもとに、次年度は関連作品の調査研究へと、その研究対象を広げていく基盤を整えることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究期間三年のうちの二年目に当たる本年度は、対象とする研究課題のコアとなる作品の基礎調査と分析を効果的に進めることができた。最終年度の成果提示に向けて、さらなる調査研究を進めたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-22

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	22）草創期の磁器における『和様化』の背景について　（メトロポリタン東洋美術研究センター研究助成金）（(5)－①）

【事業概要】
本研究では、17 世紀前半頃までの草創期の磁器の周縁に着目し、①国内で初めての磁器づくりに及ぼされた国外からの影響を朝鮮、中国のみならず広くアジア全体の交流史のなかに位置づけ、②国内における磁器の受容と、「和様化」と呼ばれる独自性が確立されていく背景について、やきものと関わりの深い茶の湯を中心に据え、茶陶の調査・研究を実施する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室研究員　横山梓

【スタッフ】
横山梓（学芸企画部企画課特別展室研究員）

【主な成果】
初期伊万里作品を中心として、館内収蔵品および他機関（九州陶磁文化館、九州国立博物館、大和文華館）の収蔵品の熟覧調査を実施。九州では、大川内、高取の窯跡を訪問し伊万里焼周縁について見知を深め、研究分析を進めた。

【年度実績概要】
1．館内収蔵品の調査
G-5854　瑠璃地染付蓮図指　ほか
※G-5854 については、東京国立博物館研究誌「MUSEUM　№632」（平成 23 年 6 月刊）に資料紹介論文を掲載
2．他機関における熟覧調査
平成 24 年 2 月　九州陶磁文化館　　染付山水文水指（佐賀重要文化財）　ほか
　　九州国立博物館　　初期伊万里染付草花文大鉢　ほか
平成 24 年 3 月　大和文華館　　染付唐草文水指　ほか
水指など茶陶にかかる初期伊万里作品を中心に、唐津、古染付など関連する作品について熟覧調査を実施。
3．窯跡等現地見学
大川内鍋島藩窯公園、高取永満寺宅間窯跡、内ヶ磯窯跡
4．研究分析
熟覧調査の結果をふまえ、研究論文としてまとめるため執筆準備を進めている。

九州陶磁文化館蔵

大和文華館蔵

【実績値】
調査作品件数　約 30 件
調査作品の撮影件数　約 150 枚
研究論文　1 本

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-22

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	B	
備考						

2．定量的評価

観点	調査作品件数	調査作品の撮影件数	研究論文			
判定	B	A	B			
備考 年度内に新たな論文をまとめられるだけの作品調査件数には、少し足りない面があった。						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究助成金は23年度限りのものであるが、来年度以降も継続して調査、研究分析を実施していくことにより成果をまとめられるものと考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	採択と研究費の執行が遅れたことから、プロジェクトへの着手も当初予定より後倒しとなり、計画の一部を変更することとなった。23年度限りの助成金ではあるが、研究を継続的に進めて行くことで達成に至るものと考える。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-23

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	23）古筆切の発生とその鑑賞に関する基礎的研究（メトロポリタン東洋美術研究センター東洋美術研究振興基金）（(5)－①）

【事業概要】
本研究は、古筆切（平安時代から鎌倉時代の間に書写された和歌、漢詩、物語等の断簡）の成立、その受容と鑑賞がいつどのように行われていたかを明らかにすることを目的とし、そのための基礎的データを収集する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー 恵美　千鶴子

【スタッフ】
恵美千鶴子（調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー）

【主な成果】
古筆切の本紙および附属の鑑定札に関する総合的なデータを収集した。あわせて、日記類などから古筆切に関連する記述を抜き出し、データ化を進めた。一部、東京国立博物館所蔵作品の鑑賞の歴史を示す資料を調査し、研究分析を進めた。

【年度実績概要】
１、古筆切に附属する鑑定札の撮影
主に東京国立博物館所蔵作品を中心に、古筆切に付属する江戸時代から明治時代にかけて作成された鑑定札の撮影を行った。鑑定札の筆者を特定するためにも、原寸複製できるような撮影を実施した。
また、その撮影データを、古筆切本体のデータに関連づけて整理した。
2、古筆切の鑑賞に関するデータの収集
古筆切の鑑賞を示すような、歴史的資料の収集を行った。
（例：『権記』、『実隆公記』、『隔蓂記』、『大正茶道記』、『茶道漫録』など）
さらに、それらの資料のうち、古筆切の鑑賞に関連する箇所の抜き出し、データ化を進めた。
3、他機関への調査
古筆切の鑑賞の歴史を調査するために、京都・今日庵文庫への出張調査を実施した。
調査内容については、データ入力を進めた。
4、研究分析
古筆切の鑑賞に関する資料の収集により、東京国立博物館所蔵作品の鑑賞に関する研究分析を進めた。研究論文として発表すべく、執筆を進めている。

鑑定札の撮影

【実績値】
・鑑定札の撮影件数 約 50 件
・鑑賞に関する資料の収集件数　約 15 件
・鑑賞に関する資料のデータ入力　約 30 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4511-23

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
本研究については、本年度始めたばかりであり、今後も継続していくことを予定している。東京国立博物館が所蔵する古筆切に付属する鑑定札のデータ化という点については、オリジナリティが高いと認識している。また鑑定札の撮影に関しては、通常の業務に合わせて行うことができるため、効率性も高いと言える。

2．定量的評価

観点	撮影件数	資料の収集件数	資料のデータ入力件数			
判定	A	B	B			

備考
古筆切に付属する鑑定札の撮影については、効率よく進めることができ、撮影件数も充分であったと言える。資料の収集やそのデータ化については、もう少し増やしたかった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本助成金による調査は、通常の業務に合わせて遂行することで、効率性も上がり、データの収集に関して成果を残すことができた。データをさらに収集して、データ公開について検討をするとともに、分析研究の成果を刊行物などで公開していく方針である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究助成金は本年度限りのものであるが、調査の方法を確立し、効率的に進めることができるために、次年度以降も継続可能なものとなった。別の補助金などもあわせながら、継続して調査を進めることを計画している。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-1

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)訓点資料としての典籍に関する調査研究（科学研究費補助金）（(5)－①）

【事業概要】

訓点資料のうち、中国・元時代、至元 28 年（1291）の「紺紙金銀字華厳経」4 帖の見返し及び本文に付された角点に関する調査研究を実施した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　赤尾栄慶

【スタッフ】

〈当館研究者〉赤尾栄慶（上席研究員）、羽田　聡（研究員）

〈客員研究員〉宇都宮啓吾（学芸部・客員研究員）

【主な成果】

中国・元時代、至元 28 年（1291）の「紺紙金銀字華厳経」4 帖の見返し及び本文を詳しく調査した結果、見返し絵の下書きとして角筆を用いた痕跡を確認し、本文にも角筆でつけた角点の存在を確認した。従来から、角点については、加点時期が特定できる資料が少ないだけに大変、重要な発見となった。

【年度実績概要】

中国・元時代、至元 28 年（1291）の「紺紙金銀字華厳経」4 帖の見返し及び本文を詳しく調査した結果、見返し絵の下書きとして角筆を用いた痕跡や角筆でつけた角点の存在を本文の箇所でも確認した。従来から、漢字文化圏の古写経に付された角点については、その加点時期が特定できる資料が非常に少ないことから、この発見は、大変、重要なものとなった。

この成果の一部は、作品研究「元時代・至元二十八年の華厳経―角筆の使用を確認―」（『学叢』33 号）というかたちで報告をし、今後は日中韓という漢字文化圏相互の関連についての検討が必要となっている。

また、韓国の口訣学会の研究者とは、7月と2月の2回にわたって交流を行い、意見交換を行った。

【実績値】

○調査　　10 回

○国際交流　2 回（7 月、2 月）

○報告執筆　1 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
古写経の訓点に関して、日本・韓半島・中国という漢字文化圏を視野に入れた研究は、非常に有益であり、本文のみならず、見返し絵の下絵に関する調査も、当館の客員研究員にふさわしい成果である。

2．定量的評価

観点	調査	国際交流	報告			
判定	A	A	A			

備考
基本的に毎月１回の調査日を設定し、調査及び意見交換会を実施している。
韓国の口訣学会の研究者と２回にわたる意見交換を行った。
成果の一部は、作品研究「元時代・至元二十八年の華厳経―角筆の使用を確認―」（『学叢』33 号）というかたちで報告をした。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	書写年代が明らかな中国の古写経に付された角筆点を発見したことは、非常に重要であり、訓点語学会を中心とした研究者から注目を集めている。韓国・口訣学会との交流をさらに深めていく必要がある。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	館蔵品を中心とした訓点資料を順次、調査し、日本・韓半島・中国という漢字文化圏を視野に入れた研究へと発展し、着実に成果を挙げている。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-2
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)彫刻に関する調査研究（科学研究費補助金）　((5)-①)

【事業概要】
京都国立博物館に保管および寄託される仏像を中心とした彫刻作品の調査、研究。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員　淺湫　毅

【スタッフ】
井上一稔（客員研究員）

【主な成果】
特別展覧会「細川家の至宝」展を担当した。
特別展覧会「法然」「細川家の至宝」展への出陳作品について調査研究をおこない、それらの成果を会場解説および講座、セミナー等で公表した。

【年度実績概要】
・京都国立博物館が保管、あるいは当館が社寺より寄託を受けている彫刻作品の調査および写真資料の収集を、新たに行なった。
・社寺、個人宅など、館外に所在する彫刻作品の調査・撮影を行なった。
・特別展覧会「法然」展において、作品輸送、展示および会場解説執筆を行なった。
・特別展観「百獣の楽園」展において展示および図録、会場解説の執筆を行なった。
・特別展覧会「細川家の至宝」展の主担当者として、作品選定をはじめとする展覧会業務全般を行なった。
・下記の科研による調査に研究分担者ないしは研究協力者として参加し、調査研究を行なうとともに、それぞれに関し成果を公表した。
①南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究
（研究分担者）研究代表者：大阪大学　肥塚隆
ミャンマーにおいて現地調査をおこなうとともに、東南アジア彫刻史研究会において「ピュー時代およびパガン時代の彫刻編年について」と題して口頭発表を行なった。
②科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究（研究協力者）　研究代表者：大阪大学　藤岡穣
韓国において現地調査をおこなうとともに大阪大学主催の「国際シンポジウム　半跏思惟像はどこで作られたか」においてシンポジウム司会を行なった。
③出雲鰐淵寺の総合的研究（研究協力者）　研究代表者：島根大学　井上寛司
「観音の聖地から天台寺院へ」と題し島根大学山陰研究センターにおいて講演を行なった。
また本研究は研究最終年度にあたるため調査報告書を執筆した。
・メトロポリタン東洋美術研究センターより「仏師清水隆慶の研究」というテーマのもと研究助成をうけ、調査研究を行なった。この成果は平成 24 年 5 月に発行予定の『学叢』34 号に発表予定である。
・京都国立博物館による社寺調査の一環として、南山城地域の海住山寺、笠置寺、一休寺、蟹満寺、神童寺において彫刻作品の調査を行なった。これらは平成 26 年に開催予定の展覧会において公表する予定である。

【実績値】
展覧会図録：16 件
会場解説：36 件
口頭発表：2 件
講座：7 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　彫刻作品の調査の成果を、特別展覧会の作品展示および、図録、解説等により公開できた。また、次年度以降の展観事業の準備として継続的に調査・研究を行っている。

2．定量的評価

観点	展覧会図録	会場解説	口頭発表	講座		
判定	A	A	A	S		

備考
　科研その他で、彫刻作品に関して計画的に調査を行い、その成果を、展覧会図録および会場解説、口頭による発表、講演等に、速やかにかつ活発に反映させることができた。
　とくに講演は、通常ひとつの展覧会では１ないし２回程度の講演会を担当することが通常であるが、「永青文庫の至宝」展においては、館が主催する講座（講演）２回のほかにも、地方自治体の教育委員会等が主催するセミナーにおいて４回講座を行なった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の所蔵、寄託作品に関する情報は順調に得られており、館外での作品調査に際しても重要な情報が収集された。引き続き特別展覧会等で成果を公開したい。 　科研による調査でもそれぞれ発表や報告書の形で成果を順調に公表している。 　担当した特別展覧会「細川家の至宝」も、目標の２倍を超える来館者があった。次年度開催する「大出雲展」においても副担当者として同様の努力を行ないたい。 　一方、平常展示館が長期閉館することにより、平常展示においてこれまで行ってきた成果の公開が当面できなくなったが、報告書、論文等それにかわる成果公開を従来にまして行なってきた。次年度以降も継続したい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	彫刻作品に関する情報は順次継続的に、かつ順調に収集されている。 　これらの調査において客員研究員の井上一稔氏をはじめとする彫刻研究者とも随時協力して行なっており、今後も各研究者と協力して事業の継続を行ない、研究の充実を目指したい。 　本研究によって得られた情報を将来の展覧会に生かせるよう、さらなる情報の収集を図りたい。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-3
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3)出土・伝世古陶磁に関する調査研究（学術研究助成基金助成金）　((5) - ①)		

【事業概要】
日本国内で伝世・出土した陶磁器について総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、近い将来に予定されている特別展覧会（平成 25 年度『(仮) 清朝陶磁』）出品作品の候補選定を進める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長　尾野善裕

【スタッフ】
谷口愛子（調査員・京都工芸繊維大学特任准教授）・橘倫子（調査研究支援ボランティア・茶道資料館学芸員）・梶山博史（調査研究支援ボランティア・兵庫陶芸美術館学芸員）・森下愛子（調査研究支援ボランティア・泉屋博古館分館学芸員）

【主な成果】
野崎家塩業歴史館（岡山）・彦根城博物館館（滋賀）・九州陶磁文化館（佐賀）などにて伝世古陶磁、京都市埋蔵文化財研究所・大阪歴史博物館・長崎市教育委員会などにて出土品の調査を行い、900 件あまりの調書を作成した。また、当館で所蔵している仁清御室窯跡出土陶片について、平成 22 年度からの継続事業（西田記念東洋陶磁史研究助成事業）として行っていた実測図作成作業を引き続き実施し、約 19 点をさらに図化すると共に、観察記録（調書）の作成を行った。

【年度実績概要】
所蔵陶磁の悉皆調査を依頼されている野崎家塩業歴史館の所蔵品調査をのべ 10 日、京都市埋蔵文化財研究所でのべ 6 日、田中本家博物館でのべ 2 日、その他の施設については各 1 日の調査を実施し、デジタルカメラでの資料写真撮影と共に、調書の作成を行った。最も力を割いた野崎家塩業歴史館での調査は、これまで調査の手が及んでいなかった厖大な資料群の情報化に主眼があり、それ自体は必ずしも研究として独創性をもつものではないが、文化財の保護・調査・研究上必要不可欠な基本情報の整備として行っており、再来年度に開催予定の特別展覧会『清朝陶磁（仮称)』への出品候補作品を多数見いだすことができるといった副次的成果もあがっている（調書作成件数 625 件)。また、科学研究費補助金の助成を受けて実施した田中本家博物館（長野）・眞葛ミュージアム（神奈川）・大阪歴史博物館（大阪）・兵庫陶芸美術館（兵庫）・彦根城博物館館（滋賀）・東洋大学井上円了記念博物館（東京）・九州国立博物館（福岡）・九州陶磁文化館（佐賀）・角屋もてなしの美術館（京都）では、意識的に特別展覧会『(仮) 清朝陶磁』に向けての予備調査も兼ねて、中国清朝陶磁やその影響を受けたと考えられる日本陶磁中心に調査を行い、従来等閑視されていた 18 世紀前半にも少なからざる中国（清朝）陶磁が日本へもたらされており、日本陶磁が大きな影響をうけていることを確認できた。
また、調査の過程で存在を知りえた清朝陶磁について、所蔵者の諒解が得られた 11 点を新規に寄託品に加えることができた。

【実績値】

調査日数（館外）	のべ 28 日
調書作成件数	912 件
実測図作成件数	19 件
新規寄託品	11 件

【備考】
科学研究費補助金助成研究『「鎖国」下の日本における清朝磁器の受容とその影響に関する調査』は、本研究を推進するための一助として申請したもので、本年度から向こう 4 ヵ年にわたって研究費が交付される予定。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4512-3

（様式 2）

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A

備考

調査・研究の成果報告としては、平成 25 年度開催の特別展覧会を大きな目標としているため、未だ基礎的な情報の収集に努めている段階であり、その作業自体に取り立てて独創性はない。しかし、今後展覧会や報告書の形で順次成果を公表してゆく予定であり、今後の展覧会・研究のための基礎情報として、広く活用してもらえる有用な情報になると確信している。展覧会出品候補を求めて各地へ出張して調査を行っているため、すくなからず移動時間を要することもあり、1 日当たりの調書作成件数は必ずしも多くない（昨年は 12 日で 454 件、一昨年は 2 日で 155 件）。しかし、調査参加者の熟練によって、1,000 点を超えるため当初来年度までかかると考えていた野崎家塩業歴史館第 1 期分の調査を完遂できたことから、これを評価して効率性もＡとした。

2．定量的評価

観点	調査日数	調書作成件数	実測図作成件数	新規寄託品		
判定	A	S	A	A		

備考

のべ 20 日以上の館外調査を実施することができたため、調査自体は大いに進捗しており、811 件という調書作成件数も満足できる数値と考えている。しかしながら、展覧会開催の工程スケジュールが変更になったこともあり、情報収集のための調査に比重が偏ってしまい、学会報告や論文といった形での研究成果の公表には、いささか充分に手が廻らなかった感がある。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究成果の公表という点ではいささか寂しいが、基礎作業としての調査は予定を大幅に上回る勢いでに進捗しており、まとまった研究成果としての特別展覧会の開催に向けての見通しが急速に明るくなりつつある。調査を通して新規寄託品の受け入れに繋がった、という点も考慮してＡとした。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査は着実にすすんでいるため、中長期的な視点からは特に問題ないと考えているが、外部に対して目に見える形での成果公表ができていないことが、いささか問題であると認識している。まとまった研究成果の公表の機会としては、あくまでも平成 25 年度開催の特別展覧会を予定しているが、博物館の調査・研究活動への社会的な認知・理解促進のためには、逐次成果を公表してゆくことも必要であると考えられるので、平成 24 年度には、研究論文などの形での成果公表にも努めたい。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)近代建築に関する調査研究　((5)-①)

【事業概要】
当館所蔵の重要文化財・旧帝国京都博物館建築資料の調査研究

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	文化財管理監　中村　康

【スタッフ】
中村　康（文化財管理監）　登谷伸宏（調査員）

【主な成果】
宮内省書陵部所蔵の現場日誌との対照により、伊豆の沢田石で造られた西正面の破風三面と中央の彫刻、柱、額面石、それに石盤葺の丸屋根など、本建築の特色あるデザインが、造営現場とその提案を受けた設計者片山東熊によって着工後 9 ヶ月の時点から進められた大規模な設計変更の結果であること、それにともなって作成されたエスキースから基本図、石割図、矩計図、模型などが本建築資料に含まれ、建築の構造に及ぶ形成プロセスの詳細を確認できることが判明した。

【年度実績概要】
整理箱Ｉに収められた図 1～図 145 について、図面の当初の使用目的、建築図面としての性格を超えた素描的に優れた表現を中心に再調査し、整理にあたって写されたものについては原図の確定と調査を行った。
本館の西正面と屋根の設計変更に関連する基本図および矩計図（図 193～図 209、図 226）を調査して前後の比較を行った。特に美しい鉛筆書きの図 199 は、エスキースを重ねてデザインを決定して行くプロセスを示す上に、博物館総長九鬼隆一と理事美術部長岡倉覚三の検印が捺されているために注目された。
本館中央棟屋根の構造を示す図 218～図 220、図 344 を調査し、設計変更にともなう小屋組の変化を確認した。
昨年来、登谷を中心に行う宮内庁書陵部所蔵の現場日誌（工期前半のみ現存）と本建築資料の比較研究のまとめとして、1、現場の造営組織の実態と片山東熊の設計図制作との関係、2、西正面と屋根等の設計変更、3、設計変更にともなう小屋組の変化、を内容とする論文「現場日誌にみる帝国京都博物館建設の様相」を、登谷が執筆した。
大規模な設計変更を工事半ばに挟んだ本館造営工事の詳細な工程が判明したことから、調査および図版目録編集の打合せを、前任の調査員田中禎彦氏を交えて行った。その結果、調査は予定通り本年度をもって終了することとし、田中氏の論文「京都国立博物館建築工事図面―工事の概要と図面の分析－」と解題は、田中氏が一部修整した。
図版目録の編集に関して、1、名称や分類に疑問が残されていた建築図面の再調査、2、調査の結果を総覧する一覧表の作成、3、着工時の仕様書と竣工事の棟札を文字データとした資料の作成を行った。

【実績値】
調査回数　16 回
調査建築図面数　198 枚

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	S	S	A	A	A

備考
適時性：美術の優れた鑑賞空間でありそれ自体卓越した美術作品である京都国立博物館本館の建築についての関心の高まりに応える研究である。
独創性：建築図面が美術としての建築の制作に果たした実際の役割を明らかにした。
発展性：建築資料の創造的、芸術的意義を究明する新しい研究分野を開拓した。

2．定量的評価

観点	調査回数	調査図面数				
判定	A	A				

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本建築資料に基づく現場日誌の慎重な解読により、現場における造営の実態と設計者片山東熊の関与が具体的に跡づけられた。従来はエスキースや初期図面として扱われていた図面の多くが、建築工事のとりわけ美術的側面において重要な役割を果たしていたことが明らかになり、本建築資料の歴史的・芸術的にユニークな意義が示された。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	本年の内容は、これまでと較べて格段に豊かなものとなり、そのために当初予定していた図版目録の編集は、作業の時間的な制約から文字原稿の作成までにとどまった。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-5-1
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)特別展覧会「中国近代絵画と日本」に関する調査((5) - ①)

【事業概要】
平成 24 年 1 月 7 日から 2 月 28 日に開催される、特別展覧会「中国近代絵画と日本」に関する調査研究を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西上　実

【スタッフ】　呉　孟晋（研究員）

【主な成果】
前年度から継続する京都国立博物館須磨コレクションの調査をふまえて、平成 24 年 1 月から 2 月にかけて特別展覧会を開催した。同コレクションから展覧会に陳列する作品を選定し追加調査を行ったうえで、新たに国内外から作品を借用し、中国近代絵画の全体像が把握できる展示構成とした。あわせて展覧会図録を刊行し、国際シンポジウムや関連の土曜講座を実施。日本では認知度が低い中国近代絵画への理解を深める機会を提供した。

【年度実績概要】
・平成 24 年 1 月 7 日から 2 月 26 日まで、京都国立博物館特別展示館にて特別展覧会を開催した。調査の成果をふまえ、これまで「中国近代絵画（仮）」と称した展覧会名称を「中国近代絵画と日本」に改め、中国近代絵画の形成において日本が果たした役割を強調する展示内容とし、合計 226 件の作品を展示した。展示構成は「筆墨の交歓―清末民国初期の上海と京阪神の文人たち―」、「美術による革新―中国絵画の近代化と日本―」、「海派と京派―上海・北京二大都市の画壇とその展開―」、「油画と国画―拡がる絵画表現と日本―」、「外交官のまなざし―京都国立博物館須磨コレクションについて―」の 5 つのセクションを設け、伝統的な筆墨から近代的な美術制度への移行とその葛藤について、清時代末期から日中戦争までの時間軸と上海、北京、広東などの地域軸を組み合わせて説明。いまだ研究が進まない近代の日中交流史の一側面を実作品により検証してゆく新たなアプローチを提示した。
・当プロジェクトで継続的に交流を積み重ねてきた海外の博物館・美術館や研究者とのネットワークを活用して、国際的な連携・協力を得ることができた。具体的には国際的な研究動向を反映した展示構成や、上海博物館や香港芸術館など海外複数地域から陳列作品 34 件の借用実現に結実している。加えて、関連する国際シンポジウム（2 月 11 日開催）や土曜講座（合計 4 回のうち 1 月 21 日と 2 月 25 日の 2 回）においても、中国やヨーロッパ地域からパネリスト、講師を招聘した。両企画とも活発な討議や質疑応答が行われ、日本から世界に向けて研究成果を発信する好機となった。
・関西地区の博物館・美術館との連携を深めた。一般来場者への中国近代絵画および当館須磨コレクションの周知に努めた。須磨コレクションは近代日本に形成された中国絵画コレクションという性格を持ち合わせておりことから、大阪市立美術館などとリレー方式で展覧会を開催してゆく「関西中国書画コレクション展」に参加し、各館共通のチラシなども作成した。

【実績値】
調査回数 10 回
論文掲載数：4 件
発表件数：5 件

【主な成果】
前年度から継続する京都国立博物館須磨コレクションの調査をふまえて、平成 24 年 1 月から 2 月にかけて特別展覧会を開催した。同コレクションから展覧会に陳列する作品を選定し追加調査を行ったうえで、新たに国内外から作品を借用し、中国近代絵画の全体像が把握できる展示構成とした。あわせて展覧会図録を刊行し、国際シンポジウムや関連の土曜講座を実施。日本では認知度が低い中国近代絵画への理解を深める機会を提供した。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-5-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
展覧会開催年の平成24年（2012）は、日中国交正常化40周年をはじめとして日中の近代の歩みを回顧するのにふさわしい節目の年にあたる。国際的に関心が高まりつつある中国近代絵画について、いち早く近代化に乗り出してその形成に大きな影響を与えた隣国日本からの研究成果発信は、評価項目の「独創性」「発展性」「効率性」にかなうプロジェクトであった。京都国立博物館の中国書画コレクションの一端を占める須磨コレクションについて、今後の継続的な研究の基盤となすことができた。

2．定量的評価

観点	調査回数	論文掲載数	発表件数			
判定	A	A	A			

備考
前年度からの須磨コレクション調査を基礎にして、展覧会出陳のための追加調査を適宜実施した。その成果をもとにして展覧会図録を中心に中国近代絵画について通史的視野にたつ論考および個別作品研究にもとづく論文を発表して、マクロ、ミクロ両面からその全体像をさぐった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	須磨コレクションの基礎的調査を終え、その成果をもとに特別展覧会開催に至ったことで当プロジェクトの目標を達成することができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	特別展覧会開催を経て、2014年春開館予定の平常展示館での須磨コレクションの展示に向けての基盤を構築することができた。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-5-1

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5)特別展覧会「王朝文化の華　陽明文庫名宝展」に関する調査研究((5) - ①)		
【事業概要】 平成 24 年度に開催される、特別展覧会「王朝文化の華　陽明文庫名宝展」に関する調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　赤尾栄慶
【スタッフ】 (当館研究者)尾野善裕（工芸室長)、大原嘉豊（研究員)、鬼原俊枝（列品管理室長)、久保智康（企画室長)、永島明子（主任研究員)、羽田聡（研究員)、水谷亜希（アソシエート・フェロー)、宮川禎一（考古室長)、山川暁（主任研究員)、山下善也（連携協力室長）			
【主な成果】 都合 4 回にわたる調査を実施し、陽明文庫からは、国宝 6 件、重要文化財 60 件を含む 131 件を選定し、関連する作品を 9 件加えて、全体で 140 件とすることにした。 全体の構成も、「近衛家の系譜Ⅰ～Ⅱ」「陽明文庫の至宝Ⅰ～Ⅲ」「宮廷貴族の生活Ⅰ～Ⅲ」というテーマを設定して展示を行うことで合意を得た。			
【年度実績概要】 4月、6月、8月、および1月にかけて、計4回の調査を実施した。 作品選定を踏まえて、展示計画や解説付き目録の編集作業に取りかかり、開催に向けての準備作業を予定通り行った。			
【実績値】 ○調査　4 回 ○撮影　2 回 ○論文掲載数　3 件			
【備考】			

【書式Ｂ】
（様式 2）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4512-5-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
国宝「御堂関白記」のうち、自筆本 14 巻は、平成 23 年 5 月に日本政府から「ユネスコ世界記憶遺産」登録候補としての推薦を受けたことを念頭に、自筆本 14 巻を一挙に公開する初めての企画となっている。

2．定量的評価

観点	調査	撮影	論文掲載数			
判定	A	A	A			

備考
翻刻文なども付加し、学術的にも充実した内容の図録の編纂作業を行った。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	陽明文庫所蔵の国宝 6 件、重要文化財 60 件が一堂に揃う初めての企画であり、特別展覧会に向けての準備作業も予定通り進んでいる。 全体の構成も、「近衛家の系譜Ⅰ～Ⅱ」「陽明文庫の至宝Ⅰ～Ⅲ」「宮廷貴族の生活Ⅰ～Ⅲ」というテーマを設定し、一般の入館者に理解しやすいように配慮した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	国宝「御堂関白記」を中心に、平安時代の和歌関係の写本や貴族の古記録など、まさに京都文化をテーマとした特別展覧会であり、今年度は、来年度の展覧会開催に向けての準備を整えた。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4513-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）館蔵品・寄託品等の基礎的・総合的調査を進め、作品の適切な収集及び魅力的な展示に反映させる。（(5)－①）

【事業概要】
社寺・団体・個人等所蔵の文化財に関する情報を恒常的に収集して新規購入・寄贈・寄託候補作品をリストアップし、綿密な調査に基づく調書を作成して陳列品鑑査会に付議し、コレクションの拡充を図る。新収蔵品は勿論のこと、既存の館蔵品・寄託品についてもより詳しい調査を行い、その成果を名品展及び特別展・特別陳列等に反映させる。調査に際しては積極的に客員研究員・調査員の助言を仰ぎ、客観的かつ信頼度の高い成果を得ることに努める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】
西山厚（学芸部長）、岩田茂樹（学芸部長補佐）、内藤栄（学芸部長補佐）、稲本泰生（前企画室長）、吉澤悟（前教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（前情報サービス室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、清水健（前教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）

【主な成果】
仏教美術及び奈良に縁の深い文化財を柱とする当館の運営方針に沿って精選された作品を、新たに館蔵品・寄託品に加えた。受け入れに際しては詳細な調査を行った。名品展では、収蔵施設の修理等の事情で一時的に寄託された近在社寺所蔵の重要作例を、調査のうえ展示（特別公開）したほか、ここ数年の新収蔵品をまとまった形で公開するなどの実績を挙げた。館蔵品・寄託品等の継続的な調査の成果は、展示会場内の解説や各種刊行物等に反映させた。

【年度実績概要】
① 新規購入・寄託候補作品について調査研究を行い、その成果をもとに作成した詳細な調書に基づいて、新たに 4 件の文化財を館蔵品として購入し、8 件の文化財を寄託品として受け入れた。
② 木津川市・海住山寺本堂厨子の改修に際して同寺本尊・十一面観音立像（重要文化財）を借用し、名品展会場にて特別公開（4 月 26 日～9 月 11 日）した。展示に先んじて当該作品に関する詳細な調査研究を行い、その成果を会場内の解説パネル等に反映させた。
③ 大和高田市・弥勒寺本堂及び河内長野市・金剛寺金堂の修理に際して弥勒寺本尊・弥勒仏坐像（奈良県指定文化財）及び金剛寺降三世明王坐像（重要文化財）を借用し、名品展会場にて特別公開（10 月 4 日～）した。展示に先んじて両像に関する詳細な調査研究を行い、その成果を会場内の解説パネル類、及び『なら仏像館名品図録』改訂版等に反映させた。
④ 館蔵品・寄託品等の調査を客員研究員・調査員と合同で継続的に行い、その成果を展示及び各種刊行物等に反映させた。
⑤ 西新館の名品展会場内で「新収蔵品展」（9 月 13 日～10 月 2 日）及び特集展示「新たに修理された文化財」（12 月 6 日～25 日）を開催した。前者においてはここ 5 年ほどの間に館蔵品・寄託品に加わった作品、後者においては館蔵品・寄託品から近年修理を受けた作品を選定し、公開した。いずれの展示においても当該作品の調査研究成果を、会場における解説・パネル等に反映させた。

新収蔵品展

【実績値】
客員研究員・調査員の調査回数　18 回
購入・寄託に向けた文化財調書の作成枚数　12 件分
展示への反映　5 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　仏教美術及び奈良に関係する文化財の調査研究・展示における国内最大級の拠点として、重要な役割を果たしている当館の特性に沿い、コレクションのさらなる充実や、館蔵品・収蔵品の有効な活用に向けた調査研究を展開した。その成果は新規館蔵品・寄託品の受け入れや展示活動に反映され、顕著な実績を挙げることができた。調査研究に際しては客員研究員・調査員の助言を定期的継続的に仰ぐことによって、十分な客観性と信頼性を確保することができた。

2．定量的評価

観点	客員研究員・調査員調査回数	文化財調書作成枚数	展示への反映			
判定	A	A	A			

備考
　館蔵品・寄託品のさらなる充実に向け、また既存の収蔵品の有効な活用に向けて、客員研究員及び調査員の助力を得つつ着実に調査資料の蓄積を行うことができた。またその成果に基づく新規館蔵品・寄託品の受け入れ件数や、展示への反映回数などの面でも、十分な実績を挙げることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良関係の文化財を中心としたコレクションの充実や、館蔵品・収蔵品の有効な活用に向けた調査研究は、これらの分野における調査研究・展示において主導的な役割を果たし、長年の実績で不動の声価を得てきた当館にとって、最も基本的な活動の一つである。本年度もこれまでと同じく、質量両面において、当館に向けられたこのような社会的要請に応えるに十分な実績を挙げることができた。次年度以降も同様の業務を、当館の果たすべき責務として継続していかねばならない。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	作品調査に基づく館蔵品・寄託品の計画的収集や効果的な展示など、有形文化財の保存と活用を促進するという目標に沿って、作品の基礎的かつ総合的な調査を着実に進め、成果を積極的に公表している。当該項目については確実に実績を挙げることのできる体制と業務サイクルがすでに確立されており、次年度以降も同様の活動を継続し、同レベルの成果を得ることが見込まれる。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4513-2

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）歴史学・考古学・美術史学などの人文諸学の見地から館蔵品・寄託品等の調査研究を行い、その成果を積極的に公表する。（(5)－①）

【事業概要】

館蔵品・寄託品等に関する調査研究活動を、研究員の専門分野に沿い各自で、もしくは館内外の各種研究グループ（科研等）などを単位として、歴史学・考古学・美術史学等の人文諸学と関連づけた広い視野に立って展開する。その成果は当館における展示活動や講座、刊行物（各種展覧会図録及び研究紀要『鹿園雑集』等）は勿論のこと、館外で行う学会・シンポジウム等における口頭発表・講演、各種学術誌等に掲載する論文等においても、積極的に公表する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】

西山厚（学芸部長）、岩田茂樹（学芸部長補佐）、内藤栄（学芸部長補佐）、稲本泰生（前企画室長）、吉澤悟（前教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（前情報サービス室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、清水健（前教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）

【主な成果】

歴史学・考古学・美術史学等、各研究員がそれぞれの専門分野に沿って館蔵品・寄託品等の調査研究を行い、その成果は展示・刊行物・講座・新聞における作品解説等に反映された。調査研究活動の展開にあたっては、これを個人単位で行うだけでなく、研究分担者・連携研究者として各種科研に参加するなど、内外の研究プロジェクトに積極的に関わることを重視し、より広い視野に立って学界に貢献する実績を挙げた。

【年度実績概要】

① 各研究員が各々の専門分野に沿って館蔵品・寄託品等に対する調査研究を行い、その成果を特別展・特別陳列・名品展における会場パネル解説等、特別展・特別陳列図録「天竺へ－三蔵法師三万キロの旅」「初瀬にますは与喜の神垣－與喜天満神社の秘宝と神像」「第 63 回正倉院展」「おん祭と春日信仰の美術」、名品展図録「なら仏像館名品図録（2012 年改訂版）」、学術協力を行う展覧会図録である「法隆寺展」における論考及び作品解説に反映させた。

② 毎月一回講堂で実施するサンデートークにおいて、各研究員が各々の専門分野に沿った、多彩な調査研究成果の一端を発表した。

③ 各研究員が各々の専門分野に沿って行ってきた館蔵品・寄託品等に対する調査研究の成果の一端を、「奈良国立博物館だより」、読売新聞の連載「鹿園観照－奈良国立博物館で見る名宝」、特別展「誕生！中国文明」「正倉院展」会期中の読売新聞の連載、「天竺へ」会期中の朝日新聞の連載等における作品解説で紹介した。

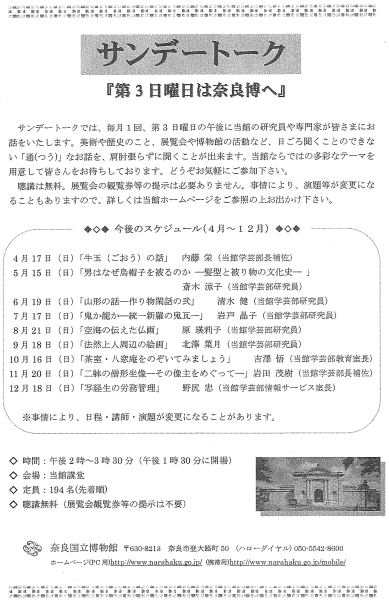
④ 科研基盤研究（A）「大画面説話画の総合研究」（研究代表者：学習院大学・佐野みどり）の研究分担者として、赤間神宮（下関市）・安楽寺（田原本町）等における作品調査に従事したほか、研究集会に参加した。

⑤ 科研基盤研究(B)「美術史における転換期の諸相」（研究代表者：京都大学・根立研介）に連携研究者として参加した。

⑥ 科研基盤研究(C)「『常陸国風土記』にみえる律令期以前の歴史的景観復原に関する実証的研究」（研究代表者：茨城大学・田中裕）に連携研究者として参加した。

⑦ （財）仏教美術協会研究助成「五世紀における鉄器生産技術の革新について－五条猫塚古墳出土品を中心に」による調査研究の実施。

⑧ 平成 23 年度文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」（法政大学国際日本学研究所「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」（研究代表者：法政大学・ヨーゼフ・クライナー）に、研究員 3 名が参加した。



サンデートーク

『第３日曜日は奈良博へ』

サンデートークでは、毎月１回、第３日曜日の午後に当館の研究員や専門家が皆さまにお話をいたします。美術や歴史のこと、展覧会や博物館の活動など、日ごろ聞くことのできない「通(つう)」なお話を、肩肘張らずに聞くことが出来ます。当館ならではの多彩なテーマを用意して皆さんをお待ちしております。どうぞお気軽にご参加下さい。

聴講は無料。展覧会の観覧券等の提示は必要ありません。事情により、演題等が変更になることもありますので、詳しくは当館ホームページをご参照の上お出かけ下さい。

◆◇◆ 今後のスケジュール（４月～１２月）◆◇◆

４月 17 日（日）「牛玉（ごおう）の話」　内藤 栄（当館学芸部長補佐）
５月 15 日（日）「男はなぜ烏帽子を被るのか ―髪型と被り物の文化史― 」　斎木 涼子（当館学芸部研究員）
６月 19 日（日）「山形の話―作り物開話の灵」　清水 健（当館学芸部研究員）
７月 17 日（日）「鬼か魔か―統一新羅の鬼瓦―」　岩戸 晶子（当館学芸部研究員）
８月 21 日（日）「空海の伝えた仏画」　原 瑛利子（当館学芸部研究員）
９月 18 日（日）「法然上人周辺の絵画」　北澤 菜月（当館学芸部研究員）
10 月 16 日（日）「茶室・八窓庵をのぞいてみましょう」　吉澤 悟（当館学芸部教育室長）
11 月 20 日（日）「二躯の骸形坐像―その像主をめぐって―」岩田 茂樹（当館学芸部長補佐）
12 月 18 日（日）「写経生の労務管理」　野尻 忠（当館学芸部情報サービス室長）

※事情により、日程・講師・演題が変更になることがあります。

◇ 時間：午後２時～３時 30 分（午後１時 30 分に開場）
◇ 会場：当館講堂
◇ 定員：194 名(先着順)
◇ 聴講無料（展覧会観覧券等の提示は不要）

奈良国立博物館　〒630-8213　奈良市登大路町 50　（ハローダイヤル）050-5542-8600
ホームページ(PC 用)http://www.narahaku.go.jp/ (携帯用)http://www.narahaku.go.jp/mobile/

サンデートーク告知チラシ

【実績値】

サンデートーク実施回数　９回
科研等研究プロジェクトへの参加（延べ人数）　16 名
論文等発表本数　22 本
新聞等掲載の作品解説　41 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4513-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
仏教美術及び奈良に関係する文化財を主たる対象として、歴史学・考古学・美術史学等、研究員各人の専門分野に沿った館蔵品・寄託品等の調査研究活動を展開し、学術的に高い水準の成果を講座・論文・各種作品解説等において公表した。また外部の要請を受けて多数の研究プロジェクトに参加していることは、当館研究員の専門知識や調査研究能力の水準が、学界で高い評価を受け、大きく貢献していることを物語る。

2．定量的評価

観点	サンデートーク実施回数	研究プロジェクト参加	論文等発表本数	新聞等掲載作品解説		
判定	A	A	A	A		

備考
歴史学・考古学・美術史学等、研究員各人の専門分野に沿って行った館蔵品・寄託品等の調査研究の成果を、サンデートーク等の講座や論文・各種作品解説等に反映し、量的にも十分な実績を挙げることができた。また内外の研究プロジェクトへの参加等も、当館学芸部の学界への貢献度の高さを示すに十分な件数に達している。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良関係の文化財を中心とした館蔵品・寄託品等の調査研究を歴史学・考古学・美術史学等、各研究員の専門分野の観点から展開・深化させることは、当館における文化財の収集・展示等の活動をより充実させる上で、最も基本的な作業の一つである。この方面の文化財の調査研究においては、当館は国内随一の拠点として高水準の成果の公表が期待されているが、本年度はこうした社会的要請に、質量ともに応えられる実績を挙げることができた。次年度以降も同様の業務を、当館の果たすべき責務として、継続する必要がある。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究員各自の専門分野に沿った館蔵品・寄託品等の調査研究を展開し、学識・経験に裏付けられた高水準の成果を公表することは、適切な作品の収集計画や効果的な展示の計画など、有形文化財の保存と活用を促進し、博物館の活動を活性化することに直結する。本年度はこの点を視野に入れた調査研究を推進し、十分な実績を挙げることができた。当館学芸部は仏教美術・奈良関係の多様な文化財に様々な人文諸学の観点からアプローチできる人員構成と研究体制を備えており、次年度以降も同様の活動を継続し、成果を公表できる準備が確立されている。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-1
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析（科学研究費補助金）（(5)－①）

【事業概要】
日本国内で最も優れた中国古代青銅器コレクションである住友コレクションを所蔵する泉屋博古館の所蔵品 180 点を中心に、中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積したデジタルアーカイブを作成する。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長　今津節生

【スタッフ】
森田稔（副館長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元塁（企画課研究員）、鳥越俊行（文化財課主任研究員）

【主な成果】
泉屋博古館の所蔵品を中心に X 線 CT、精密三次元計測機、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて、中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積したデジタルアーカイブを構築した。この成果を基に、泉屋博古館にて特別展を開催すると共に、図録を作成した。また、東アジア文化遺産保存学会（中国・呼和浩特市）で研究発表を行った。

【年度実績概要】
九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に、1 年間で約 50 点の CT 調査や精密三次元計測を実施した。得られた成果は、文化交流展の展示の際に活用している。
本研究は、Ｘ線 CT スキャナならびに三次元計測機を使用して得られたデジタルデータを蓄積し三次元デジタルアーカイブを構築し、そのデータを活用した共同研究・博物館展示の可能性を探るものである。
調査は以下のように実施した。
1.　**Ｘ線ＣＴスキャナ調査**　殷周青銅器の内部構造を非破壊で把握するには、Ｘ線ＣＴスキャナによる三次元断面像が最適の方法である。
2.　**三次元計測**　青銅器表面に施文された表面情報などは、Ｘ線ＣＴスキャナと併用し、より微細な凹凸を記録できる三次元計測機によってデジタル化を行う。
3. **一般市民に向けた研究成果の公開**　デジタル化された 3Ｄデータは、研究だけでなく博物館でも大きな展示効果を発揮する。3ＤデジタルデータをＣＧや 3Ｄプリンタ等の最新機器で加工したデジタル複製品の展示・活用について研究する。本年度は、実物とデジタル複製品をあわせて展示する展示会を泉屋博古館で開催した。
4. **学会における研究成果の発表**　本研究の成果を、日本文化財科学会・東アジア文化遺産保存学会で研究発表した。

虎鴞兕觥全景と持ち手の三次元断面像

象文兕觥全景と持ち手の三次元断面像

【実績値】

○展覧会数　1 回（泉屋博古館）
○調査回数　6 回
○資料収集数　50 点
○学会研究会等発表数　2 件　日本文化財科学会、東アジア文化遺産保存学会
○論文掲載数　2 件
・「The 2011 International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia」
東アジア文化遺産保存学会
・「神秘のデザインー中国青銅技術の粋」　泉屋博古館
○報告書　1 件
「Ｘ線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析」　500 部

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	S	S	S	A	S

備考
　世界的に見ても最先端の調査機器である大型Ｘ線CTを用いた文化財の科学的な構造・技法調査として、適時性、独創性、正確性に優れた研究である。調査は展示の前後の期間を利用して効率的に実施しており、年度末には３年間の調査結果を掲載した報告書を刊行した。本研究は、国内の他博物館および中国の博物館からも注目を集めており今後の発展性も極めて高い。ただし、本年度末で文科省科学研究費の研究期間が終了するので、次年度からは研究協力の範囲を広げた新たな継続的研究を計画している。

2．定量的評価

観点	展覧会数	調査回数	資料収集数	学会研究会等発表数	論文掲載数	報告書
判定	A	S	S	A	S	S

備考
　年間３回の展示替えの前後を利用して効率的に６回の調査を実施した。泉屋博古館の全面的な協力を得て、本年度だけで約50点の青銅器を調査した。これまで３年の調査期間中に住友コレクションの大部分を調査することができた。この研究成果は日本文化財科学会で研究発表した他、東アジア文化遺産保存学会（中国・呼和浩特市）でも発表した。また、年度末には、世界で初めて非接触非破壊で中国古代青銅器の内部構造を系統的・総合的に解析した報告書を刊行することができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	最先端の調査機器である大型Ｘ線CTを用い、中国殷周青銅器の構造・技法の研究に画期的な成果をもたらした研究である。中国古代青銅器のコレクションとして名高い住友コレクションを総合的に調査できた研究として極めて貴重である。今後は、この成果を核として、国内の博物館が所有する青銅器コレクションや中国の博物館との連携研究による発展が期待される。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	泉屋博古館の保有する住友コレクションと呼ばれる殷周青銅器のほとんどを調査することができた。さらに、この研究成果は200頁を超える膨大な報告書として公表することができた。 　次年度に向けて、本研究をさらに発展させ、殷周青銅器を所有する国内外の博物館と連携した研究と展示を計画したい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）平成 20 年度特別展「工芸のいま　伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行う。（(5)－①）

【事業概要】
九州･沖縄における伝統工芸の作家の創作活動について、調査研究を行なう。無形文化財としての伝統技術と、そこから生まれる新たな創作について、それぞれの作家の取り組みを調査する。これまで調査を行ってきた作家の調査を継続するとともに、新たな作家を調査対象に加えていく。伝統工芸の技術についてもワークショップを開催する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　谷豊信

【スタッフ】
原田あゆみ（文化財課主任研究員）、池内一誠（交流課主任研究員）、遠藤啓介（展示課研究員）

【主な成果】
平成 23 年度西部工芸展、日本伝統工芸展など、今年度開催の工芸展で作品調査を行なった。陶芸部門では、西部工芸会陶芸部会の研究会に参加し、新たな創作活動の展開について調査し、これまでに対象となっていなかった若手作家も調査に加わった。
タイと共同で開催した平成 23 年度トピック展「日本とタイーふたつの国の巧と美」展では、展覧会の一つの柱として伝統工芸を位置づけ、日本とタイの伝統工芸を比較し、現代に展開する工芸を紹介した。同時に、伝統工芸の技術を示すワークショップを開催した。

【年度実績概要】

九州･沖縄の伝統工芸の中で最も層の厚い陶芸分野で、調査を継続し、研究会への参加を行った。西部工芸展、日本伝統工芸展、西部工芸陶芸部会展、九州･山口陶芸展の出品作品の調査を行い、新たな創作の動向とこれまで調査対象となっていなかった新しい人材の発掘を行なった。その一方で、全国規模での陶芸の状況の把握をつとめた。
陶芸では柿右衛門様式の色絵技術の復活と伝統の継承について、染織では久留米絣と絵絣の展開について、平成 23 年度トピック展「日本とタイーふたつの国の巧と美」展でタイの伝統工芸作品と比較紹介した。また、当館職員が久留米絣の作家から織りについての指導を受け、上記トピック展開催中に、伝統工芸の技術を示すワークショップを開催した。
なお、24 年 2 月に西部工芸会の陶芸作家 2 名について、ご自宅での調査を行った。

トピック展「日本とタイーふたつの国の巧と美」展　展示風景

【実績値】

○調査回数　　3 回
第 108 回 九州･山口陶芸展、第 46 回西部工芸展、第 58 回日本伝統工芸展で九州･沖縄の工芸の調査と全国的な工芸の状況の調査。

○研究会　1 回
「陶芸散歩の会」第 10 回記念公演

○展示　15 件
4/12～6/5　九州国立博物館のトピック展でタイと日本の伝統工芸について伝える展示を実施。

○ワークショップ　2 回
4/30　　九州国立博物館で絣糸と簡易腰機を用いたワークショップ開催。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　伝統工芸への取り組みは近代美術館を持たない九州地区にあって、無形文化財を扱う役割を果たすとともに、地域にある博物館として伝統工芸の発展を通して地域貢献を果たすというものである。これらは平成20年度の展覧会以来の、継続的な事業であった。工芸作家の中にこの活動に対する期待も大きく、また既に昨年度のこの事業によって九州･沖縄の工芸は確実に新たな展開を示しつつある。
　海外との共催展の中に伝統工芸を組み込むことができた。

2．定量的評価

観点	調査回数	研究会	展示	ワークショップ		
判定	A	A	A	A		

備考
　個別調査主体から、展覧会出品作による追跡調査を行っている。さらに全国レベルでの工芸の状況へと調査対象を広げている。それらの成果の一部は、工芸作家とともに行なう研究会によって公表している。
　海外との共催展の中で日本の伝統工芸を紹介し、その技術保護の状況を伝えた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	地域に根ざした博物館として、九州･沖縄の伝統工芸の発展に寄与している。技術の保存とともに、伝統の美意識について、貢献することができる。 　日本以外の工芸技術の実情調査、保護といった新たな研究の広がりがあり、文化交流を視座に置く九州国立博物館としては今後さらに広げる必要がある。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	工芸展開催以来の成果を受け、さらに広がりを大きくもてたという点は評価できる。陶芸、染織といった層の厚い分野では、より活発な研究活動が行なわれているが、今後は層の薄い分野での活動を深めていく必要がある。 　今後も海外での工芸技術の実情と保護という面について、更なる研究が望まれる。無形文化財に積極的に取り組んできた日本の状況について、海外に伝えることで、海外の無形文化財の保護についても貢献が可能となる。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）旧石器から弥生時代の日本人の起源に関する調査研究（(5)－①）

【事業概要】
日本人はどこから来たのか。その議論は古くから行われており、近年では理化学機器の発達により新たな仮説も提示されている。本研究では考古資料から日本人の起源について調査研究を行い、その成果を文化交流展示に反映させることを目的とする。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　志賀智史

【スタッフ】
杉原敏之（九州歴史資料館学芸調査室学芸班長）

【主な成果】
日本列島に最初に人類が到来した地域の一つと考えられる九州において、最古の時代―旧石器時代がどのような時代であったのか資料調査を行った。その結果を、九州歴史資料館との共催事業として文化交流展示トピック展示「九州最古の狩人とその時代」として開催した。また、教育普及事業として石器作りのワークショップも行った。

【年度実績概要】
資料の所蔵先を訪問し、資料を実見するとともに記録を取った。調査遺跡数は福岡(4 遺跡)、佐賀(4)、長崎(5)、熊本(2)、大分(3)、宮崎(3)、鹿児島(3)の合計 24 遺跡となった。この成果を受けて、文化交流展示トピック展示「九州最古の狩人とその時代」（平成 23 年 10 月 29 日～12 月 18 日）を開催した。会期 44 日間で入場者数 54,390 人であった。このトピック展示は、文化庁の「発掘された日本列島 2011」（九州会場は九州歴史資料館）の地域展も兼ねて開催された。

展示作品は約 120 点で、内容は九州最古級の石器、旧石器人の道具箱、当時の暮らし、狩猟具の変遷で構成した。特に、九州最古級の石器である長崎県福井洞穴 15 層出土石器は、所蔵先である東北大学から 50 年ぶりの里帰り展示となった。展示図録は 2,000 部作成した。

会期中の 12 月 4 日には教育普及事業として石器作りのワークショップを開催し、約 40 名の参加を得た。鹿角をハンマーとして北海道白滝産の黒曜石を割るという本格的なもので、参加者は石器作りの難しさを学んだ。

展示室風景

【実績値】

○調査遺跡数　24 遺跡

○入場者数　　54,390 人

○展示図録　　1 件
「九州最古の狩人とその時代」　2000 部

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　発掘調査が進んでいるにも関わらず、九州ではこれまで当該期に絞った展示が行われたことが無かった。地域を九州に絞ったため、効率よく調査、展示を行うことができた。

2．定量的評価

観点	調査遺跡数	入場者数	展示図録			
判定	A	A	A			

備考
　九州の主要遺跡を網羅している。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	九州旧石器文化の現状が明らかになり、展示に反映できたことは評価できる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に従って実施することができた。展示だけでなく、図録の作成やワークショップの開催などにより、専門家はもとより一般の方々にも親しみやすい内容になった。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4）縄文時代の火焔土器に関する調査研究（(5)－①）

【事業概要】
我が国の縄文土器を代表する火焔土器を対象に、立体陶板や 3 次元プリンターによるさまざまな模造製作をおこなうための調査研究を実施する。製作実験をおこないながら、質感・重量感などを再現すべく課題を整理するものである。これらの成果を野外展示やトピック展に反映させ、来館者に火焔土器の歴史的な意味合いを体感してもらう。
本事業は、模造・模写等の復元資料を有効に活用する手法として、野外でも退色・劣化がほとんどない陶板を、立体物で製作する我が国では初めての試みでもある。

【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	展示課長　赤司善彦

【スタッフ】
今津節生（環境保全室長）、河野一隆（文化交流展室長）

【主な成果】
システィーナ礼拝堂の壁画など美術陶板を唯一制作している大塚オーミ陶業株式会社との共同研究で、火焔土器の立体陶板の試作品を製作することに成功した。また、当館内で新潟県津南町所蔵の火焔土器について、科学的な調査をおこない、データを収集し、これを基に製作技法等についての研究を進めた。視覚障がい者への活用への道を開きたい。

【年度実績概要】
津南町所蔵の火焔土器をＸ線ＣＴスキャナーと 3 次元デジタイザーによるデータを取得し、そのデータと見とりによる立体陶板の製作実験を行った。まずは形状を復元製作する課題を抽出するために、成型を試作した。その結果、材料や原形の再加工、重量の再現、焼成方法などについての課題を整理することができた。今回の試作によって、立体陶板による製作の道筋をつけることができた意義は大きい。
今年度は、研究成果の一端を披露するために、複製資料等によるハンズオン展示を実施する予定であった。新潟県津南町の実物破片資料を借用することも、津南町と昨年度協議していたが、東日本大震災を含め、新潟県での震災も起こったことから、本年度の実施を断念せざるを得なかった。そのため、火焔土器のトピック展は来年度実施することとした。

陶板技術による複製実験
型による素地成型の作成

【実績値】

○調査回数　2 回
○模造試作　立体陶板　1 口、3 次元プリンターによる石膏モデル　2 口
○展覧会数　0 回　（東日本大震災を含め、新潟県での震災も起こったため 24 年度の実施となった。）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
独創性：美術陶板という平面資料について実績のある技術を、立体物に応用する新しい取り組みである。
発展性：三次元プリンター出力は、教育用ハンズオンとしての活用と、美術陶板技術は、野外展示での活用が期待できる。

2．定量的評価

観点	調査回数	試作品制作数	展覧会数			
判定	A	A	F			

備考
美術陶板では試行錯誤の連続であったが、試作品の完成にこぎつけることができた。
展覧会数Ｆについては、今年度開催を予定していた展示が、東日本大震災を含め、新潟県での震災も起こったことから24年度開催となったためである。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまでにない研究として試行錯誤をしてきた。その結果、美術陶板については質感は問題がなく、あとの課題は重量感である。石膏模型は重量感については錘を入れるなどの工夫を考えたい。次年度以降に行う研究の基礎が整った。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	展覧会については、今年度開催を予定していた展示が、東日本大震災を含め、新潟県での震災も起こったことから24年度開催となったが、調査や実験については計画通り実施されている。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5）館蔵品を中心とした漆器の調査研究（(5)－①）

【事業概要】

アジアとの対外交流をテーマに収蔵された漆器のうち、とくに本年度は彫漆器をとりあげて文様、技法などの基礎的な調査研究をおこなう。対象は、館蔵品のほか、東京国立博物館をはじめとする他機関所蔵品についても範囲を広げる。なお、本プロジェクトでは、構造調査においてＣＴ撮影を用いるが、このような研究手法は九州国立博物館の特色であり、画期的な成果が見込まれる。

本年度の成果については、トピック展での展示やパネルでの紹介、図録解説において公表し、広く観覧者に提供するものとする。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	企画課研究員　川畑憲子

【スタッフ】
鳥越俊行（文化財課主任研究員）

【主な成果】

本年度は当該テーマについて、以下の成果を得た。

1）館蔵品のほか、関連する他収蔵品についても調査をおこない、当館でＣＴ撮影などの科学分析が可能な作品については貴重なデータを収集した。

2）上記の調査における成果を、トピック展での展示や展覧会図録を通じて、観覧者に公表した。

【年度実績概要】

中国より招来された彫漆器は、我が国では室町時代から盛んになった書院飾りや茶の湯の道具として珍重されてきた。東アジアの文化交流を考えるにあたっても、欠くことのできないものであり、当館では積極的に収集をすすめるとともに、文化交流展示「唐物飾り」においても、常に展示、公開している。本年度は、上欄に記した「主な成果」をあげるため、以下の調査研究をおこなった。

１）館蔵品をはじめとし、関連作品を所蔵する国内外の美術館・博物館の所蔵品約 80 点の作品調査をおこなった。とくに、当館でＣＴ撮影などの科学分析が可能な作品についてはデータを収集した。

２）トピック展「彫漆　漆に刻む文様の美」を開催し、展示室内の解説キャプションやパネル、ミュージアムトークおよび図録論考、作品解説において上記の成果を公表した。

トピック展示「彫漆　漆に刻む文様の美」
会場風景

【実績値】

○作品調査回数
　海外　2ヶ所（中国・山東省博物館、北京故宮博物院）
　国内　8ヶ所（東京国立博物館、愛知・徳川美術館、東京・静嘉堂文庫美術館、個人所蔵者など）
○調査作品数
　約 80 点
○トピック展開催数
　1回　「彫漆　漆に刻む文様の美」（平成 23 年 6 月 14 日～7 月 31 日）
○論文掲載数
　1回　展覧会図録『彫漆　漆に刻む文様の美』九州国立博物館

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4514-5

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	作品調査回数	調査作品数	トピック展開催数	論文掲載数		
判定	A	A	A	A		
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価については、今後見込まれる発展性および継続性から左記の判定が妥当と考える。また、定量的評価については、公表した実績値から左記の判定が妥当と考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、貴重な成果をあげており、順調に遂行することができたと考える。本事業については、今後も外部資金の活用や他館との共同調査の実施により、調査研究を継続していきたいと考える。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究（(5)－②）

【事業概要】

東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。これらは、博物館草創期の明治時代初期に、文部省（現：文部科学省）より引き継いだ江戸幕府旧蔵資料を中心とする資料群よりなっている。また洋書には江戸幕府旧蔵資料の他にも、ドイツ人医師シーボルトより献納された数百冊を含んでいる。貴重図書として保管されてきたこれらの詳細調査を実施し、その学術的意義を明らかにすることを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長　高橋裕次

【スタッフ】

田良島　哲（調査研究課長）、住広昭子（博物館情報課情報資料室専門職員）

【主な成果】

・漢籍は、これまでに江戸幕府旧蔵資料である医学関係のものを中心に調査を行ってきたが、一段落がついたため、全体の調査に着手し、本年度は 485 点の書誌学的調査を終了した。
・洋書については、ほぼ全体にあたる 973 点の書誌学的調査をほぼ終了し、図書館システムへのデータの入力を行った。

【年度実績概要】

1. 漢籍には、経年によって劣化や綴じ糸の欠失しているものが多い。調査では書誌データを図書館システムに入力するとともに、保存状態の把握につとめ、必要に応じて糸綴じの簡単な手当を行った。

2. 洋書については、かつて科学研究費補助金で行った江戸幕府旧蔵資料の洋書のデータを参考にしながら、全体の書誌データを図書館システムに入力した。当館の洋書は、蕃書調所などの旧蔵書を含む点で国立国会図書館の所蔵する洋書と共通するが、ほとんどが原装を残している点が当館の洋書のもっとも大きな特徴である。

『スリナム産昆虫変態図譜』
マリア・シビラ・メリアン 1705

【実績値】

調査およびデータ入力点数　漢籍 485 点、洋書 973 点
写真撮影点数　50 点、

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A

備考
　漢籍、洋書については、これまでは科学研究費補助金「江戸幕府旧蔵資料の総合的研究」による部分的な調査の成果を本館 16 室における歴史資料の特集陳列で公開してきた。しかし、本事業における書誌学的な調査によって、全貌を把握することができるようになったことで、それぞれの学術的意義などを明らかにするための基礎固めができた。

2．定量的評価

観点	論文数等	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数		
判定	A	A	A	A		

備考
　調査では、漢籍、洋書ともに名称、員数、成立年代、伝来に関わる情報をデータ化し、図書館システムに入力している。とくに洋書については、デジタル撮影なども実施しており、保存上の理由から閲覧に供することのできない資料であっても、書誌データをともなう画像によってその詳細を公開することができるようになったことは大きな進展であるといえる。また、閲覧室内の展示ケースにおいて、解説を付して展示による公開を行っている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館の所蔵する漢籍、洋書について、書誌データおよび画像を入力し、インターネットで広く公開するための準備を進めることができた。次年度からは、漢籍の調査を促進するとともに、主要な作品に関して解題を作成するなど、学術的情報の提供に努めていきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	漢籍・洋書ともに、その保存状況をほぼ把握することができた。原装を残している貴重な図書を、後世に永く伝えていくためには、必要最小限な処置によって現状を維持し、形状や大きさに応じた配架を行うなどの配慮が必要である。今後は保存修復課と連携しながら、適切な保存方法について、さらに検討を続けていく予定である。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-2

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）東洋民族資料に関する調査研究　((5)-②)

【事業概要】

東京国立博物館が所蔵する約 3,500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究をおこなう。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質のほかに、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からない情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報をより充実した形で整備する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課研究員　川村佳男

【スタッフ】

丸山清志（客員研究員）

【主な成果】

東洋民族の収蔵品のうち、台湾先住民族の生活および宗教儀礼にかかわる資料の未調査分について調査した。調査で得られた情報をデータベースに反映させることで、研究・陳列・保管・修理などに資する基礎情報が従来よりも一層充実した形で整備された。また、過去に調査済みの分とあわせて台湾先住民族資料の基礎調査を完了させることができた。

【年度実績概要】

東京国立博物館が所蔵する台湾先住民族資料のうち未調査分について、計測値・員数・形状・材質・所在・保存状態を調査し、画像とともにデータベースに追加した。また、明治から昭和初期にかけて当館に収蔵される以前の箱書きや札が添えてあれば逐一その内容を記録し、伝来や年代の解明に役立てるようにした。

調査の結果、形状・品質について当館の台帳には記載されていなかった知見を得ることができた。これらの知見により、2013 年にリニューアルオープンする東洋館での台湾先住民族資料の展示準備をさらに促進することができた。このほか、同資料の東洋館への輸送や東洋館の収蔵庫内での保管についても、有益な情報を得ることができた。

東洋民族資料に関する調査研究のうち、平成 21 年度より進めていた台湾先住民族資料の所蔵品に関する基礎調査は、今年度を以って完了させることができた。

【実績値】

調査回数：4 回。作品調査件数：100 件。データベース更新件数：100 件。撮影点数：約 200 カット。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	A	A	A

備考
　東洋館収蔵庫への移動、および東洋館での展示・保管を次年度に控えたタイミングで、当館所蔵の東洋民族資料の大半を占める台湾先住民族資料の基礎調査を終えることのできた意義は大きい。調査の結果、次年度に予定している台湾先住民族資料の移動・保管・展示の準備をいっそう進めることができたといえる。

2．定量的評価

観点	調査回数	作品調査件数	データベース更新件数	撮影件数		
判定	B	A	A	A		

備考
　今年度は東洋館リニューアルオープンや特別展にかかわる業務が集中するため、前年度よりも少ない数値目標を設定した。しかし、東日本大震災の長引く影響、昨年まで調査に参加していたスタッフの異動といった不測の事態により、調査の実施回数は所期の数値には至らなかった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	メンバーの異動や減少などにより、調査の経常的な実施が一層困難になった。その状況のなかで、台湾先住民族資料の基礎調査を完了させ、最低限の目標を達成することができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	台湾先住民族資料の基礎調査の結果を、次年度以降の東洋館における展示・保管に結実させることが最大の課題である。また、これまで重点的に調査を積み重ねてきた南太平洋の民族資料、今年度基礎調査を完了させることのできた台湾先住民族資料のほかに、東洋館での新たな展示ソフトの開発につながる東洋民族分野の調査も継続する必要がある。次年度も今年度と同様に特別展や東洋館リニューアルオープン準備などの業務が集中するため、次年度の数値目標は今年度並みに設定する。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-3

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究（科学研究費補助金）（(5)－②）

【事業概要】

国内外に所蔵される東アジアの書道史に関わる作品について、1 点ごとに詳細な書誌や伝来などの情報と、デジタル画像を収集する。さらに、科学機器を用いて、料紙の技法、変遷、使用法を検証するとともに、時代による書風の特徴やその変化などを調査研究する。また、個々の作品に関する歴史的・文学的調査も進める。これらによって、書の作品を、料紙と書風という二つの側面から解明し、複合的・総合的なデータ作成を行う。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	副館長　島谷弘幸

【スタッフ】

神庭信幸（保存修復課長）、高橋裕次（博物館情報課長）、富田淳（調査研究課長）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）、恵美千鶴子（学芸研究部調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー）、赤尾栄慶（京都国立博物館学芸部副部長）、羽田聡（京都国立博物館学芸部企画室研究員）、丸山猶計（九州国立博物館学芸部主任研究員）

【主な成果】

装飾料紙を用いた古筆・典籍を中心に、これまでに作成した対象作品のリストから調査を進めた。国内では、東京国立博物館・京都国立博物館・九州国立博物館・陽明文庫等、海外では中国の香港芸術館、上海博物館、北京故宮博物院等、スイス・リートベルク博物館等に収蔵されている作品について、デジタル写真撮影と、作品の筆跡および料紙に関する調査を実施した。

【年度実績概要】

1．東京国立博物館所蔵の装飾料紙作品の調査とデータ化

東京国立博物館が所蔵する装飾料紙作品の調査とデータ化を行った。

2．特別展に関係する作品の調査とデータ化

2013 年度に東京国立博物館で開催予定の特別展「和様の書」（仮称）においては、本研究と関係の深い作品が一堂に展示される予定である。その展示準備を兼ねて、関係作品のリスト作成と調査を進めた。

3．他機関への調査

国内では、京都国立博物館、九州国立博物館、京都・陽明文庫、広島・ふくやま書道美術館、奈良・大和文華館へ出張し調査を行った。海外では、中国・香港芸術館、上海博物館、浙江省博物館、寧波博物館、北京故宮博物院、台湾・国立故宮博物院、スイス・リートベルク博物館へ出張、装飾料紙を用いた写経・古筆・典籍等の調査を行なった。許可の出た作品に関しては、東京国立博物館内部での調査と同様に、顕微鏡による料紙の拡大画像の撮影を行い、データの充実をはかった。

4.成果の公開

これまでに蓄積してきた調査結果より得られた成果を、総合文化展本館 3 室（仏教の美術、宮廷の美術）等の展示解説等で公開した。また、ホームページ「1089 ブログ」の「書を楽しむ」シリーズにおいて、成果を公開した。

料紙の文様を確認するために、斜めより撮影

【実績値】

・調査件数 約 50 件、写真撮影点数 約 800 点、データ入力点数 約 300 点

・研究会などでの発表　6 件

　島谷弘幸「書の変遷　その必然性と未来」（大正大学書道カレッジ）平成 23 年 8 月 6 日　ほか計 6 件

・論文掲載数　10 件

　島谷弘幸「一休一行書」（『聚美』第 2 号、青月社発行、平成 24 年 1 月）　ほか計 10 件

・成果公開件数　31 件（展示 22 件、ホームページ 9 件）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	S	A

備考
本研究はすでに３年間の基礎研究（平成19年度～21年度科学研究費基盤研究（Ｂ））を行っており、実質的には５年目にあたる。継続して行っていることで、基礎的なデータを確実に収集している。オリジナリティの高い調査内容であるが、調査方針の再検討も行った上で、その調査方法は確立したと言える。その方法にしたがって他機関においても調査を進めることができた。科学研究費を使用して、協力者を増やし、より多くの情報を得ることができた。

2．定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数	研究会発表件数	論文掲載件数	成果公開件数
判定	A	A	A	B	A	A

備考
本年度の当初より他機関での調査を行っており、調査件数や調査データの入力点数は目標件数に達している。調査の成果を展示やホームページ等で年間を通して定期的に公表できた。研究会発表の件数をもう少し増やしたかった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は継続的に行なう調査により、効率が上がっている。その成果の公表についても、論文や展示等で確実に行うことができた。光学顕微鏡などの科学機器を用いた客観的なデータをさらに収集して、調査の内容を充実したものにすると同時に、さらなる成果を刊行物などで公開していく方針である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの博物館の国際交流の実績を反映して、海外においても中国やスイスなど東アジアの書道史に関わる資料の調査を行うことができた。今後も、その調査を継続的に行っていく必要がある。また、これまで収集した調査データや成果をひろく公表するとともに、所在情報や、調査方法について、相互に連絡を取り合っていきたいと考えている。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)中国書画の表装に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)-②)

【事業概要】
本研究は、中国の諸文献から表装に関する記述を整理し、歴史的な様式の変遷を明らかにしつつ、日本および中国に収蔵される中国書画を実際に調査し、「中国表装」および「日本表装」の双方について、時代や地域ごとの様式や素材のデータを網羅的に収集・整理し、表装の変遷に関する体系的な調査研究を進めようとするものである。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課長　富田淳

【スタッフ】
東京国立博物館：富田淳(列品管理課長)
台東区立書道博物館：鍋島稲子(主任研究員、東京国立博物館客員研究員)

【主な成果】
『書史』『画史』北宋・米芾遠などの中国歴代の文献から、書画の表装に関する記載を収集・整理した。また、北京故宮博物院・遼寧省博物館・京都国立博物館・大阪市立美術館・台東区立書道博物館・東京国立博物館に所蔵される主として中国の書画を調査し、表装の諸データおよび画像データを収集した。

【年度実績概要】
文献調査
・『書史』『画史』北宋・米芾、『南村輟耕録』元・陶宗儀、『斉東野語』南宋・周密等から、書画の表装に関する記載を収集・整理した。

作品調査
・北京故宮博物院「蘭亭特展」を視察、清朝宮廷作品約 50 件を調査した。
・遼寧省博物館の所蔵する中国書跡 50 件を調査した。
・大阪市立美術館の所蔵する中国書画 5 件を調査した。
・京都国立博物館の所蔵する中国書画 20 件を調査した。
・台東区立書道博物館の所蔵する中国書跡 12 件を調査した。
・東京国立博物館の所蔵する中国書跡 6 件を調査した。

上記の成果に基づいて、国内国外の研究会で発表し、東京国立博物館と台東区立書道博物館の連携企画展に反映させた。

【実績値】
・調査回数：7 回(海外 2 回、国内 5 回。
・調査作品件数：143 件(撮影点数約 120 カット)
・論文発表件数：2 件
　富田淳「呉昌碩と長尾雨山」(『呉昌碩の書・画・印』)、鍋島稲子「呉昌碩と朝倉文夫」(『呉昌碩の書・画・印』)
・研究会発表回数：3 回
　富田淳「趙孟頫蘭亭十三跋小考～焼残時期について～」(北京故宮博物院)ほか計 2 回、鍋島稲子「1913 年蘭亭記念会雑考」(北京故宮博物院)
・展覧回数：1 回
　「呉昌碩の書・画・印」、9 月 13 日～11 月 6 日、東京国立博物館・台東区立書道博物館

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
本研究は３年計画の２年目にあたり、文献の整理および内外に現存する作品調査から得られたデータは着実に増え、その成果の一部を、東京国立博物館と台東区立書道博物館の連携企画展や、国内・国外における研究発表会において公表することができた。将来的には、毎年継続して実施している中国書画の修理において、修理方針を検討する際の基礎データとして有効な資料となりうる。

2．定量的評価

観点	調査回数	調査作品件数	論文発表件数	研究会回数	展覧回数	
判定	A	A	B	A	A	

備考
論文発表件数は昨年を下回ったが、調査回数は昨年度とほぼ同様、調査作品件数、研究会回数、展覧回数は昨年度以上の成果をあげることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データは当初の研究計画にそって蓄積・整理が進んだ。また本研究で得られた成果の一部を、論文や学会発表として公開することもできたためＡと判断した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	本研究は当初の研究計画にそって、ほぼ順調にデータの蓄積・整理・発表ができたと考える。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5）光学的調査に基づく高雄曼荼羅の発展的研究（科学研究費補助金）（(5) -②）

【事業概要】
本研究では高雄曼荼羅（京都・神護寺所蔵）の重要性を考え、その研究推進を図るために、最先端の撮影技術を用いた高精細デジタル画像および赤外線画像の撮影を全面的に行う。さらに新たな高雄曼荼羅研究の端緒と成せるよう、研究者それぞれが絵画・彫刻・工芸等の専門性を生かし、空海と彼を取りまく仏教美術を考察するのに重要と思われる観点を取り上げて調査・研究を行うものである。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長　松本伸之

【スタッフ】
松本伸之（学芸企画部長）、丸山士郎（博物館教育課教育講座室長）、伊藤信二（博物館教育課教育普及室長）、
澤田むつ代（特任研究員）、沖松健次郎（企画課特別展室主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、
安藤香織（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）

【主な成果】
高雄曼荼羅 2 幅のうち胎蔵界曼荼羅について、高精細デジタルカラーおよび赤外線の画像撮影を、京都国立博物館にて実施した。また空海が滞在し所謂「根本曼荼羅」を賜った西安において、西安碑林博物館、陝西歴史博物館、青龍寺など関連する作品、史跡の調査を実施した。根本曼荼羅は高雄曼荼羅のもととなった作品であると考えられており、唐時代の作例の調査は次年度以降の各研究にとって重要な要素となる。

【年度実績概要】
1、高雄曼荼羅撮影
高雄曼荼羅 2 幅のうち、まず胎蔵界曼荼羅について、高精細デジタルカラーおよび赤外線の撮影を行った。撮影は作品の寄託されている京都国立博物館にて、上記参加者ならびに京都国立博物館研究員の立会いのもと、作品取扱の専門業者と撮影担当の専門業者を雇用して実施した。カラー撮影は解像度 8000 万画素、赤外線撮影は解像度 4000 万画素の高性能デジタルカメラを使用し、カラー315 カット、赤外線 432 カットを撮影した（合計 747 カット）。撮影した画像の処理と合成は、撮影を担当した専門業者に依頼した。またこの撮影作業と平行して、絹の状態や絵画技法など細部の観察をし、必要に応じて部分の拡大写真を撮影した。これらの画像は今後の研究の基礎資料になる。

高雄曼荼羅撮影、調査（京博にて）

2、西安調査
本研究では、高雄曼荼羅の調査を端緒として、空海が唐から請来した根本曼荼羅の解明につながるような研究を目指している。長安（現、西安）は、空海が恵果に師事して修行に励んだ地で、高雄曼荼羅のもととなったと考えられる根本曼荼羅を恵果から賜った重要な場所である。今回は西安碑林博物館、陝西歴史博物館、西安市博物院などで先方の協力のもと関連作品の調査を行うと同時に、青龍寺や春明門跡、法門寺、興善寺など空海や密教に関連する事跡を追う事にも努めた。特に西安碑林博物館では、金剛像をはじめとする安国寺跡出土の石彫仏像 11 躯や、経咒画 2 件（いずれも唐代、7～10 世紀）など重要作品を仔細に調査することができた。また同時代資料として、陝西歴史博物館では陵墓より出土した多数の壁画を、西安博物院では仏像や陶俑などを調査することができ、高雄曼荼羅と根本曼荼羅を考察するのに有効な資料を得た。

【実績値】
高雄曼荼羅撮影日数：1 日
高雄曼荼羅撮影カット数（業者撮影数）：高精細デジタル画像 315 枚、赤外線画像 432 枚
西安調査件数：碑林博物館 13 件、陝西歴史博物館 13 件
西安調査撮影カット数：327 枚

【備考】
本研究は 11 月に追加採択を受けて始動したため、日程や実施項目等に当初計画との誤差がある。

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-5

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	B	A	A	A

備考
本研究は高雄曼荼羅について、これまでで最も精度の高い撮影を実施するものであり、撮影画像は基礎的な資料として各種研究に資することが見込まれる。従って、適時性、独創性については十分に評価できると考える。発展性はＢとしたが、本年度は基礎的な調査を始めたところであり、来年度以降に成果を期待できる。また調査は業者への委託も含めて効率良くできるよう努めており、得られた成果は十分に評価できるものと思われるため、効率性、継続性、正確性についてＡとした。

2．定量的評価

観点	高雄曼荼羅撮影日数	高雄曼荼羅撮影カット数	西安調査件数	西安調査撮影カット数		
判定	C	C	A	A		

備考
本年度の当初計画では、高雄曼荼羅の高精細撮影を２幅とも実施する予定であったが、所蔵者の都合上、胎蔵界曼荼羅１幅のみ実施することになった。そのためこれに関する撮影日数、カット数についてはＣと評価せざるを得なかった。西安調査は十分な成果を得ることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は追加採択を受けて 11 月より開始したため、本年度の研究期間は短かったが、一定の成果を得ることができた。本研究の主眼である高雄曼荼羅の高精細撮影は、所蔵者の都合上、胎蔵界曼荼羅のみ実施し、金剛界曼荼羅は次年度へ持ち越しとなった。そのためこの期間を有効に活用し、胎蔵界曼荼羅に見いだされた様々な問題点を熟慮して次回の撮影に臨みたい。また引き続き、アジアを視野に入れた「根本曼荼羅」の研究に有力な資料を得るため、中国や周辺各国における調査を勢力的に行いたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	本年度実施予定であった高雄曼荼羅の高精細撮影は２幅中１幅の実施に留まり、当初の研究計画とは異なる。しかし採択時期を考えれば、ほぼ順調に進んでいると言って良いだろう。所蔵者の神護寺や寄託先の京都国立博物館の協力も得る事ができており、来年度の撮影も問題なく実施できると思われる。本年度の各調査の結果、新たな調査方法、調査対象を取り入れる必要性も考慮されるため、これらについても十分に検討して次年度の計画へ反映させて行きたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-6
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6)「家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究」(学術研究助成基金助成金) (5-⑥)

【事業概要】
日本列島の古代国家形成期である古墳時代に、前方後円墳を中心とした古墳で執り行われた葬送儀礼を家形埴輪の群構成と階層性から分析・研究する。とくに東アジア農耕社会の集落建築や家形造形品との比較・検討から、復元的分析を通じてその特質を明らかにし、古墳時代社会の安定と成長に大きな役割を果たした古墳葬送儀礼とその背景にある古墳時代他界観(世界観)を解明するための基礎研究の確立を目的とする。
また、これまでに交付された科学研究費補助金Ｃ(2001～2002 年度)・Ｂ(2005～2007 年度)の調査・研究成果と併せ、調査資料・研究成果の学術的公開を目指す総合研究報告書の作成準備を進める。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課　古谷　毅

【スタッフ】　連携協力者：犬木　努(大阪大谷大学 文学部教授)

【主な成果】
科学研究費補助金Ｃ・Ｂ(2000～2002･2005～2007 年度)による調査･研究成果を基に、連携研究者および各地の研究協力者と共に研究会を組織・開催し、各地の主要古墳出土埴輪群の分析結果を検討した。
また、補足調査を実施し、発掘調査によって家形埴輪を含む埴輪配列が確認された良好な家形埴輪資料を再度精査して、埴輪樹立時の群構成と配置・階層性を復元する基礎資料を整備した。

【年度実績概要】
本年度は、連携研究者と日本古代史研究者を含む研究協力者と共に、23 年 10 月・24 年 2 月・3 月に、大阪府・京都府・滋賀県にて研究会を開催し、これまでの調査成果の確認と東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する問題点を検討・分析した。また、科学研究費補助金Ｃ・Ｂ(2000～2002･2005～2007 年度)の研究成果を含む、総合的研究報告書の内容・構成と体裁、および作成スケジュールの打合せを進めた。
資料調査としては、近畿・中国・関東地方の主要古墳出土資料を重点的に進めた。大阪府・京都府・広島県・滋賀県・群馬県などの古墳出土埴輪資料の調査を順次、実施した。
このほか、既存の調査資料の整理と東京国立博物館所蔵埴輪資料の調査準備を進めた。
既存調査資料では、写真・データ等の整理・分析を実施した。しかし、列品埴輪資料の整理・調査に関しては、館内における韓国国立中央博物館との研究交流事業および存在確認事業等の影響で、今年度は実施には至らなかった。

【実績値】
○調査回数 6 回、研究会回数 3 回、論文等公開 5 件
・主な調査資料　：広島県三ツ城古墳出土埴輪(広島大学所蔵)・大阪府七観古墳出土埴輪(京都大学所蔵)・大阪府百舌鳥御廟山古墳出土埴輪(堺市教育委員会所蔵)・滋賀県野洲大塚古墳出土埴輪(野洲市教育委員会所蔵)・栃木県甲塚古墳出土埴輪(上毛考古学研究所保管)

【備考】
(論文等公開)
・古谷　毅「家形埴輪の構造・変遷と分析視角」『埴輪研究会誌』第 15 号、埴輪研究会、129～145 頁、2011 年 5 月 29 日
・犬木　努「城山 1 号墳の埴輪列小考 ―後円部墳頂の埴輪列をめぐって―」『埴輪研究会誌』第 15 号、埴輪研究会、79～92 頁、2011 年 5 月 29 日
・犬木　努「埴輪の編年 ②東日本の円筒埴輪」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』同成社、187～200 頁、2011 年 12 月 25 日
・犬木努・近藤麻美「西都原 171 号墳出土蓋形埴輪の再検討―立ち飾り部の製作技法を中心として―」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 8 号、宮崎県立西都原考古博物館、23～34 頁、2012 年 3 月 31 日
・犬木努・近藤麻美「下総型人物埴輪の新例 ―大阪大谷大学博物館所蔵品から―」『大阪大谷大学文化財研究』第 12 号, 大阪大谷大学文化財学科、1～9 頁、2012 年 3 月 31 日

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-6

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	A	A	B	S	A

備考
適時性については、既存の科学研究費補助金による調査・研究成果の公開性において需要性・必要性があり、早期の公開を目指しているが、今年は館内事情で十分な緊急性には応えていない。
独創性については、古墳時代労働編制研究の視角を中心にして発想・着想しており、埴輪研究においてはオリジナリティおよび新規性には優れていると思われる。
発展性については、円筒埴輪中心であった従来の埴輪研究の多様性・汎用性に裨益し、研究視角の面からは先史考古学および古墳時代・古代史研究に与える応用性などに一定の成果があると思われる。
効率性については、連携研究者と共に日本古代史研究者を含む多数の研究協力者を得ており、予算運用の時間的・人的投資について有効であると思われる。一方、設備的投資については、消耗品を含めてほとんど行なっていない。
継続性については、これまで交付された科学研究費補助金による調査・研究成果を継承し、期間は適正で、質・内容・量ともに従来の調査・研究例を上回っており、本研究テーマの資料的基盤を構築する基礎性に優れている。
正確性についても、実測図の作成はほとんど行っていないものの、数値・データに関してはすでに写真撮影だけでも20,000カットを超えており、達成値・網羅性については従来の調査･研究事例に類似する成果は見られない。

2．定量的評価

観点	調査回数	研究会回数	論文等公開			
判定	A	A	B			

備考
調査回数・研究会回数については十分な成果があった。一方、東京国立博物館所蔵資料(列品)の調査および論文等公開については、今年度の館内事情によりやや不十分であった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	継続性については変更の必要が認められないと考えられるため、他の定性的・定量的評価により判定。次年度研究計画への改良・改善点については、補足調査の拡充によって調査精度の正確性をさらに高めると共に、今年度不十分であった東京国立博物館所蔵資料(列品)の整理･分析を進めることで、より研究予算運用の効率性・適時性を高めることを図りたい。また、研究会では、さらに古代史研究者等との研究協力を強化し、研究･分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図る。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析および学術的評価に関する十分な考古学的情報、および展示・解説(展示パネル・講演･ニュース等)・出版等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として比較的十分な蓄積を行ったと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。改良・改善点は3.総合的評価のように、より高度な効率性・適時性および発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次年度以降の計画へ反映させる予定である。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-7

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7）隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究（科学研究費補助金）（(5)－②）

【事業概要】
本調査研究は隋唐時代の舎利荘厳に注目し、その実際を美術史、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究分担者が詳細に調査し、総合的に考察を加えようとするもので、本年度は西安、涇川、天水、蘭州、廓州、南京、揚州、蘇州、杭州、紹興、寧波、済南、徳州、北京において現地調査を実施した。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室主任研究員　和田浩

【スタッフ】
加島勝（大正大学）、松本伸之（学芸企画部長）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、東野治之（奈良大学）、岡林孝作（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、泉武夫（東北大学）、長岡龍作（東北大学）

【主な成果】
中国各地において現地調査を行い、仁寿舎利塔起塔寺院に関する多くの地理的データ及び、文献的資料を多数収集することができた。

【年度実績概要】
1. 文献収集
中国側研究者と協力し、中国国内でこれまでに発表、出版された、仁寿舎利塔起塔寺院跡から出土した遺物の報告書、研究論文、書籍を収集し、今年度調査地点の絞込み、現地との連絡調整、旅程の決定を行った。

2. 現地調査の実施
2011 年 8 月に中国側研究協力者の協力のもと、西安、涇川、天水、蘭州、廓州、南京、揚州、蘇州、杭州、紹興、寧波、済南、徳州、北京において 23 日間に及ぶ現地調査を実施した。これにより現地における①仁寿舎利塔起塔寺院に関する地理的データ、②仁寿舎利塔出土遺物と隋代関連遺物、③関連岳廟、等に関する詳細なデータを収集することができた。

3. 国内関連調査の実施
2011 年 12 月に東京国立博物館所蔵の関連遺物の調査を行なった。

中国国内における寺院跡調査の状況

【実績値】
仁寿舎利塔起塔寺院跡調査数：9 地点

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-7

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳の実際について、美術史(彫刻史、絵画史、工芸史)、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究分担者が中国各地において詳細な現地調査を実施し、基礎資料を収集した。これにより、中国の造形美術を通して浮かび上がる信仰と思想について総合的な見地から考察をくわえる基礎が構築された。

2．定量的評価

観点	仁寿舎利塔起塔寺院跡調査数					
判定	A					

備考
　今年度は特に実資料を調査する機会に恵まれた。また、多くの制約が存在する中で地理的データが相当数収集できた成果は大きいと考える。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳の実際について、中国各地において詳細な現地調査を実施し、基礎資料を収集することができた。集積された基礎的データは従来にない重要な新知見を数多く含んだものである。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳の実際について、現地調査や研究会等を通じて、美術史(彫刻史、絵画史、工芸史)、考古学、歴史学、保存科学的見地からのデータ収集を当初計画の通り進めることができた。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-8
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8）南宋絵画史における仏画の位相－都と地域、中国と周縁－（(5)－②）

【事業概要】
従来まで特殊なジャンルと思われていた南宋時代の仏教絵画を中国絵画史のなかに位置づける試みを行う。そのために従来の南宋絵画史を批判的に検証し、さらには日本、中国、アメリカ等に所蔵される、異なった位相の南宋絵画を包括的に調査する。また、文献的調査についても継続的に行い、作品と文献の両面から、南宋時代における仏教絵画、ひいては仏教文化の具体的な様相を明らかにする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室研究員　塚本麿充

【スタッフ】
塚本麿充（調査研究課東洋室研究員）

【主な成果】
①作品調査：東京国立博物館所蔵品、関西を中心とする美術館、および北京故宮博物院展開催にともなう調査を行った。②事業：今年度は「関西中国書画コレクション展」の開催年であり、10 月には記念のシンポジウムが開催された。また北京故宮展の開催にともなって 1 月には記念のシンポジウムが開催された。そのほかの研究会、ワークショップ等に参加することができた。③成果：論文と研究発表、講演の形で公開することができた。

【年度実績概要】
1、関西中国書画コレクション等の調査
中国書画の世界的宝庫である、関西地区の中国書画コレクションの継続的調査を行った。また、今年は関西中国書画コレクション展の開催年であり、「関西中国書画コレクションの過去と未来―収集から一世紀、その意義を考える―」（2011.10.22・23、泉屋博古館（京都））を行って、コレクションの形成と意味を広く認識する機会とすることができた。この成果は、論文集として刊行予定である。
2、東京国立博物館所蔵品等の調査
所蔵品のうち、金大受「十六羅漢図」、蔡山「羅漢図」等、寄託品のうち「千手観音像」（永保寺）などを調査し、写真撮影を行った。その成果として、総合文化展「中国書画」（本館特別 1 室、2011.6.28～7.24）において、明時代に至るまでの羅漢・寒山拾得・観音の居士図像を体系的に展示することができた。
3、北京博物院所蔵品等の調査
北京故宮博物院展開催にともない、出陳作品を中心に、詳細に実見することができた。これらは通常、調査が困難な作品が多数を占めるため、非常な僥倖に恵まれたと言う他なかった。成果の一部は、下記記念シンポジウムで発表することができ、またシンポジウムの論文集も刊行予定である。さらにそれらの成果として、記念講演「乾隆帝の書画鑑賞」（東京国立博物館、2012.1.28）を行うことができた。
4、紫禁城および北京地区の寺観等の調査
作品調査と並行して紫禁城を詳細に見学することができた。また、碧雲寺金剛宝座塔、雍和宮、白塔寺、智化寺などを見学する機会に恵まれ、北京の仏教空間について新たな知見を得ることができた。
5、ボストン美術館、福岡市美術館等の調査
そのほか、「国際シンポジウム「韓国美術研究のいま」」（福岡市美術館、2012.2.12）、「南宋絵画研究の現況と課題Ⅰ：李唐をめぐって」（九州大学、2012.2.13）、ボストン美術館、サックラー・ギャラリー（調査）、及び Harvard 500 Luohans Workshop（ハーバード大学、2012.2.14-18）等に参加し、多くの知見を得ることができた。
6、研究発表
「宋代開封の文物配置と大相国寺壁画の意味」（2011.4.16 宋代史談話会、大阪市立大学）
「公開研究会 実物とデジタル画像による文化財考察―中国花鳥画の彩りに迫る―」（2011.11.12、黒川古文化研究所）
「清明上河図から見た開封の文化的空間」（2011.12.4 シンポジウム「前近代中国都市社会と公共空間」、大阪市立大学）
「徽宗、後白河院と『清明上河図』の視覚文化」（2012.1.7、「北京故宮博物院 200 選」開催記念国際シンポジウム「『清明上河図』の魅力に迫る―東アジア文化史のなかの『清明上河図』」、東京国立博物館）
7、論文
「皇帝の文物と北宋初期の開封-啓聖禅院、大相国寺、宮廷をめぐる文物とその意味について-（上）（下）」『美術研究』404 号、406 号
「呉昌碩の画―近代・東アジアの光のなかで―」『呉昌碩の書・画・印』東京国立博物館、台東区書道博物館
「「清明上河図巻」の魅力―「清明上河図巻」と宋代の視覚文化―」、「清朝の国際交流」『特別展 北京故宮博物院 200 選』東京国立博物館

【実績値】
論文数 5 本、調査件数 10 回、写真撮影点数約 1,000 枚、研究会発表 4 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-8

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　今年度は北京・故宮博物院展の準備のため、館外の調査はあまり行えなかったが、故宮博物院と北京を中心とする仏教文化について十分な調査を行うことができたことは、非常な僥倖であり、特筆すべき成果であったと言ってよい。

2．定量的評価

観点	論文数等	調査件数	写真撮影点数	研究会発表		
判定	A	A	A	A		

備考
　今年度の特筆すべき点として、北宋初期の仏教文化についての論文を発表することができ、長い時間をかけた論文であるため、非常に満足できる成果公開となった。また東京国立博物館所蔵品を中心として写真撮影を行うことができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	より包括的な中国仏教文化の理解を目指と、士大夫を中心とする文人文化との接点を模索するため、さらなる調査が必要である。特に江南・四川地域の寺観の調査、日本やアメリカの作品調査が急務であり、今後はこの方面の調査を広げていきたい。併せて、東京国立博物館所蔵品の調査、および文献的な調査も継続する。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	初年度としては順調に計画を行うことができた。次年度以降、さらに計画を進め、その成果は総合文化展、特別展の開催で活用していきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-9
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	9）アジアの木地螺鈿－その源流、正倉院宝物への道をたどる－（科学研究費補助金）（(5) -②）

【事業概要】
貝の光沢を装飾に用いる螺鈿は漆地螺鈿、木地螺鈿、玳瑁地螺鈿などに分けられる。本研究は、19 世紀以降になってベトナムで盛んに作られる木地螺鈿について、その実態や広がり、変遷、技術、地域間関係、地域社会における螺鈿の位相、といった問題を、九州国立博物館所蔵資料の調査や、中国南部やベトナムを中心としたフィールド・ワークによって検討し、アジアの工芸史の中に木地螺鈿を位置付けようするものである。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課　猪熊兼樹

【スタッフ】
小林公治（九州国立博物館学芸部文化財課資料管理室長）

【主な成果】
本研究の調査において採取したベトナム螺鈿の器物資料の資料的価値について、「ベトナム螺鈿の器物資料に関する知見」と題する論述を九州国立博物館紀要『東風西声』第 7 号（2012 年 3 月刊行）に寄稿した。ベトナム螺鈿の素材・器種・意匠などについて、器物の背景にあるベトナムの歴史や文化についても理解を及ぼす必要の在ることを論じた。

【年度実績概要】
本研究の調査において採取したベトナム螺鈿の器物資料れの資料的価値について、「ベトナム螺鈿の器物資料に関する知見」と題する論述を九州国立博物館紀要『東風西声』第 7 号（2012 年 3 月刊行）に寄稿した。その概要は下記の通り。

ベトナム螺鈿の実態については不明なところが少なくない。かかる状況のなか、筆者らはベトナム螺鈿の歴史・産地・素材・技法・意匠・用途などに関する調査に携わってきた。調査にあたっては、ベトナム各地の博物館施設・工房・古器物商・個人宅を訪れ、螺鈿器を調査し、製作工程を記録し、工具・素材・器物に係る資料を採取するとともに、阮朝王宮・華僑邸宅・キリスト教会などを訪れ、螺鈿器を用いる歴史と文化の理解に努めた。本稿では、ホーチミン市内において採取した四点の螺鈿器「家屋人物図木地螺鈿檳榔櫃」「村落人物図貝地螺鈿台脚付茶盆」「花蝶図漆地螺鈿十四花形提食籠」「花卉文木地螺鈿十字架」の資料的価値を記す。西洋において発達した科学理論を背景とする産業革命が興る以前の前近代世界にあっては、工芸品の形式には地域や民族の風土・習俗・社会などが大きく反映していた。このことはベトナム螺鈿器についても同様である。そのようなことを念頭において、ベトナム螺鈿の素材・器種・意匠などについて、その背景にあるベトナムの歴史や文化についても理解を及ぼす必要性があることを論じる。

【実績値】
調査回数　1 回
データ収集件数　画像 20 カット
論文掲載件数　1 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-9

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数	データ収集件数	論文掲載件数	調査回数		
判定	B	B	A	B		
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査回数が減り、データの収集量が少なくなったが、これまでの調査に基づいた研究発表を行なっているため。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	予定の計画よりも一層のデータを収集すべき必要性を感じたため。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-10

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	10）高雄曼荼羅の調査研究（メトロポリタン東洋美術研究センター研究助成金）（(5) -②）

【事業概要】
空海が唐より請来した曼荼羅を、空海の指導下に模写した京都・神護寺所蔵の両界曼荼羅（高雄曼荼羅）は、密教美術にとどまらず、教学、歴史など密教に関わるあらゆる分野における根本資料である。しかしその曼荼羅は縦横が 4 メートルを超す大幅で、取り扱いが困難であること、保存状態が良好でないことなどから公開される機会は少ない。また、公開されても大幅であるゆえに実際に観察できる範囲は限られる。本研究は、これまでに十分な画像資料の無い高雄曼荼羅の高精細画像を作成し、今後の研究の基礎資料を整える。

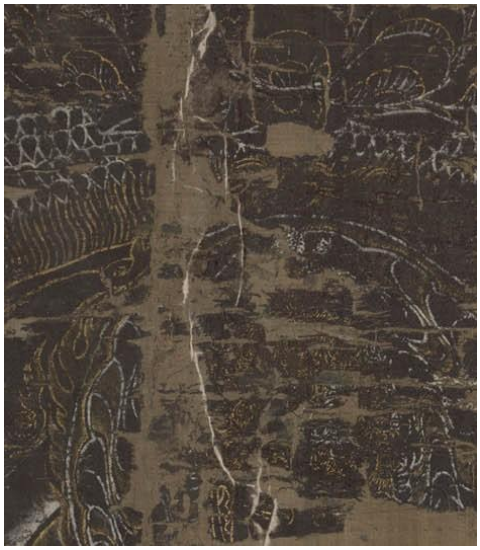
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長　松本伸之

【スタッフ】
丸山士郎（博物館教育課教育講座室長）

【主な成果】
高雄曼荼羅のうち胎蔵愛曼荼羅について、高精細デジタル画像および赤外線画像の撮影を実施した。現状では変色のため確認困難な銀泥線を、画面の 9 分の 1 のみであるが画像処理によって本来の銀泥の色に復元をした。それによって描線の全てを見ることができるようになり、製作当初の表現を考える上で貴重な資料となった。

【年度実績概要】
東京国立博物館で展示中（空海と密教美術展）に、作品の調査、細部の写真撮影を実施した。高雄曼荼羅のほか、西院曼荼羅（教王護国寺所蔵）、血曼荼羅（金剛峯寺所蔵）など関連作品の調査、写真撮影を実施した。
東京国立博物館での調査を踏まえ、撮影担当の専門業者を雇用して、京都国立博物館で再度調査、写真撮影を実施した。カラー撮影に用いるデジタルカメラは解像度 8,000 万画素、赤外線撮影に用いるデジタルカメラは解像度 4,000 万画素のものを使用し、高雄曼荼羅（胎蔵界）をカラーおよび赤外線で撮影した。作品全体の 9 分の 1 について、現状では変色によって確認困難な銀泥線を、画像処理によって製作当初に近い色に復元し、作品本来の表現を見ることができるようになった。

高雄曼荼羅（不動頭部）


高雄曼荼羅（部分、銀泥線復元）

【実績値】
撮影カット数：カラー画像 660、赤外線画像 15

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4521-10

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
　これまでに十分な画像資料の無かった高雄曼荼羅について詳細な画像を作成した。高雄曼荼羅は、美術にとどまらず、密教の教学、歴史など、密教に関わるあらゆる分野の根本資料であり、さまざまな研究分野において極めて有用な資料となる。

2．定量的評価

観点	写真撮影点数					
判定	A					

備考
　カラー画像、赤外線画像とも目標どおりの画像資料を作成することが出来た。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまでに十分な資料が無かった高雄曼荼羅について、詳細な画像資料を作成することが出来、作品本来の姿を復元的に考えることも可能にした。それらは、今後の高雄曼荼羅研究に大いに活用できる。また、関連する作品についても調査、写真撮影を実施した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	助成金は 23 年度限りではあるが、本研究を継続的に進めて行くことで達成に至るものと考える。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4523-1
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）中国・韓国などアジア諸国の文化財に関する調査研究を積極的に進め、日本の文化財との比較検討や相互理解に資する。（(5)－②）

【事業概要】
仏教美術を中心に、日本のみならず広くアジアを視野に入れた展示活動を展開している奈良国立博物館の特性に鑑み、中国や朝鮮半島などアジア諸国の文化財に関する調査研究を行って、その魅力を積極的に発信することに努める。調査研究成果の蓄積と併行して中国・韓国などアジア諸国の研究者との交流や共同作業を積極的に進め、日本の文化財との比較検討や相互理解などに資するとともに、将来の展示活動等に向けた情報収集を行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】
西山厚（学芸部長）、岩田茂樹（学芸部長補佐）、内藤栄（学芸部長補佐）、稲本泰生（前企画室長）、吉澤悟（前教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（前情報サービス室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、清水健（前教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）

【主な成果】
学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館との間で職員の派遣・受入を実施し、活発な研究交流・情報交換を行った。また「誕生！中国文明展」の開催を通し、平成 17 年以来交流を行ってきた中国河南省の文化財に関する調査研究の成果を、展示及びこれに伴う講座等に反映させた。このほか中国（遼寧省）、韓国（ソウル、扶余）において将来の特別展に向けた文化財調査を実施する傍ら先方諸機関と研究交流を行い、調査資料及び有益な情報を蓄積した。

【年度実績概要】
① 学術交流協定を結んでいる韓国国立慶州博物館から 2 名の研究員を各 1 ヶ月間招聘、当館からは同館へ 1 名を約 1 ヶ月間派遣し、研究交流・情報交換を行った。また正倉院展開催に際して同館から、館長ほか 1 名を招聘した。
② 学術交流協定に基づき、中国・上海博物館から 3 名の職員を 10 日間招聘し、研究交流・情報交換を行った。
③ 中国・遼寧省に研究員 1 名を派遣し、平成 25 年度に開催する特別展「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮称）」出陳予定文物の調査を遼寧省文物考古研究所等で実施し、先方諸機関との間で研究交流を行った。
④ 韓国国立中央博物館の特別展「肖像画の秘密」に協力した際、研究員 2 名を同館にクーリエとして派遣し、作品の輸送・点検とともに研究交流及び情報交換を行った。
⑤ 「誕生！中国文明」展開催に際して 147 点の文化財を中国河南省から借用し、展示した（22 年度に東京国立博物館・九州国立博物館で行われた展示の巡回展。図録は前年度刊行）。展示に際してはクーリエとして計 6 名、開会時には河南省の文化財関係者 4 名を代表団として受け入れた。また作品返却時には研究員 1 名をクーリエとして現地に派遣し、これらを通して相互に研究交流と情報交換を行った。会期中には河南省文物に関する当館研究員の調査研究成果に基づく公開講座を 3 回実施し、新聞記事の連載を計 9 回行った。
⑥ 中国・河南博物院との間で締結されている学術交流協定を更新し、今後も研究交流を継続的に行うこととした。
⑦ 韓国国立中央博物館及び扶余博物館に館長以下計 3 名を派遣し、平成 26 年度特別展「百済（仮称）」開催に向けた情報交換及び出陳予定文化財の予備調査を実施した。

河南博物院との学術交流協定調印式（於：河南博物院）

【実績値】
研究員等派遣人数　11 名
研究員等受入人数　17 名
研究会・講座等発表回数　3 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4523-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　学術交流協定を締結している博物館をはじめとする中国・韓国の諸研究機関との間で行った、研究員等の派遣・招聘等を通して、仏教美術を中心とするアジア諸国の文化財調査を進め、将来の展示活動等につながる資料の収集や先方の研究者との信頼関係の強化などの実績を挙げることができた。また「誕生！中国文明」展において中国・河南省の優れた文物を一堂に展示し、平成 17 年度以来行ってきた河南博物院との学術交流に基づく、これまでの調査研究の成果を反映できたことも特筆される。

2．定量的評価

観点	研究員等派遣人数	研究員等受入人数	研究会・講座等発表回数			
判定	A	A	A			

備考
　中国・韓国への研究員等の派遣や両国からの研究員等の招聘など、活発な往来を通して仏教美術を中心とした両国の文化財に関する調査資料や情報を、着実に収集することができた。海外の博物館等との研究交流に関しては、量的にみても将来の展示活動等に向けた信頼関係を築くに足る実績を挙げた。また「誕生！中国文明」展においては、これまでに蓄積した調査研究の成果を一定回数の講座で公表する等の実績を挙げることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	奈良に立地し、仏教美術を文化財の収集・展示・調査研究活動等の中核に据えている当館にとって、アジア諸地域の仏教美術を中心とした文化財に対する調査研究は、わが国の作例に対する調査研究の深化や、展示活動の充実等を図る上で不可欠な業務である。この認識に基づいて、学術交流協定による研究交流を中国・韓国の博物館との間で長年にわたって行うなどして、調査資料の蓄積や信頼関係の構築等に努め、それを展示活動や研究成果に反映させてきた。本年度もその延長上に位置づけられる交流・調査等の活動を展開し、質量ともに十分な実績を挙げることができた。次年度以降も中国・韓国の文化財を対象とした特別展を計画しており、同様の事業を継続的に進める必要がある。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	学術交流協定に基づく中国・韓国の博物館への研究員の派遣等を通して、アジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究を着実に遂行し、将来の展示等に向けた資料の蓄積を進めている。次年度以降も中国・韓国の文化財を出陳する 25 年度特別展「遼寧省仏教文物展（仮称）」、26 年度特別展「百済（仮称）」等を計画しており、開催に向けて、当該テーマに沿った調査研究をさらに深化させて行く予定である。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4523-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）日本とアジア諸国の文化交流に関する調査研究を進め、その成果を展示や公刊物等に反映させる。（(5)－②）

【事業概要】
「国宝　鑑真和上展」「聖地寧波－日本仏教 1300 年の源流」（平成 21 年）、「大遣唐使展」（同 22 年）など、日本とアジア諸国の文化交流をテーマとする展示活動を展開してきた奈良国立博物館の実績を重視し、国内外所在の請来系文化財及びその影響の濃厚な文化財、日本とアジア諸地域間の文化交流に関係する諸事象等を対象とした調査研究を行い、その成果を展示や刊行物等に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】
西山厚（学芸部長）、岩田茂樹（学芸部長補佐）、内藤栄（学芸部長補佐）、稲本泰生（前企画室長）、吉澤悟（前教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（前情報サービス室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、清水健（前教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）

【主な成果】
特別展「天竺へ－三蔵法師三万キロ」開催に伴い、日本の古代～中世における中国・インド両国に対する認識、仏教を介した両国の文化・文物の受容、玄奘のインド求法行がそれらに与えた影響等の問題について調査研究を行い、その成果を当該展示・刊行物・講座等に反映させた。またこれ以外にも日本とアジア諸国の文化交流に関連する内外の研究プロジェクトに積極的に参加し、研究発表・論文等を通してその成果を公表した。

【年度実績概要】
① 特別展「天竺へ－三蔵法師 3 万キロの旅」開催にあたり、全巻が展示された「玄奘三蔵絵」の題材となった玄奘の求法行、絵巻及び関連絵画作例の図様における大陸からの影響、中世南都における中国・インドの表象及びその背景、等の問題について考究を行い、その成果をパネル等の解説、展覧会図録所載の総論・各論等に反映させた。また当館が企画運営した夏季講座「玄奘三蔵とシルクロード」においても当該テーマに沿った内容構成を行い、3 名の研究員が研究成果に基づく講演を行った。
② 科研基盤研究（B）「南宋絵画史における仏画の位相－都と地域、中国と周縁」（研究代表者：九州大学・井手誠之輔）に研究分担者として参加し、当該テーマに沿った作品調査に従事した。
③ 科研基盤研究(A)「科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究」（研究代表者：大阪大学・藤岡穣）の連携研究者として参加し、当該テーマに沿った作品調査（東京国立博物館・東京藝術大学・妙伝寺・奈良国立博物館等）及び国際シンポジウム「半跏思惟像はどこで作られたか」討論司会等に従事した。
④ 「第 63 回正倉院展」における黄熟香（蘭奢待）出陳にあたり、この種の香木の産地であるベトナム共和国に研究員 1 名を派遣し、現地で調査研究を行った。
⑤ 公益財団法人ポーラ美術振興財団研究助成「『国宝　東大寺金堂鎮壇具』の工芸技術史的研究」、財団法人福武文化振興財団研究助成「『国宝・海獣葡萄鏡(香取神宮所蔵)』の研究」などによる、古代日本における文物の請来とその受容に関する研究を実施した。

特別展「天竺へ―三蔵法師 3 万キロの旅」会場

【実績値】
講座・研究会等発表回数　7 回
論文等発表本数　6 本
展示への反映　2 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4523-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
当該テーマに沿った調査研究の成果を特別展「天竺へ」に反映し、展覧会図録を刊行し、当館研究員が講師となって関連講座を実施するなどした。これらは独創的な着眼点と視野の広さ、綿密な作品調査に立脚した内容の手堅さの両面で、学術的意義において非常に高い評価を受けた。また請来文物や、東アジアにおける日本仏教美術の位置づけに関わる調査研究プロジェクト等にも積極的に参加するなどして、当館研究員のこの方面における調査研究能力の高さを、学界にアピールすることができた。

2．定量的評価

観点	講座・研究会等発表回数	論文等発表本数	展示への反映			
判定	A	A	A			

備考
当該テーマに沿った調査研究の成果を特別展「天竺へ」に反映して一定本数・回数の論文・講座等で公表するなど、着実に実績を挙げている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	奈良に立地し、仏教美術を文化財の収集・展示・調査研究活動等の中核に据えている当館にとって、日本とアジア諸国の文化交流という観点から、国内外所在の請来系文化財及びその影響の濃厚な文化財や、その背景にある諸事象について調査研究を行うことは、最も基本的な課題の一つと位置づけられる。前年度である22年度には、本プロジェクトに直結する内容の調査研究がめざましい成果を挙げ、科研基盤研究（A）『奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流』報告書、東京文化財研究所との共同研究の成果報告『大徳寺伝来五百羅漢図　銘文調査報告書』、『奈良時代の塑造神将像』（中央公論美術出版）という三種の報告書を刊行するなどした。今年度もその延長上に位置する調査研究を展開し、「天竺へ」展の開催など、展示への反映の面でも大きな実績を挙げた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究を、「文化交流」という観点から着実に遂行し、その成果を「天竺へ」展及びその図録、関連講座等で公表した。来年度以降も25年度の「遼寧省仏教文物展（仮）」、26年度の「百済（仮）」など、中国・韓国の文化財を中心とした展覧会開催を予定しており、前者については日本の平安～鎌倉時代、後者については中国の南北朝時代及び日本の飛鳥時代を視野に入れた「文化交流」という観点から調査研究を継続することで、海外の博物館の所蔵品紹介にとどまらない内容へと充実・深化させる必要がある。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4524-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）中国内蒙古自治区出土の契丹文化に属する考古遺物に関する調査研究（(5)－②）

【事業概要】
契丹は、唐滅亡後の北アジアに興った遊牧国家である。近年、内蒙古自治区で契丹時代の遺跡・遺物の発見が相次ぎ、それが北宋や高麗、平安文化とのつながりを想起させることから注目を集めている。九州国立博物館では開館前から契丹文化を重要視し、調査研究や人的交流を推進している。本年度は、本調査研究の成果を公開すべく、契丹文化に関する特別展を開催する。特別展は九州国立博物館で開催の後、静岡、大阪、東京へ巡回する。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	研究員　市元塁

【スタッフ】
臺信祐爾（文化財課長）、小泉惠英（企画課長）、今津節生（環境保全室長）、森實久美子（企画課研究員）、遠藤啓介（展示課研究員）、末兼俊彦（アソシエイトフェロー）

【主な成果】
４月の現地調査及び昨年度までの成果をふまえ、９月 27 日から 11 月 27 日の日程で特別展「草原の王朝 契丹－美しき３人のプリンセス」を開催した。これまで、契丹文化は遊牧文化という側面が強調されてきた。本特別展および図録や講演会においては、遊牧文化という側面にくわえ、契丹文化の重要な柱となる、唐との連続性、広域な対外交渉、仏教文化にも十分に焦点をあて、多様な契丹文化のすがたをひろく紹介することができた。

【年度実績概要】
９月 27 日から 11 月 27 日まで九州国立博物館において、特別展「草原の王朝 契丹－美しき３人のプリンセス」を開催した。これに関連する特別番組の制作に全面協力し、９月下旬から 10 月初旬にかけて九州各県で放映され、12 月には静岡県でも放映された。特別展図録には内蒙古研究者の論文２編のほか、当館研究職員による論文５編を含む７編の論文を掲載した。また 128 点すべての作品に対して詳細かつ分かりやすい解説文をつけたほか、年表や地図なども最新成果をふまえて九州国立博物館により作成した。特別展期間中は当館研究職員による講演会を５回、外部有識者による講演会を３回実施した。そのほか新聞や雑誌への寄稿やマスコミ取材、出張講演などを精力的に実施し、契丹文化の普及とともに当館の事業をひろく紹介することにつとめ、来場者は７万５千人を超えた。

特別展「草原の王朝 契丹」展示風景；九州国立博物館と内蒙古文物考古研究所が保存修復を実施した彩色木棺

契丹は、当時は豊な経済力、軍事力、文化力でもって世界にその名を轟かせた王朝であり、また周辺諸国への影響の強さを考えても決して等閑視できない存在である。それにもかかわらず、現在契丹に関する認知度はきわめて低い。こうしたなかで、九州国立博物館では６年にわたり調査研究をすすめ、その成果を特別展という普及公開の場を活用してひろく紹介し、大きな反響を得るに至った。

また本事業は、開始当初より、九州国立博物館の職員を中心とする保存修復活動をも加味して進めてきた。すなわち九州国立博物館は内蒙古文物考古研究所とともに、契丹時代の彩色木棺に対する保存修復事業を４ヵ年にわたり実施した。修理が完了した彩色木棺は、本特別展において世界初公開として出品し、また保存修復過程についても映像で紹介した。このような保存修復を加えた調査研究は、九州国立博物館ならではといえるものであり、特別展を通して当館の独自性も紹介することができた。

【実績値】

○調査回数	２回
○収集資料数	128 点
○論文掲載数	５篇
○学会研究会等発表数	11 回
○講演会	８回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	A

備考
　独創性Ｓ：契丹文化の総合的な特別展はわが国においては初めてとなるものであり、また本事業の推進にあたっては当館職員による保存修復事業を軸として実施するといったように、極めて独創性に富んだものと評価できる。

2．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	論文掲載数	学会研究会等発表数	講演会	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　十分な計画のもと適時調査を実施し、資料を収集した。また調査成果については特別展、論文、研究会発表等によって計画的かつ効果的に公表した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	入念なる計画策定のもと、当初見込みの成果をあげることができた。しかしながら、契丹文化に対する認知度は依然として低く、より多様な情報発信手段の活用を検討し、実施をはかりたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	入念なる計画策定のもと、当初見込みの成果をあげることができた。しかしながら、契丹文化に対する認知度は依然として低く、より多様な情報発信手段の活用を検討し、実施をはかりたい。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4524-2
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）館蔵水墨画を中心とした日・中・韓の水墨画に関する調査研究（(5)－②）

【事業概要】
日本の歴史を海外との文化交流の観点から紹介するというコンセプトのもとに収集された九州国立博物館の絵画コレクションのうち、とくに作品が充実している水墨画の分野を取り上げて基礎的な調査研究を集中的に行う。
その造形的・文化的な意義を日本・中国・朝鮮を含む東アジアの美術のなかに位置付けることを目的として実施し、その成果を特集陳列や図録作成などを通じて観覧者に提供する。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　畑靖紀

【スタッフ】
鷲頭桂（企画課研究員）、森實久美子（企画課研究員）

【主な成果】
本年度は当該テーマについて次の二つの観点から研究し、下記の成果を得た。
(1)館蔵の水墨画などを実見調査し、さらに必要に応じて光学調査もおこなった。その成果をもとに、作品を筆線と墨面の観点から分析して、表現の特質を考察した。
(2)上記の作品に関連する文献を収集し、作品を歴史的に考察するための基本的な資料を整えた。
その成果を特集陳列や図録作成などを通じて観覧者に提供した。

【年度実績概要】
東アジアの文化交流の歴史のなかでも、水墨画は注目すべき美術のジャンルの一つである。そのため当館ではこの分野の作品収集を積極的に進めており、開館から６年を迎え水墨画の所蔵品が 20 件を超えたことを画期として、本調査研究を集中的に遂行することとした。その造形的・文化的な意義を日本・中国・朝鮮を含む東アジアの美術のなかに位置付けるとの目的を達成するために、今年度は「主な成果」に記した観点から研究を遂行した。
(1)については、当館の所蔵品をはじめ、関連作品を所蔵する国内外の美術館・博物館において 100 点の作品の調査を遂行した。さらに作品を筆線と墨面の観点から分析して表現の特質を考察した成果を論文にて公表した。
(2)については、九州大学所蔵の研究図書などを活用して作品の主題や様式、伝来などに関する基本資料を収集した。
また「実績値」に示したように、上記の成果を特集陳列（トピック展示）を開催して公共の観覧に供し、あわせて図録を作成して公表した。さらに学術雑誌に論文を掲載し、講演会においても成果を発表している。

トピック展示「館蔵水墨画名品展」

【実績値】
○調査回数　　４回
○研究員海外派遣数　　２回
　・中国（作品調査）　１回
　・韓国（作品調査）　１回
○収集資料数　　100 点
○特集陳列開催数　　１回
　・トピック展示「館蔵水墨画名品展」
○論文掲載数　２回
　・展覧会図録『トピック展示館蔵水墨画名品展』九州国立博物館
　・『聚美』第２号、青月社
○学会研究会等発表数　１回
　・特別展記念講演会（北九州市立自然史・歴史博物館）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	収集資料数	特集陳列開催数	論文掲載数	学会研究会等発表数
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価についてはとくに発展性・継続性・正確性の観点から、定量的評価については公表した成果の実績値から、A判定とした。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、研究内容の水準を保ちつつ、順調に遂行できたと考える。 本事業については、今後も外部資金などを積極的に活用する方法により、調査研究を継続していきたいと考える。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4524-3
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）中国湖南省の馬王堆漢墓に関する調査研究（(5)－②）

【事業概要】
馬王堆漢墓は、中国湖南省長沙にある前 2 世紀の墳墓で、1972 年に発見された。被葬者は利蒼という人物とその妻子であるが、発見当時、妻の遺体は極めて良好な状態であったことや、漆工芸品や染織品、帛書などの貴重な副葬品が出土した。この出土品を中心とする特別展を当館では 2012 年夏（この他日本国内各地に巡回の予定）に計画し、そのための調査研究、出土品の保存事業を湖南省博物館などと共同で行なう。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長　小泉惠英

【スタッフ】
谷豊信（学芸部長）、市元塁（企画課特別展室研究員）

【主な成果】
前年度までに、湖南省に事前調査に赴き、作品の状態確認を行ない、出品候補作品とその保全措置について協議を行なってきた。また、元京都大学人文科学研究所教授の曾布川寛氏らと日本国内における馬王堆漢墓の研究動向について研究会を行ない、準備を進めてきた。しかしながら、東日本大震災により巡回予定先の仙台市博物館の受入れが不能となるなど、運営面での見通しが立たなくなり、展覧会実施の計画自体が中止となった。

【年度実績概要】

3 月 11 日の東日本大震災以後、平成 23 年度 4 月より運営に関しての協議を日本国内各館および中国側と進めてきたが、上記理由により事業として採算見通しが立たないことが予測され、6 月に展覧会の開催中止を決定した。そのため実績に関しての記載はない。

【実績値】

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定						
備考						

2．定量的評価

観点						
判定						
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
F	東日本大震災により展覧会が中止となった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4524-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4）朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究（(5)－②）

【事業概要】
百済・新羅・高句麗の三国時代の文化を中心とした朝鮮半島の文化財について、考古・美術・工芸の分野について調査研究を実施するものである。現地での調査だけでなく、我が国に将来された文化財を当館のＸ線ＣＴなどの科学機器を利用した分析をすすめる。こうした成果を将来特別展として結実させるために、まずは今年度、韓国での海外日本古美術展を実施する。

【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	展示課長　赤司善彦

【スタッフ】
三輪嘉六（館長）、森田稔（副館長）、谷豊信（学芸部長）、本田光子（博物館科学課長）、臺信祐爾（文化財課長）、小泉惠英（企画課長）、今津節生（環境保全室長）、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、秋山純子（アソシエイトフェロー）、志賀智史(主任研究員)河野一隆（文化交流展室長）、池内一誠（主任研究員）、上野知彦（主任研究員）、楠井隆志（主任研究員）、鳥越俊行（主任研究員）、川畑憲子（研究員）、森實久美子（研究員）、進村真之（主任研究員）、酒井芳司（研究員）、遠藤啓介（研究員）、坂元雄紀（研究員）、末兼俊彦（アソシエイトフェロー）

【主な成果】

1　韓国の国立中央博物館及び国立公州博物館、国立扶余博物館での予備調査と共同研究の打合せを行った。
2　韓国での現地調査や、日本に伝来した文化財の調査研究を実施した。
3　韓国国立中央博物館で、文化庁、滋賀県とともに海外日本古美術展を実施した。
4　国際シンポジウムを開催した。(24 年 3 月 10 日)

【年度実績概要】
1　将来の百済展開催に向けた共同研究の実施について、協議等を実施した。国立公州博物館との九州出土の百済関係遺物の調査は、震災の影響により来年度以降に延期となった。
1―2　24 年 3 月 10 日に国際シンポジウム「百済文化と古代日本」を開催した。
2―1　韓国の扶余地域の百済山城と日本の古代山城について、ＧＰＳ機器による現地踏査を韓国の研究と共同で実施した。
2－2　新羅古墳出土飾履や対馬に伝わる高麗時代の地蔵菩薩のＸ線ＣＴ等の調査を実施した。
2－3　長崎県対馬・五島での対外交流関係遺跡や関連史料の総合調査（科学研究費）を実施した。
3　平成 23 年 12 月 20 日より韓国国立中央博物館において、文化庁海外展「日本　仏教美術－琵琶湖周辺の仏教信仰」を開催した（～24 年 2 月 19 日）。展覧会の内容は日韓共同で構築し、日本の仏教美術の中心地の一つである琵琶湖周辺の文化財を紹介した。文化財 59 件を展示した。

五島列島小値賀島での朝鮮半島関係資料の調査

【実績値】
○調査回数　17 回
・韓国での打合せ　3 回（5 月、11 月、12 月）
・韓国内の調査　5 回（ソウル地域 3・公州地域 1・扶余地域 1）
・日本国内の調査　7 回
・Ｘ線ＣＴ分析　2 回（新羅古墳出土飾履・対馬伝世の地蔵菩薩）
○論文掲載数　4 件
○学会研究会等発表数　3 回（文化財科学会、美術史学会、九州古代史の会）
○展覧会開催　1 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	S	A	A	A

備考
当初は、東日本大震災の影響等で予定していたスケジュールが延期されるスタートであったが、韓国国立中央博物館の本事業への理解と協力をいただき、なんとか軌道に乗せることができた。今後の長期的な共同研究を視野に入れての、日本と韓国の文化対比という試みは発展性と伸張性が大いに期待できる。また、九州島内の朝鮮半島由来の資料についての調査を、島嶼部より実施した。

2．定量的評価

観点	調査回数	論文掲載数	学会研究会等発表数	展覧会開催		
判定	A	A	A	A		

備考
九州島内の調査は当館の職員のほとんどすべてが関わって実施することができた。館員の多くの研究基盤に新しい視点を提供することができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	五島列島と対馬を中心とした九州島内での現地調査や、韓国の研究者との意見交換、展覧会の実施などを予定通り実施することができた。韓国中央博物館で日本の仏教文化を紹介する展覧会を開催することができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されている。

【書式Ｂ】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4524-5
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5）Ｘ線ＣＴによる九州所在彫像重要作例の三次元的解析（科学研究費補助金）（(5)－②）

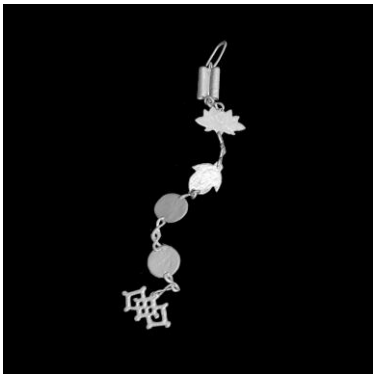
【事業概要】
九州国立博物館に導入されている文化財専用の大型Ｘ線ＣＴ（Computed Tomography）装置を活用し、九州所在彫像のうち、銘文や納入品が存在するなど制作年代の明らかな基準作例やそれに準ずる重要作例を調査対象として取り上げ、非接触・非破壊できわめて詳細・精緻な内部構造の解析や納入品の検出を実施し、日本彫刻史研究および東アジア彫刻史研究の進展に有益な基礎的データを蓄積・公開してゆこうとするものである

【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　楠井隆志

【スタッフ】
今津節生（学芸部博物館科学課環境保全室長）、鳥越俊行（学芸部文化財課資料登録室主任研究員）、末兼俊彦（アソシエイトフェロー）、輪田慧（博物館科学課）

【主な成果】
平成 22 年度からの継続研究であるが、今年度は特別展「黄檗 - OBAKU　京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風」に出陳した主要彫像およびその関連彫像について、Ｘ線ＣＴ調査やＸ線撮影を重点的に実施した。これまで未解明であったこの時期の中国木彫仏の内部構造に関する基礎的データを採取・蓄積した。その成果は報道発表や地元での調査報告講演会などで積極的に公表した。

【年度実績概要】
黄檗宗大本山萬福寺をはじめ黄檗宗寺院に所蔵される彫像については、これまで本格的・科学的な調査の対象となる機会がほとんどなかった。このたび展覧会出陳作品を対象に、会期中順次調査および撮影作業をおこなった。また出陳されなかった彫像についても、必要に応じて現地で調査を実施し、なるべく多くのデータを採集するよう努めた。
比較的小型の彫像についてはＸ線ＣＴ調査を実施し、像内納入の存在確認、内部構造の解析をおこなった。大型の彫像については、通常のＸ線透過撮影を実施した。これにより、17 世紀の活発な日中貿易の過程で日本に舶載された中国木彫仏、また長崎で中国人渡来仏師が制作した木彫仏などのデータがかなり蓄積された。特筆されるのは、長崎聖福寺の「釈迦如来坐像」で、Ｘ線透過撮影の結果、像内に納入品が存在することを確認、さらにＣＴによって納入品の三次元画像を採取した結果、大変珍しい金属製五臓が検出された。国内外で 5 例目の確認であり、未解体での発見はもちろん初の事例である。そのほか九州所在作品ではないが、大本山萬福寺所蔵の「隠元隆琦像」や「白衣観音像」などは今回寺外初公開であり、今後も公開されることはないと思われるが、それらのＸ線調査が実施でき、内部構造についてある程度把握できたことは大きな成果であった。



長崎・聖福寺釈迦如来坐像納入品（金属製五臓）の三次元画像

【実績値】
○調査件数　　17 件
（Ｘ線ＣＴスキャン調査件数　6 件、Ｘ線透過撮影件数　11 件）
○収集資料数　　475 点
（写真（4×5 カラーポジフィルム）　75 点、デジタルデータ　400 点）
○研究発表件数　　3 件

【備考】
研究発表：
美術史学会西支部例会（平成 24 年 1 月 21 日　九州大学）　「黄檗山萬福寺の隠元隆琦倚像について」（楠井隆志）
調査成果報告講演会（平成 23 年 7 月 30 日　長崎歴史文化博物館）
「生きている！聖福寺釈迦如来坐像」（楠井隆志）、「像内から発見された内臓模型について」（末兼俊彦）
マスコミ報道：
「仏像内部に金属の内臓　九州国博、ＣＴで初確認」（『西日本新聞』平成 23 年 6 月 27 日朝刊）ほか新聞 29 紙、ＴＢＳ『朝ズバッ』・『ひるおび』・『サンデーモーニング』、フジテレビ『とくダネ！』取材報道対応
『放射線等に関する副読本』（小中高生副読本　文部科学省研究開発局・原子力文化振興財団制作）への制作協力
『月刊考古学ジャーナル』No.621　「長崎市聖福寺　釈迦如来坐像の像内納入品　Ｘ線ＣＴスキャナーによる調査」
今津節生・楠井隆志（ニューサイエンス社　平成 23 年 11 月発行）
『科研費 NEWS』2011 年度 VOL.3「科研費からの成果展開事例　仏像のＸ線ＣＴ調査で金属製五臓を発見」
（独立行政法人日本学術振興会発行）

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-5

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	S	S	S	S	A

備考
　黄檗宗寺院に安置される彫刻に対して、Ｘ線ＣＴスキャン調査、Ｘ線透過撮影、携行Ｘ線装置による成分分析、樹種同定など、さまざまな科学的調査を実施することができた。いずれも過去に例がなく、初めてのことである。像内納入品の発見もあり、国内外からの注目も集めた。

2．定量的評価

観点	調査件数	収集資料数	研究発表件数			
判定	A	A	A			

備考
　調査件数は、数的には少ないかも知れないが、ひとつひとつから得られた三次元的情報は膨大な量であり、将来的に無限に活用できるデータ量が収集された。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	黄檗宗寺院の彫刻に関しては、これまであまり調査・研究が進んでいない。今回、特別展に出品した大本山萬福寺や長崎・唐寺の仏像を調査し、中国・明末清初期の木彫像の内部構造などの解明が進んだことはきわめて注目すべきことであった。 次年度も調査を続行するとともに、調査成果を論文としてまとめ、公表していく予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	特別展で借用した文化財を、最新の設備と科学機器を駆使して、館内で安全に調査を実施し、新発見による報道を積極的に行い、また調査成果を着実に蓄積している。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4524-6

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6）南アジアと東方アジアの螺鈿構造―技術比較の視点から―（メトロポリタン東洋美術研究センター研究助成金）（(5)－②）

【事業概要】
昨年度のインド国内螺鈿工房の調査により、現代インドでは古い螺鈿器はほとんど残っておらず、またかつての高度な技術はほとんど維持されていないものの、樹脂地螺鈿と木地螺鈿の２種の存在が確認でき、さらに骨や石などの多様な素材による象嵌装飾が盛んに行われていることも確認された。本研究はこれを受け、ヨーロッパ各地に残されているインド螺鈿器の調査とそれに関連するアジア各地の螺鈿器等について、技術面を中心に調査を行ったものである。

【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料管理室長　小林　公治

【スタッフ】

【主な成果】
本研究では、16～17 世紀の大航海時代にヨーロッパからインド、東南アジア、そして極東アジアにかけて盛んに交易活動を行ったポルトガルやスペイン、さらにそうした交易品を入手したオーストリア、ドイツ、イギリス各国の博物館・美術館、また王宮城址や寺院などで調査を実施し、当時のインド螺鈿器の具体的な様相を確認すると共に、ヨーロッパ人によって注文され日本から多数輸出された南蛮漆器などとの関係などについても様々な成果を得ることができた。

【年度実績概要】
インドの螺鈿については、世界的にもこれまでほとんど研究が無く、その様相とくに技術的な側面については不明点が多かった。本研究では昨年度実施したインド国内での螺鈿工房調査成果を元に、ヨーロッパ各地に残されているインド製螺鈿器の具体的様相、特にその制作技術や入手年代などについて実見やインベントリー情報の確認により調査することを第一の目標とした。また併せて、これらインド螺鈿器とヨーロッパ製器物（金工品や陶磁器等）との関連性、さらにこの時代に来日したポルトガル人らによる注文と輸出の結果、現在ヨーロッパに多数残されている南蛮漆器についてもできるだけ実見し、ポルトガル・スペイン・インド・日本などとの関係性、あるいは差異などについて明確な認識を得ることも目的とした。

マドリッド､デスカルサス修道院での調査

調査地は、ポルトガル国内（リスボン・シントラ・ポルト）、スペイン国内（マドリッド）、オーストリア国内（ウィーン）、ドイツ国内（ミュンスター）、イギリス国内（ロンドン、オックスフォード）の博物館・美術館、宗教施設（教会・修道院）、王宮や城址などで、各地では短期間の滞在ながら充実した調査を実施でき、その結果、上記螺鈿器のみならず、西アジア各地で造られた螺鈿器や象嵌器などについても実見し、また各地で多くの研究者との意見交換することができ、当初目的としたインド螺鈿についての成果はもとより、螺鈿全体についても多くの有益な情報を得ることができた。またそうした成果の一部はすでに日本国内で開催された国際会議での発表によって公表している。

加えて、各地のキリスト教寺院、王宮や城址、富裕層家庭の姿を再現した博物館等の調査によって、ヨーロッパ社会において螺鈿器が調度としてどのような位置にあり、また歴史的に変遷してきたのか、きらびやかな装飾性を求められた理由は何かといった、螺鈿器の消費の側面についても多くの情報を知ることができた。

【実績値】

○調査回数　１回

○論文等掲載数　１回

○学会研究会等発表数　１回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-6

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	B
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数	論文等掲載数	学会研究会等発表数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の予定通りの調査地域で、各機関との調整を実施した上で、相当数の幅広い資料の調査を実施することができた。多くの資料は初めて実見するものであったため、今回の調査は問題意識の認識を中心とするが、今後はより広い問題点の抽出を行い、幅広い観点からの調査研究を実施したい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	単年度研究ではあるが、得られた成果は今後の研究につなげるために貴重な情報である。短い時間の中での限られた調査であり、今後のより詳細な調査は必要であるが、実見の困難な資料へのアプローチができたことなど、当初の目的・目標は達成できたと言える。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4524-7

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7)平山郁夫　画業と文化財保護活動に関する調査研究（(5)－②）

【事業概要】
日本画家で文化勲章受章者の平山郁夫（1930-2009 年）は、62 年にわたるその作画活動とともに、世界各地の文化遺産に対する保護活動を通じて世界平和を希求し続けた。平山の画業とともに文化財保護活動の軌跡を検証する。

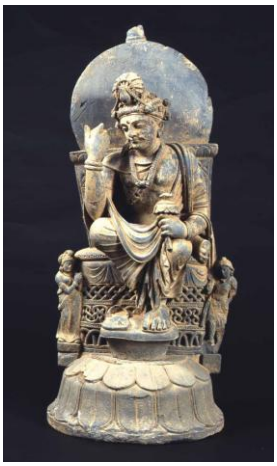
【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	文化財課長　臺信祐爾

【スタッフ】
谷豊信（学芸部長）、小泉惠英（企画課長）、原田あゆみ（文化財課主任研究員）、森實久美子（企画課研究員）、市元塁（企画課研究員）

【主な成果】
来年度 4 月 3 日～5 月 27 日開催予定の特別展「平山郁夫　シルクロードの軌跡」実現に向けて基礎的な情報ならびに写真資料などの収集、出品候補作品の調査と選定および関係諸機関との調整などを実施した。また、本展の内容を広く一般の方々に知っていただけるように、記念講演会やワークショップなどについて企画した。

【年度実績概要】

昨年度 1 月－3 月にかけて、東京国立博物館で開催された特別展「文化財保護法制定 60 周年記念　仏教伝来の道　平山郁夫と文化財保護」に着想をえて、本年度 1 年間をかけて平山郁夫の画業、文化財保護活動の実態、研究材料として収集した優れた美術品（平山郁夫夫妻コレクション）の内容調査などを実施し、来年度の特別展企画準備とした。
4 月に平山郁夫シルクロード美術館館長平山美知子氏の企画協力について確約が得られたため、作品調査などと並行して、上智大学学術顧問石澤良昭氏ら、文化財保護活動に平山とともに尽力した方々と面談し、その内容について調査した。
これらの調査に基づき、展覧会名称を「平山郁夫　シルクロードの軌跡」とし、また展覧会内容を四部構成（釈迦追慕・壁画模写と文化財保護・シルクロードと仏教伝来の道・日本回帰－平和への祈り）とした。



菩薩半跏思惟坐像
（ぼさつはんかしゆいぞう）
クシャーン朝　2-3 世紀
パキスタン、ガンダーラ
平山郁夫シルクロード美術館所蔵

【実績値】

○調査回数　　10 回

○収集資料数　　109 点

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4524-7

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
平山郁夫は、画業のみならず、文化財保護活動にも大きな役割を果たしたことについて分かりやすい構成ができた。

2．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				

備考
十分な計画のもと適時調査を実施し、資料を収集した。また調査成果については特別展、論文、研究会発表等によって計画的かつ効果的に公表する予定である。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	入念なる計画策定のもと、当初見込みの成果をあげることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	入念なる計画策定のもと、当初見込みの成果をあげることができた。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 京都国立博物館　　処理番号 4532-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査および研究の推進
プロジェクト名称	1)近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究（科学研究費補助金）（(5)－③）

【事業概要】
京都国立博物館では従来から継続的に京都を中心とする古社寺所蔵の文化財の悉皆調査を行い、『社寺調査報告』として公刊報告を重ねてきたが、平成 23 年度から 3 年間の予定で京都府南部、木津川流域の寺院を対象として文化財の調査を行い、この地域がもつ歴史的・文化的な特性を明らかにすることを目的に調査を行った。その 1 年目として、木津川市加茂町所在の海住山寺に関してその文化財調査を行った。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	考古室長　宮川禎一

【スタッフ】
宮川禎一（考古室長）、久保智康（企画室長）、淺湫毅（主任研究員）、尾野善裕（工芸室長）、山本英男（美術室長）、山下善也（連携協力室長）、山川暁（主任研究員）、永島明子（主任研究員）、赤尾栄慶（上席研究員）、羽田聡（研究員）

【主な成果】
京都府木津川市加茂町所在の海住山寺の文化財総合調査をおこなった結果、中世の仏画・近世の絵画・金工・陶磁器などに新たな発見があった。

【年度実績概要】
平成 23 年 6 月 30 日、7 月 1 日・2 日・5 日・6 日ののべ 5 日間にわたって京都府木津川市加茂町所在の海住山寺（佐脇貞憲住職）の文化財総合調査を行った。これは同年 2 月の調査（2 月 14・15・16 日）に引き続くものである。
調査は本堂・庫裡・土蔵・旧堂などに所在する彫刻・絵画・書跡・工芸などをすべて調査して調書を制作し、必要な作品文化財に関しては写真を撮影するものであった。
彫刻は本堂内および土蔵内部の諸尊像を調査し、撮影を行った。絵画では旧山城国分寺所蔵だったと推定される中世の仏画が発見されるなどの成果があった。また、近世初頭と見られる未報告の障壁画が発見された。この障壁画については将来の展覧会への展示を前提に、京都国立博物館で寄託を受けてその修理と綿密な調査をおこなうこととした。書跡においては海住山寺文書の全貌をリスト化した。工芸作品では中～近世の金属製仏具の詳細な調査を行った。また青白磁の壺や香炉など上質の輸入陶磁器の調査撮影を行った。
この文化財調査には博物館の学芸スタッフをはじめ調査研究ボランティアや撮影カメラマンなど 5 日間でのべ 60 名以上が参加した。
この海住山寺の調査に続いて、平成 24 年 2 月中旬には笠置寺・一休寺・蟹満寺・神童寺の四寺院の文化財調査を実施した。

今回の海住山寺の調査によって新たに発見された近世初頭の狩野派の手になる屏風の調査風景

【実績値】
調査点数：約 400 点
撮影文化財点数：約 150 点

【備考】
科学研究費　基盤Ｂ「南山城地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」（平成 23 年～25 年の三年間）経費による

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4532-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	A	B	A	A

備考
今後の調査によって引き続き新たな文化財の出現が予想されること。笠置寺・一休寺・蟹満寺・神童寺での調査が将来予定されていることから発展性・継続性をＡと評価した。

2．定量的評価

観点	調査点数	撮影文化財点数				
判定	A	A				

備考
文化財作品の調査件数はあらかじめ予測できないものの、おおむね５日間という調査日数に比して約 400 点の作品の調査をすることができたのは評価できる。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	南山城地域の古寺所在文化財調査として海住山寺を選びその調査を行ったが、調査以前の想像を超える数量と質をもつ文化財を新たに発見するなどその調査の効果が高かった。また次年度以降の調査研究対象として海住山寺子院である現光寺の文化財調査の見込みを得ることができた。この南山城地域の寺院の文化財の特質の傾向を知ることが出来るようになったことも次年度以降の調査におおいに役立つと見られる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	京都国立博物館での文化財調査の成果については本来単年度・寺院毎に「社寺報告書」としてまとめるのが本来であるが、三年間の科学研究費による調査であり、本年度は調書の整理に努めるにとどめた。調査成果については将来の特別展覧会カタログや調査報告書の形で公開還元する予定である。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 京都国立博物館　　処理番号 4532-2

業務実績書

中期計画の項目	4.文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)近世絵画に関する調査研究((5)-③)

【事業概要】
当館に保管および寄託される作品を中心とした近世絵画に関する調査研究を行なう。近い将来に予定されている特別展覧会（平成24年度末～25年度初『狩野山楽・山雪』）出品作品の候補選定を進める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長　山下　善也

【スタッフ】
（当館研究者）水谷亜希（当館アソシエイトフェロー）
（外部研究者）奥平俊六（客員研究員・大阪大学教授）、橋本寛子（調査支援ボランティア・神戸大学助手）、吉田智美（調査支援ボランティア・同志社大学院生）、森光彦（同前）

【主な成果】
当館発行の『学叢』第33号に、次の論文を執筆し、館蔵品の文化財的価値を明らかにした。
山下善也「狩野永良の秘伝画法書について」
水谷亜希「新出の「やすらい祭絵巻」・「牛祭絵巻」（京都国立博物館蔵）について－松村景文・河村文鳳・上田秋成らによる祭礼の記録－」

【年度実績概要】
毎月一日程度、当館近世絵画担当研究員が調査支援ボランティア等とともに主として館蔵品・寄託品について、調査・撮影・意見交換等を行った。これらの調査に際し、客員研究員の奥平俊六氏の協力を得た。

当館近世絵画担当研究員が、調査支援ボランティア等とともに社寺調査に参加し、調査・意見交換を行った。社寺調査には、客員研究員の奥平俊六氏の協力を得た。

特別展覧会（平成24年度末～25年度初『狩野山楽・山雪』）出品作品の候補選定については、50％程度進捗できた。

近世絵画研究は年々深化しており、それを通じ、京都国立博物館館蔵品・寄託品の価値がいっそう高まってきている。とともに、客員研究員および近世絵画担当研究員の著作活動をつうじて、一般の人々の京都文化に対する興味を喚起し、ひいては博物館に対する理解を深めている。

【実績値】
調査回数　12回
収集資料数　150点
調査概報　2件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4532-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会「狩野山楽・山雪」展（平成24年度3月～平成25年度4月）の準備は順調に進んでおり、リスト化は進捗している。 近世絵画の館蔵品・寄託品についての調査研究および関連情報収集は、順調に進んでいる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	近世絵画担当研究員と客員研究員との協力により、近世絵画、とくに館蔵品・寄託品に関する情報収集は、順調に調査研究は達成されている。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4542-1
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)鎌倉仏教とその造形に関する調査研究　((5)－④)

【事業概要】
鎌倉仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集、整備する。
報告書の刊行、シンポジウム(研究座談会)の開催により、成果を公開する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　赤尾栄慶

【スタッフ】
鬼原俊枝(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、山下善也(連携協力室長)、大原嘉豊(研究員)、羽田　聡(研究員)、淺湫　毅(主任研究員)、久保智康(企画室長)、尾野善裕(工芸室長)、山川曉(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、宮川禎一(考古室長)、中村　康(文化財管理監)、村上　隆(保存修理指導室長)、呉　孟晋(研究員)、水谷亜希(アソシエイトフェロー)

【主な成果】
仏教美術研究上野記念財団の助成によって、鎌倉仏教に関する資料の調査・撮影を実施し、研究発表と座談会「浄土宗の文化と美術」を開催した。

【年度実績概要】
鎌倉仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集、整備する中で、源空（法然）の撰述した「選択本願念仏集」（重文、奈良・当麻寺奥院蔵)の書誌学的調査を行い、全巻デジタル撮影を行った。選択集古写本中、廬山寺本に次ぐ鎌倉時代の善本である。また、正安三年（1301）に鹿島門徒長井道信の請により覚如が撰述した『拾遺古徳伝』九巻本に基づく「拾遺古徳伝断簡」（重文、茨城・無量寿寺蔵）の調査を実施し、全巻撮影を行った。本作は真宗における源空（法然）伝記絵の古本として知られ、鳥栖・無量寿寺は鹿島門徒の中心寺院である。所蔵先で厳重に格護されており、従来公開の機会も少なかったものである。また、「木造十二天面」（重文、京都国立博物館蔵）の調査と撮影を行った。本作は、京都・教王護国寺旧蔵品で、灌頂会の行道に使用されていた 10 世紀の遺品である。
また、4 月 29 日に研究発表と座談会「浄土宗の文化と美術」を開催し、次年度における報告書刊行の準備作業を行った。

【実績値】
○調査　3 件
・「選択本願念仏集」（重文、奈良・当麻寺奥院蔵)を調査し、全巻の撮影を行った。
・「拾遺古徳伝断簡」（重文、茨城・無量寿寺蔵）の調査と全巻の撮影を実施した。
・「木造十二天面」（重文、京都国立博物館蔵）の調査と撮影を行った。
○撮影　3 件
・「選択本願念仏集」（重文、奈良・当麻寺奥院蔵)を調査し、全巻の撮影を行った。
・「拾遺古徳伝断簡」（重文、茨城・無量寿寺蔵）の調査と全巻の撮影を実施した。
・「木造十二天面」（重文、京都国立博物館蔵）の調査と撮影を行った。
○研究会開催　1 件
研究発表と座談会「浄土宗の文化と美術」を開催した。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4542-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	S	A	A	A	A	

備考
鎌倉仏教の美術について多面的に調査研究し、多岐にわたる資料を収集している。特別展覧会「法然―生涯と美術―」（平成23年3月26日-5月8日）の展示借用という貴重な機会を活かし、法然に関する2件の調査撮影を行った。また、1件は、特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」（平成25年1月8日開催）の予備的調査として行った。研究発表と座談会は、継続性のある活動であり、仏教美術分野のみならず、宗教史など幅広い分野から注目されているものである。今回は、法然800回忌を記念した法然に関する初めての大規模展である特別展覧会「法然―生涯と美術―」に合わせて「浄土宗の文化と美術」と題して開催したが、試験的に大学関係者の出席を念頭に休日に設定したため、予想以上の出席増という好成績を得た。また、従来の法然研究の成熟による転換期にあたっていたこともあり、内容的にも発表者の最新成果を元にした研究の画期となる優れた成果を収めることができた。特別展覧会の機会を活用した調査研究及び研究会開催、及びその研究の時宜を得たことによる研究会の斬新性に鑑み、特に適時性のみＳの評価としている。

2．定量的評価

観点	調査	撮影	研究会開催			
判定	A	A	A			

備考

調査と撮影を、各々3件ずつ行い、研究発表と座談会も行った。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4カ年の継続事業「鎌倉仏教とその造形に関する調査研究」の第3年度として、平成23年3月からの特別展覧会「法然―生涯と美術―」の機会を利用し、鎌倉新仏教の祖師である法然に関する資料調査を2件行い、かつ研究発表と座談会により一定の研究成果を公開することができた。研究発表と座談会については次年度に報告書刊行の予定であり、準備作業を進めた。また、特別展観「国宝 十二天像と密教法会の世界」（平成25年1月開催）に向けた予備的調査撮影を1件行った。次年度は特別展観の趣旨に照らして鎌倉時代密教諸流の動向に焦点をあて、仁和寺御流関係聖教等の調査を予定しており、また特別展観会期中に関連する研究発表・座談会を開催する運びとなった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	多岐にわたる分野の資料について収集・整備ができ、また、研究発表と座談会の開催により、仏教美術研究の発展に資することができた。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4543-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）平成 24 年度春季特別展「貞慶（仮称）」、25 年度春季特別展「当麻寺展（仮称）」など、将来の特別展実施に向けた調査研究を行う。（(5)－④）

【事業概要】
次年度以降に実施する予定の特別展のテーマに沿って予備的な文化財調査を行い、出陳品の選定や展示構成案の作成に資する。出陳候補となった作品に対してはより詳細な調査を行い、展示会場における各種解説、展覧会図録に掲載される総説・各論・作品解説、会期中の講座等に資する。また展覧会担当者を中心として、当該テーマに沿った様々な学術的観点からの調査研究を行い、展覧会とそれに伴う諸活動の内容充実を図る。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】
岩田茂樹（学芸部長補佐）、内藤栄（学芸部長補佐）、稲本泰生（前企画室長）、吉澤悟（前教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（前情報サービス室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、清水健（前教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）

【主な成果】
平成 24 年度春季特別展「解脱上人貞慶－鎌倉仏教の本流」、夏季特別展「頼朝と重源（仮称）」、25 年度春季特別展「当麻寺展（仮称）」、夏季特別展「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮称）」、26 年度特別展「百済（仮称）」等に向けて関連作品の調査を行った。うちある程度内容が確定している特別展（「貞慶」展等）については、特定作品の重点的な調査を行った。また他機関との共催展（「貞慶」「遼寧省」展等）については、相手先との学術面での協議や合同調査を実施した。

【年度実績概要】
① 平成 24 年度春季特別展「解脱上人貞慶－鎌倉仏教の本流」開催に向け、出陳予定品の事前調査を行った。阿弥陀浄土図（京都・海住山寺蔵）の、館内修理工房における修理の過程で新知見が得られたことを機に行った、本図及びこれと密接な関係を有する兜率天曼荼羅（京都、興聖寺蔵。重要文化財、京博寄託品）の調査では、特に大きな成果を得た。また共催者である神奈川県立金澤文庫（同展は当館で開催後、同文庫に巡回。二会場とも両者の共催）との間で、内容・学術面での充実を図るべく情報交換・協議を重ねた。
② 平成 24 年度夏季特別展「頼朝と重源（仮称）」開催に向け、鶴岡八幡宮及び甲府善光寺等で出陳予定品の事前調査を行い、資料収集を行った。
③ 平成 25 年度春季特別展「当麻寺展（仮称）」開催に向け、同寺所蔵文化財の全容を把握した上で出陳品選定を行うべく、学芸部研究員ほぼ全員が参加して、同寺諸堂及び塔頭の西南院・奥院等で文化財調査を実施した。
④ 奈良文化財研究所と共催する平成 25 年度夏季特別展「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮称）」開催に向け、奈文研と内容等について協議を重ねるとともに、中国遼寧省に研究員 1 名を派遣し、遼寧省博物館・遼寧省文物考古研究所・朝陽北塔博物館等で、奈文研側の担当者との合同調査を実施した。
⑤ 平成 26 年度特別展「百済（仮称）」開催に向け、韓国国立中央博物館及び扶余博物館に館長以下計 3 名を派遣した。同展は九州国立博物館でも開催される予定であり、現地では同館と合同で情報交換及び出陳予定文化財の予備調査を行った。

当麻寺における宝物調査

【実績値】
・作品調査回数（人数×日数の延べ回数）　52 回
・共催館との打ち合わせ・合同研究会等回数　10 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4543-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
24年度以降に開催する特別展に向けて、出陳予定品の選定あるいは展示・論考及び解説等執筆等の準備のため、作品調査及びテーマに沿った研究を実施した。その過程で24年度特別展「解脱上人貞慶－鎌倉仏教の本流」展出陳予定品の二件の絵画作品の関係についての知見に基づく調査研究が行われるなど、展覧会の内容をより魅力的に、かつ学術面でも信頼できるものとすることにつながる実績が得られた。

2．定量的評価

観点	作品調査回数	打ち合わせ・検討会回数				
判定	A	A				

備考
24年度以降における特別展開催に向け、それぞれの展覧会のテーマに沿った、十分な回数の文化財調査を実施することができた。また他機関との共催で行う特別展については、展覧会の学術面における充実・深化を図るべく、相手機関とともに情報交換・内容検討・協議等を行う場を、必要十分な回数、設けることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンルに関連する多彩かつ魅力的な特別展の企画立案・実施は、社会からの要請が最も強い業務の一つである。このような認識から特別展の内容を充実させ、かつそれを学術的な裏付けを伴ったものとすべく、設定した展覧会のテーマに沿った調査研究を展開してきた。本年度は24年度以降に開催予定の展覧会に関わる研究活動を作品調査中心に進め、質量両面において大きな実績を挙げることができた。次年度以降も将来の企画展示の充実に向けて同様の業務を継続し、着実に成果を挙げていく必要がある。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	特別展等の企画立案から開催に至るまでの過程における調査研究を、「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画に沿うよう展開しており、その点において順調に実績を積み重ねている。次年度も25年度特別展「当麻寺展（仮称）」「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮称）」、26年度特別展「百済（仮称）」等の開催に向けた調査研究を行う予定であり、これを円滑に遂行し、確実な成果の蓄積へと導く業務のサイクルが、すでに確立されている。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4543-2
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）南都諸社寺等における文化財調査を積極的に実施して宗教文化に関する調査研究の成果を蓄積し、平成 23 年度特別展「天竺へ－三蔵法師三万キロの旅」及び特別陳列「初瀬にますは与喜の神垣－與喜天満神社の秘宝と神像」、毎年恒例の特別陳列「お水取り」「おん祭と春日信仰の美術」、24 年度特別展「貞慶（仮称）」、25 年度特別展「当麻寺（仮称）」等に反映させる。（(5)－④）

【事業概要】
奈良及びその周辺地域に位置する諸社寺に対し、奈良国立博物館の諸活動に対する理解と協力を得られるよう積極的な働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を実施し、その成果を平成 23 年度特別展「天竺へ－三蔵法師三万キロの旅」特別陳列「初瀬にますは与喜の神垣－與喜天満神社の秘宝と神像」、毎年恒例の特別陳列「お水取り」「おん祭と春日信仰の美術」、24 年度特別展「解脱上人貞慶」、25 年度特別展「当麻寺展（仮称）」等に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】
岩田茂樹（学芸部長補佐）、内藤栄（学芸部長補佐）、稲本泰生（前企画室長）、吉澤悟（前教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（前情報サービス室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、清水健（前教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）

【主な成果】
奈良を中心とする諸社寺等への働きかけを行って薬師寺（奈良市）・與喜天満神社（桜井市）・当麻寺（葛城市）・法隆寺（斑鳩町）・談山神社（桜井市）・春日大社（奈良市）等の所蔵文化財を調査した。その成果を 23 年度に実施した展示及びそれに伴う図録類や講座等に反映させるとともに、今後の展示活動等に活用できる資料の蓄積、将来の調査に向けた調整などを行った。

【年度実績概要】
① 特別展「天竺へ－三蔵法師三万キロの旅」開催に伴い、前年度以来行ってきた藤田美術館所蔵玄奘三蔵絵（国宝、興福寺大乗院伝来）、同・大般若経（国宝、薬師寺旧蔵）、薬師寺所蔵仏足石（国宝）等の調査研究の成果を会場解説、図録等に反映させた。
② 與喜天満神社の文化財及び長谷寺の天神関連文化財の調査研究を実施し、その成果を特別陳列「初瀬にますは与喜の神垣－與喜天満神社の秘宝と神像」の展示、展覧会図録、公開講座等に反映させ、鎌倉彫刻の名作である同天満宮所蔵の天神坐像を史上初公開するなど、画期的な成果を挙げた。
③ 名品展「珠玉の仏たち」における海住山寺（木津川市）本尊十一面観音像、弥勒寺（大和高田市）本尊弥勒仏坐像、金剛寺（河内長野市）金堂降三世明王像の特別公開に際してこれら諸像に関する調査研究を行い、その成果を解説・パネル等及び『なら仏像館　名品図録』に反映させた。
④ 当麻寺における総合的な文化財調査を前年度から継続し、平成 25 年度特別展「当麻寺展（仮称）」に向けて調書・写真等の調査資料を蓄積した。今年度は当麻寺本体及び西南院・奥院の所蔵文化財を調査し、その過程で注目された平安時代制作の台座群の精査を実施すべく、当館収蔵庫に搬入した。
⑤ 「聖徳太子御遠忌 1390 年記念　法隆寺展」（平成 24 年 3～4 月、日本橋高島屋等、当館学術協力）に成果を反映すべく、法隆寺にて文化財調査を行った。また同寺の刊行物『聖徳』（季刊）の巻頭作品解説を当館研究員が執筆した。
⑥ 談山神社の社殿改修を機に宝物群の総合的な調査を実施し、資料の蓄積を行った。
⑦ 出光文化福祉財団助成による調査研究「春日若宮おん祭図の研究」の実施、東京大学史料編纂所の共同研究「春日大社所蔵『大東文書』の調査・撮影」（代表者・藤原重雄）への参加等による成果を、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の展示及び図録等に反映させた。
⑧ 東大寺所蔵文化財についての調査研究の成果を東大寺ミュージアム開館記念図録『奈良時代の東大寺』に掲載された論考及び作品解説に反映させた。

特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」における
おん祭図の展示

【実績値】
社寺等における調査回数（人数×日数の延べ回数）　112 回
展示への反映　6 回
講座・研究会等発表回数　11 回
論文等発表本数　15 本

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4543-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　興喜天満神社、当麻寺、法隆寺、東大寺、春日大社、談山神社、海住山寺、金剛寺など、奈良を中心とする主要な社寺に積極的な働きかけを行って所蔵文化財を調査し、その成果を年度内に開催した特別展・特別陳列等において反映したほか、次年度以降の企画の充実に資するべく蓄積し、重大な実績を挙げることができた。中でも興喜天満神社の天神坐像が本格的な調査に基づいて史上初めて公開されたこと等は、当館以外の機関ではなしえない画期的な成果として各方面から注目を集め、非常に高い評価を受けた。

2．定量的評価

観点	作品調査回数	展示への反映	講座・研究会等発表回数	論文等発表本数		
判定	A	A	A	A		

備考
　南都諸社寺等において精力的かつ着実に宝物調査を実施しており、資料の蓄積を行うとともに、その成果を展示や刊行物・口頭発表等で積極的に公表している。調査の回数、成果の公表回数とも、この方面における当館の調査研究の優れた実績を、広くアピールするのに必要十分な数値に達しているといえる。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	奈良に立地し、仏教美術の調査研究・展示における国内最大級の拠点としての役割を果たしてきた当館にとって、南都諸社寺等に蔵される文化財の調査研究は、最も基本的にして不可欠な作業の一つである。本年度は近在の社寺を中心に所蔵品の調査を活発に展開して資料の収集を着実に進め、また蓄積した成果を展示や刊行物等に反映させ、うち幾つかの事例が画期的成果として注目を集めるなど、質量ともに大きな実績を挙げることができた。こうした調査を通じて近隣社寺との交流・信頼関係は一層深まりつつあり、今後の特別展をはじめとする、当館の企画・事業のさらなる充実につながることが期待できる。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	南都諸社寺等における文化財調査は「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画の主軸をなすものであり、近隣社寺の宝物調査実施による基礎資料の蓄積、その成果の展示や刊行物等への反映の両面において、本年度は大きな実績を挙げることができた。24年度以降も毎年恒例の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」や、南都の地域性を重視した仏教美術関連の特別展（「解脱上人貞慶」「当麻寺展」等）の開催を予定しており、それらの充実を図るべく本年度同様の業務を継続し、着実に成果を挙げていく必要がある。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4543-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）正倉院宝物や奈良の出土遺物・伝世品・伝統工芸・芸能など、当該地域に密着した文化財に関する調査研究を実施し、展覧会等に反映させる。（(5)－④）

【事業概要】
毎秋恒例の「正倉院展」を最も重要な事業の一つに位置づけている奈良国立博物館の運営方針に沿って、正倉院宝物に関する調査研究活動を行い、その成果を展示や刊行物等に反映させる。併せて奈良という地域に密着した文化財に関する調査研究を、（当館が主たる調査研究対象としている仏教美術ないし社寺関係の文化財に限定することなく）時代的にもジャンル的にも幅広く展開し、その成果を展示活動や刊行物等に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】
岩田茂樹（学芸部長補佐）、内藤栄（学芸部長補佐）、稲本泰生（前企画室長）、吉澤悟（前教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（前情報サービス室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、清水健（前教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）

【主な成果】
正倉院宝物に関連する調査研究を積極的に進め、その成果は当館が編集・刊行した展覧会図録『第 63 回正倉院展』に掲載されたほか、「正倉院展」会場での解説パネル類、新聞連載記事、講座・シンポジウムにおける口頭発表等に反映された。また明治時代に奈良県物産陳列所として建立され、このほど改修工事を終えて 23 年 7 月に再オープンした、敷地内の仏教美術資料研究センターの文化史的意義に関する調査研究を行い、その成果を図録にとりまとめて公刊した。

【年度実績概要】
① 「第 63 回正倉院展」開催に際し、同題の展覧会図録（和文及び英文）を編集・刊行した。出陳宝物調査資料の精査に基づいて各人が執筆した原稿を当館研究員全員で討議・吟味し、内容を確定した各個解説を掲載した。同図録には当館研究員の執筆した関連論考（「宝物寸描」）3 篇も付載した。会期中には新聞紙上で当館研究員執筆による宝物紹介記事を連載し、公開講座では当館研究員 2 名が研究成果を披露した。また当館が企画運営した正倉院学術シンポジウム 2011「正倉院宝物のはじまりと国家珍宝帳」（於：ならまちセンター）でも研究員 1 名が正倉院宝物に関連する研究成果を発表し、討論に参加した。
② 平成 21 年度から 2 年間にわたり耐震補強改修工事が行われた、当館敷地内の仏教美術資料研究センター（奈良県物産陳列所として建立された、近代建築史上重要な遺構。重要文化財）の文化史的意義に関する資料収集・調査研究を行い、その成果をとりまとめた図録『奈良国立博物館　仏教美術資料研究センター　重要文化財　旧奈良県物産陳列所』（総頁 24）を、23 年 7 月のリニューアルオープンに併せて公刊した。調査研究の過程で明治時代に陳列所の建設に従事した技術者宅から、貴重な古写真等が発見された。遺族の厚意でこれら資料は当館に寄贈され、その一部が図録に掲載された。
③ 毎年恒例の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に際し、本年度は特に競馬と相撲とに焦点をあてて関連文化財を重点的に調査し、出陳した。調査研究の成果は、同名の展覧会図録及び解説パネルなどに反映された。

正倉院学術シンポジウム 2011

仏教美術資料研究センター古写真

【実績値】
展覧会等図録刊行　5 冊
講座・研究会等発表回数　16 回
論文等発表本数　7 本

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4543-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
正倉院展開催時に刊行した図録や講座・シンポジウム等において、正倉院宝物に関する当館の研究員ならではの調査研究成果を公表することができた。また奈良に密着した文化財についての調査研究に関しては、ユニークな近代建築として注目を集める、敷地内の仏教美術資料研究センターの文化史的意義に関する研究成果を図録として刊行するなど、仏教美術一辺倒ではない奈良国立博物館の多彩かつ充実した調査研究活動の一端を、広くアピールすることができた点が特筆される。

2．定量的評価

観点	図録等刊行	講座・研究発表等回数	論文等発表本数			
判定	A	A	A			

備考
正倉院宝物及び奈良に密着した文化財の調査研究を展開し、資料の蓄積を行うとともに、その成果を展示や刊行物・口頭発表等で積極的に公表した。成果の公表回数については、この方面における当館の調査研究の優れた実績を、広くアピールするのに必要十分な数値に達しているといえる。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	かつて平城京がおかれた奈良には、独特の魅力に富んだ地域色豊かな文化が形成され、開花した。そこには当館が展示・調査研究の主軸としている仏教美術の枠に収まりきらない要素が、多分に含まれている。また奈良時代の日本に開花した文化の高い水準と国際性を、最も雄弁に物語る存在である正倉院宝物を、毎年恒例の「正倉院展」で展示する館として、当館は世界でも唯一無二の存在である。これら諸点に鑑み、正倉院宝物及び奈良という地域に密着した文化財の調査研究を展開し、その魅力を掘り起こして展示・刊行物等で広く紹介する活動を行ってきたが、本年度もこれまで同様、質量両面において十分な実績を挙げることができた。次年度以降も同様の業務を継続し、着実に成果を挙げていく必要がある。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	正倉院宝物や奈良という地域に密着した文化財に関する調査研究は、「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画の趣旨にきわめてよく適合するものであり、その成果の展示等への反映も要請度の高い業務である。本年度は恒例の正倉院展開催時の刊行物や講座・シンポジウム、仏教美術資料研究センターに関する図録等において優れた成果を公表することができ、順調に実績を挙げることができた。次年度以降も同レベルの成果を得ることができるよう、この方面における調査研究活動を継続的に実施していかねばならない。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4543-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4）東京文化財研究所と共同で行う天台高僧像（一乗寺蔵）、信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）の調査など、仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術等の解明に寄与する。（(5)－④）

【事業概要】
奈良国立博物館と東京文化財研究所との間で締結した協定書に基づき、両機関の共同研究として仏教美術作品の光学的調査を実施し、使用材料、製作過程等について検討するとともに、高精細デジタルコンテンツを作成する。光学的調査は、①高精細フルカラー画像の作成、②可視光励起による高精細蛍光画像の作成、③高精細反射近赤外線画像の作成、④高精細透過近赤外線画像の作成、⑤蛍光エックス線による非破壊分析、を実施する。

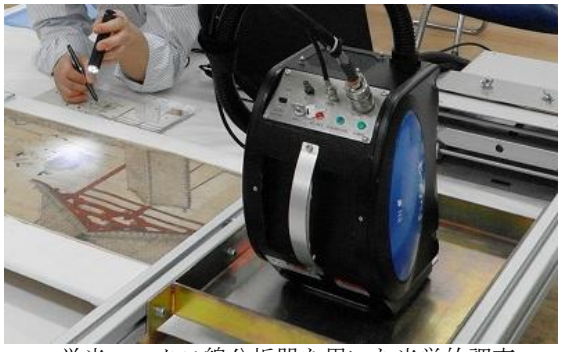
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長　西山　厚

【スタッフ】
【奈良国立博物館学芸部】岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稲本泰生(前企画室長)、吉澤悟(前教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、野尻忠(前情報サービス室長)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、清水健(前教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、永井洋之(企画室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)、【東京文化財研究所】田中淳(企画情報部長)、津田徹英(文化財アーカイブズ研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、城野誠治(専門職員)

【主な成果】
前年度に引き続き当館の寄託品である国宝 信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）を対象とする光学的調査を中心に実施した。すでに撮影を終えていた同絵巻全 3 巻の全紙にわたる高精細カラー画像、近赤外線画像、可視光励起による蛍光画像を詳細に検討して顔料調査の必要ポイントを確定し、蛍光エックス線分析器を用いて約半分のポイントまで光学的調査を実施し、顔料の同定に資する基礎的データを蓄積することができた。

【年度実績概要】
① 本年度は、前年度から 3 ヶ年計画で開始した当館寄託品の国宝 信貴山縁起絵巻を対象とする光学的調査の第 2 年度に当たる。まず、前年度にすでに撮影を終えていた山崎長者巻・延喜加持巻・尼公巻の全 3 巻全紙にわたる高精細デジタルカメラを用いたカラー画像、近赤外線画像、可視励起光による蛍光画像について詳細な分析を加え、その所見を踏まえて東京文化財研究所において 5 月 6 日に研究会を開催した。以後も継続的に画像データの検討を重ね、剥落や変色によって顔料の有無や種類、顔料層の構造が不明明瞭になっている部分を中心に追加の光学的調査が必要なポイントを絞り込んだ。これを元に、当館調査室において 11 月 9 日から 11 日の 3 日間にわたり蛍光エックス線分析器を用いて顔料に含まれる元素を同定する光学的調査を実施し、山崎長者巻の全ポイントと延喜加持巻の約半分のポイントに関する基礎的データの収集を行った。また調査期間中の 11 月 11 日には研究会を開催し、そこで年度内に残る延喜加持巻後半と尼公巻の全ポイントについての調査を実施すること、次年度には蛍光エックス線調査ポイントを中心に高精細デジタルカメラを用いた顕微鏡撮影を実施することを確認した。
② 前年度末に刊行した本共同研究の成果報告書である『大徳寺伝来五百羅漢図銘文調査報告書』は国内外で極めて高い評価を受けているが、その成果を踏まえて 24 年 2 月 18 日に米国ハーバード大学で開催される五百羅漢図のシンポジウムにおいて、当館研究員が研究報告を行った。
③ 『大徳寺伝来五百羅漢図銘文調査報告書』の入手が極めて困難な状況になっていることを踏まえ、同報告書の出版の計画が立ち上がった。出版に際しては、同報告書刊行後に蓄積された五百羅漢図に関する最新の研究成果および関連作品の基礎情報を盛り込むことを確認し、これに備えて次年度に大徳寺所蔵五百羅漢図のうち京都国立博物館寄託分について高精細カラー画像撮影を含む追加調査を実施する計画である。

【実績値】
調査回数　1 回：11/9 ～11/11
調査作品数　　1 件 3 点：
　　国宝　信貴山縁起絵巻(朝護孫子寺蔵)　3 巻
研究会開催件数　　2 回：東京文化財研究所で 5/6
　　奈良国立博物館で 11/11


蛍光エックス線分析器を用いた光学的調査

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4543-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　これまで十分な光学的調査が行われて来なかった平安絵巻の名品である国宝 信貴山縁起絵巻に対し、最新の光学機器を用いた調査を着実に実施し、同絵巻の顔料・絵画技法の解明に向けて、基礎データを蓄積することができた。

2．定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	研究会 開催件数			
判定	A	A	A			

備考
　本年度はすでに信貴山縁起絵巻は全３巻のうち山崎長者巻の全ポイントと延喜加持巻半分のポイントについて蛍光Ｘ線分析器を用いた顔料調査を実施し、顔料同定に資する膨大なデータを収集することができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、3 ヶ年計画で進められている平安絵巻の名品国宝信貴山縁起絵巻に関する光学調査の 2 年度目に当たる。最新鋭の光学機器を用いた調査の実施により、従来は不明だった文化財の材質や構造を明らかにすることができ、また文化財の保存・修理を将来行う上での指針となる詳細な現状記録を残すことができた。また、共同研究のメンバー以外にも当該作品を総合的に評価するために外部の研究者を招聘して調査を実施するとともに、調査によって得られたデータをもとに研究会を行った。特に本年度は蛍光Ｘ線分析器を用いた顔料分析を中心に実施し、基礎的データの収集に努めたが、次年度には本年度の調査箇所を中心に顔料層の構造解明などを目的とした高精細デジタルカメラによる顕微鏡撮影を行う計画であり、追加調査を重ねていくことで分析の精度を高め、報告書の刊行につなげたい。また調査前・調査後の検討会をより綿密に行う一方、現在は 1 週間程度かかる 1 回あたりの調査実施期間を圧縮して、スムーズな日程調整を実現にするとともに、作品自体への負担を軽減したい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。 調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、報告書・目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4554-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究（(5)－⑤）

【事業概要】。
九州国立博物館のコンセプトとして掲げられているアジアとの交流について、関係諸国とのさまざまな形での研究活動を進め、これを展覧会や研究報告などの形で示していく。

【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長　小泉惠英

【スタッフ】
赤司善彦（展示課長）、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、原田あゆみ（文化財課主任研究員）、森實久美子（企画課特別展室研究員）、市元塁（同）、進村真之（展示課研究員）、上野良信（滋賀県立琵琶湖文化館）、井上ひろ美（滋賀県立琵琶湖文化館）、土井通弘（就実大学）

【主な成果】
昨年来継続してきたタイ国芸術局との研究交流の成果として、平成 23 年 4 月 12 日～6 月 5 日まで「日本とタイ ふたつの国の巧と美」帰国展、また、韓国国立中央博物館との研究交流の成果として「日本　仏教美術－琵琶湖周辺の仏教信仰」を韓国国立中央博物館において 12 月 20 日～平成 24 年 2 月 19 日まで実施した。これらはいずれも文化庁との共催事業である。

【年度実績概要】
平成 19 年度より継続的に実施してきた「文化財の保存と観光資源としての利活用」の成果として、前年度にタイ国バンコク国立博物館で特別展を開催したが、この帰国展を本年度、当館文化交流展示室において開催した。これに伴い、タイ側から計 10 名を招聘し、また日本側から計 2 名を派遣した。
会期中、展示内容に即した講演会、講座を 2 回、ワークショップを 1 回、タイの民族芸術を紹介するイベントを 1 回実施した。
また、展覧会の開催に伴って、今後の日タイ両国の学術交流について検討し、今後も継続的な研究交流活動を行なうことで合意した。
韓国では、国立中央博物館において日本文化を紹介する展覧会開催にあたり、2 年前に当館で開催した「湖の国の名宝」展を核としてこれを実施することとなり、文化庁ならびに韓国側と協力して、企画・運営・展示・学術協力を行なった。これに伴い、韓国より延べ 5 名の研究員を招聘、日本側から延べ 11 人を韓国へ派遣した。また、滋賀県において日韓共同での文化財調査も実施した。

＜日本 仏教美術-琵琶湖周辺の仏教信仰＞展
（韓国国立中央博物館）

【実績値】

○調査回数　1 回（韓国：日韓での共同調査）

○研究員海外派遣数　のべ　13 名（タイ 2 名、韓国 11 名）

○研究員受入数　15 名（タイ 10 名、韓国 5 名）

○論文掲載数　10 本（タイ展：日本 1 本、タイ 4 本、韓国展：日本 4 本、韓国 1 本）

○展覧会回数　2 回（タイ展、韓国展）

○研究報告回数　1 回（第 53 回東南アジア彫刻史研究会）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4554-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	S	A	A	A

備考
　タイ、韓国の両展覧会ともに、それまでの研究の蓄積および成果を大規模な海外展の形で結実したものであるが、展覧会の開催によって、プロジェクトが終結するものではなく、これをきっかけとして、さらに多角的にそれぞれの国の文化を研究していく端緒となっている。タイにおいては学術交流を進めることが提起され、また韓国においては今後の特別展を踏まえながら、より細分化した分野での専門性の強い研究交流を進めることを予定している。

2．定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	研究員受入数	論文掲載数	展覧会回数	研究報告回数
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　タイ展においては、すでに事前調査が前年度までに十分行なわれ、準備が整っていた。派遣、招聘については、博物館はじめ文化財行政に関わるメンバーによって、展覧会の準備などが行なわれ、同様に図録掲載論文においても、多くのそれぞれ各国の研究員が数多く参加している。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	タイ、韓国ともに両国を代表する国立の機関との研究交流を実施した。いずれの国も文化財行政の最先端を行く機関との共同事業であり、相互に有益な情報を得たばかりでなく、展示という形を取ることでそれぞれの市民・観覧者にもその成果が還元された。また、今後の更なる研究交流、展覧会開催に向けて、より強固な体制作りの契機となった。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会を契機として、タイ、韓国ともに文化財行政に関わる中枢機関との密接な関係を築くことができた。これによって、タイとは今後の学術交流の進展、韓国とは特別展の開催に向けて、新たな段階へと進んでいく。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4554-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）アジアの木地螺鈿－その源流、正倉院宝物への道をたどる－（科学研究費補助金）（(5)－⑤）

【事業概要】
正倉院宝物として伝えられる木地螺鈿は、今のところ唐代の遺品が最古の事例であり、その後アジア各地で散発的に出現して独自のスタイルを持って盛行する。本研究では、螺鈿として優れた作品を生みながらもこれまでほとんど研究が行われて来なかったこの木地螺鈿について、中国、ベトナム、インドなどの制作地や各地に残る遺品について実見を行い、その歴史的実態について制作技術、製品内容、また消費の実態などについて多面的な研究を行うものである。

【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	資料管理室長　小林公治

【スタッフ】
猪熊　兼樹（東京国立博物館主任研究員）

【主な成果】
本研究の最終年度である今年度は、これまでに行ってきた木地螺鈿を主体とするベトナムの螺鈿について、おそらく世界で初めて総合的な研究論文を発表した。さらに中国での研究発表と調査、またベトナムでの研究発表と調査によりその成果を各地で広く公表し、より広範な関心の喚起と成果の還元を行うと共に、まだまだ不明点の多いその実態について、さらなる究明を目指した。また、国内各地に於いても調査を実施した。

【年度実績概要】
ベトナムに螺鈿が存在することは、外国人ではこれまで漆工史や家具類に関心を持つごく一部の研究者などが知るのみであり、一方ベトナム国内ではキン族の人々は一般的な知識として知っているものの、その歴史や技術、またそれに反映されているベトナム人の価値観といった点については何らの書籍も無く明らかにされていない現状にあった。筆者はこれまでに行ってきた調査結果をまとめ、日本語ではあるがベトナムの螺鈿に対する総合的な研究調査計画を発刊することができた。
また、8月から9月にかけて中国西安で開催された漆に関する国際フォーラムでは、中国はもとより各地からの参加者に対してこれまでの本科研費研究の成果を含む中国の螺鈿史全体について、その歴史上の問題点とその理解への解決点の提示、さらにはこうした文化の今後の維持について提言などを行い、さらにそれを中国語で論文発表した。その後、中国各地で正倉院と類似する鏡類や木地螺鈿作品や制作状況に関する調査を実施した。
11月のベトナム調査では、これまでのベトナム調査の研究ベースの一つであるベトナム国家博物館（歴史博物館）において、副館長3名以下多数の館員、またベトナム革命博物館館員らおおよそ 50 名に対してこれまで明らかになったベトナム螺鈿研究の成果について講演を行った。また講演後には多くの感想が寄せられ、高い関心を得ることができた。その後、ベトナム各地を訪れこれまでで不足していた情報の収集に努め、南部およびカンボジアにかけてクメール人によるクメール様式（仮称）というべき独自の螺鈿が存在する可能性が高いことなどが明らかになってきた。
この他、関連する唐代螺鈿鏡と平脱鏡について日本国内各地でも調査を行い、重要問題点として上がってきた、漆と自然樹脂との使い分けについて研究発表を行った。

山西省稷山螺鈿工房での調査

ベトナム国家博物館（歴史博物館）での講演

【実績値】

○調査回数　3回

○論文等掲載数　3回

○学会研究会等発表数　3回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4554-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	B
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数	論文等掲載数	学会研究会等発表数			
判定	A	A	A			
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の調査目的に従うと共に、より広い視野の下、広範な調査を実施できた。またこれまでの調査成果や、問題点などについて各地で公表し幅広い意見交換を行い今後の研究につなげる実績を得ることができた。 資料収集については画像などを中心としたためあまり積極的に行えなかったが、今後の課題としたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	アジア各地に於いて幅広い調査を実施でき、おおむね順調な成果を上げ得たと評価できる。しかし、一地域での調査時間は十分とは言えず、得られた情報に精粗がある。今後はこうした問題点についてできるだけ改善し、より詳細な情報の入手に努めたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4554-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3)琉球との交流の視点から京都檀王法林寺に関する調査研究（(5)－⑤)

【事業概要】
平成 23 年は袋中上人が檀王法林寺を開創して 400 年目にあたる。袋中は 17 世紀初期の古琉球時代の琉球に渡って浄土教を広めた僧侶で、尚寧王はじめ多くの帰依を受けた。袋中は、琉球に関する『琉球神道記』(重要文化財)を著したことでも知られている。檀王法林寺には袋中が尚寧王から譲られたと伝えられる宝物が所蔵されており、これらは日琉交流に関する極めて貴重な文化財であり、当館のテーマに最適であり、トピック展として公開した。

【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長　藤田励夫

【スタッフ】
楠井隆志（展示課主任研究員)、原田あゆみ（文化財課主任研究員)、川畑憲子（企画課研究員)、森實久美子（企画課研究員)、末兼俊彦（アソシエイトフェロー)、金井裕子(東京国立博物館研究員)

【主な成果】
トピック展示「琉球と袋中上人展」(会期　平成 23 年 11 月 1 日から 12 月 11 日）を沖縄県立博物館・美術館と共催で開催した。
展覧会図録「琉球と袋中上人展」を刊行した。
関連催事として講演会「袋中上人とエイサー・檀王法林寺」を開催した。うるま市無形文化財　平敷屋エイサー公演を行った。共に 11 月 13 日。
沖縄県立博物館・美術館での会期は平成 24 年 1 月 25 日から 2 月 19 日まで。

【年度実績概要】

トピック展示「琉球と袋中上人展」を開催するにあたっては、事前調査を実施した。応急修理が必要な作品については、修理を行った。
展覧会図録作成のため写真撮影を行った。展覧会図録「琉球と袋中上人展」を刊行した。
展覧会開催中は、講演会「袋中上人とエイサー・檀王法林寺」を開催した。(11 月 13 日)
うるま市無形文化財　平敷屋エイサー公演を行った。(11 月 13 日)
ミュージアムトークも行った。(11 月 1 日「琉球と袋中上人」、11 月 8 日「琉球と袋中上人展」の彫刻)

トピック展示「琉球と袋中上人展」
展示風景

【実績値】

展覧会観覧者数　48,000 人

講演会参加者　70 人

平敷屋エイサー観覧者　800 人

論文掲載数　1 回　展覧会図録「琉球と袋中上人展」九州国立博物館

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4554-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	S	S	A	A

備考
適時性　檀王法林寺開創 400 年という記念の年に開催できた。
発展性　所蔵者や沖縄県との深いつながりを構築した。
効率性　短時間の準備で達成できた。

2．定量的評価

観点	展覧会観覧者数	講演会参加者	平敷屋エイサー観覧者	論文掲載数		
判定	A	A	S	A		

備考
平敷屋エイサー観覧者は、午前と午後の各公演とも 300 名を超える観覧者があり、ほぼ全員の観覧者が、約 30 分の公演を終始観覧していた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館のテーマである対外交流と深い関わりがある「琉球と袋中上人」展の開催は、単に展覧会を開催しただけではなく、研究面での深まりを達成し、檀王法林寺をはじめとする所蔵者や共催館との信頼関係を深めることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	一定数の観覧者を得たほか、関係各機関との繋がりを深めることができた。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4561-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）博物館の保存環境に関する研究（(5)－⑥）

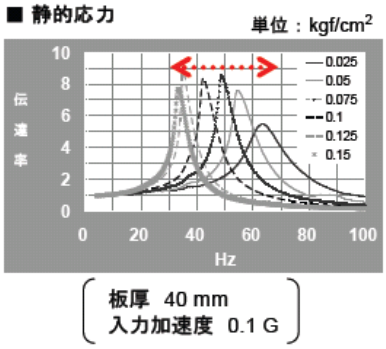
【事業概要】
東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

【スタッフ】
和田　浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、荒木　臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）

【主な成果】
今年度は文化財の保存環境の内、特に輸送環境と収蔵環境について、下記概要に示す調査研究を行った。文化財梱包に用いられる緩衝材の振動特性について新たな知見が得られたこと、および、保存箱製作に使用される接着剤の硬化過程における揮発成分濃度の変化を科学的に解析できたことが主な成果である。

【年度実績概要】
1.緩衝材の特性評価について
文化財輸送では輸送中に発生する衝撃を緩衝する技術がまず重視されるが、同じく輸送中に発生する振動と文化財が共振せぬような梱包設計も重要である。従来、緩衝材の固有振動数は単位面積あたりの荷重と緩衝材の厚みによって決まるものと考える傾向が強く、入力加速度を変化させた場合に振動特性へその影響が現れるのかは不明確であった。そこで、文化財梱包において頻繁に使用されるサンテックフォーム®を用いて、振動実験を行いその挙動を明らかにした。結果は下表の通り、荷重、入力加速度、緩衝材厚みといった要素が変化するにつれて固有振動数にも変化が現れることが分かった。この結果から、輸送時の振動対策は複数の要素（荷重、加速度、厚み）が関係する複雑なものであると考えられる。従って、今後は他の緩衝材についても振動特性評価を進め、輸送中の文化財への振動の影響を効果的に排除できる梱包設計の構築を目指す。



	荷重	入力加速度	緩衝材厚み
小さい	固有振動数高い	固有振動数高い	固有振動数高い
大きい	固有振動数低い	固有振動数低い	固有振動数低い

2.保存箱製作における中性接着剤の使用法について
中性紙を材料として文化財用保存箱の表面に布を貼る際に用いられる中性接着剤が、硬化する過程でどの程度揮発性有機物を放出しているのか、実物模型を用いて分析した。館内で製作する保存箱と同じ材料･工程で同一技術者が模型を製作し、製作直後から揮発する気体を捕集し含有する有機酸（ギ酸、酢酸）濃度を分析した。その結果、保存箱製作後から少なくとも１ヵ月間の調整（枯らし）期間を経過した後に実用に供することが適切であると分かった。

【実績値】
研究会発表件数　３件
文化財保存修復学会（奈良）
日本包装学会第 20 回年次大会（京都）
2011 ISTA-CHINA PACKAGING SYMPOSIUM（中国）
論文掲載件数
発表の準備をしている段階、現状では発表件数はなし。
調査回数　３回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4561-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　緩衝材の特性評価に関する調査研究は文化財関連分野だけでなく、輸送・包装関連の国内外の学会からも高い評価を受けている。中性接着剤の使用法についての調査研究からは、極めて実用的用途に有効なデータが得られた。

2．定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数			
判定	A	B	A			

備考
　緩衝材の特性評価に関する調査研究については、他の緩衝材を複数調査する機会を得た後に、改めて総合的な調査報告を行いたいと考えている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	いずれの調査研究も、実験を行うことで得られた客観的データを詳細に分析することで、従来から存在する問題点について具体的な解決の方向を見出したものであるが、基礎研究にとどまらず、実用的側面に大きく寄与する成果が得られた。その点を特に重視して総合的評価を判定した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	環境からの影響を最小限に抑制するために、劣化の原因となる因子を個別的に研究し、それを排除する方法論の開発を実施している。今期について緩衝材および接着剤について確実に進展したことから、きわめて順調に計画が進捗していると考えている。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 東京国立博物館　　処理番号 4561-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究(科学研究費補助金)（(5)－⑥）

【事業概要】
保存と公開という博物館の使命を持続的なものとするためには、あらゆるリスクを予測し、リスクを回避するための対策を事前に講じることによって、高い安全性に裏付けられた活動へと博物館を質的に転換する必要がある。そのためには、従来行われてきた基礎研究及び個別的対処を統合し、機動的かつ実効的な臨床保存学を確立する必要がある。その具体的な方法論としてトータルケアシステムの構築について研究を行う。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

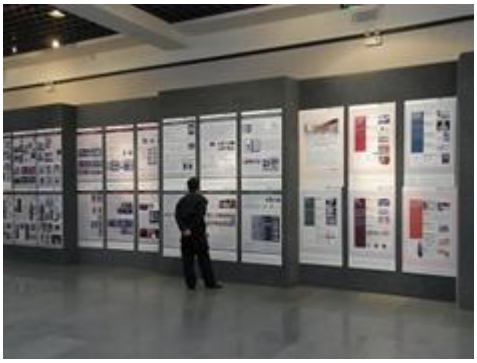
【スタッフ】
土屋　裕子（保存修復室主任研究員）、和田　浩（環境保存室研究員）、荒木　臣紀（環境保存室主任研究員）、佐藤　香子（研究支援者）

【主な成果】
これまでに集積したカルテデータのデジタル化を進めながら、管理分析サブシステム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」の整備、温湿度センサー及び 2 次元バーコードを用いたセンサーサブシステムの整備を行った。管理・分析サブシステム、センサーサブシステム、列品検索データベースシステム（プロト DB）とのネットワークを用いて、包括的保存システムの実験的運用を開始した。

【年度実績概要】
平成 23 年度は 22 年度に引き続き、これまでに構築したシステムを用いて　温湿度環境レベル、空気汚染物質、振動・衝撃レベルの許容量の指針を作成し、劣化要因（Critical To Quality）の定義の一つとした。それに基づいた環境の最適化を図るための検討を、これまでに構築したシステムを稼動させ、環境改善の取り組みを試行した。現段階で、臨床データを取得・処理するためのハードウエア部分の仕組み作りは完成した。さらに、これらのサブシステムの実際的な運用をすでに開始しており、各サブシステムあるいはサブシステムに含まれる個別的なシステムの動作確認を臨床活動の中で実施している。今年度より、これら完成したサブシステムを具体的に運用しながら、処置後の経過観察の在り方などに関して、最適化管理サブシステムの構築を進めた。

【実績値】
研究会発表件数　11 件
・東アジア文化遺産保存学会第 2 回大会口頭発表 1 回（内モンゴル・フフホト）（2011.08.17）
・東アジア文化遺産保存学会第 2 回大会ポスター発表 1 回（内モンゴル・フフホト）（2011.08.17 - 18）
・文化財保存修復学会第 32 回大会ポスター発表 7 件（奈良）（2011.06.04-05）
・日本包装学会第 20 回年次大会口頭発表 1 回（京都）（2011.07.08）
・2011 ISTA-CHINA PACKAGING SYMPOSIUM 口頭発表 1 回（中国）(2011.09.21)

論文掲載件数　1 件
東アジア文化遺産保存学会第 2 回大会予稿集（内モンゴル・フフホト）(2011.08.17)



東アジア文化遺産保存学会第 2 回大会
ポスター発表風景
壁一面に掲載された臨床保存のポスター

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4561-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　作品の状態、履歴及び環境の情報の収集と解析に関して、実践を通じた研究を行った。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。

2．定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数				
判定	A	A				

備考
　科学研究費補助金（基盤（S）（平成20年～24年））を活用して、各種のデータを博物館の空間と関連付けて保存・検索できるデータ活用システム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」に昨年までに整備したデータを用いて構築したサブシステムや温湿度センサーネットワークなどとのネットワークを構築して、博物館内に蓄積したデータを包括的に活用する実用実験を実施した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	保存と公開を実践しつつ、安全性をより向上させるために、現状の解析と改善を具体的に実施し、臨床保存学の具体的な機能が明確化できた。現在構築中の支援システムの精度の向上を図ると同時に、将来予測に立脚した現状判断が可能なように、目標とするシステムの確立を目指したい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	包括的保存システムの構築に向けた4年目の取り組みとして、全5カ年の計画を予定通りに進めることができた。今後、実験的運用に着手する段階に達している。これまでの取り組み、および本システムの意義などについて社会的な普及が課題として残っているので、次年度はそれについても重点的に取り組む予定でいる。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4562-1
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1）修復文化財に関する資料収集及び調査研究（(5) －⑥）		
【事業概要】 文化財保存修理所において修復が行われている文化財に関して情報を収集する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	副部長兼保存修理指導室長　村上　隆
【スタッフ】 淺湫　毅（主任研究員）、伊東史朗（調査員）			
【主な成果】 平成 23 年度に新規搬入された作品の「修理計画書（設計書）」にもとづき、データを入力し、平成 22 年度に完成、搬出した作品については、各工房より提出された「修理解説書（報告書）」にもとづき、データを追加、更新した。また、平成 19 年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 8 号に掲載し、修理時に発見された銘文 6 件を「銘文集成」として報告した。			
【年度実績概要】 文化財保存修理所の工房に搬入される新規修理作品に関して、データを収集し、データベースに登録した。 過去の修理作品に関してもデータの更新、整理作業を行なった。 毎月行っている文化財保存修理における修理工房の巡回時のほか、適宜工房において、修復中にしか得ることの出来ない情報（作品の構造や使用材料、内部納入品や銘文など）を収集し、分析を行なった。 『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 8 号に掲載する平成 19 年度修理作品のデータを整理するとともに、同年の修理で発見された銘文の解読作業を行なった。			
【実績値】 ○データ収集件数 23 年度は 102 件の新規修復文化財の搬入があり、これらの作品に関してデータを収集するとともに、修復データベースへの登録を行なった。 ○データ追加更新件数 過去のデータに関して 1,869 回追加、更新を行なった。 ○調査回数 修理所の巡回を 11 回行なった。その他、新発見の事実や銘文の調査を適宜行なった。 ○報告書 24 年 3 月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 8 号（19 年度分）を発行した。			
【備考】			

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4562-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　限られた期間中にあらゆる側面からの調査を行ない、データ収集に努めた。
　制作年や制作者など、文化財の制作時に関わる情報は、解体修理の折に発見されることがほとんどであり、作品を多角的に評価する上での基準となりえる。ここで得た情報を「銘文集成」として記録にとどめる意義は大きいといえる。

2．定量的評価

観点	データ収集件数	データ追加更新件数	調査回数	報告書		
判定	A	A	A	A		

備考
　修理に関するデータの蓄積は順調であり、今年度は『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第８号の１冊を完成した。これにより、これまで滞っていた情報公開のスピードを速めることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修理所で行われる修理作品から得られる情報はおおむね収集できた。 また、その成果を報告書に反映した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財保存修理所で行われる修理作品から得られる情報はおおむね収集できた。 また、その成果を報告書に反映した。

【書式Ｂ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4562-2
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）文化財の保存・修復に関する調査研究（(5) －⑥）

【事業概要】
京都国立博物館の館蔵品を中心にさまざまな分析を行い、材質や構造を調査し、今後の保存、さらには修理のための基礎知見を蓄積することが目的である。また、特に金属製文化財を中心に調査を進めるために、奈良文化財研究所などの独法内施設を効率的に活用し、調査研究の効率的推進も視野に入れている。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　　村上　隆

【スタッフ】
赤尾栄慶（上席研究員）　　高妻洋成（奈良文化財研究所）
羽田　聡（研究員）　　難波洋三（奈良文化財研究所）
永島明子（主任研究員）

【主な成果】
京都国立博物館蔵品「銀字華厳経」の修理にあたって、経文の文字が銀の細かい粒子で描かれていることを、電子顕微鏡などを駆使して明らかにすることができた。また館蔵品の印籠のマイクロフォーカスＸ線 CT によって、内部を精細に観察し、材質が薄い革か紙製であることを明らかにした。さらに、昨年に続き、長野県中野市柳沢遺跡出土の銅鐸、銅戈の分析と埋蔵環境の評価を行った。

【年度実績概要】
東大寺二月堂に伝わる華厳経は火災のため一部を焼失しているが、銀字で書かれた経文がまったく変色していないため、プラチナ経ともいわれてきた。しかし、今回の調査により、銀そのもので書かれていたことが明らかになった。銀が変色しなかった理由についても考察した。この成果は、文化財保存修復学会において発表した。館蔵品の印籠の調査では、
これまで木製とされてきた材質が、革か紙であることを明らかにすることができた。これについても、同じく学会において発表した。
昨年から引き続き行ってきた長野県柳沢遺跡出土の銅鐸と銅戈の調査は、今年が最終年度であったが、分析値と形式論との比較検討など、これまでの研究では触れらてこなかった事項にまで踏み込んだ調査となった。

【実績値】
調査件数：　5 件
収集資料数：15 件
調査報告：　報告書 1 件　学会発表 3 件
新聞掲載：　3 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4562-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査報告	新聞掲載		
判定	A	A	A	A		
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究員とともに館蔵品を科学的に調査・研究を行う体制を確立できてきたことは大きく評価されよう。また、得られた成果は適時に学会等で絵発表しており、それに伴い、新聞などのメディアの注目も集めている。これは、京都国立博物館の研究の幅広さを世間に問う意味でも大いに評価されると考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究・調査の重要性が、学芸部全体で認識されており、協力的な体制をとることができている。今後とも、少しずつではあっても同様の調査・研究を継続できるような体制を取れるように努めていきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4563-1
（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1）収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究を持続的に実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る。（(5)－⑥）		
【事業概要】　展示室・展示ケース・収蔵庫等の環境が文化財に与える影響の解明を目的として、①温湿度センサーによる展示室・展示ケース内等の温湿度データ収集、②展示ケース内に浮遊する粉塵の電子顕微鏡観察、③パッシブインジケータによるＶＯＣ調査、④文化財害虫調査トラップの定期的な設置・回収等を継続的に実施し、調査で蓄積されたデータを分析することで展示室等の保存環境向上を図る。			
【担当部課】	学芸部保存修理指導室	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　谷口耕生

【スタッフ】
岩田茂樹(美術室長)、内藤栄（工芸考古室長)、谷口耕生（保存修理指導室長)、斎木涼子(列品室員)、山口隆介（美術室員)、降幡順子（奈良文化財研究所主任研究員）

【主な成果】
・展示室、展示ケース内に設置した温湿度センサーのデータを分析して、展覧会ごとにその所見を報告書にまとめた。
・正倉院展終了後に展示ケース内から回収した粉塵を電子顕微鏡で観察し、粉塵の種類および単位面積当たりの量を計測して、展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。
・展示室・収蔵庫などに設置された調査用トラップを、毎月 1 回当館研究員が設置回収し、文化財害虫の生息状況を報告書にまとめて害虫被害回避につなげた。

【年度実績概要】
① 展示室、展示ケース内の温湿度については無線機能付き温湿度センサーを合計 75 箇所設置して 24 時間リアルタイムに温湿度の変化を監視するとともに、ＬＡＮ回線を通じて学芸部内で収集したデータを蓄積し、分析結果を展覧会ごとに報告書にまとめることで、文化財の展示環境の保持および改善につなげた。収蔵庫・文化財保存修理所内については、各 5 箇所程度設置したロガータイプの温湿度センサーのデータを保存修理指導室員が定期的に回収・分析を行い、温湿度状況の異常が把握された箇所について、結露防止を目的とする二重ガラス設置・保存棚の配置変更など施設の改善につなげた。
② 正倉院展終了後、20 箇所の展示ケース内から回収した粉塵を電子顕微鏡で観察し、粉塵の種類および単位面積当たりの量を計測して、展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。
③ 上記の当館の無線通信機能付きセンサーを用いた温湿度管理および展示ケース内の粉塵調査の成果については、6 月 4 日に文化財保存修復学会第 33 回大会において、当館保存修理指導室研究員と宮内庁正倉院事務所保存課技官が共同発表者として「奈良国立博物館における無線ＬＡＮ温湿度モニタリングシステム・新展示ケース導入の経緯と成果」「電子顕微鏡観察による展示ケースの密閉度の評価」と題する報告を行い、当館保存環境維持への取り組みについて理解を広めた。
④ 正倉院展展示作業開始前の 10 月上旬に、本年度に入ってから新造・改修した展示ケースを対象としてパッシブインジケータを用いた有機酸・アルカリ性ガスの残存状況について検査を行い、展示環境の安全を確認した。
⑤ 展示室・収蔵庫・文化財保存修理所内など館内 150 箇所に設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制により毎月 1 回交換・回収し、回収したトラップは外部業者に委託して文化財害虫の捕獲数データを蓄積した。この調査データをもとに清掃による衛生環境の保持などＩＰＭの実践につなげた。

【実績値】
・保存環境調査実施箇所数：245 箇所（展示室内温湿度調査：75 箇所、展示ケース内粉塵調査箇所：20 箇所、文化財害虫生息状況調査箇所：150 箇所）
・保存環境調査報告書作成件数：11 件
（温湿度モニタリング報告書 3 件、昆虫類調査用トラップ分類同定結果報告書 8 件）
・研究発表件数：2 件（文化財保存修復学会第 33 回大会　6 月 4 日　2 件の発表を行った）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4563-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　前年度に引き続き保存環境調査を着実に実施し、そこで得られたデータを報告書として蓄積することができた。このデータに基づいて展示環境の改善が飛躍的に進んでおり、当館の取り組みが今後、広く全国の博物館施設に普及することが期待される。

2．定量的評価

観点	保存環境調査実施箇所数	報告書作成件数	研究発表件数			
判定	A	A	A			

備考
　保存環境調査の件数、報告書の作成ともに前年度の実績を踏襲して着実な成果を上げており、これを踏まえて本年度は新たに文化財保存修復学会で口頭発表を行うなど、必要十分な条件を満たしている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	前年度に引き続き一年を通じて保存環境調査を着実に実施し、そこで得られたデータをもとに展示環境の維持・改善に努めることができた。次年度も今年度と同規模の調査を継続的に実施し、データの精度をさらに高めるとともに、保存環境変化の兆候を十分に把握できる体制を築いていきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。 今後もこのペースを維持しつつ、保存環境の維持・改善に努めていきたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4563-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）館蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する。（(5)－⑥）

【事業概要】
・館蔵品、寄託品について詳細に保存状態の調査を実施し、保存カルテとして記録を蓄積することで、将来の文化財修理への指針に役立てる。
・館蔵品、寄託品の修理に際し、事前に当該文化財の保存状態について入念な調査を実施し、その結果を基に修理調書を作成する。
・文化財保存修理所内での修理中に文化財から得られた材質や銘文などの基礎情報について調査分析を実施し、その成果を当館研究紀要に掲載する形でデータを蓄積する。

【担当部課】	学芸部保存修理指導室	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　谷口耕生

【スタッフ】
岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、山口隆介（美術室員）、降幡順子（奈良文化財研究所主任研究員）

【主な成果】
・館蔵品、寄託品について保存状態を中心に入念な調査を実施し、その所見をもとに保存カルテを作成した。
・館蔵品、寄託品の修理に際し、保存カルテや新規に実施した保存状態調査の所見をもとに修理調書を作成し、修理方針を決定した。
・文化財保存修理所で修理中の木造文化財について実施した樹種同定調査や、同じく修復文化財から発見された銘文の調査を実施し、その成果を当館紀要に掲載する準備を進めた。

【年度実績概要】
① 館蔵品・寄託品の貸与や修理などの機会に、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各部門担当者が、光学機器等を用いて保存状態確認を中心とする文化財調査を実施し、そこで得られた成果を保存カルテに記入して基礎データを蓄積し、将来の修理への指針に役立てた。保存カルテについては、新規フォームの作成・保管などの管理業務を保存修理指導室が担当した。
② 館蔵品・寄託品の修理時において、事前に保存状態を中心とする入念な文化財調査を実施し、その成果や保存カルテの情報を参照しつつ修理調書作成し、修理方針を決定した。
③ 当館と京都大学生存圏研究所との間で締結した協定に基づき、当館文化財保存修理所内における未指定の木造文化財の修理過程で自然に脱落した資料について、所蔵者の同意を得て樹種同定の調査を行った。調査対象となったのは当館寄託品の施福寺所蔵舎利厨子等２件であり、分析結果は当館研究紀要『鹿園雑集』14 号（平成 24 年３月刊行）に「平成 23 年度　修復文化財（木造）材質調査報告」として掲載した。これらの樹種データを蓄積することによって、木造文化財の製作技法・製作背景等を樹種の観点から解明する基盤としたい。
④ 文化財保存修理所内で館蔵品・寄託品および未指定文化財の修理中に発見された銘文については、当館研究員と修理技術者が共同で調査を実施した。とりわけ海住山寺からの寄託品である阿弥陀浄土曼荼羅の軸木から発見された鎌倉時代の墨書銘を調査した結果、この阿弥陀浄土曼荼羅が海住山寺中興開山である解脱上人貞慶の十三回忌に際して創建された同寺経蔵の什物だったことが判明し、貞慶の信仰と密接に関わる作品である可能性が高まった。この成果は、平成 24 年４月に当館で開催予定の特別展「解脱上人貞慶」の展示・図録に反映される予定である。
　なお、発見された銘文については、修理完成後に所蔵者の同意を得た上で当館研究紀要『鹿園雑集』に写真・翻刻データを掲載予定である。

【実績値】
・保存カルテ作成件数：総計 110 件
　うち彫刻 18 件、絵画 44 件、書跡７件、工芸（金工・漆工・染織）25 件、考古 16 件
・修理調書作成件数：総計９件
　うち彫刻２件、絵画３件、書跡２件、工芸１件、考古１件
・調査回数：木造文化財樹種同定調査実施件数：２件、修復文化財銘文調査実施件数：４件
・調査概報：２件（「修復文化財（木造）材質調査報告」、「修復文化財関係銘文集成」）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4563-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
館蔵品・寄託品の保存状態調査を継続的に実施し、そこで得られた基礎データを保存カルテとして着実に蓄積することができた。また前年度に引き続き修復文化財の樹種同定調査や銘文調査を着実に実施し、そこで得られたデータを報告書として蓄積することができた。これらのデータは将来における文化財研究や文化財修復に資するものであり、今後も継続的な調査の実施が望まれる。

2．定量的評価

観点	保存カルテ作成件数	修理調書作成件数	調査回数	調査概報		
判定	A	A	A	A		

備考
保存カルテの作成件数、修復文化財の樹種同定調査や銘文調査の件数、同調査に基づく調査報告書の作成ともに着実な成果を上げており、必要十分な条件を満たしている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	館蔵品・寄託品の保存状態調査に基づく保存カルテの作成や、以前から継続的に実施している修復文化財の樹種同定調査・銘文調査を着実に実施し、将来における文化財の研究・修復に資するデータを蓄積することができた。次年度以降も本年度のペースを維持しつつ修復文化財調査を着実に実施していく予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ堅調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ、修復文化財の基礎データ蓄積に努めていきたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4563-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）館蔵品・寄託品等の調査研究を保存科学の観点から実施し、貴重な文化財の後世への継承に資する。（(5)－⑥）

【事業概要】
・館蔵品、寄託品等の修理に際し、修理前・修理中に当該文化財に対して透過Ｘ線や蛍光Ｘ線等を用いた光学調査を実施し、その所見を修理方針に反映させる。
・館蔵品、寄託品の文化財の修理において、修理前に電子顕微鏡を用いた料紙・料絹の繊維組成調査を実施し、その成果をもとに補紙・補絹を調製する。
・文化財保存修理所で修理中の文化財について、研究員と各工房職員が共同で光学機器を用いた材質調査を実施する。

【担当部課】	学芸部保存修理指導室	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　谷口耕生

【スタッフ】
岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、山口隆介（美術室員）、降幡順子（奈良文化財研究所主任研究員）

【主な成果】
・館蔵、寄託品の修理に際し、蛍光Ｘ線を用いた材料調査、近赤外線写真やポリライトを用いた補筆・補絹分布調査、透過Ｘ線を用いた構造調査等を実施した。
・館蔵、寄託品のうち絹製文化財の修理において電子顕微鏡を用いた料絹の組成調査、紙製文化財の修理において同じく料紙の繊維調査を実施し、その所見を修理に用いる補絹・補紙の調製に反映した。
・文化財保存修理所の修理寄託中の仏像について、蛍光Ｘ線を用いた材料調査を実施した。

【年度実績概要】
① 館蔵の絹本著色春日宮曼荼羅の修理に際し、肌上げ作業終了時に料絹の裏から近赤外線撮影を行うとともに、蛍光Ｘ線を用いて裏彩色の顔料調査を実施し、絹裏の状態について基礎データを収集した。その成果は年度末の修理完成時において、修理報告書に掲載した。
② 寄託品の絹本著色阿弥陀浄土曼荼羅（海住山寺蔵）の修理に際し、ポリライトを用いた可視光励起による蛍光画像撮影を実施し、補筆・補彩の有無や、補絹箇所における絹の重なり状態について調査した。その所見に基づいて、次年度に実施予定の補絹除去作業の方針について協議した。
③ 考古部門の館蔵品のうち金属製品の修理 5 件において、透過Ｘ線を用いた構造調査および蛍光Ｘ線を用いた材質調査を修理技術者と共同で実施し、その成果に基づいて修理方針を決定した。併せて材質教化のために含浸させる樹脂の選定についても修理技術者と検討を重ねた。
④ 館蔵、寄託品のうち絵画部門の絹製品 3 件の修理において、電子顕微鏡を用いた料絹の組成調査を修理技術者と共同で実施し、その成果を補修絹の調製に反映した。同じく、書跡部門の紙製品 2 件について、電子顕微鏡を用いた料紙の繊維調査を修理技術者と共同で実施し、その所見を補修紙の調製に反映した。
⑤ 文化財保存修理所で修理中の東大寺法華堂天蓋附属鏡および同堂本尊不空羂索観音像台座について、文化庁の依頼により学芸部研究員が蛍光Ｘ線による材質調査を実施し、修理方針および時代判定の材料を提供した。
⑥ 東京文化財研究所との共同研究により、寄託品の国宝信貴山縁起絵巻について蛍光Ｘ線を用いた顔料調査を実施し、前年度に実施した近赤外線撮影および可視光励起による蛍光画像撮影の成果と併せて、文化庁が進めている同絵巻の復元模写に資する基礎データを蓄積した。

【実績値】
・調査回数　13 回　（館蔵品、寄託品等の修理に伴う光学的調査実施回数：13 回）
・研究会回数 10 回　（館蔵品、寄託品等の修理に使用する補修材料の検討会実施回数：10 回）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4563-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
館蔵品・寄託品の修理に伴い、保存状態の確認や材質解明を主目的とした透過Ｘ線・蛍光Ｘ線・ポリライトなどを用いる光学的調査を着実に実施し、そこで得られた所見を修理方針決定に役立てることができた。これらのデータは次年度以降の文化財研究や文化財修復にも資するものであり、今後も継続的な調査の実施が望まれる。

2．定量的評価

観点	調査回数	研究会回数				
判定	A	A				

備考
光学的調査の実施回数、補修材料選定の検討会実施回数ともに着実な成果を上げており、必要十分な条件を満たしている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	館蔵品・寄託品の修理に伴って、保存状態の確認や材質解明を主目的とした光学的調査を着実に実施し、当該文化財の修理方針決定や、将来における文化財の研究・修復に資する基礎データを蓄積することができた。次年度以降も本年度のペースを維持しつつ、館蔵品・寄託品を主対象とする保存科学的手法を用いた調査を着実に実施していく予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ堅調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ、文化財の基礎データ蓄積に努めていきたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4564-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）文化財の材質・構造等に関する共同研究（(5)－⑥）

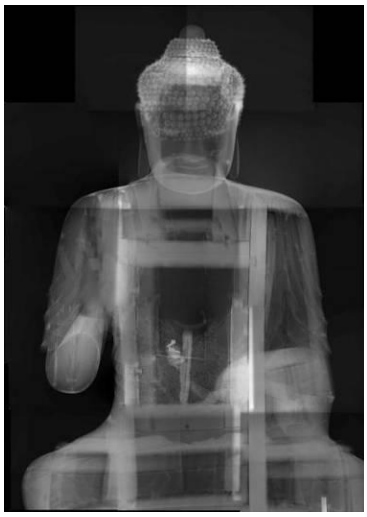
【事業概要】
文化財を解体することなく内部構造を立体的に調査する方法の開発を目指す。九州国立博物館において、X 線 CT を用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の構造や制作技法を理解し、文化財の健康状態を知る。さらに、得られた成果を展示に活用することを目的とする。

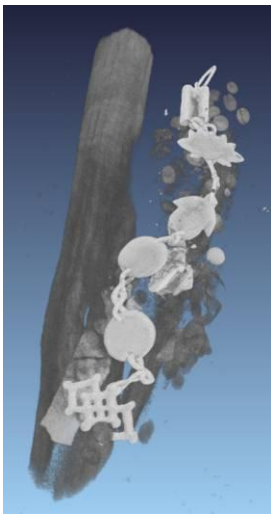
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長　今津節生

【スタッフ】
臺信祐爾（文化財課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元塁（企画課研究員）、楠井隆志（展示課主任研究員）、坂元雄紀（展示課研究員）

【主な成果】
特別展『黄檗展』で展示した長崎市聖福寺釈迦如来座像の調査を実施した。腹部像内から金属製の五臓を含む複雑な納入品を発見した。この発見は国内外で５例目の発見であり、納入品の当初の状態を非接触で発見したのは世界でも初めての例である。

【年度実績概要】
九州国立博物館では、長崎市聖福寺の本尊「釈迦如来座像」を調査した。この仏像は中国・清時代の 17 世紀の製作で中国から舶載された仏像としては日本最大級である。X 線透過撮影で像の全体を撮影し、腹部に金属納入品を発見したので、X 線 CT による構造調査を実施した。
その結果、像内に腎臓や肺に見立てた金属製の五臓などをはじめとする内臓模型を納めた希少な「生身仏」の作例であることを確認した。像内に金属製五臓を納入した仏像はこれまで国内外で 4 例が確認されているに過ぎなかった。今回発見された五臓は長さ約 15 ㎝にわたり肺、心臓、肝臓、脾臓、腎臓、咽喉に見立てた異なる材質（ガラスあるいは水晶製）の物体も確認できる。これらと金属製の五臓は綿と布に包まれ、紐で木材（長さ 35 ㎝の香木？）に結ばれていた。この発見は、17 世紀後半における中国の身体観、内臓観を表したものとして、仏像研究、東洋医学史研究の両面から極めて貴重な発見として注目される。
本件のように、透過 X 線撮影に加えて X 線 CT 調査を実施することによって文化財を解体することなく文化財の内部構造を知り、文化財の健康状態を把握することができるようになった。


透過 X 線画像（正面）


五臓の CT 画像

長崎市聖福寺釈迦如来座像の調査

【実績値】

○調査件数　90　件

○調査回数　50　回

○資料収集数　90　点

○学会研究会等発表数　2 件　日本文化財科学会
東アジア文化遺産学会

○論文掲載数　1 件　考古学ジャーナル 621 号

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4564-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	S	S	S	S	S

備考
本研究は大型のＸ線ＣＴやＸ線室を保有する当博物館でしか実施できない調査としてオリジナリティや注目度が高い。最近では、研究者はもとより所蔵者にとっても「文化財の健康診断」として、本調査の需要や必要性・公共性が認識されており調査の適時性は極めて高い。調査は展示期間の前後に実施しており特別な時間的投入や人的投入を必要としない点でも効率性が高い。本調査によって得られるデジタルデータは１㎜以下の高精度で三次元的に記録するもので正確性が高く、汎用性や応用性も高いのでデータを活用した多様な発展が期待できる。

2．定量的評価

観点	調査件数	資料収集数	学会研究会等発表数	論文掲載数		
判定	S	S	S	A		

備考
展示替え等の機会を利用して、年間 50 回程度の調査を実施している。本調査のデータ収集数は 90 件にも達しており、膨大な文化財の調査データが蓄積されている。所蔵者の意向により公表できないデータもあるが、日本文化財科学会・東アジア文化遺産学会等で研究発表を行っている。本研究の成果は新聞・テレビ等でも紹介し論文として公表している。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	本研究は大型のＸ線ＣＴやＸ線室を保有する当博物館でしか実施できない調査として注目度が高い。多くの貴重な文化財の健康状態を正確に判断し、正確で基本的なデータを蓄積している。 今後は、さらに多くの文化財の調査が可能なように連携研究を進めること、蓄積したデータの多角的な活用を年次計画に反映するようにすすめたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに実施されており、当該年度計画については達成されている。今後は、さらに様々な文化財の調査を集積すると共に、成果の公表および、蓄積したデータの多角的利用を次年度計画に反映させてゆきたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4564-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）博物館における文化財保存修復に関する研究　（(5)－⑥）

【事業概要】
当館文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で装こう技術による文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　志賀智史

【スタッフ】
篠崎悠美子（別府大学教授）、藤田励夫（保存修復室長）、秋山純子（アソシエイトフェロー）、松尾かをる（研究補佐員）、藤岡春樹（国宝修理装こう師連盟九州支部長）、竹上幸宏（国宝修理装こう師連盟九州支部技師長）、井口茉也（国宝修理装こう師連盟九州支部技師）、田村　公（国宝修理装こう師連盟九州支部技師）、元　喜載（国宝修理装こう師連盟九州支部技師補）

【主な成果】
吉備国際大学２名、九州産業大学２名、別府大学２名、佐賀大学１名、広島市立大学１名の計５大学８名が参加した。少人数のため、実践的な研修が実施できた。研修会終了後、参加学生は修復技術者になりたいという思いを一層強くした者、将来何らかの形で文化財の保存に関わりたいと思う者など、修復技術者の育成だけでなく、文化財保護への理解者の増加にも寄与した。

【年度実績概要】
別府大学の篠崎悠美子教授を招聘し、保存修復施設を利用し、地域の大学との協業を果たすことを目的とした短期インターンシップ研修プログラムを平成 17～22 年度の実績を踏まえ検討、改善した。成果は８月 15 日（月）～19 日（金）の５日間にわたり国宝修理装こう師連盟の協力を受け、５大学８名の学生に対して、装こう技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」として開催した。研修では障壁画下貼り作製に関する講義と実習を通して、文化財保存修復についての理解と研鑽を深めた。

学生研修実習風景

【実績値】

○研修開催数　　７回目（平成 17 年度より）

○参加者数　　８名

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4564-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　近年、文化財修理についての関心が高まっているが、中国・四国・九州で文化財修理に関する研修をおこなっている機関は他に無く、独創的で発展性のある研修といえる。

2．定量的評価

観点	研修開催数	参加者数				
判定	A	A				

備考
　短期の実習としては適切な数である。申し込み大学が増えたことから研修への関心の高さが窺える。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	大学で保存修理の基礎的な教育を受けた学生に対して実践的な研修の場を提供することにより、修復技術者の育成を目指す。このような研修を行っている機関は極めて少ない。少数の研修生で毎年継続することに意味のある事業であり、平成24年度以降も実施する計画である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平成17年度より少人数の実習を継続的におこなっており、参加者数も安定している。平成24年度以降も同様な研修を実施する計画である。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4564-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）博物館危機管理としての市民協同型 IPM システム構築に向けての基礎研究（(5)－⑥）

【事業概要】
平成 23 年度文化庁文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業「市民と共に　ミュージアム IPM」実行委員として、地域の博物館等と連携協力し、実施する。本事業は、地域に展開可能なミュージアム IPM 支援者育成プログラムを策定し、館の保存管理機能の基盤強化と共に地域のミュージアム支援者層の拡大に寄与するものである。ミュージアム IPM 支援者研修（基礎編）を実施し、次の段階となる技術編・実践編のプログラムを策定する。公開シンポジウムを開催し、地域や市民への普及に努める。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	博物館科学課長　本田光子

【スタッフ】
三輪嘉六(館長)、森田稔(副館長)、宮本裕一(交流課長) 、岩崎英明（総務課長)、神谷真美(総務課長補佐)、秋山純子(アソシエイトフェロー)、上野敦子(研究補佐員)

【主な成果】
研修会等参加者は、全国の美術館・博物館の学芸員およびボランティアからなるが、毎回大変熱心な参加状況であり、学芸員・市民の関心の高さがうかがえ、積極的な意見を集約することが可能となり、ミュージアム IPM 支援者研修プログラム案策定に充分活かすことができた。今後は、本プログラムにより支援者育成を段階的に進める目途が立てられた。公開シンポジウムでは専門家の講演と事例報告等により、地域や市民の理解を得られた。
平成 23 年度文化庁文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業「市民と共に ミュージアム IPM」を軸に市民協同型 IPM システム構築に関する研究を展開しその成果は、事業費より 3 冊の報告書にまとめた。平成 23 年度 IPM 事業の内容を総括した研究成果を 1 冊（総合版）418 頁、内容を簡潔に要約した研究成果普及版 2 冊（研修編 58 頁、シンポジウム編 48 頁）を刊行した。

【年度実績概要】
1. ミュージアム IPM 支援者研修プログラムの策定
専門家や有識者による会議を開催し、ミュージアム IPM 支援者研修（基礎編）の次の段階である技術編・実践編のモデル研修プログラム案を策定した。ワーキンググループによるプログラム案を全体会議で検討し、問題点や課題を整理した。
2. 研修会の実施
文化財の保存科学と生物被害の基礎を学ぶ研修会（基礎編）と、メンテナンスに伴ったダスト・インジケーター観察の基礎を学ぶモデル研修会（技術編）及び荷解き場・収蔵庫前室兼通路・展示室などで実際の IPM メンテナンスを実習するモデル研修会（実践編）を実施した。
3. 公開シンポジウムの開催
公開シンポジウムを開催し、市民協同型ミュージアム IPM の必要性や重要性を広く社会へ紹介する。2 名の専門家による講演と 3 本の事例報告および座談会の構成で、平成 24 年 1 月 14 日に開催した。

ミュージアム IPM 支援者研修　IPM ガイダンス

【実績値】
○検討会等開催回数・・・・・・・・・・6 回
・「市民と共に　ミュージアム IPM」全体会議：2 回
・ワーキンググループ検討会：4 回
○支援者研修会開催回数・・・・・・・5 回
○支援者研修会参加者数・・・・・・108 名
ミュージアム IPM 支援者研修（基礎編）：76 名
ミュージアム IPM 支援者研修（技術編）：25 名
ミュージアム IPM 支援者研修（実践編）： 7 名
○シンポジウム開催回数・・・・1 回
○シンポジウム参加者数・・・・107 名
○報告書　　3 冊
「市民と共に　ミュージアム IPM」事業報告書（研修編）　300 部
「市民と共に　ミュージアム IPM」事業報告書（報告会・シンポジウム編）　300 部
「市民と共に　ミュージアム IPM」事業報告書（総集編）　1,000 部

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4564-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	検討会等開催回数	支援者研修会開催回数	支援者研修会参加者数	シンポジウム開催回数	シンポジウム参加者数	報告書
判定	A	A	A	A	A	A

備考
ミュージアム IPM 支援者研修（基礎編）の参加登録者は毎回 20 名前後であり、各回とも 90%以上の出席であった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今回の事業が、IPM をひとつの切り口とした、九州国立博物館の着実な取組を多くの方々に理解していただく契機になるとともに、館の規模や設置形態を超えて、広く参考となるモデルを示すことができた。次年度には、本プログラム案を基にした研修（技術編・実践編）実施計画を検討、開催し、地域との連携を深めながら、より広範な普及を図るようにする。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	地域の支援者層の拡大充実を図ることで、市民や機関との連携を深めながら、より積極的に文化財に関する調査及び研究を推進した。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4564-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4）東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究(UNESCO との共同）（(5)－⑥）

【事業概要】
日本、中国、韓国における文化財の保存修理には、良質の手漉き紙の確保が不可欠である。そのため、各国の手漉き紙の製作状況を調査する。材料や技法などを詳細に調査し、映像記録（動画、静止画)、調査カードにまとめる。また、各国での調査結果について報告会を開催する。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長　藤田励夫

【スタッフ】
森田稔（副館長)、本田光子（博物館科学課長）

【主な成果】
中国四川省において、各国の調査状況を報告する会議を開催した。四川省内の二箇所の紙産地　夾江県と梁平県を調査して、映像記録や調査カードを作成した。
韓国慶尚北道聞慶では、無形文化財の紙工房を調査し、映像記録、調査カードを作成した。

【年度実績概要】

中国四川省において、調査した二箇所の紙産地、夾江県と梁平県では、大規模な工房を時間をかけて調査することができた。特に、紙の乾燥施設は広大で他に類例を見ないものであった。韓国慶尚北道聞慶での調査でも、製品からのみでは知りえない、工程上のさまざまな問題点を調査することができた。材料、工程を詳しく調査し、現状のままで保存修理に使用できる手漉き紙が極めて少数であること、紙文化財修理向上のためにも、材料確保のために手漉き紙製作の改善を進める必要性の大きさを再認識できた。

四川省夾江県　竹紙工房

【実績値】

調査地　海外：　３件
（中国四川省　２箇所　中国四川省夾江県、梁平県。韓国　１箇所　韓国慶尚北道聞慶）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4564-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	海外調査件数					
判定	A					
備考 ３回の海外調査を達成できた。						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	実地調査の難しい海外の紙漉き調査について、ユネスコとの連携により達成できた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されている。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4564-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5）日本の文化財修理と保存、復元に関する調査研究（(5)－⑥）

【事業概要】
日本の文化財保存修理の歴史を「扱い・収納・曝涼・修理」の観点から調査研究し、その成果を特別展「よみがえる国宝―守り伝える日本の美―」にて展示公開する。展示は、「保存」「修理」「模写・模造」「文化財保護の始まり」という４つの章から構成し、書跡・典籍・古文書・絵画・染織・漆工・陶芸の名品の数々を通して我が国のお宝保存システムを紹介する。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長　本田光子

【スタッフ】
三輪嘉六（館長）・森田稔（副館長）・藤田励夫（保存修復室長）・畑靖紀（企画課特別展室主任研究員）・酒井芳司（展示課研究員）・川畑憲子（企画課文化交流展室研究員）・森實久美子（企画課特別展室研究員）・金井裕子（企画課文化交流展室研究員）・志賀智史（保存修復室主任研究員）・今津節生（環境保全室長）・秋山純子（アソシエイトフェロー）・松尾かをる（研究補佐員）・上野敦子（研究補佐員）・赤嶺桂子（事務補佐員）

【主な成果】
長い歴史を経て伝わった美や宝は、その保存修理の在り方も時代の美意識や技術に基づく判断や価値観を物語る。本研究により、文化財を身近に感じ、守り継がれる理由、引き継ぐ意志や営みにも想いをはせる場となることを願い、展覧会を企画した。九州初公開の国宝や皇室の名宝と模写・模造の最高傑作を通して、土蔵や校倉に収め定期的曝涼を行い数十年数百年おきに修理をくり返すことにより、日本の美や宝が守り伝えられてきたことを紹介することができた。

【年度実績概要】
・専門性の高い展覧会だったが 12 万人に近い入場者があった。九州一円からの来場者の年齢構成は子供若年から老齢まで、世代を超えた家族連れが想定できる。入場者数は、優品揃いの内容とテレビ・新聞による効果的広報の成果が考えられる。
・ブログ・アンケートや会場での感想は、名品鑑賞の喜びに加えて、博物館の役割への新たな理解、文化財の意義の再認識、保存修理への理解等々、展覧会趣旨をストレートに受け止めた内容が多かった。
・「保存」と「修理」の章は映像で理解を助けるようにし、さらに正倉院校倉の高床部分を実物大模型で体感できるようにしたが、「模写・模造」は短い導入と１枚のパネルでその意図を伝えることができるか心配であった。しかし意外にも関心は高く、模写模造の制作が、伝統技術･伝統材料そのものを伝承していることが率直に受けいれられた。
・目に見える宝の伝世は、目にはみえない宝（技・こころ）の伝承があるからこそ成り立つことを、再確認してもらうことができた。
・時を超えて受け継がれた品々を、その美や価値を維持し続ける「理由」と共にご覧いただくことができた。
・戦争や災害、時代の大転換を乗り越え、一方では四季の変化と付き合い伝世した日本の宝を通して「人が守り継ぐ」物語を現代社会へ伝えることができた。

特別展「よみがえる国宝」
ポスター

【実績値】

○ 展覧会入場者数	118,528	人	（目標４万人）
○ 展覧会図録論文掲載数	21	本	（展覧会図録　292 頁）
○ 展覧会関連講演会	14	回	（聴講者数　2,000 名）
○ 展覧会解説	7	回	（聴講者数　700 名）
○ 広報番組数	3	本	
・ 展覧会関連トークショー	1	本	
・ 展覧会関連テレビ特別番組	2	本	
○特集記事数	8	本	
・ 展覧会関連連載・特集記事	8	本	
○ 展覧会出陳作品数	77	件	（内　国宝 11 件・重要文化財 18 件）
○ 展覧会場映像	3	本	

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4564-5

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	入場者数	図録論文数	講演会数	解説数	広報番組数	特集記事数
判定	S	A	A	A	A	A
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	開館以来の「文化財の保存と修理」に関する調査研究を、各部門の担当研究員の協力のもとに、特別展という形で、多くの市民へ効果的に発信することができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、文化財に関する調査及び研究の推進を図ると同時にその成果を収蔵品の保存・管理に活かすことができた。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4571-1
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）博物館環境デザインに関する調査研究（(5) -⑦）

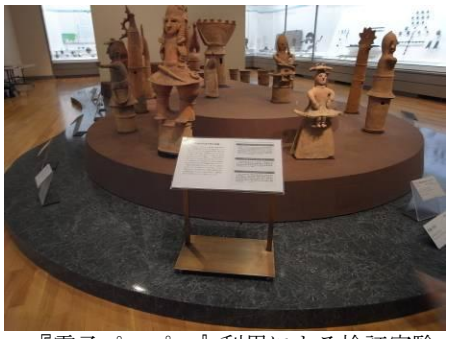
【事業概要】
　東京国立博物館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザインの向上に結びつける事を目的として実施する。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	デザイン室長　木下史青

【スタッフ】
矢野賀一（デザイン室主任研究員）　勝沼早苗（デザイン室 アソシエートフェロー）

【主な成果】
1. 通常の案内サイン整備に加え、デジタルサイネージ利用の実験的導入により、その効果を検証した。(a, b)
2. 140 周年記念にあたり設定された『伝統と品格』を、便殿の展示/施設利用として具現化した（ｃ）
3. 東博の新キャラクターを空間化・サイン化するにあたり、キャラクターのあり方について研究した。（ｄ）

【年度実績概要】


a.『電子ペーパー』利用による検証実験
平成館考古展示室

b. 資料館閲覧コーナーのサイン整備
表慶館北側から資料館への誘導サイン

ｃ.『根付 高円宮コレクション』展示デザイン
便殿の展示室利用

ｄ．140 周年イベントにともなうサイン整備等
トーハクくん、ユリノキちゃん

【実績値】
- 研究発表件数　　２回
  - 東京藝術大学美術学部 第一講義室　対談　　・art-link 上野-谷中 2011 実行委員会
- 論文等掲載数　　２回
  - 「国語 3」（中学校 3 年生・国語教科書）　・「月刊文化財」等
- 他館展示／観覧環境のデザイン調査
  - 森美術館（東京・六本木）　・根津美術館（東京・表参道）
  - サントリー美術館（東京・乃木坂）　・福岡アジア美術館（福岡・博多）
  - 東大総合研究博物館（東京・本郷）　・歴史民俗博物館（千葉・佐倉）
  - 川村記念美術館（千葉・佐倉）　・ホキ美術館（千葉・土気）
  - 国立新美術館（東京・乃木坂）　・アリゾナ記念館（ハワイ・真珠湾）等

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4571-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
- 適時性：サインの多国語化は東博の国際性向上のためには不可欠である。
本館便殿の展示室利用、公開は施設の有効利用の面で東博ならではの独創的事業といえる。
- 発展性：資料館の公開は有料/無料ゾーンの区分けが数年来の課題であったが、博物館の空間的かつ情報的な、両面での利用についての将来への継続的な可能性を得る検証となった。
- 効率性：電子ペーパーのデジタルサイネージ実験的導入は、機器の故障や運用面での支障があったが、そのことにより今後の時間的・人的・設備的投資に対して、一定の効果と問題点が明らかになった。
- 正確性：デジタルサイネージについては、次年度の東洋館開館へ向けて、利点/欠点の両面での継続的な技術およびデザイン面での研究により、情報伝達における正確性を高める事が必要である。

2．定量的評価

観点	研究発表件数	論文等掲載数	他施設等調査			
判定	B	B	A			

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示・公開事業の基本的なメンテナンスは欠かせない一方で、急速な技術的進歩を遂げているサインのデジタル化（デジタルサイネージ）および画像・映像利用の増進に対応して、展示解説等への応用的デザイン研究を計画的に進めている。 平成23年度に得られた成果は、特に24年度に予定されている東洋館のリニューアルオープン(2013年１月予定)に反映させる予定である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平成22年度に実施しされた「アクションプラン」（平常展から総合文化展への名称変更にともなう展示、およびサイン･リニューアル等）から、平成23年度においては、試行的な実験を含む計画的･継続的な博物館環境デザインに関する調査研究は順調に進捗している。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4571-2
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）博物館教育に関する調査研究（(5)－⑦）

【事業概要】
当館本館 20 室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」において、総合文化展と密接に関連した博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を実施し、その成果の一部を研究会等で発表する。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長　今井敦

【スタッフ】
鈴木みどり(博物館教育課ボランティア室長)
藤田千織(博物館教育課教育普及室主任研究員)

【主な成果】
本館 20 室「みどりのライオン」での博物館ガイダンスやハンズオン体験コーナー、制作工程模型展示は年間で 10 万人を超える利用者があり、当館における博物館教育プログラムとして定着している。鈴木と藤田はこのプログラムを博物館教育の見地から調査研究し、口頭および論文で発表を行った。

【年度実績概要】
・　当館本館20室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」において、スライドショー「東京国立博物館ガイダンス」、ハンズオン体験コーナー「日本のもようでデザインしよう！」の博物館教育事業を実施した。
・　上記事業を博物館教育の一事例として、その理論と実践について以下のように発表した。
鈴木みどり「Museum for Everyone - through the development of School Programs for Visually Impaired」(韓国国立民俗博物館『Learning Innovation Symposium 2011』)
「東京国立博物館盲学校のためのスクールプログラム」(文化庁ミュージアム・エデュケーターズ研修、口頭発表)
「Museum for everyone - through the development of School Programs for Visually Impaired」(韓国国立民俗博物館国際シンポジウム ”Learning Innovation Symposium 2011”、口頭発表)
「東京国立博物館とミュージアムエデュケーターの役割」(跡見学園シンポジウム「マイライフ」、口頭発表)
藤田千織　「盲学校のためのスクールプログラム」(文化庁文化財部美術学芸課　ミュージアム・エデュケーター研修、口頭発表)
「《報告》館内ガイドの新しいかたちースマートフォンによる位置連動型ガイド「とーはくナビ」製作と貸出についてー」(『MUSEUM』636 号)

【実績値】
研究発表 4 回
論文発表 2 本

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4571-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
　教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」での総合文化展と密接に関連した博物館教育事業を研究会等で報告できたことは、今後の国内外の博物館教育研究に寄与するところがきわめて大きい。

2．定量的評価

観点	研究発表回数	論文発表本数				
判定	A	A				

備考

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館本館20室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」では、博物館のガイダンス機能にくわえ、各種レクチャーや体験型プログラム、制作工程模型展示などを、一般から学校団体まで幅広い層に向けて展開している。これは当館の博物館教育を推進する上で大きな成果といえる。また、この事業を通して、博物館教育の理論と実践について、担当研究員が研究し、その内容を広く内外に発信できた。今後もさらに研究を続け、博物館教育に関する情報発信を精力的に行っていきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館教育に関する調査研究は、博物館教育課の研究員を中心に概ね研究計画にそったかたちで順調に進められていると考える。今後も有形文化財とそれらに関する調査研究の成果を活用しながら、博物館教育理論の構築、ならびに実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4571-3

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究（(5) －⑦）

【事業概要】

東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。

【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	情報管理室長　村田良二

【スタッフ】

佐藤祐介（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）

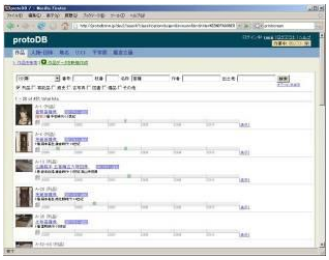
【主な成果】

東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議管理機能、貸与管理機能の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。また Web サイトにおいて公開する収蔵品の展示予定情報のために、平常展管理機能からデータを抽出する機能を実装した。また次期システムに向けた設計のための準備を開始した。

【年度実績概要】

収蔵品管理システムの運用を継続することにより、収蔵品のデータ更新・追加・訂正を円滑に行える環境を維持し、随時改善を重ねて一層の機能向上を図った。

他システムとの連携強化として、リニューアルした Web サイトのために総合文化展での収蔵品の展示予定情報について、収蔵品管理システムの平常展管理機能により蓄積されたデータを加工し、Web サイトのバックエンドであるコンテンツ・マネージメント・システムに転送する機能を実装、運用開始した。従来、Web サイトへのデータ移行は手作業によるコピーが必要であったため、作業効率を大幅に向上することができた。



収蔵品管理システム
（プロトタイプ）

【実績値】

192,946 件

（内訳）

作品データ件数　189,311 件
平常展データ件数　2,805 件
鑑査会議データ件数　29 件
貸与データ件数　801 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4571-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
博物館のシステムに必要な機能を着実に開発しており、業務の円滑化と情報の効果的な蓄積につながっている。最新の技術も取り入れており、博物館におけるシステムのあり方を先導的に示すものとなっている。

2．定量的評価

観点	収集データ件数					
判定	A					

備考
効果的な業務支援機能により、学芸業務を行う流れの中で効率的に無理のないデータ収集が可能となり、その結果データを着実に蓄積している。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵品のデータ蓄積と業務支援を密接に連動させたシステムにおいて効果的にデータの蓄積、活用が行えることが確認された。また Web サイトへのデータ転送の実装により、より効率的かつ正確に情報の公開を行うためにも業務支援システムが有効であることが確認できた。今後は、これまでに実装した機能をもち、かつより一貫性・保守性の高い次期システムの検討を進める。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各分野の研究員、業務担当者と連携をとりながらシステム開発を継続しつつ、さらに発展させた次期システムの検討を進める。

【書式Ｂ】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4571-4
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4）凸版印刷と共同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究（(5)－⑦）		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタル・アーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。 平成19年度から「国宝　聖徳太子絵伝」「国宝　灌頂幡」「重要文化財　洛中洛外図　舟木本」の高精細デジタル・アーカイブを作成し、それらを素材としてミュージアム・シアターにおけるコンテンツの公開を実施している。本年度は「土偶」を素材とした			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長　井上　洋一
【スタッフ】 田良島　哲（学芸研究部調査研究課長）			
【主な成果】 重要文化財２件を含む館蔵の土偶３件について、凸版印刷との共同で高精細三次元データを取得し、それに基づいたシアター用コンテンツを制作した。同コンテンツは平成24年１月からミュージアムシアターで公開している。			
【年度実績概要】 館蔵の土偶３件 ＊重要文化財　土偶（J-38392）　青森県つがる市木造亀ヶ岡出土 ＊重要文化財　土偶（J-39223）　埼玉県さいたま市岩槻区 真福寺貝塚出土 ＊土偶（J-8008）　山梨県笛吹市御坂町上黒駒出土 について、高精細三次元データを取得し、それに基づき、凸版印刷が当館の監修のもとに、ミュージアム・シアター用コンテンツ「DOGU-縄文人が込めたメッセージ-」を制作した。同コンテンツは平成24年１月から金、土、日、祝日にミュージアム・シアターで来館者に公開している。			
【実績値】 ＊データ化　３件 ＊コンテンツ作成　１件			
【備考】			

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　東京国立博物館　　処理番号　4571-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2．定量的評価

観点	データ化件数	コンテンツ作成件数				
判定	A	A				
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画どおりのデータ化及びコンテンツ化が行われた

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	前期間に引き続き、新たに凸版印刷との研究を継続することになったが、アーカイブの方法も含めた作品データの蓄積と活用を進めるとともに、来年度の新シアターの開室に備え、来館者の反応を確かめながら、公開方法についてさらに研究開発を進めていく。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 京都国立博物館　　処理番号 4572-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)文化財情報に関する調査研究　((5)-⑦)

【事業概要】
当館のウェブサイトや文化財情報システムなど、運用中のコンテンツの問題点の検討を行い、随時改良を行った。またサイボウズなど機構内の共通システムの運用に対する対応や、館内 LAN システムの発展的整備の方向性に関する検討など、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長　久保智康

【スタッフ】
山田奨治（客員研究員）

【主な成果】
文化財情報システムの昨年度更新後の運用上の問題点を検討し、運用ソフトの改良を随時行った。
文化財の写真原板のデジタル化開始に伴う、特別観覧業務上の問題点と文化財情報システム運用の間の整合性について検討し、システムを改良した。
ウェブサイトのコンテンツを随時見直し、情報を更新した。

【年度実績概要】
・各月ごとに現時点での情報システムの運用面における現状調査を行い、その結果について、当館研究員・事務職員・SE と共同で検討会を実施して、システム全体の問題点を抽出。改良を随時行った。
・既存の収蔵品高精細画像のファイリングシステム構築を継続し、今年度から開始した特別観覧における写真原板のデジタル版提供との整合性を図った。
・重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」の拡充、公開収蔵品データベースの拡充、研究紀要「学叢」バックナンバーPDF 版の拡充、館外貸出作品一覧の追加、展覧会混雑情報の追加など、コンテンツ充実に向けての検討を行った。

【実績値】
・システムの現状調査　5 回
・システム検討会　10 回
・ウェブサイトコンテンツの検討　5 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　京都国立博物館　　処理番号　4572-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　文化財情報システムを全面更新し、研究業務、特別観覧業務の円滑化が各段に進んだ。
　当館のウェブサイトは、コンテンツの豊富さ（収蔵品データベースなど）から定評があるが、さらに多くのページで質の充実を図った。

2．定量的評価

観点	システム現状調査	システム検討会	ウェブサイトコンテンツの検討			
判定	A	A	A			

備考
　システムとウェブサイト・コンテンツの検討を随時行い、定期的な検討会を実施した（計 12 回）。
　特別観覧業務の作品原板提供の全面デジタル化を開始し、高精細画像のファイリングシステムへの追加を鋭意進めた。
　ウェブサイトにおける重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」の拡充、公開収蔵品データベースの拡充、研究紀要「学叢」バックナンバーPDF 版の拡充、館外貸出作品一覧の追加、展覧会混雑情報の追加、メールマガジンの配信などの充実を図った。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財情報システムを更新し、ウェブサイトも質・量ともに格段の充実を図った。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	予算を効率的に活用し、緊急性の高い事項から順次検討を行い、改良を加えている。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4573-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究を行い、その成果を児童・生徒を対象として行う「世界遺産学習」等に反映させる。（(5)－⑦）

【事業概要】
奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える。

【担当部課】	学芸部教育室	【プロジェクト責任者】	教育室長　吉澤　悟

【スタッフ】
西山厚（学芸部長）、清水健（前教育室員）、北澤菜月（教育室員）、山口隆介（前教育室員）

【主な成果】
奈良の歴史と伝統文化に関する情報を、まずは今年度開催した展覧会の中から抽出することとした。その情報を職員やボランティアが共有する機会を設け、児童・生徒が歴史への関心を高めるのに使える情報は何かを検討した。ボランティアへの指導と話合いを通して、世界遺産学習の実践の場での「語りかけ」の精度を高めることに努めた。

【年度実績概要】
当館で開催した特別展や特別陳列、正倉院展の中には奈良の歴史と伝統文化を反映した作品や情報が多く含まれている。「天竺へ～三蔵法師 3 万キロの旅」は仏教経典の伝来と奈良における写経の歴史に関する情報、「初瀬にますは与喜の神垣」は奈良の古社である與喜天満神社に伝わる神像や奉納品などから神への崇敬の歴史が示され、さらに正倉院展では蘭闍待や聖武天皇の愛刀などから伝来と宝物をめぐる歴史物語が読み取れるなど、子供から大人に至るまで多くの人が楽しめる情報が抽出できることが認識された。その一部は公開講座やサンデートークなどによって各研究員から情報発信されているが、さらに子供に向けてどのような語り方があるか、検討を行っている。また、世界遺産学習で直接生徒に向き合うのは解説ボランティアであるため、ボランティアに対しても研修の機会などを通して、要点を解説し、共有化をはかると同時に、子供たちに伝えるべき情報は何かを個々にも考えてもらうこととした。これらは未だ試行段階にありマニュアル化されてはいないが、世界遺産学習の実地現場において生徒たちへの語りかけの内容が広がっているとの実感がある。向後も方法論的な検討を行い、短時間の中で伝える情報の質的向上がはかられるとの見通しを得ることができた。
また、これと併行して、当館学芸部の職員が個別の情報発信源として学校に趣き、「伝えること」の尊さを講義する機会も設けている。

【実績値】
・「世界遺産学習」に来校した小学校　36 校
・出張講義　3 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4573-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　世界遺産に関する教育普及活動は自治体や観光事業など様々な場所で行われている状況において、博物館が基点となった「世界遺産学習」とは何かを追求する好事業となった。展覧会情報を生かした「語りかけ」を検討することで、他の観光案内にはない博物館のオリジナリティをもたせ、かつボランティアにより生徒に直接語りかけることができた。

2．定量的評価

観点	「世界遺産学習」に来校した小学校数					
判定	A					

備考
　職員・ボランティアで共有された情報を繰り返し利用して生徒に語ることができ、効率的であり、かつ反復により精度を高めることにもつながった。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	職員とボランティアの間で情報を検討する時間が多くとれれば、「世界遺産学習」のみならず一般来館者への解説サービスの向上にもつながるものと考える。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	「世界遺産学習」は歴史・伝統文化の宝庫、奈良にある博物館が担うべき重要な事業である。向後の継続性のみならず発展性をもふまえて、さらに情報の蓄積と方法論の先鋭化をはかって行きたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4573-2
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究を行い、その成果をデジタル画像の作成・各種データベースの構築（収蔵品・画像・図書）・各種情報資源の公開推進に反映させる。（(5)－⑦）

【事業概要】
当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開と共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。

【担当部課】	学芸部資料室	【プロジェクト責任者】	資料室長　宮崎幹子

【スタッフ】岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（前企画室長）、吉澤悟（前教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室員）、野尻忠（前情報サービス室長）、清水健（前教育室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、斎木涼子（前列品室員）、北澤菜月（企画室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛莉子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）

【主な成果】
昨年度から開始したデジタル撮影の本格的な稼働をうけ、その安定的な継続を目指して、撮影機材、環境、ストレージ、体制等の整備に努めた。それにより新規の撮影と外部へのデジタル画像提供もスムーズに実施することができた。また、館内の情報システム・公開用データベースの更新を行い、情報資源の内部での活用と外部への公開の拡充に積極的に取り組んだ。仏教美術資料研究センターの改修工事完了をうけて、情報公開施設の整備と一般への普及にも努めた。

【年度実績概要】

・デジタル撮影

昨年度よりデジタル撮影を本格化しているが、今年度の特筆すべき実績としては、天神坐像（與喜天満神社）、弥勒仏坐像（弥勒寺）、降三世明王坐像（金剛寺）、不空羂索観音立像（東大寺）などがあげられる。いずれも南都および周辺の重要な文化財であり、出品等の貴重な機会を捉え、これまで館内外で未整備であった画像データを多数作成・蓄積することが叶い、文化財の調査研究に資することができた。

・画像データベースのリプレイス

館内で運用している画像情報システムと連動する形で、公開用の画像データベースをリプレイスし、デジタル画像の提供機能を充実させた。その際には内部・外部のサーバを分離し、内部公開用の画像データベース（仏教美術資料研究センターにて利用可能）では収蔵品以外も含む公開可能な画像を、外部公開用の画像データベースでは収蔵品に限った画像を提供するなど、文化財情報の公開促進と共に、安全性の確保にも努めた。

・収蔵品データベースの連携

以前より公開している収蔵品データベースと、画像データベース、仏教美術資料研究センター蔵書目録（ＯＰＡＣ）との連携を一部実現した。これは、一つの収蔵品について、文化財、画像、文献（展覧会カタログや論文）等異なる形式の情報を一元的に提供するもので、文化財に関わる館内の情報資源を重層的に提示することができる。昨今、ＭＬＡ（博物館・図書館・文書館）の情報資源の連携の必要性が叫ばれているが、博物館においてこうした取り組みを進める国内でもほぼ初めての事例となった。また、国立国会図書館、文化庁など、外部のデータベースとも連携を図り、収蔵品情報へのアクセス経路を拡充している。

収蔵品データベース画面

・高精細画像システム

特別展「天竺へ～三蔵法師 3 万キロの旅」において、国宝玄奘三蔵絵（藤田美術館所蔵）全十二巻全場面の高精細画像を提供するシステムを構築した。文化財の展示替えによる観覧の制限を補完し、かつ館内の情報資源を一般来館者に向けた普及活動へと展開させる事例となり、所蔵者ならびに来館者からも高い評価を得た。

・研究発表

上記の実践と並行して、文化財アーカイブズの形成に関わる内外の事例や理論について調査研究を継続し、アート・ドキュメンテーション学会、文化庁文化遺産オンラインフォーラム等において研究発表を行った。また、全国美術館会議情報・資料専門部会企画セミナーを共催し、専門家に対して、当館のアーカイブズ事業と公開施設（仏教美術資料研究センター）に関する研修を行った。

【実績値】
デジタル撮影：5，884 件、フィルム撮影：112 件、写真フィルムスキャニング：5，297 件
画像データベースへの個別データ登録：4，370 件（そのうち公開　2，220 件）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　奈良国立博物館　　処理番号　4573-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
本事業は継続性の高いものであり、短期的な成果や個別の画期性を期待するよりも、間断なく質の高い情報の蓄積を続けている点が最も高く評価できる。中でも、当館の事業や調査研究と密接に連携することで、重要領域の貴重な文化財に関する情報を重点的に収集し、学術的価値の高い独自のコレクションを形成していることは、特筆に値する。今年度の撮影は、南都を中心とした貴重な文化財の新発見とも連動しており、文化財指定調査等の基礎資料となるなど、研究の進展にも大きく貢献した。また、各種データベースの継続的な運用とともに、内部・外部の情報資源との連携を実現したことにより、文化財情報の連携の可能性について、一つの方向性を示すことも叶うなど、大きな成果があった。

2．定量的評価

観点	収集画像数					
判定	A					

備考
撮影数やデータの登録数は多ければ良いというわけではないが、質や継続性を鑑みても、本年度は充分な調査と撮影を実施しており、収集画像数は豊富であった。撮影後の処理やデータベースへの登録についても、当館の規模やスタッフ数を勘案しても他機関と比較して遜色のない数をこなしているといってよく、仏教美術の研究拠点に相応しいコレクションを形成している。外部への情報発信については、データベースの公開とともに、当館刊行の展覧会カタログ・学術報告書への画像掲載や、画像提供（特別観覧）によっても実現した。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の調査と撮影は、文化財の保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではない。実績概要でも述べたとおり、学術的に重要であり、調査と撮影の機会を得ることが通常では困難な文化財について、調査を実施し、質の高い画像の収集が叶うことの意義は大変大きい。今後も調査や展覧会の開催と密接に連携した情報収集を続け、仏教美術情報の一大拠点として、コレクションの質の維持に努める予定である。また、情報資源の運用にあたっては、デジタル技術を適切に取り入れ、アーカイブズの発展にも寄与することを目指す。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	実績概要でも述べたとおり、デジタル撮影の実施が本格的となり、館内での処理から最終的な情報公開にいたるまでの一連の流れについて、人材および機材の確保を含めた長期的な展望が今後とも必須である。仏教美術分野では国内唯一と言っていい貴重なコレクションを維持管理しつつ、引き続き内外の研究者や学術出版界の利用に供する体制を整備するとともに、今日的な要請をふまえたシステムの構築、情報公開への対応が急務である。今後も文化財の保存・活用と研究の基盤として機能するべく、アーカイブズの形成を実践していくとともに、それを下支えする理論の構築にも取り組んでいく。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4574-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）九博に関連する絵本の次シリーズの企画に関する調査研究　((5)－⑦)

【事業概要】
九州国立博物館では、文化財に関する理解をより深め、博物館をより身近に感じてもらうことを目的として『きゅーはくの絵本』シリーズを刊行している。絵本は子どもから大人まで幅広い読者層を有し、学校教育等でも活用されていることから、博物館にとっても大きな情報発信力をもつものである。本研究では、『きゅーはくの絵本』に続くシリーズ企画を推進すべく、調査研究を行うものである。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	研究員　市元塁

【スタッフ】
池内一誠（交流課主任研究員）、新名佐知子（企画課研究補佐員）、濱川裕子（交流課事務補佐員）、村田真知子（交流課研究補佐員）

【主な成果】
次シリーズを企画するうえで、絵本活用という観点から検討を加えるべく、既刊の『きゅーはくの絵本』シリーズを用いた読み聞かせやバックヤードツアーを実施した。他館における絵本展示の実例を調査した。絵本出版社と意見交換を行い、今後のシリーズ展開を検討する上での情報収集を行った。あじっぱを主題とするマナーブック『あじっぱのたいせつななかまたち』を、展示課と九州産業大学芸術学部デザイン科が共同で制作している。年間を通じて関係各所に絵本を配布し、本活動の周知につとめた。

【年度実績概要】
次シリーズの検討を進めるために、既刊シリーズの活用を通して、あるべき博物館絵本の姿を検討した。
(1)絵本の活用方法を調査研究することの一環として、作品への理解を深めるために、作品の前で絵本の読み聞かせを行い、その後作品鑑賞へとつなげた。4月24日と6月4日には、『月夜のおおさわぎ』と埴輪を題材に教育普及ボランティアが実施。8月3日には『じろじろぞろぞろ』と南蛮屏風を題材に、博物館実習の一環として実習生が実施した。子どもたちの集中力を高めるため、絵本の読み聞かせと作品鑑賞の時間ははっきりと区切り、絵本でしっかり絵本のテーマに対する印象を植え付けたうえで鑑賞へとつなげたところ、子どもたちは作品の細部までよく観察し、絵本の中に出てくる事物を再発見し、絵本にない事柄も自ら発見していた。さらに絵本に登場する作品以外の列品にも関心を向け、鑑賞をすすめることができた。
(2)新たな絵本の主題を探ることの一環として、博物館での過ごし方などについて紹介する絵本のプロトタイプ『あじっぱのたいせつななかまたち』を、九州産業大学芸術学部デザイン科と協働して作成した。制作途中評価として、9月18日に大学生による読み聞かせを実施した。「あじっぱ」に展開する体験用資料への接し方を紹介する内容であり、読み聞かせの後の子どもたちのようすを観察すると、両手で包み込むように資料を手にする姿を見ることができ、絵本による伝達力の大きさを再確認することができた。
(3)8 月には福岡アジア美術館で開催されている企画展「おいでよ！ 絵本ミュージアム 2011」を視察し、絵本の読まれ方を調査した。その結果、既刊の『きゅーはくの絵本』シリーズについては、個人・年齢によって理解の仕方や深度は異なると想定されるが、実態としては小学校入学前の子どもからでも楽しめるという見込みを得た。また絵本ミュージアム展を担当した出版社の方と意見交換の機会を得た。
(4)7 月から 8 月には、『おおきな博物館』を元にしたバックヤードツアー「大きな博物館の探検」を 3 回にわたり実施した。
(5)年間を通じて『きゅーはくの絵本』シリーズを国内外の博物館・美術館、寺社、官公庁、大学、学校等に配布し、九州国立博物館が推進する絵本事業の推進につとめた。

バックヤードツアー
「大きな博物館の探検」

【実績値】
○調査回数　12 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4574-1

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2．定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
備考						

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	次シリーズを検討するうえで多くの検討材料を得ることができた。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度は、博物館や美術館以外での絵本活用例なども調査し、広視野に立った次シリーズの検討を図りたい。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4574-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）ＮＨＫと協同で高精細画像を活用したシアター4000 での映像公開に向けた研究（(5)－⑦）

【事業概要】
ハイビジョンが 200 万画素であるのに対して、スーパーハイビジョンは 3,300 万画素数の情報量を有している。ＮＨＫはこれを究極の放送システムと位置付けて、将来の実用放送を視野に入れた研究開発を進めてきた。このスーパーハイビジョンのもつ質感と臨場感に優れたメディアを、文化財の保存と活用に応用するために当館では常設のシアターを設けてコンテンツ制作と一般公開を通じた調査研究を推進する。

【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	展示課長　赤司善彦

【スタッフ】
河野一隆（文化交流展室長）

【主な成果】
新コンテンツ作成のための予備調査を実施し、その映像公開にむけた具体的な打合せを実施した。また、将来のスーパーハイビジョンの広い分野での活用を視野に入れた研究を、ＮＨＫ及びＮＨＫエンタープライズと共同で推進するための協議を行った。

【年度実績概要】
ハイビジョンの 16 倍の解像度を誇るスーパーハイビジョンは、きめ細かい画像と色彩の高い再現性が特徴であり、単なる番組としてコンテンツを制作するのでなく、より来館者の五感に訴えるコンテンツ制作のための研究と、低コストによる制作の取り組みをおこなった。新しい取り組みとして九州のキリシタン文化の展示と連動した五島・天草の教会群の撮影を決定し、その現地の予備調査を実施した。
また、今後の取り組みについては、映像設備の更新についての低コスト化の研究と、ＮＨＫの番組制作に伴うコンテンツの活用をすすめる方策等を協議した。
24 年 3 月に、撮影対象を決定するロケハンの実施とコンテンツの台本等の作成を行った。

五島列島の野首教会

【実績値】

○調査回数　　2 回
・現地調査　　2 回（9 月・10 月五島列島の教会群）

○打合せ回数　3 回
・コンテンツ制作の打合せ　2 回
・設備改善についての協議　1 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4574-2

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考
発展性：これまでの静止画主体のコンテンツだけでなく、動画的な要素を盛り込んだコンテンツの作成へと発展できる見通しがついた。

2．定量的評価

観点	調査回数	打合せ回数				
判定	A	A				

備考
　来年度に本製作を予定しているため、目標回数は少ないが、予定通り実施し、ＮＨＫ側との率直な意見交換などを通じて今後の調査研究を充実させることができた。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今後の取り組みについて、ＮＨＫ側との共通認識をもつことができた。また新コンテンツについても、現地調査をおこない、関係者との事前協議を実施する事ができた。来年度の本製作に向けて、円滑に作業を進められる見通しがついたことから判定した。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿った内容で実施でき、展示作品を分かりやすく伝える手法として、今後さらにハード面も含めて開発・改良を図りたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4574-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究（(5)－⑦）

【事業概要】
当館では、特別展ごとに観覧者に展示内容の理解を促進するため、さまざまな形での教育普及プログラムを実施してきた。本年度は、「黄檗-OBAKU」（前年度末より開始）、「よみがえる国宝」「草原の王朝 契丹」「細川家の至宝-珠玉の永青文庫コレクション」の４つの特別展において、普及プログラムを実施する。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長　小泉惠英

【スタッフ】
楠井隆志（展示課主任研究員）、本田光子（博物館科学課長）、市元塁（企画課特別展室研究員）、川畑憲子（企画課文化交流展室研究員）、新名佐知子（企画課研究補佐員）、山本久美子（同）

【主な成果】
講演会の実施、展覧会の出品作品にちなんだグッズの作成、展覧会の出品作品にちなんだワークショップなどを行った。展示室内に解説パネルを掲出、小冊子を作成し観覧者に配布するなどした。展覧会のアンケート結果より、多くの観覧者から教育普及プログラムを通して展覧会を楽しめたとの高い満足度を得ることができ、多くの観覧者に展示内容を理解いただける成果を挙げた。

【年度実績概要】
「黄檗展」では、江戸時代にわが国に伝わった黄檗宗そのものを平易に理解してもらうために、イラストを用いたパネルを作成して、展示室に掲出、また、展覧会図録にもこれと関連した黄檗宗そのものの理解を助けるコーナーを設けた。
「よみがえる国宝展」では、大規模な文化財保存のセミナーを実施したほか、文化財の修理・保存に当たって、どのようなことをが行なわれているかをイラストパネルで説明した。また、子供向けに文化財の修理をトピックとした小冊子を作り、これを配布した。
「契丹展」では、日本ではなじみの薄い遊牧民族の契丹を紹介するパネルを作成し、これを掲出すると共に、遊牧民族の上位階層の墳墓から出土した豪華な服飾、工芸品を再現し、身につけてもらい、往時の文化の豊かさを体感できるというコーナーを設置した。
「細川家の至宝展」では、700 年の歴史を持つ細川家の事蹟を整理し、解説パネルの掲出、能楽イベント、剣豪宮本武蔵の剣術を紹介するワークショップの実施、歴史的事蹟を列挙した双六の作成・配布など、細川家の歴史を親しみながら理解できるようにした。
各々の展覧会で、講演会を実施した。

＜よみがえる国宝展＞
解説パネル

【実績値】

○解説パネル作成　４回（黄檗展１回、よみがえる国宝展１回、契丹展１回、細川家の至宝展１回）

○冊子およびリーフレット、歴史双六などの配布物の作成　２回（よみがえる国宝展１回、細川家の至宝展１回）

○講演会　23 回（黄檗展４回、よみがえる国宝展５回、契丹展８回、細川家の至宝展６回）

○ワークショップ　３回（よみがえる国宝展２回、細川家の至宝展１回）

上記以外に、
「黄檗展」において黄檗宗の読経を紹介するイベント、長崎の黄檗寺院に伝わる蛇踊り、獅子舞の紹介、黄檗宗独特の料理である普茶料理を紹介する講演会を実施。
「よみがえる国宝展」では、博物館の裏側を紹介するバックヤードツアー、文化財保存交流セミナー（計 5 日間・講座計 12 回）を実施。
「細川家の至宝展」では、能を手厚く保護した細川家の足跡にちなんだ能楽の紹介イベントなども実施した。

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4574-3

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
展示室における平易な解説パネルの制作、掲出に加え、多数の講演会、きわめて多岐にわたるイベントの実施など、特別展という１つの事業から、さまざまな形でその歴史的背景、文化的意義などを紹介することで、文化財を通じて重層的に歴史を理解できる機会を設けた。

2．定量的評価

観点	解説パネル	冊子	講演会	ワークショップ		
判定	A	A	S	A		

備考
本年度は、特に講演会の回数を大幅に増加させ、いずれも好評を博した。とくに連続講座の形で、展覧会の内容をより多角的に紹介したことで、観覧者より大きな充足感を得た。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展を核として、展覧会の内容に応じて、パネル紹介、ワークショップなどの教育普及に関わるさまざまなイベントを多角的に展開できた。観覧者からも好評を博しており、今後も展覧会の内容を精査、吟味し、より適切な形でのプログラムを選び、このような形での実施を進めていきたい。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	観覧者を集めてのイベント形式のプログラムでは、多くの参加を得て、また展示室内でのプログラムにおいても展示品理解の助けとなるべく目的を十分に果している。

【書式Ｂ】
（様式 1）

施設名 九州国立博物館　　処理番号 4574-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4）学校教育との連携を図りながら、学校貸出キット「きゅうぱっく」の研究・開発（(5)－⑦）

【事業概要】
学校貸出キット「きゅうぱっく」について、学校教育の実態やキットの特性等に合わせて最適な活用方法を検討する。活用にあたっては必要に応じて教師と館職員がティーム・ティーチング形式で授業実践を行い、学校教育におけるモノを通しての歴史理解・異文化理解を支援し、同時に児童生徒や教師の博物館・展示物に対する興味・関心を高める。また、新たなシリーズの制作に向け、キットとして構成可能な資料についての調査研究を行う。

【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	主任研究員　池内一誠

【スタッフ】
佐藤　茂史（交流課　主任研究員）

【主な成果】
小学校・中学校・高等学校などさまざまな校種において「きゅうぱっく」が活用され、教科や単元においても、歴史学習にとどまらず、「道徳」や「総合的な学習の時間」の郷土学習、異文化理解学習での活用がみられた。活用形態も、博物館訪問の事前学習として活用する例、長期休業中の学習活動への導入として組み込む例など多様な形態での活用が確認できた。また、新シリーズを構成する資料について候補の選定、収集を進めた。

【年度実績概要】
春日市立須玖小学校では、4 年生の「総合的な学習の時間」の郷土学習で近隣資料館を見学するための事前学習として「きゅうぱっく」を活用。歴史学習に入っていない学年でも「きゅうぱっく」の活用によって、文化財から学ぶことができることが明らかになった。また、同校は 6 年生の「道徳」においても「きゅうぱっく」を活用した。
飯塚市立高田小学校では、6 年生の歴史学習において、館職員のほか地元自治体の文化財担当職員も教師と協働して「きゅうぱっく」を活用した授業を展開した。
太宰府市立太宰府東中学校では、冬期休業期間を活用した「博物館学習」への導入として「きゅうぱっく」を活用。教師と館職員が協働で生徒を指導し、資料の観察をとおして、冬期休業期間中に博物館を訪問する生徒たちに、文化財をみる視点を養うことができた。
福岡県立香住ヶ丘高等学校では、文化祭における異文化紹介の資料として「きゅうぱっく」を活用。体験をとおして理解を深める「きゅうぱっく」の特性が発揮された。
福岡県立視覚特別支援学校の博物館観覧に際して、「きゅうぱっく」の一部を含む体験資料を活用し、展示観覧支援を実施。「きゅうぱっく」が、学校での活用のみならず、展示室における観覧支援にも有効であることが明らかとなった。
文化交流展示第Ⅳテーマ、第Ⅴテーマに対応した新シリーズの制作に向けて候補資料の調査を行い、第Ⅳテーマについてはシリーズ構築が可能な程度に候補を選定できた。

「きゅうぱっく」のキットをスケッチしながら観察する

【実績値】

○「きゅうぱっく」貸出件数：85 件

○博物館職員による授業実践支援回数：15 回（対象生徒数延べ約 750 名）

○新シリーズ構成候補資料の選定・収集：9 件

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名　九州国立博物館　　処理番号　4574-4

自己点検評価調書

1．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
今年度、貸出地域を明確に「全国」とし、それに伴って貸出期間を延長したことにより、公共性は高まった。「きゅうぱっく」の構成資料には館所有の３次元デジタイザやＣＴスキャナで取得したデータを３次元プリンタで出力したものも含まれており、資料の有する情報の正確性は非常に高く、当館の有する資源を存分に活用したもので、独自性も高い。学校連携のための職員が配置されたことで、学校側の要望にも応えやすい体制がとれている。

2．定量的評価

観点	きゅうぱっく貸出件数	授業実践支援回数	新シリーズ候補資料選定			
判定	S	A	A			

備考
貸出件数は前年度比約173％（平成22年度は貸出件数49件）。貸出件数が飛躍的に伸びた要因としては、年度当初に県下の全学校に向けて案内チラシを送付したこと、貸出地域を明確に「全国」として貸出期間も延長したこと、学校連携担当の職員が配置され、学校との連携が強化されたことが考えられる。授業実践支援も、今年度学校連携担当の職員配置により、学校側の要望に応えることができた。新シリーズ構成のための資料については、文化交流展示第Ⅳテーマに対応する資料について７種類、第Ⅴテーマに対応する資料について２種類、候補を選定することができた。第Ⅳテーマについてはシリーズ構築のめどが立ち、準備可能な資料については随時準備をすすめている。

3．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「きゅうぱっく」の貸出件数は毎年順調に伸びている。時間の経過とともにその存在と効果が知られてきていること、貸出地域の拡大や貸出期間の延長を行ったことによると思われる。授業実践支援回数も一定の回数を数えたが、今後は活用事例を整理して公開し、教師の利用に供する手法も考えられる。新シリーズの構築に向けて、更なる資料の調査と選定が必要である。

4．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	「きゅうぱっく」の開発によって、学校教育との連携は着実に進展している。単なる授業支援のためのツールとしてだけでなく、来館に向けた事前学習のためのツールとして、あるいは館内での観覧支援のための活用も報告されており、学校教育のあらゆる場面において九州国立博物館が連携できる可能性が広がっているといえる。「きゅうぱっく」の構成資料と密接なつながりを持つ体験型展示室「あじっぱ」の体験用資料には、学校教育支援に有効な資料が多数あり、今後これらについて調査研究と活用を推進することで、一層学校教育との連携は強化されると思われる。活用可能な資料の選定と活用の方法について更なる研究が必要である。